

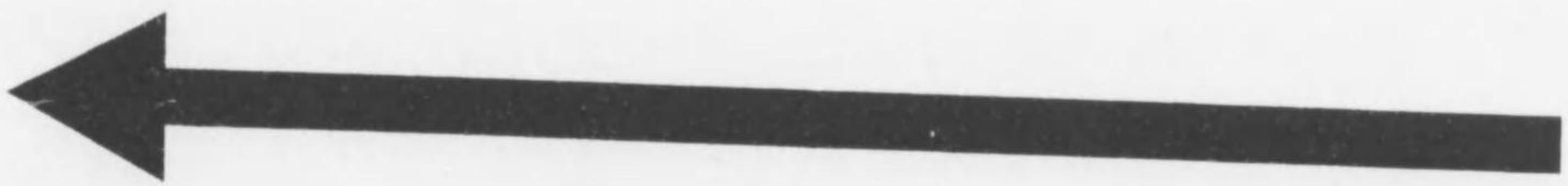
918.6-G3417



1200500759133



始



918.6
G341
(50)



新興文學集

改
造
社
版

杉浦非水裝幀





影近の氏五(下右)岡片(下左)山葉(上右)光横(上左)田岸(中央)河田前

55543

「新興文學集」目次

(次 目)

<p>岸田國士篇</p> <p>序 詞(筆蹟)……………一三四</p> <p>村で一番の栗の木……………一三五</p> <p>四十二歳の現在迄……………一三〇</p> <p>上海の宿……………一二五</p> <p>敗軍……………一〇七</p> <p>拵へられた男……………九五</p> <p>太陽の黒點……………八五</p> <p>伯父……………七五</p> <p>マドロスの群……………六五</p> <p>三等船客……………五五</p> <p>序 詞(筆蹟)……………四</p>	<p>前田河廣一郎篇</p> <p>總序……………二</p>	<p>落葉日記……………一五四</p> <p>紙風船……………一七四</p> <p>ぶらんこ……………一八一</p> <p>命を弄ぶ男ふたり……………一八八</p> <p>年譜……………一九八</p>	<p>横光利一篇</p> <p>序 詞(筆蹟)……………一〇〇</p> <p>芋と指環……………一〇一</p> <p>マルクスの審判……………一一一</p> <p>蠅……………一三三</p> <p>無禮な街……………一三六</p> <p>ナポレオンと田舎……………一三八</p> <p>園……………一四五</p> <p>街へ出るトンネル……………一五三</p> <p>青い大尉……………一六七</p> <p>眼に見えた風……………一七三</p>	<p>葉山嘉樹篇</p> <p>序 詞(筆蹟)……………三二八</p> <p>海に生くる人々……………三三九</p> <p>略傳……………四四三</p>	<p>片岡鐵兵篇</p> <p>序 詞(筆蹟)……………四四六</p> <p>生ける人形……………四四七</p> <p>あんな男こんな男……………四八五</p> <p>大島争議……………四九六</p> <p>雲とゴルフの球……………五〇一</p> <p>年譜……………五〇三</p>
--	--------------------------------	--	--	--	---



總序

大正末期から昭和への過程は、その多面複
雜、深刻さに於て、おゝその日本の歴史あつてこ
の方位を見ないものがある。あらゆる分野に互
つて變移し、動搖し、多種多様な傾向がめまぐ
るしきまでに展開された。このことは常に時代
の尖端を行く文藝に反映し、特異あり、異色あ
る傾向をもつた作家が輩出した。彼等は既成文
壇の堅壁に對立し、勇敢なる存在を示し、年一
年と大家の心核に滲入し、社會的にも文壇的に
も輝かしき地歩を獲得するに至つた。こゝに
集められた五作家はさうした諸傾向の最尖端を
代表する風爽たる新鋭である。

に生くる人々」はたゞに氏にとつてのみならず、
第一期の日本プロレタリア文學の永遠の記念塔
である。氏は微頭徹尾プロレタリア・ロマンチ
ストだ。特殊な經歷から来る特殊な題材を把握
し、プロレタリアの情熱を以て歌ふが如く創作
する「労働の詩人」だ。
同じプロレタリア文壇内に於ても前田河、
葉山兩氏と、片岡氏とのあひだには細分すれば
それぞれ違つた意識的分界を見出し得る。所謂
「文壇的」に對する、「戰旗的」の差異である。轉
換以前の片岡氏の立場と作に就てはしばらく
措き、轉換後の氏はプロレタリア文壇陣營中
「生ける人形」の一篇に示したるが如き、氏でな
ければならぬ独自の領域を擔當してゐる。そ
れは「ブルジョアジーの社會機構の欺瞞に正
面から、がつしりと打つかつて行く行き方より
も側面から、皮肉で、明快な頭腦をもつて傲し
くづしに暴露して行く」行き方である。
岸田、横光の二氏はイデオロギーから云つて
明らかに前三者とは反逆の點にある。且つ、岸
田横光の二氏の間にも大して共通した要素は
發見され得ない。

を氣分でもりたて、行く。さう云つたのが岸田
氏の戯曲だ。それは既成文壇には見られざると
ころのものだ。氏の出現によつて日本の戯曲
界が初めて寫實主義から解放されたとはあなが
ち強辯ではない。朗らかな足取で登場する浪
漫主義者岸田氏の存在は、何はともあれ日本劇
壇に大きな示唆をもつ。
横光氏はその特異なる着想と技巧、特異なる
近代感覺の觸手を以て、「新感覺派」なる一派を
産んだ。氏は絶えず前人未踏の境地を捉へよ
うと努力する。「艦」に於て、「日輪」に於て、そ
の努力の成果は遺憾なくうかゞはれる。氏の文
壇に於ける地位は前田河氏と共に既に大家の班
に伍した。否その中堅作家として異常なる期待
をかけられてゐる。
是等新興五作家のその各々の特色より打出さ
れたる二十七の長短篇を一讀する時、吾等は既
成文壇人の諸作に求め得られざる「新しき興奮」
を感じる。この二十有七篇はいづれも各作家の
代表的名作だ。今、一括して「新興文學集」とす
る。本集によつて新時代の代表的文藝は縮圖
的鳥瞰圖をもち得たと云つてよい。

昭和四年六月

三等船の客
マドロスの
伯父の群
太陽の黒點
拵られた男
敗海軍の宿
上海の

前田河廣一郎

をむきながら話し出した二人の青年の會話も、其時、船窓の外を、まつ蒼な大輪の波が、強い肩でぐいと船體を押しめして、甲板の上に大男が仆れた時のやうな物音を立てたので、揉消されてしまった。亂雑な室内のすべての物は、一瞬間、ふらふらと宙に浮いて、一息ついたかと思ふと、又逆にもとの位置へ急にぐらぐらツと押し戻された。けたたましい嬰兒や子供の泣き聲と、それらの母親らしい女の聲とが、一時に方々に湧きあがった。枕元の金盥をさぐる音と生欠伸を囁む聲もそれにまじった。

「……後は荒山、前は海、尾のない狐があるさうな、僕も三度四度騙さアられいた、なつちよらん……」

誰やらが、ほそい換つた鼻聲で突然叫び出した流行連れの歌は、すべての騒音に覆された病的な空気をかい潜つて、歌の續く間は人々の耳に、船室の勞苦を忘れさせる爲の妙樂のやうにひびいた。

「——あすこの隅の奴等は、みんなあれに惚れてるんださうだ。面白いね。」
個目の男は、まだ執拗く暗闇の方を見ながら、談話本の男の肩を揺つた、話しかけられた方

白い腹を露してゐる女の子や、電燈の光の届かぬ邊に蒲團やら子供やらわけのわからぬ黒い團塊になつて突伏してゐる者などが、一様に臭い息を吐いてゐた。折々、臨月にまぢかい婦人が、息を吐きながら、ベッドの鐵柱傳ひによぼよぼと二階の便所へ通ふ姿などが、多数の視線につきまとはれて室内から消えて行つた。

廣い物置のやうな一室に、わづか五つしかない煤つぼけた靴の彼方に、黄昏の海は、寒さに刺戟された蒼白い波を戦かしながら、絶えず後ろへ後ろへと流れて行つた。時には、ガラス一枚の外で、まるで誰のやうに暗碧の水の渦がどろどろと壁をふるはせて打ち當つたり、それが遠退くと、水山のやうな水の層が、また近づいて来る大波と、溫和しく抱き合つて、船から離れながら深い谷を作つて渦を巻いて行つたりするの、恐ろしい他界の不思議な暴力の如く人々の眼を脅かすのであつた。

「腹がへつたな、——まだ飯にならんかなア。」
皺枯れた聲が、どこからか、さう呟いた。すると、そのすぐ傍から、
「飯つたつて、例のバケツ臭い乾物の煮しめと、鹽つ辛い澤庵漬ちや食ふ氣にならんからね。」と誰やらが、不平らしく嘯き足した。その時、色

は、「二三行讀み通してから、やつと……」
二人はこれより播州船路をさして急ぎました。とある處へ中指を挿し入れたまま本を閉ぢて、充血した眼をあげた。

「さうかね？——暫く考へるやうな眼付をしてゐたが、思ひ出したやうに彼は駭腕の畫である安樂草を片手でつまんで、——皆な湯をてる連中ばかりなんだからね。」とシガレットを口へ運びかけて、「この三等室に乗つてる女と云ふ女で、亭主のたいの彼女つきりだらう。皆なが張りこむのも無理はなからうぢやないか。お化粧さへすりや、あんなお多福だつて満更澄たてもないからな。」とシガレットを口にくはへて、枕元の米國製のマツチを鐵柱に擦つた。

「あ、こりや大變。あすこの奴等はつかりと思つたら、君も、もうまゐつてゐるんだね。」個目の男は顔の半分だけで、苦しうに笑つて、いきなり對手の肩を打つた。
「何をぬかす。君こそ、見い、シスコを出帳してから、彼女の臂がつかり狙つてるんぢやないか。」

「僕が？……と云ひかけて個目の男はさつと顔を振らめながら、「そ、そんな馬鹿なことがあ

の蒼黒い船室附のボーイが、だらしない雪駄ばきのまま戸口へあらはれて、莫迦丁寧な聲で叫んだ。
「さア、さア、皆さん、これから船室の検査がありますから、どうぞ床の上へ物を落つこときんやうにして下さい。煙草の殻や、蜜柑の皮などね。済み次第すぐ御飯に致しますよ——」と妙に船客を鼻であしらふやうな事を言つてゐな

くになると、人々の間には、一しきりベッドの上へ立ちあがつたり、金盥をかたづけたりする氣勢がして、片頬へべつとり寝亂裝のねばりついた女が、きよきよきよ首だけ擡げてその邊を見廻したり、子供が眠から醒された時に限つて立てる泣き聲などが聞え出した。一日中、必らず誰かがどこかの隅で燃やしてゐる會話の火は、再び船室一杯にひろがった。元氣の良い掛聲で、上のベッドから飛び降りる若い者などもあつた。

「どうです、かみさん、一寝入りしやしたか？」
緒ら顔のがつしりした男が、暗闇からあらはれて、「十三番」と札を貼つた酌婦のベッドへ、づかづかと寄つて来た。飛びあがるやうにして毛布の中から半身を起した女は、まだ眠げな眼をぼんやり、睨いて忘れたことを思ひ出したや

るけえ。」と新みつくやうな聲で笑つて、彼は揉みくちやになつた蒲團を敷いたベッドの上へ、くるりと仰向けに寝轉んで、一つの目をつぶつた。

人々の會話の複音は、一種の單調さを以ていつまでも續いた。時々それが、階上の便所の扉が船の震動とともにやけに柱に打ち當る音や、どこかでフライ鍋が吊されたまま煙を傳つて動く拍子にからからと鳴る音や、船腹を撲つて甲板にざわざわと裾を曳く波の音などに寸斷されて、一しほ眼さうに響くのであつた。多くの人々から發散する汗酸つばく、體えたやうな動物性の臭が閉された送風機、船口の爲に、どこへも逃場がなくなつて、辛うじてシイ、デツキの便所の戸口へ通うてゐるので、そこへ溜つた尿素と石炭酸の臭を飽和したまま、再び船室へ舞ひ下りて来て、八十幾つかのベッドにある夜具の古布や、めいめいの處に積み重ねた手荷物や、果物の箱や、香ざめた顔をして寝てゐる女共の胸の底までも沁み込んでしまふやうに思はれた。その空気に浸りつくした船客のうちには、耳きい指のびくびく動く足の裏だけを見せてゐる男や、未熟な果物のやうな乳存兒にだらけた胸元をひろげて寝てゐる婦や、青

うに、
「もう、御飯ですか？」と訊ねた。
「御飯——？ さうよ、御飯はとうに済んだがね。あんたがあんまり寝坊しとるんで、もう明日の朝までは御飯にありつけアせんぜ。」
男はとぼけ顔をして、女のベッドの片端へ無遠慮に腰をおろした。女は胸の下のちらと見えたスカートの邊をかばひながら、無意味な笑ひに、健康さうな齒を見せて、ベッドから降り立つた。

「いいや、ほんたうさ。今御飯をつめた他の腹アこの通りつつ張つてるがな、觸つて見なされ。」
「どれ、どれ。」
「あいたツ。」
その時、三人の男がそのベッドの前へどやどやと押寄せて来た。
「もう来てるか、早いなう。」
紀州訛の、角顔な、色のなま白い男に續いて、顔の黒い、聲の細い青年が、調聲な聲でわめき立てた。
「新けるね、いつもから二人でちんかもをきめるのを見と。」

「さうよ、いくら船中だつてな。」
 茶色のスウェータを暖かきうに着た個目の男が一番後になつた。五人は狭いベッドに目白押しに掛けて、霧々めき散らしてゐたが、突然、いまままで静かであつた上のベッドから、色の浅黒い二十五六の青年が、安全剃刀を片手に、半身をあらはして、心持侮蔑を含んだ眼元で一同を見張つてから、女へ向つて、
 「君、あの鏡をちよつと貸してくれませんか？」と優しく尋ねた。
 女の瞳は、素早く青年の視線を捕ひ上げて、一瞬間、二人の視線は絡みついたりやうに、空中にちつと交錯したまま眺み合つてゐたが、女は急に顔のある端高な聲をあげて、
 「顔を剃るんですか？」とわざとらしく眼を睨りながら尋ねたが、やがて男どもを立たせてベッドの邊をそくそく探し始めた。
 「御安くないね、いよう、色男。」
 「二階にお前の鏡かね。」
 下の四人は、そんなことを小聲で言ひ合つた。
 「あ、ありました。書生さん。」女は青年の顔を下から覗くやうにして、鏡を手渡しながらにツと笑つた。

「よう、よう。」
 「俺も書生さんにあやかりたいな。」
 人々の聲に遮られた青年の言葉は「……どうも髯が伸びて」と云ふ一句だけが女の耳に入つた。女が自分のベッドの方へ戻るといきなり誰かの拳をびしやりと平手で叩く響がした。上のベッドの青年は、ブラッシュで鼻の下や頬へ石鹸を塗り立てた。
 この時、かつかつと階子段を降りて来る五六人の靴音がして、妙に語尾を落した会話のきれざれが、急にひっそりとなつた一室の内へ響いて来た。船客の多くはベッドから伸びあがつて、検査に来た船の役員どもの姿を訝しさに見送つてゐた。役員は總勢五人で、室のボーイが一番後から、ふだんよりも威張つた表情をして、白のジャケツトを着込んでついで来た。眞鍮鎖をひからした彼等は何かの缺點を船客の間から探し出さうとする鋭い眼で隅々を見廻しながら、さもさも重要事らしく何事かを囁き合つて厳密に次室へ通過して行つた。まづ先に立つた制服隊の、口髭を短く刈り込んだ、日本人の船長の貌だけは、暫く人々の記憶に残つた。
 「船長も羨もあつたもんけい。一體俺達を何と

思つてやがるんだ。かう見えても、へん、御客様だぜ。船賃こそ安いかは知らねえが、ちつた人間並の待遇をしる。船會社ア俺達がかうやつて大勢乗り込むからこ備かるんだ。こんな臭いとこへぶち込みアがつてさ、あの飯は何だ、一體、莫迦にするのもいい加減にしねえか……」
 眼の圓い、赤肥りに肥つた老翁が、酒臭い息を吐いて、一番先に煽動家らしい口吻で船室の沈黙を破つた。彼は叫びながら、ベッドからまんな中の食卓の卓へせり出て来て、そこへ括り猿のやうな拳をとんと置いた。
 「さうよ、さうよ、まるで豚小屋ぢやねえか、このざまはよ。」百軒らしい老人が、胡麻鹽頭をふりながら、講談本を讀んでゐる男の下のベッドから合聲を打つた。それからそれへと、相應する者の聲で、夜になつた一室には、桑港を出てからここ三日間の待遇の悪い會社の仕打を非難する不平で充ちてゐた。
 「十三番」の女を中心として集まつた男どもは、何やらはしやいだ聲で、高らかに叫びながら、折々、どつと笑ひ崩れてゐた。
 「飯だ。」
 正面のベッドにゐた二人の青年が、さう叫ん

で、ベッドを立ちあがつた。送風機の向うから、ボーイが茶碗と箸を入れた筈と、香の物を盛つた飯葉の皿を抱へながら、動搖する床をふみしめ、ふみしめ、こつちへ運んで来るのが見えた。次室の天井から、湯気の立つ飯櫃を、汚らしい縄で釣り卸すのが、立ち奔く船客の間から、手にとるやうに見えた。梅雜な騒がしさが、急に室の四隅から湧いて、まん中へ集まつた。
 「飯だ、飯だ。」
 「御飯ですよ。」
 「そら、飯、飯、飯ッ。」
 口から口へと、この簡単な言葉が、見る見る傳染して行つた。口に出さぬ者も、群集の勢ひに動かされて、腹の中ではかすかに「御飯」と囁かざるを得なかつた。箸箱を持つてベッドから飛び降りる者や、子供の名を呼ぶ聲や、茶碗の壊れる音や、バケツを蹴つた音や、人々の重みにきしめるベンチの響や——大勢の人が、無造作な會食をする際に起すすべての物音は、船室の萎えた空気を一變して、急に賑やかな、騒々しい景氣付をした。
 「ボーイさん、お菜が来ないぞー！」
 「お菜だ、お菜だ、問拔奴。」

「何をしてゐるんだい。先刻注文したいた淋焼と口取を忘れるない。」
 人々は笑ひどよめきながら、首を伸ばして次室の天井から、まつ黒い縄で吊り下げられる筈を見てゐた。一人の男が、箸で茶碗の縁をかんかん叩いて、床板をとんとんと拍子を取つて躍ると、もう一人の男が、別な場所ですりやりと笑ひながら同じことを繰り返した。すると、それをきつかけに、模倣者がそこにもここにも増えて、しまひには、卓へ顔を出した男どもは、皆一齊にその即興の馬鹿舞を始めた。男どもの中に、食慾のなささうな顔に微笑を噛みながら、うつむいてゐた。
 「さア、さア、皆さん、御待合のお菜が参りましたよ。——鉢巻をしてお食んなさい。類つべたが落つこちるほど甘い物ですよ。食料はついてゐるんですから、御遠慮なしにたんとお食んなさい。——どうぞお静かに願ひます。」
 煮物の小皿を山のやうに積んだ筈を、汗みどろになつて運んで来たボーイは、唇を歪めて叫びながら、一同を笑はせた。暫とすると、船室にははかにひっそりして、湯を吸る音と、舌打する響と、飯櫃を少しこつちへよこして呉れ

るやうにと騒ぐ聲などが聞えるだけであつた。人々は、時々、茶碗から眼をあげて、自分の周囲を見廻して、これ程大勢の人間がこの船室には居つたかしらと疑ふやうに、卓へ押し掛けた多數の人々を眺めた。席がないので、立ちながら頼張つてゐる者もあつた。食物だけは二等まがひの特別な膳を運んで貰つてゐる者は、尊大らしくベッドの上から下の食卓を覗下して、ボーイの持つて来るオムレツなどを撮んでゐた。箸をつけたと思ふと、すぐ吐瀉してしまふ婦なども見受けられた。
 二
 晩餐のすんだ後には、牛肉の片や、箸の折れや、澤庵の端などが、處處はす撒き散らされた飯粒と、煙草の吸殻とに雜つて、恰度、何物かが突然そこへ亂入して、手當り次第にすべての物を破壊して行つた跡のやうに思はれた。それをボーイがせつせと掃除してゐるのを見成りながら、人々は如のやうに轉けて行く飯粒や、齒形の立つた大根の端などに、つくづく食物と云ふものの氣拙さをさつたやうな眼付で、めいめいのベッドに飽食の體を横へた。
 湯氣のやうにむんとする温かみと、すべての

物が核心から腐つて行くやうな臭みとに閉ざれた船室には、だんだん時間が経つにつれて、人々の顔もやや下火になり、時間の拘束の無い場所であり勝ちな、底深いけだるさと、何かしら強烈な刺戟を覚める本能が、陸の生活のすべての約束から解放された人々の頭に根強く湧いて来た。一様に惻い表情をして煙草を吸うたり、とろんとした眼を開けたり閉ぢたりしてゐる彼等の或者は、折々、何か事件が起ればいいと云ふ風に、ひよつくり、ベッドから首を擡げて、部屋の中を見廻すのであつた。船の賭の粗悪な談や、アメリカ人と喧嘩した談などが、かう云つたふやけた空気の中に、ちよろちよろと流れ出ては又すぐ沈黙に吸ひ込まれた。それでも、女の談だけは執念深くそこに縋り返された。

「一隅の上のベッドに、仰向けに寝そべつてトラムプを弄つてゐた青年が、向ひ側のベッドに鼻唄を歌つてゐる紀州訛の男へ話しかけた。

「やろか。」

話しかけられた方は、しまりの無い、肩を開いたなり、流暢に青年の釣りあがつた眉を見遣つて、

「何をやるんか。」とじめじめした口吻で訊き返した。

チはそつちへ集つたり、こつちへ掻きよせられたり、一人の膝の前に手薄になつたと思ふと、すぐ又そこへ倍になつて戻つたりした。立ち置めた煙草の煙を通して、

「張りますよ。」

「そら、ブラック・ジャックだ。」

「ああ、これで一弗損しちまつたな。」

などと云ふ言葉が、次第に静まりかへつて行く船室の片隅から漏れた。いつの間にか風になつた海の上を、こるやうに進んでゐた船は、折々心臓のやうな機關の鼓動を、遠くの方で間歇的に聞かしてゐる外、時々、海のどこかで、船の棒で大地を撲つたやうな波の音が、真夜中の底知れぬ大洋の裏返りを打つてゐる態を想像させるのみであつた。そここのベッドには厭の聲がだんだん高まつて行つた。

紀州訛の男は、ポケットからウイスキーの罎を出して、

「どうです？」と學生の鼻先へ突付けた。

「いや、いけません。」

「ちや、あんたは？」突出した手首を動かさずに、罎の口だけ女の方へ向けた。

「ウイスキー？ すこしくださいな。」女は眉根に小皺を刻みながら、罎を受取ると「このまま飲

した。

「トランティー・ワンは？」

「よからう。」彼は首肯して、青年の隣のベッドに、膝を組みたててその上へ本を載せて讀んでゐた學生に「あんたはどう？」と起きあがりさま、促した。學生は氣輕に受けて、膝の上の本を枕の下へしまひ込んだ。三人では面白くないと云ふので、「十三番」の女と、緒ら顔の男とが加へられた。五人は青年と學生とのベッドに、珈琲色の毛布を敷いて、圓座を敷いた。

「親は誰？」

「くじがいい。」

「ぢやんけんで定めようよ。」

親になつたのはトランプを持つた青年であつた。マツチの棒が一人前二十五本づつ、一本二十仙で各自が親から買ふことと定まつた。無聊と倦怠から急に一つの遊戯に集中された五人の人々は、活々とした笑顔を浮べ、心の中には一種の家庭的な親しみを共有してゐるやうに感じたのであつた。器用に切られて、器用に各自の膝下へ撒かれる札の一枚づつ増えて行くのを樂しみに待つてゐるかのやうに、四人は妙に張りつめた忍耐力を以て、親の細長い指を油断なく見戊つた。五人の顔の影は、カードを拾ふた

むの？」と罎の貼札と男の顔を見くらべた。

「喇叭吹くよ。」彼は素直な答へて、札を切り始めた。罎は女から緒ら顔の男と眉の釣りあがつた青年へ廻つたが、他に飲む人がなかつた。自分の處へ歸つた罎を掴むと紀州訛の男はまだ九分通り入つてゐる酒を、本能的に眼の前に翳して見て、ぐいとそのまま口へ持つて行つて、咽喉を鳴らしながら半分ほど飲んでしまつた。飲み終ると「ほーう」と太息をして、再び罎をポケットへ納めた。カードを掻き終つてから、彼は膝下のマツチを擦つてシガレットに火をつけながら、酒に喰はれた聲で、

「さア、少し仰山張るか。」と云つて、マツチをぼんと外へ投じた。

立ち後れた形で、三人は勝負にならず、伏せ札とジャツキとスピードの三をぢつと手元に見成つてゐた學生と、彼の勝負になつた。

「見ようか。」學生はマツチのありたけを場へ拂ひ出した。その時、隣り合ひに坐つてゐた十三番の女の柔かい膝が、骨張つた學生の膝を二度ぐいぐいと小突いた。目をあげると、女はほんのり上氣した眼を意味ありげに細めて、彼に胸をした。

親は自分の札を用心深く引いて、一枚だけ手

めに動く時だけ、ひらりひらりと毛布やベッドや壁の上に躍動したが、ややともすると、ちつと珈琲色の毛布の上に水い間しがみついて何か深い考へ事をでもしてゐるかのやうに見えた。彼等の弛みない視線と指先だけが、注意深く働いた。

「もう一枚。」緒ら顔の男は、手元に配られた伏せ札とハートの女皇を見くらべてゐたが、太い聲で呟いた。

「いいの？」親の手からはダイヤの三がひらりと二り出た。

「よし。」貰つた方は首を縮めて、それを伏せ札と敷へ合はしてから、強く口を噤んだ。

「そちらは？」

「もらはうか。」

「ほら来た。」

「もう一枚。」紀州訛の男は、手札を二枚開いて、片手で煽るやうな手付をしながら、伏せ札を呼んだ。

「そーら、ブローク。」親に慣れた手付でマツチを渡つて行つた。

一回目の勝負は、親の全勝に歸した。マツチの大部分は彼の膝下へ無造作に投げ込まれた。かうした勝負が、しばらくの間續いた。マツ

元に伏せて待つてゐた。

「いかう、——罎火でいかうかい。」頼て彼は膝の下のマツチを太い手でぐいとまん中へ押し遣つて、學生の顔をぢつと覗き込んだ。マツチの大部分は場へ集つた。手合せになると、學生は自信のある手付で、伏せ札を軽く繰んでひよいと場へ開いた。五人の視線は一時にその一枚の札へ集つた。と思ふと、急に轉じて親の手元へ撥ね歸つた。そして、突然湧いた一種の感情を陰蔽した時誰もが使ふ急劇な表情、——沈黙を守つて、恐ろしさうにまん中のマツチの敷を目で計つた。すこし細つと、傍の三人は、殆ど同時に叫び出した。

「紀州さん、どうしたの？」

紀州訛の男は酔の廻つた顔をあげて、唇を歪めながら、てれかくしに高く囁つた。

「ブラフだと思つたら、トランティー・ワンか。」

「敗けた。敗けた。」

彼の鼻にかかつた聲は、船室いつばいに底力のない、からな響を送つた。どこかで、小兒の麗される聲がそれに雜つた。

「わたし、酔つちまつたの。もうよさうぢやありませんか。大分遅いわよ。」女は紅くなつた頬を、圓い手で撫でおろして、人一人動いてゐ

「あれだ。」緒の顔の男はベッドの梯子をおりかけて、情けなさうな眼で彼女を見あげた。「甲板へ出りや、あんたと二人切りぢやけに、」

「連れてつて頂戴な。」

「あなた、さみしいか？」

「シスコよ。それから田舎の方へも行つたわ、パパさんと。」

「パパさん幾歳？」

「わたしと十六ちがふのよ。姉さんを貰ふはずだつたけど、姉さんが他の男と出来ちまつたのでわたし身代りに来たの。わざわざ眞実と御金を送つて来たんですから、——」女は、一等室の圓窓から漏れる光の前を横切る拍子に、まつ黒い海を背負つて、一瞬間くつきりと浮出した男の横顔を、流管にちらと見遣つて、聲を落した。男はががつと身内に悶を感じた時のやうに、暫く押黙つてさつと早足に歩いた。誰かでもない甲板には、二人の靴音が不規則に、暗を割んでどこまでも續いた。船の方へ近づくに従つて、機関の響と船の動きとがより強く感ぜられた。暗に慣れた二人の眼には、その夜の送風機の群やら、起重機の柱やら、船口の扉

「……三人でかい？——彼はぐくりと咽喉を鳴らして、一瞬間の躊躇を示したが、すぐと狡猾さうな眼を天井へ投げて、

「……變な御連れさんぢやて。」と空囃いた。

「浪にさらはれると危険だよ。」學生はつけつけと明喉から鋭い言葉を吐いたが、言ひ終つてから自分で自分の指を加減に背立つた風に唇を噛みながら、枕の下の本を取り上げた。女は黒と白の毛織の襟巻をすつぱり頭から被つて、あぶなげな足取で、男の導くままに階子段をあがつて行つた。

「書生さん、妬いたなら。」男は上甲板へ出る船口の梯子をのぼりつめて、アメリカ流に女の腕を執つて戸口を跨がせながら、鼻先でせせら笑つた。暗と電燈との境に、彼の金歯が、ちら

「誰か見てゐるといけないわよ。」

「暫くすると、女の尖つた鼻聲が、折重つた靴音の下に、か細く響いた。

「何、誰もゐやせんがな、そりや氣の所ぢやけに。」男はぼそぼそと囁いた。その途端に、女の襟巻が何ぞのやうに、ひらりと暗に跳ねあがつて、音も無く甲板へ落ちた。すると、突然、空の方から、絹を裂くやうに、

「あつはは、あつはは……」

と笑ふ淋しい聲がした。

男と女は撥ね飛ばされたやうに、距離を置いて、暗から立ちあがると、女の方から先に小犬のやうな唸りを發して、男の腕へしがみついたのであつた。上の方をすかして見て、男は、

「あれ、狂人よ、あすこの居室にゐる姉だよ。」と強さうに言つた。

「おお、びつくりした。さ、歸りませうよ、わたしはこいわ。」

「ま、もちつとるやうよ。あんなもの無關ぢや。」

腕りの大きい波が、一掃り船を動かした後は、霧の深くなつて行く甲板には、大洋のどん底から湧き出すやうな、重苦しい沈黙がすべての物を小さく封じ籠めてしまつた。

「……」紀州訛の男は女の手を執りながら笑ひ崩れた。話の纏結が無さうに黙つて俯首してゐた學生は、

「僕もいつしよに行きませうか。」と顔を染めながら言つて、きまり惡げに二人の様子を下眼で見くらべた。

「學生さん……かまはないことよ。いいでせう？」女は男の手を振り握り、紀州訛の男に訊ねた。

「……」三人でかい？——彼はぐくりと咽喉を鳴らして、一瞬間の躊躇を示したが、すぐと狡猾さうな眼を天井へ投げて、

「……變な御連れさんぢやて。」と空囃いた。

「浪にさらはれると危険だよ。」學生はつけつけと明喉から鋭い言葉を吐いたが、言ひ終つてから自分で自分の指を加減に背立つた風に唇を噛みながら、枕の下の本を取り上げた。女は黒と白の毛織の襟巻をすつぱり頭から被つて、あぶなげな足取で、男の導くままに階子段をあがつて行つた。

「書生さん、妬いたなら。」男は上甲板へ出る船口の梯子をのぼりつめて、アメリカ流に女の腕を執つて戸口を跨がせながら、鼻先でせせら笑つた。暗と電燈との境に、彼の金歯が、ちら

「……」紀州訛の男は女の手を執りながら笑ひ崩れた。話の纏結が無さうに黙つて俯首してゐた學生は、

「僕もいつしよに行きませうか。」と顔を染めながら言つて、きまり惡げに二人の様子を下眼で見くらべた。

「學生さん……かまはないことよ。いいでせう？」女は男の手を振り握り、紀州訛の男に訊ねた。

「……」三人でかい？——彼はぐくりと咽喉を鳴らして、一瞬間の躊躇を示したが、すぐと狡猾さうな眼を天井へ投げて、

「……變な御連れさんぢやて。」と空囃いた。

「浪にさらはれると危険だよ。」學生はつけつけと明喉から鋭い言葉を吐いたが、言ひ終つてから自分で自分の指を加減に背立つた風に唇を噛みながら、枕の下の本を取り上げた。女は黒と白の毛織の襟巻をすつぱり頭から被つて、あぶなげな足取で、男の導くままに階子段をあがつて行つた。

「書生さん、妬いたなら。」男は上甲板へ出る船口の梯子をのぼりつめて、アメリカ流に女の腕を執つて戸口を跨がせながら、鼻先でせせら笑つた。暗と電燈との境に、彼の金歯が、ちら

「……」紀州訛の男は女の手を執りながら笑ひ崩れた。話の纏結が無さうに黙つて俯首してゐた學生は、

「僕もいつしよに行きませうか。」と顔を染めながら言つて、きまり惡げに二人の様子を下眼で見くらべた。

「學生さん……かまはないことよ。いいでせう？」女は男の手を振り握り、紀州訛の男に訊ねた。

「……」三人でかい？——彼はぐくりと咽喉を鳴らして、一瞬間の躊躇を示したが、すぐと狡猾さうな眼を天井へ投げて、

「……變な御連れさんぢやて。」と空囃いた。

「浪にさらはれると危険だよ。」學生はつけつけと明喉から鋭い言葉を吐いたが、言ひ終つてから自分で自分の指を加減に背立つた風に唇を噛みながら、枕の下の本を取り上げた。女は黒と白の毛織の襟巻をすつぱり頭から被つて、あぶなげな足取で、男の導くままに階子段をあがつて行つた。

「書生さん、妬いたなら。」男は上甲板へ出る船口の梯子をのぼりつめて、アメリカ流に女の腕を執つて戸口を跨がせながら、鼻先でせせら笑つた。暗と電燈との境に、彼の金歯が、ちら

と、突然、女のヒステリックの聲が沈黙を破つた。「いや、いや。この人は、黙つてるといい氣になつて！」

「いや、いや。この人は、黙つてるといい氣になつて！」

前の日と同じやうに、その日も暮れるのであつた。凡ての出来事が、前の日の出来事を真似てゐるやうに單調で、古臭かつた。同じやうに舌觸りのわるい飯が、同じやうに嫌な味で、同じやうに安草の煙の層の下に漂うてゐる話も、一定の仕事のない無聊さも、サン・フランシスコを出發した其日から、一日として變つたことがなかつた。人々の心も、同じ服を着て、規則正しい監視の下に置かれたやうに、何一つ珍らしい事を考へ出すことが出来なかつた。それでも、この重苦しい、ふやけた空氣のうちに、だんだん熱帯地へ近づいて行く豫感としての暖かさだけ

は、少しづつ人々の生活を變へて行くと同時に、彼等の心に自分達の旅行に就いて何かの目的があつたことを思ひ起させるのであつた。そして、彼等の會話のうちには日毎に「ハワイ」と云ふ言葉が餘計に挿まれるやうになつた。だが、彼等の大多数は盲目的に自分の生活を、汽船そのものに任せ切つて、サン・フランシスコから横濱までの旅程を出来るだけ何も考へずに、その日その日の生活を造つて行くやうな自暴的な懶惰に陥つてゐるのであつた。さう云つた人達は物を食べてゐない時は、鈍重な眠りに陥るか、無駄話をするか、その執らかを選んだ。たまたま甲板へ出たり、ものを讀んだりする者があつても、それは彼等の全生活とは何の關係もない、不意の出来心からする行爲に過ぎなかつた。

その晩も食事が済むと、まだ雑巾のあとの乾かねうちから、一塊りの男どもが、白けた、みだらな微笑をうかべながら、二三人の饅舌者を中心として集つた。「——その半巾お玉つてい名はどうしてつけたんですか。」と一人が訊ねた。「いや、面白いんだ。人三化七たアあの女のこどだらう。處が、奴さん、顔は醜いが客の特選

が上手でね。それで、御客は顔だけ見ないやうに、半巾を掛けると云ふ寸法さ。——」

「メリケン人が日本人を排斥するのも無理はないと思ふこともあるね。眞實結婚をやかましく云つてゐるが、あれで、ほんたうの處を曝け出した日にや、お互に肩身が狭いからなア……」

人が、若い者を見廻して、むくれあがつた。唇を舐めずりながら、「あッハ、あッハ」と無遠慮に哄笑した。彼の聲に和して、笑ひ興じてゐた一群の若い者は、だらしない眼付で、ベッドの上にいる婦どもを見返つた。

東雲の形がくづれた油じみた頭を、重苦しさに持てあましてゐた婦どもは、彼等の枕元で男達が、言葉で表はせぬほどの興奮さを手振りや身まねで表はして、展覽會に工場が盛うて製作品を出品するやうに、あること無いこととの限りを捏造して語りあつてゐるのに、顔一つ賑らめもせず、くすくすと男にはわからぬやうな微笑を含んで、耳を濟ましてゐた。

そのうちに、何かの機會で、微かな變化が船室一般の空氣を支配するやうに見えた。一隅には、昨晚の連中が、またトランプを始めたりしく、そこへ吸散されて行つた人々の爲めに、まん中の食卓に集つた人影も、大分疎らになつた。話し疲れた者はベンチへ足を伸ばして、あたり憚らぬ大欠伸をした。煙草を吸つてゐる者は、一口でも早く一本のシガレットを吸ひつくしてしまひたさうに、やたらに黄ろい煙を鼻孔から吐いた。まだ話し續けてゐる者どもも、話をする當人が、言葉を遣んだり、記憶を辿つた

りする爲めに、明瞭の邊で「え——」と聲を引張るのが、堪らなく持ちもどかしさうに、いらいらした眼で御互の顔を見成つた。彼等は各自に、だんだん深いけだるさの底に落込んで行く心を、無理にも刺戟の強い言葉や、實感を再現すること、惹き立てようと思はせればあせるほど、言葉が上りになつて、ほんたうに言はずとすることと遠くなつて行くのを感じた。今までの無限の好奇心から眺め合つた違つた顔も、その人の職業も、もう珍らしさを失つて、普通の挨拶以上にその人間の氣質や經驗などを穿鑿して見ようと云ふ氣も起らなくなつてしまつた。

どのベッドにも、寂寥に苛まれた、壯健な肉體を持つた男や女が、息のつまるほど彼等の前途に塞がつてゐる「時」の重みを、どうして過さうと云ふ考へもなく、彼等の第二の本能である労働から、一時解放されたまま、何をするともなく、ただぼんやり煤けた天井や、上の人間の體のなりにふくらんだ帆布のベッドなどを眺めてゐるのであつた。

「諸君、ちよつと御相談に及びますが——」

人の肥つた男が、小さなしよぼしよぼした眼を、肉の塊のやうな顔に働かせながら、いつのまにか船室の入口から妙な聲を發して室内へ叫んだ。大食をする家畜のやうな男であつた。彼の背後には、個目の男と談話の本の男が、ポケットへ手を捻ぢ込んで、心持腹を突き出したがら、一室を見廻してゐた。

れるさうですから——と附け加へて、自分で自分の言葉に恥ぢたやうに、顔と顔を舐らめながら、一室の喝采や拍手に送られて、次の室へ出て行つた。

今までの軍調が急に破られて、人々の心には新しい感激が湧いた。ボーイが三人どこからか紅白の幕を持つて来て、正面のベッドの鐵柱へ釣りあげる。食卓が取除かれた壇の上には、帆布が一面に敷きつめられ、辯士卓にはフランスとコップが運ばれる。見る見る汚い船室は、浪花節の定席と變じてしまつた。しほりあげた幕の前の、日本の國旗と汽船會社の旗とが、人々の眼には如何にも華々しく映じたのであつた。

船の三等室から来た人々と、鐵の船客とは、初めのうちは異人種のやうに、滅多に話もせず、別々に塊り合つてゐたが、時が経つにつれて、煙草の火を借りる者や、語り手の噂をする者や、前に坐つてゐる女の批評をやる者などが増えて、いつのまにか、同じ目的の下に集つた、單純な多數に化つてしまつた。

鈴が鳴る。奥州辯の男が、卓の前へ立つた。壇をはみ出した群衆は、梯子段や、床の上、壁の際などから、熱心に拍手をした。

「不肖が在米邦字新聞記者を代表すまして、今晚の司會の任を帯びましたことは非常な光榮に感ずる次第で御座います。床次内閣閣下が浪花節を以て忠君愛國の大精神を鼓吹する宣傳機關と御考へになられましたことは、實に深い意義があることと存じます。同じく思想方面の宣傳者たる私どもの、今夜の如き會を皆様の前で企てしましたことも、決して御縁の無いこととは申されません。抑も、藝術と思想とは……」

その男は尚の浮くやうな事柄を、生硬な植民地式な熟語で長々としゃべり立てた。幕の後ろには、語り手らしい男が、黒の三つ紋の羽織を着流して、聴衆の中の婦の顔をじろじろ覗いてゐた。稍だれ氣味になつて、新聞記者の演説が終ると、音ノを合せる三味線の音が、拍手や呼び聲の響に雜つて、人々の心を浮き立たせた。世話役の個目の男は、幕の後ろから、ひかた一つの間を覗かせながら、黒い團塊になつて蠢動してゐる頭の数に概算してゐた。

つた強音に變ると、人々の胸裡に刺まれる一句一句は、封建時代の社會觀や、日本でなかりやわからぬやうな不自然な思想や、それに絡みついて醜惡なものを美化しようとする雲とか花とか云ふ自然の現象や、卑俗な英雄崇拜の觀念などであつた。聲の抑揚が騒々しい言葉を運んで、ぐんぐん音階を登りつめると、末はやはらかな妙音になり、語り手は自分の聲に魅されたやうに、眼を開ちてびしやり、卓を扇で叩いて、苦痛に堪へぬやうな長音を引いて、沈黙が呑みまゝに聲を納めた。と思ふと、くだけた、平板な敘述が浪花節特有の誇張した談話體で、いろいろな事件を、さもさも面白さうに、疑惑を挿まぬ頭で考へられて来た通り、するすると物語られて行くのであつた。

「……」

彼の内の省は知らず識らずのうちに、聴いてゐる事件の中へびつたりとはまつてしまつた。彼等の知つてゐるすべての事が、その靈妙な節廻しのうちに補つてゐるさうであつた。それは、彼等が生れてから、また生れぬ前からも、幾度か聴いてゐた節ではなかつたらうか。いや、彼等自身曾て、その事件のうちに住んでゐたのではなかつたかしら。彼等は皆一人の中山安兵衛として、江戸中の安料理屋や酒屋を千鳥足で飲み廻したのではなかつたかしら。そして、今かやつてアメリカから長い間の力勞を終へて小金をためて日本へ歸つて行くのは遠い昔の出来事で、實は自分自身、醉眼を睜つて、伯父の決

も先づ藝人に接したと云ふ遊戯的な氣分を人々に與へたのであつた。最後の拍手や、野次馬の呼び聲などが鳴りやんでから、わづかの間の沈黙が、秒と秒との間にダツシユを引いた。

「……ええと、金門灣頭から降るアメリカを後にして、櫻花咲く日の本の横濱埠頭まで、旅程十六晝夜、長の御旅のつれづれを、私ども藝人風情が、御聴著しの題を掲げまして、一夕の御清聴を煩はすことは、甚だ恐れ入りました次第で御座りまするが……」

外國ではどんな場合にも聞かれない種類の、個人性を極端まで否定してかかつた敬語の連發と、慣伏したやうな彼の動作は、聴衆を、一段高まつた、藝人を愛顧してやつてゐると云ふ見物人の心理状態に置いた。

「……この御仁、十を知つて百を悟り、目から鼻へ抜けるやうな恐ろしい智慧で、——幸ひ智慧であつて結構、これが梅毒でもあつて御覽じろ……」

一同は頭を外して笑つた。氣のゆるみに乗じて、合の手を籠めた三味線は、浮えた撥音に、現實の固有名詞や代名詞を、遠い昔の空想の距離に押し隔てた。鼻にかかつた低音が、言葉を探り、せりあげて、だんだん口腔いっぱいのは

また肩をとりあげて、騒々しい復讐譚の終局を、手短にはしよつて、調子も外れ勝ちに、幕の外の三味線の音と共に、演じ終ると手拭で汗を押しながら、一同の前に平身低頭した。だが、その姿は、今となつては、いかにも英邁々しく群集の目に映じたのであつた。彼等は世話役の廻した帽子に、思ひ思ひの小鏡を投りこんで、我勝ちにとそこを立ち始めた。閉會の辭などは、彼等の譁聲や笑ひ聲に埋れて、新聞記者の動かす両手が、懸音の底に落着いた人のする表情のやうに見えた。

その晩は、遅くまで、中山安兵衛を眞似て唸つてゐる男が多かつた。

一日経つと、汽船は暹と土人の泳ぎまはつてゐるホノルルの灣口へ着いた。

四

「しづかにせい。」
「喧嘩なら上へ来い、どん百姓。」
「何をッ。」
聽衆の氣持は急に幻覺の世界から突つ離された。今まで演壇へ集つてゐた視聽は、階子段の上に船室の空氣を脊かす爲めに控へてゐる不穩な關入者の群を見て、恨めしげに震へた。英語まじりの罵倒が、呼吸の迫つた群衆のうちから、磔のやうにそこを目標けて飛んで行つた。何かが宙をけし飛んで来て、どしんと船室のうちの何物かに打當つた。偏目の男は、演壇の前に落ちた古靴を拾ひあげるや否や、歇的な呻吟を發して、人をかきわけながら、階子段の方へ急いだ。續いて四五人の男が水夫の群に肉迫した。風船玉を兩手で打破つたやうな物音が起つた。まつ黒い一團の人々のうちから、三つ四つの拳が團塊の中心に向つて亂射されるのが、一瞬間、かつきりと下の人々の眼に映じた。複雜な喧嘩がそこから發して、シイデツキに空的な波動を起した。階子段を這つた勢と、親かい物が、重く床の上へ墮ちた音とが、けたたましい子供の泣き聲と、さう云ふ場合に誰しもが發する、言葉とも叫びともつかぬ、動物のやうな叫び聲の底に、太い音の郭を引いた。どや

「やかましい。」

「しづかにせい。」
「喧嘩なら上へ来い、どん百姓。」
「何をッ。」
聽衆の氣持は急に幻覺の世界から突つ離された。今まで演壇へ集つてゐた視聽は、階子段の上に船室の空氣を脊かす爲めに控へてゐる不穩な關入者の群を見て、恨めしげに震へた。英語まじりの罵倒が、呼吸の迫つた群衆のうちから、磔のやうにそこを目標けて飛んで行つた。何かが宙をけし飛んで来て、どしんと船室のうちの何物かに打當つた。偏目の男は、演壇の前に落ちた古靴を拾ひあげるや否や、歇的な呻吟を發して、人をかきわけながら、階子段の方へ急いだ。續いて四五人の男が水夫の群に肉迫した。風船玉を兩手で打破つたやうな物音が起つた。まつ黒い一團の人々のうちから、三つ四つの拳が團塊の中心に向つて亂射されるのが、一瞬間、かつきりと下の人々の眼に映じた。複雜な喧嘩がそこから發して、シイデツキに空的な波動を起した。階子段を這つた勢と、親かい物が、重く床の上へ墮ちた音とが、けたたましい子供の泣き聲と、さう云ふ場合に誰しもが發する、言葉とも叫びともつかぬ、動物のやうな叫び聲の底に、太い音の郭を引いた。どや

「しづかにせい。」
「喧嘩なら上へ来い、どん百姓。」
「何をッ。」
聽衆の氣持は急に幻覺の世界から突つ離された。今まで演壇へ集つてゐた視聽は、階子段の上に船室の空氣を脊かす爲めに控へてゐる不穩な關入者の群を見て、恨めしげに震へた。英語まじりの罵倒が、呼吸の迫つた群衆のうちから、磔のやうにそこを目標けて飛んで行つた。何かが宙をけし飛んで来て、どしんと船室のうちの何物かに打當つた。偏目の男は、演壇の前に落ちた古靴を拾ひあげるや否や、歇的な呻吟を發して、人をかきわけながら、階子段の方へ急いだ。續いて四五人の男が水夫の群に肉迫した。風船玉を兩手で打破つたやうな物音が起つた。まつ黒い一團の人々のうちから、三つ四つの拳が團塊の中心に向つて亂射されるのが、一瞬間、かつきりと下の人々の眼に映じた。複雜な喧嘩がそこから發して、シイデツキに空的な波動を起した。階子段を這つた勢と、親かい物が、重く床の上へ墮ちた音とが、けたたましい子供の泣き聲と、さう云ふ場合に誰しもが發する、言葉とも叫びともつかぬ、動物のやうな叫び聲の底に、太い音の郭を引いた。どや

「しづかにせい。」
「喧嘩なら上へ来い、どん百姓。」
「何をッ。」
聽衆の氣持は急に幻覺の世界から突つ離された。今まで演壇へ集つてゐた視聽は、階子段の上に船室の空氣を脊かす爲めに控へてゐる不穩な關入者の群を見て、恨めしげに震へた。英語まじりの罵倒が、呼吸の迫つた群衆のうちから、磔のやうにそこを目標けて飛んで行つた。何かが宙をけし飛んで来て、どしんと船室のうちの何物かに打當つた。偏目の男は、演壇の前に落ちた古靴を拾ひあげるや否や、歇的な呻吟を發して、人をかきわけながら、階子段の方へ急いだ。續いて四五人の男が水夫の群に肉迫した。風船玉を兩手で打破つたやうな物音が起つた。まつ黒い一團の人々のうちから、三つ四つの拳が團塊の中心に向つて亂射されるのが、一瞬間、かつきりと下の人々の眼に映じた。複雜な喧嘩がそこから發して、シイデツキに空的な波動を起した。階子段を這つた勢と、親かい物が、重く床の上へ墮ちた音とが、けたたましい子供の泣き聲と、さう云ふ場合に誰しもが發する、言葉とも叫びともつかぬ、動物のやうな叫び聲の底に、太い音の郭を引いた。どや

「しづかにせい。」
「喧嘩なら上へ来い、どん百姓。」
「何をッ。」
聽衆の氣持は急に幻覺の世界から突つ離された。今まで演壇へ集つてゐた視聽は、階子段の上に船室の空氣を脊かす爲めに控へてゐる不穩な關入者の群を見て、恨めしげに震へた。英語まじりの罵倒が、呼吸の迫つた群衆のうちから、磔のやうにそこを目標けて飛んで行つた。何かが宙をけし飛んで来て、どしんと船室のうちの何物かに打當つた。偏目の男は、演壇の前に落ちた古靴を拾ひあげるや否や、歇的な呻吟を發して、人をかきわけながら、階子段の方へ急いだ。續いて四五人の男が水夫の群に肉迫した。風船玉を兩手で打破つたやうな物音が起つた。まつ黒い一團の人々のうちから、三つ四つの拳が團塊の中心に向つて亂射されるのが、一瞬間、かつきりと下の人々の眼に映じた。複雜な喧嘩がそこから發して、シイデツキに空的な波動を起した。階子段を這つた勢と、親かい物が、重く床の上へ墮ちた音とが、けたたましい子供の泣き聲と、さう云ふ場合に誰しもが發する、言葉とも叫びともつかぬ、動物のやうな叫び聲の底に、太い音の郭を引いた。どや

で味つた果物などが、船客の記憶を占めて、彼等の食後の話題にのぼつたりしたが、彼等が出来るだけ島の記念を船の中へ蒐めようと試みたやうに、彼等が買ひ求めたバナナや鳳梨、果が、船室の温度に熱れて、各自のベッドの銀柱に酸の強い芳醇な匂を發散する頃になると、それらもやがて忘れられてしまつた。終りに、一つ握がれ二つ割かれて、だんだん果物も人々の鼻につき始め、子供らでさへ食べかけて床へ投るやうなことが多くなつた。そして、その頃から、客のやうな船室には、再び絶大な海の單調さから込み込む寂寥が、容赦なく人々を囚にしたのであつた。

汽船は北へ航路を變へた。さきらのやうに裂けた寒い水面には、折々、鯨が潮を吹いたり、船のまはりへ飛び交ふ信天翁の群が終日悲しうな聲をあげて鳴いたりした。波濤の音は、次第に甲板近くに、性急に噴みつくやうに聞えた。氣候の變り目から、船客のうちには鼻カタールを羅ふ者が多くなつた。

恐る見遣りながらも、懐かしい日本への距離が、一波ごとに近づいて行くのを思ひ、わづかに、大自然が無慈悲な、氣まぐれな力を以て、萬物を無造作に取扱つてゐることを忘れるのであつた。恐ろしい外界から眼を閉ぢて、日本へ着く迄の現實の生活を、出来るだけ遊戯化しよう、そして何でもいから思索力を要求せぬやうに、意識を麻痺して過さうと云ふ氣持が、殆ど典型的に人々の心に、行為に、表情にあらはれた。酔ふ者は泥のやうに酔つて暮した。賭博に耽る者は、夜となく晝となく、着い緊張した夜業者にあるやうな顔をして、食卓の隅に黒山のやうに塊り合つた。讀んで暮さうと思ふ者は、ハワイで買つた講談本や、通俗小説や、雜誌などを、幾冊も幾冊も枕元に重ねて、滅多にベッドから讀をあげなかつた。すべての男どもは、女に對する態度を一變した。女どもの眼も、男に向つて大膽になつた。彼等は「御前があたしに何を求めてるかはよく知つてをよ。」と眼で語つてゐるやうであつた。一切は、日本へ着くまでの旅の恥に過ぎない、と云ふ無責任な思想が、目に見えて著しく人々の動作にあらはれた。人の行為の最後に踏みとどまる羞恥と云ふ觀念の、薄い皮一枚を剥けば、みだらな

胸に萌したことであつた。日本は、彼等にとつては、普通の内地人の考へてゐるやうな、單純な故國ではなかつたのである。——さびしい、頼りない、迫害され勝ちな異國から、一生に一度しか越したことの無い巨きい海を隔てて、今更毎日々々憧れの眼を潤まして翹望して来た、彼等の労働と孤獨の半生に對する最後の安息地であつた。あらゆる困難を冒し、どんな激勞をもいとはず、いかなる屈辱にも甘んじて、再びそこへ、より富み、より強き、より有名な人間となつて歸ることが、彼等の異國に於ける長い漂泊の唯一つの願望であつたのである。その爲めには石も投げられた、拳もつけた、熱い涙を幾度か吞み込んだ。忍び難い精神上の虐殺をもちつと悔へて忍んで来た。無智な彼等は、自由思想の發達した外國人が、日本の國體や、軍事行動や、社會組織や、商業道德などに對して、あらゆる諷刺を行つても、ただただ盲目的な愛國心を以て抗爭するより外はなかつた。彼等は心の中で「今に見ろ」と言ひながら、負けて、負けて、負け抜いた移民の生活を續けて来た。煩瑣な日本の徴兵猶豫願や、無能な駐在官吏や、舌たらずの外交官の遣り口などを、何の批評もなく真想して来たのも、亦何の爲

野獸性の跳梁してゐるやうな行動を目撃するこゝとが多くなつた。互にそれに慣れてしまふと、羞恥の觀念も、鈍く稀薄になつて行つた。悉くの人が、はしやいだ、不純な、一時限りの戀に陥つた。放縱な、狂暴な色慾上の想像力が、人々の頭を擧げた。彼等の眼は、密閉された、鳳梨果の腐る臭と、ペンキと、便所の汚物の臭と、コスメティックの香りを籠めた、ぐるぐるの轉動して熄まぬ空間に、火を吹くやうに燃えあがつた。いたる處にもつれ合ふ彼等の視線は、今更知らなかつた御互を、全く別な半面から、目新しく發見したやうに、異常な嫉妬と、疑恨と、執着心とを以て、ぢいと凝視するのであつた。何かしら新鮮な刺戟が、誰かに依つて外から齎されなければ、その爛熟した空氣が、今にも飽え腐つて、人間を海豚のやうに癡鈍にしてしまひさうであつた。そして、外からは、何等の新しい刺戟も来ないのである。

何を見ても物の本質がわからぬほど、彼等の感覺は懈り、硬ばつて行つた。その懈り、洋裝の中からはあらはれる女の肌や、子供が甘さうに尻つてゐる豐滿な乳房や、何かに押しししがれてのた打ち廻るやうな、男の戯れた妄動などに

めに自分達が迫害されるかを、植民地の低級な邦字新聞の社説以上に深く省察することがなく、すべてを教へられたままの、帝國主義一點張りで通して来たのも、それは皆、彼等の日本と云ふ、抽象化された理想に對する愛が、他の何ものよりも強かつたが爲めである。彼等の日本は、彼等自身の生活の、より高い大部分であつた。彼等の持つた願望のすべては、日本に歸することに依つて實現されるもの、古木のやうな彼等の一生はその土に接觸して直ちに若芽を吹き出すものと、彼等は先入的に久しい間信仰して来たのであつた。或者は、そこに要らざるうら若い妻を豫想してゐた。又、他の者は異國で拒まれた女性に對する復讐的な双棘化を夢みてゐた。小金を貯へた者は新しいアメリカ風な商賣や、耕作法などを企圖してゐた。食物や、言語や、衣服に對する傳統的な必要は、すべての人々の同じ欲求であつた。

切端つまつた、險惡な北太平洋の中に、汽船は離漢のやうにしどろもどろな足取で、寒い方へ、寒い方へ、と進路をとつて行く日が多くなつた。さういふ日には、人々は皆五つの小さな被窓の彼方に、ぬつとあらはれては、陥落するやうに消えて行く、昏い鋼鐵色な水水平線を、恐

對しては、鋭いびりびりした視線が、四方八方から、攻め立てるやうに錯集するのであつた。はげしい、上ずつた、衝動的な動作が多くなつた。それに續いて、嵐のあとのやうな、深刻な、魯鈍な地獄が、ひつそりして息の音一つ通はぬ船室に漲るのであつた。人々は砂の中に埋められた者が、口だけ開いて救ひを求めてゐるやうな表情をして、隅から隅へ、底びかりのする眼を睥るのみであつた。發作的な會話が、所々、風に煽られたやうに、彼等の間に燃えあがつた。言葉——それだけが、ただ一つ彼等の間に默許された自由な交際機關であつた。言葉はあらゆる象に引用された。彼等は言葉で抱擁し、言葉で性の慾望を食ひ達げ、言葉で競争者を威嚇した。いささかの接觸も、偶然の握手も、不用意な微笑も、それが男と女との間に交されたものであつたなら、忽ち群衆の喧嘩や諷刺の中心となり、後々までもしつこく口汚く紅蓮された。だんだん個人性を失つて行く人々の言葉は、御互に異つた趣味や、性格や、職業などをあらはす調子が薄らいで、ともすると、全く無意味な、狂燥的な、淫逸その物の叫喚のやうな聲を傳へるのであつた。長い間、植民地で搾りへられた彼等の言語は、さもしいアメリカの

俗語や目潰辭などを雑へた、日本語とも英語ともつかぬ呂律で、混沌とした泥の中を爬ひながら、隙の上では見せない別な世界を、そこに築きあげようと試みるやうに、あらゆる物に向つて發せらるるのであつた。

それから暴風雨の雨が降いた。空と云はず、水と云はず、茫漠とした、まっ白い濃霧の中を、船は弱み足で、一寸二寸と、足場を探りながら進むやうに思はれた。けしきけるやうな風は、汚い煙突の煙を、みるみる白濁々の世界へ、襍獲屑をちぎつて擲きつけるやうに飛ばして行つた。マストや柱や欄干は、髪を揺られる女のやうな悲鳴をあげて身を揺めた。あらゆる垂直した立體は大自然の暴力に依つて、みすみす壓搾されて縮められてしまふやうに見えた。ビードロの山のやうな巨濤は、甲板の敷尺上まで盛りあがつて、船腹に裂かれることに、冷たい残忍な音で甲板を罵りながら、細かいガラス屑のやうな飛沫を、船一面に浴びせた。波の落ち窪んだ個所に、風の工合で飛沫が海らぐと、千丈の雲の傾きかかつたやうな海の腹に亂射する雨の脚が懐いほどはつきりと思へた。空は低く、壁のやうに水面に垂れて、その上を怪物の影のやうな雲が、豫想外の速

度でけし飛んで行つた。永遠の黄昏が迫つたやうに、船室は柿の果ほどの電燈がともつてゐる外、深い闇のうちに没してしまつた。夜とも晝とも、日が幾日経つたともわからぬやうな、恐ろしい時間の停止が、船室に蟠つた。

誰一人外へ出る者がない。地下室のやうな三等船室には、すべてを忘れる爲めの賭博が、一團の男女を聚めてゐる。四五十人の人影が、まん中の六七八人の博徒を取圍んで、ひたひたと重り合ふ。卓の上の電燈は、醜い、頭の耳きな侏儒のやうな彼等の影を、食卓から床の上へ、そこからまたベッドのある周圍にまで、うつすり投げ出して、それがぼやけた邊には、白い尚を刺した女や、馬のやうに鼻孔を大きくした男や、蜥蜴のやうな手をひろげた子供の姿などが、朦朧と見える。

ひながら險のある眼付で他人の動作ばかり見てゐる「親」もある。傍觀者は、自分達の冒險心を他人の財産で購ふ爲めに、残忍なほど批判力を磨きすまして、取れた者の射伴心を煽り、勝つた者の名譽心を嘔す。酔漢がわめき立てて卓の金を掻き廻す。ベンチが作れる。群衆が割れると、立ちあがつた博徒の一人が、酔漢を撲り飛ばす。船客が十重二十重にそこを取り巻く。地獄のやうな騒音が鎮まつて人が散る。再び深い沈黙のうちに、弗が胸かに鳴り響く。外には、暴風雨が海を底の底から攪拌して、澎湃たる叛逆の手をあげて、鐵と木材とに隠れた卑怯な生物に挑みかかつてゐる。

「そんなに追駈けちやいけませんよ！」金切聲が、二三度高く船室に響いた。「十三番」の女の聲であつた。群衆は首を傾げて彼女の方を覗いた。

を凝視してゐた。女は彼のすぐ側に掛けてゐた。

「二弗、行つた。」胡麻頭頭の老人が、ぢみぢみな手付で、銀貨を二枚場へ置いた。

「二弗受けて、もう五弗。」紀州訛の男は意味ありげに學生の顔を見ながら金商を囁んだ。

「ぢや、こつちは七弗で見ようかい。」偏目の男は放膽的に十弗紙幣を場へ投げて、三弗の銀貨を手元へ引込めた。

「目腐れ博突つたアこのこつたよ。俺は恰度にして、もう十三弗、二十弗で見ようか。」緒ら顔の男が、狡辯さうに眼で笑つて、紅い二十弗紙幣を出した。

「どうせ博突だ。よかる、二十弗で開く。」胡麻頭頭の老人が手先の銀貨を勘定し始めると、「親」になつてゐた手の甲に牡丹の文身のある男が、突飛ばすやうにその男を遮つて、

州訛の男の三枚続きの一つがダイヤのスポットなら、四揃になるが、その他の者は別に恐るべきほどの手でもない。と彼は唯唯の間に考へた。しかしそれはこの多人數の勝負にはあり得ないことだ。賭博にさう経験の多くない彼の心には、今まで失つた彼は三百弗近くの金が、必ずいつか歸つて来るもの、と云ふ妄信が絶えず働いてゐた。賭博の最弱點たる所有慾を以て、彼は賭けた。所有慾は彼の眼を鈍らしてゐたことを彼は知らなかつた。

「もう、これつきり。」と、女に云つた言葉を、彼は再び心のうちで、繰り返した。そして、立ちあがるなり、すこし激昂した口調で、

「二十弗受けて、もう三十弗……」ときつぱり叫んだ。

一座は轟として、彼の顔面を帯びた聲を受け入れた。「十三番」の女は、青年の聲が彼女には餘り高過ぎたと云ふ風に、ぎよつとして、彼の横顔を仰いだ。

「五十弗、行つた。」紀州訛の男が應じて、互きい平手を卓の上へ宮守のやうに拈しつけた。舌を巻いて落ちる者は落ちた。學生は、椅子の上へ片足を載せて、青白いわなわなした手で、綱上げの紐をぐるぐるどいとほいた。新紐はかな

り長かつた。細長い指に絡まつた紐を、殆ど引きさぎるやうにして、紐を脱ぎ捨て、部下を捲り下した彼は、指の曲つた、長いこと日光を浴びたことのない、縞縞な片足をあらはした。人々は息を凝らして、彼の不思議な行動を見成つてゐた。間もなく、彼は部下を捲りあげて、手早く靴を穿き直した。彼の頬には、餘裕のない微笑が閃いた。脂汗にじんだ一枚の百弗紙幣が、無造作に彼の手から投げ出された。「親」と、紀州訛の男と、學生との手合せになつた。

あり得ないことが實現された。それはほんたうにあり得たのだ。紀州訛の男は、ダイヤのスポットを魔術手のやうに起して、部厚い葡萄酒の土のまだこびりついてゐるやうな指で、山のやうな場の金を横柄に渡つて行つた。學生の手元には五十弗の利金が戻つて、カードはまた切り換へられた。

「もういいぢやないの、わかつたでせう？」だめよ、だめですよ。」女は囁きながら、彼の腕を強く押へた。學生の心には、何が刷れて、どこかへ流れて行くやうな心持がした。

「失くした！」と云ふ觀念が、突然その流の中に渦巻いた。彼は無意識にまた配られたカード

を取りあげて、心の渦を凝視してゐた、そして、いつの間にか、その渦がだんだん大きくなつて来て、すべての意義や判断をその底へ引摺り込んでしまつたことを感じたのであつた。彼には何も聞えなかつた、何も見えなかつた。百弗紙幣を切崩した賭博は、その餘勢で、性急な、緊張した二三回の小さな勝負で、みるみる残りの五十弗も吸ひ竭してしまつた。最後の十弗紙幣をいらぬ物のやうに掻きよせて行く紀州訛の男の太い指を凝視してゐた學生の眼は、芯のなくなつた瞳に、無限の同情を湛へたやうに、熱心に、忠實に、その指の動く方向に従つて動いて行つた。彼の視線が、指の持主の顔にまで傳つて行くと、彼は初めて、その指の持主が唇を歪めて、自分の傍にゐる女に妙な笑ひを送つてゐるのに気がついた。女はちつとして、失神した者のやうに彼の傍に掛けてゐた。突如、學生の眼の底に涙が湧いた。彼の心の中には、紅い、黒い、大渦が凄まじい勢でぐるぐる廻つてゐた。それに脅かされたやうに彼は半分笑ひながら、女や、老人や、子供を押し別け、突退して、そこを飛び出した。

「……よう色男……」と云ふ聲が、走つてゐる彼の耳に落ちた。盲目的に階子段の下まで駆け

つた彼はちよつと立ち停まつた。彼は臆身が急にまつ骨な物に押しひしがれたやうな気がした。その途端に、誰かが後ろから彼の腕を押へた。

「どこへ行くんです？」

女の聲だ。彼はその女の誰であるかを知つてゐた。

「どこへも行かんよ……」彼はむつり答へると同時に、階子段を昇らうとした。

「あなた、泣いてゐるのね。」女は追ひついて、いつしよに階子段を昇つた。後ろの方から、どつと笑ひ興する人々の聲がひびいた。階子段は二人の足下に、むくむくと駝背のやうに膨れあがつた。すると、今度は反対の方へ急な傾斜を作つて、走り落ちた。凄まじく上甲板にくだけた波の音が、何か叫んだ女の聲を打消した。彼は女を振り切つて、階子段を駆けあがり、シイ、デッキの船口から夢中で重い扉を押し退けて、狂奔の海をまともに受けた上甲板へ半身をあらはした。ゴーツと云ふ聲が、彼の耳から耳へ通り抜けたかと思ふと、彼の全身を擦り流しさうな勢で、扉が逆にあふり返された。辛うじて、両手で、それを支へると、にはかに彼の両眼から涙がはらはらこぼれた。

まつ骨い、底知れぬ騒音の世界から、恐ろしい勢で二人の巨人のやうな大浪が、もつれ合ひ、揉み合つて、急激に目の前へ近づいたかと思ふと、汽船が時速に打砕かれたやうな震動と響とが、一度にどつと彼の支へた扉を襲撃して、弾き飛ばされた學生は、よろよろと船口の階子段をよろけ落ちた。したたかに濡れた彼の體を抱き留めたのは「十三番」の女であつた。

五

なまなましい血が、隣のベッドをしきつたカナリア色の毛布の全面へ、恐ろしい勢で進んで、みるみるあざやかな斑點になつて沁みとほつた。殆ど同時に、壓搾されたゴム人形のやうな剛かな響が、重苦しい沈黙をかい潜つて、可憐な音の輪を畫いた。その音の輪はだんだん大きくなつて、終ひには船室いつばいに充ちわたつた。すると、その音のかたはらから、威力のある、暖れた、苦痛に歪められた聲が、ややともすると、朗かな音を奪ひ取つて、もつと太い音の輪を畫いた。——長い間二つの聲が相争つた。

寝てゐる船客の耳にその聲は、小うるさく、しつこく附纏うた。だが暫く経つと、その二つ

の音聲がどこか遠い昔から聞覚えのある、それでゐて何とも云へぬ不思議な、懐かしみと怡びをいつしよにした複音のやうにひびいた。それにしても、彼等の醒めかけた意識が、だんだん明瞭になるにつれて、その二つの違つた聲は、彼等の寝てゐる船室、彼等の枕元で、さつきから響き続けたことに、漠然とした疑ひを起したのであつた。

その喘喘、いろいろな雑音と振動とが、一度に湧きあがつた。

誰やらが、咽喉をしめられた時のやうな聲をあげた。ベッドの梯子が外れて床の上へばつたり作られた。寝てゐる者を呼び起す氣勢がした。金盞か何か、金属性の器物が鳴つた。足音が、ど、ど、ど——と何處かへ傳つて行つた。そつちにも、こつちにも、ただ一つの感情をあらはした人々の言葉が、入り亂れて、船室にはかたに沸騰したやうに騒しくなつた。船客の大部分はベッドを離れた。

夜は白ら白ら明けに近かつた。透みを帯びた藍色の海は、どろりと重く舷窓の下に低く湛へてゐた。湯を含んだ海面のどこからかすかな光が傳つて来て、船の周囲に忍び寄るやうに見えた。霞とした寒さが、人々の肌を犯した。

「御産ですつて？」

「誰？」

「あの五十番の、例の御腹の大きい婦よ。」

「どうも昨晚から様子がおかしいと思つたんですかね。」

「おかみさん、お産は今すぐ来ますよ。——でも良かった。二人とも健康でね。」

「おお、ひどい血だ。こりや、きたない。」

しどけない姿態をした人々は、いつも暗のうちに埋められたやうな、正面から左手の「五十番」のベッドを健状に取り巻いて、一人の産婦の汚い婦が、血の滴る布や、蒲團などを取除けた。産婦の枕の下へ蒲團をあてがつたり、獨りていそがはしげに立ち働いてゐるのを眺めながら、ひそひそと囁き合つてゐた。駆けつけようとしてあせる子供を抱き留めてゐる婦もあつた。みだらな笑ひを含んで上のベッドから下を覗いてゐる青年などもあつた。にはかにこの産婦が、一室の中心點になつた。

産婦は蒲團の層の中に、高い鼻と歯だけをあらはして、低い呻吟を立てながら臥てゐた。一應洗ひ淨められたらしいが、ベッドの下にあるごみごみした着物や、布切や、器具などの中に、踏み捨てられた商標標が一本血に染まつた

まま、濡れた床に轉がつてゐた。

「さア、皆さん、どうかあちらへ行つてくださーいよ。」

産婦の世話をした産婦は、以前は産婆でもあつたらしく、さう云ふ場合に限つてあらはれる職業的な着せき、商切れの悪い聲に聞かせて、何やら一塊の布に包まれた物を勧めながら、だんだん近寄つて来る人々をたしなめた。一杯のびいびいした聲で泣いてゐた。そこから少し遠退いた人々は、喪服をつけた親族の會議のやうに、ひそひそ聲で話し合つてゐた。婦と婦とでなげりやわからぬやうな會話が、そこそこ取り交された。

金釦のついた制服を着けて、船醫が来たのは、夜が全く明け放れた頃であつた。彼は急いで、後から續いたボーイから、靴を受け取ると、慣れた手付で聴診器などを出して、看護をしてゐた婦の云ふことを、熱心に聴取つた。やがて彼が立ちあがると、ボーイに擔架を命じて、

「ともかく病室へ連れて行つてからにしますから。——こまつたなア、今夜着港と云ふのに、頼に小籠を剥みながら、何か心配げに訊ねるその婦に對して答へた。

を片付けはじめた。子供達は大人の群に感服して、わけもなく嬉しうな顔をして室内を狂ひ廻つた。船客の顔は、どれもこれも、誠が舒びて、柔和な、慈悲深い表情をしてゐた。言葉にあらはせない彼等の心は、十六日間じめじめと見古した床の上を、朝餐の飯粒の散らばつた上を、

「日本、日本、日本——」
とコーラスを唱つて飛び廻つてゐた。

長い間、ベッドの支柱に吊されたベナナの朽ちた幹が、どさりと切り除かれた。まとめた布包を上からベッドから床へ投つて、「あつ、しまつた。」と顔を擧げて、あわてて飛び降りる者もある。毛布や蒲團のカーテンが拂ひ除かれる。税関がやかましいからと云うて、買ひ込んで来たシガレットを手當り次第に突けて行く者もある。自分が宿引にでもなつたやうに、横濱の旅館の屋敷をならべて、他人を慈恵してゐる者もある。不用になつた物は、皆借しげもなく床の上に捨てられた。金盞、鳥打、側煮の罐、果物、煙草の罐、古靴、女のコレット、講談本、ウイスキーの罇——これらの物品は、突然持主の所有感を離れて、みるみる床の上に積み重つて、必需品から廢物に變じてしまつた。毛布

や、道具類や、船客の乗つてゐないベッドは、今までのやうな個性を失つてしまつた。斑點だらけの壁が、床の上や、壇の上のごみごみした廢物を四方から包んで、一室が巨大な塵埃場やうに見えた。遮る物の無くなつた壁の上には、春の海の反映が、ゆらゆらと光線の戯れを畫いた。

不思議な融和力が、人々の心に動きかけた。それは單に昨日一昨日までの憂鬱と倦怠の生活から反動した、氣紛れな歡びだけではない。すべての人に共通な、すべての人を満足させる、すべての人の理想である。そして、今までの現實よりも高い、偉大な、幸福なものが、彼等の目前に迫つて来て、すぐと彼等の生活に溶け込んでしまふ、と云ふ晴々しい豫感が、各自の小さな迫害心や、獸力や、利己主義などを打ち破つて、彼等と同じ大きな目的に向つて進んでゐる仲間同志にしてしまつた。無意識な欣びが互の間に結合力となつたからである。荷造りを終へた者共は婦や老人どもに力を添へた。憂東ない手跡で田舎の住所を認めながら、遊びに来給へ、と隣のベッドの他國者に勧めてゐる者もあつた。ボーイを呼んで幾何かの心附を取らせて、丁寧に禮を述べてゐる者もあつた。

船の中をあらためて、税関を通過せぬ物を除けてやつてゐる世話好きな者もあつた。男達は云ひ合したやうに、アメリカ仕立の一張羅に、派手なネクタイを結んだ。婦どもは田舎の帽子屋から買ひつけられたやうな、大東の造花を重げに載せた天鵝絨の帽子や、思ひ切つて夏向きなスカートを着た。彼等の眼は皆霞んだ。彼等の足は軽かつた。彼等の聲は空洞になつて船室を鈴のやうにひびきわたつた。

「陸が見えるよ、——日本が！」
あたふたと、甲板から降りて来た偏目の男は、まだ荷物の始末に忙しい講談本の男へ話しかけた。その聲が、意外に高かつたので、一室の人々は聴立ちになつて、甲板へあがつて行つた。

甲板の上は寒かつた。二月の風はコートやスカートの裾を翻して、柱や壁の隙には霜の氣が清んでゐた。正午近い海は、無敵の飛魚が泳いでゐるやうに、白い日光の下に躍いた。静かな蒼空は、澄んで、巾廣い白金のやうな日光を漲らして、水平線からくつきりと立ち離れて見えた。五六艘の反古紙を貼りつけたやうな日本船が、モーターの力で、汽船から離れようとするやうに、沖へ向つて駛つてゐた。冷た

「さうだね、こんな幾起の良いたアありませんよ。」商の出た、顔のくすんだ中年の男が、心から嬉しうに同じた。

人々の話は、今日に限つていんかりと、人間の持つてゐる深さから湧き出るやうに、厚みがあつた。話と話は、思慮深い間を置いて交された。

舷窓の外には、嵐のやうにうねうねした浪が、きざきざと朝日の破片を泛べて、その反映が、

「さうだね、こんな幾起の良いたアありませんよ。」商の出た、顔のくすんだ中年の男が、心から嬉しうに同じた。

人々の話は、今日に限つていんかりと、人間の持つてゐる深さから湧き出るやうに、厚みがあつた。話と話は、思慮深い間を置いて交された。

「さうだね、こんな幾起の良いたアありませんよ。」商の出た、顔のくすんだ中年の男が、心から嬉しうに同じた。

人々の話は、今日に限つていんかりと、人間の持つてゐる深さから湧き出るやうに、厚みがあつた。話と話は、思慮深い間を置いて交された。

「さうだね、こんな幾起の良いたアありませんよ。」商の出た、顔のくすんだ中年の男が、心から嬉しうに同じた。

人々の話は、今日に限つていんかりと、人間の持つてゐる深さから湧き出るやうに、厚みがあつた。話と話は、思慮深い間を置いて交された。

「さうだね、こんな幾起の良いたアありませんよ。」商の出た、顔のくすんだ中年の男が、心から嬉しうに同じた。

人々の話は、今日に限つていんかりと、人間の持つてゐる深さから湧き出るやうに、厚みがあつた。話と話は、思慮深い間を置いて交された。

「さうだね、こんな幾起の良いたアありませんよ。」商の出た、顔のくすんだ中年の男が、心から嬉しうに同じた。

人々の話は、今日に限つていんかりと、人間の持つてゐる深さから湧き出るやうに、厚みがあつた。話と話は、思慮深い間を置いて交された。

い波は、船の兩舷の下に逆毛のやうに白く砕けて、うねりを打つごとに黒い冬の影を射して行つた。船客の多くは、右舷の欄干に凭れて、船形の一帯の陸地が、遠望に白い霧を閃かして近づいて来るのを見成つて、がやがやと吹き立ててゐた。

人氣のない船室に、自分の頭文字を書いた靴の上へ履かけて、甘くもなきさうに幾本も幾本もシガレットを吹かしてゐた學生はふと立ちあがつて、片隅のベッドへよち昇つた。毛布や蒲團の除かれた帆布のベッドは、體の重みにきき、きと軋つた。彼はその邊を見廻して、はつと息をひそめた。空洞な船室には、産婦のゐなくなつた跡に撒いた石炭酸の臭ひが縋つて流れてゐた。彼は恐る恐る手を伸ばして、ベッドの上に乗せてある紐州語の男の手靴を引寄せた。靴にはまだ鏡が卸してなかつた。それを開きながら彼は鋭い眼を、階子段の方へくばつた。其時、セイ・デツキに忙しげな聲音がして、船室の階子の前ではつたりと停まつた。

「日本が見えますよ、ね、書生さん。——書生さん！」女の聲が、筒抜けに正面の壁へ衝當つて、やけにこつちの壁へ反響した。

いきなり、何かの兇器で頭を殴られたやうに、彼は立ちすくんで、大きな眼をすぐ前の壁の上に睨めた。彼が、何か言はうとして、産婦的に唇を開いた時、「十三番の女の、華奢な、踵の高い白靴が、階子段をことりと一階降りて来た。

マドロスの群

村島が死ぬ前までの他たち六人は、よく酒を飲んでは呑み合ひ、博奕にとられては打つ殺すのと云ひながらも、離れがたい兄弟のやうに、一種の喧嘩ばやい友情をもつてたうとうと航海を過したのであつた。ながい間の異國の海を放浪に身も心も荒みはてて、どうして海から足を洗はうとか、また何を目的に稼ぐとか云ふ、陸に棲んでちみちな生活を営んで居る者のやうな打算をふりすてて、ただもう船室へ空いてゐりやどこへでも渡つて歩くと云ふ手合ではあつたが、どつちを向いても毛唐ばかりの世界に、苦力同様な仕事を同じ船で二月もいつしよにやつたと云ふことは、女々しいとも思はれるほどの愛着心をめいめいの魂に刺み込んだのであつた。それに、こんどはもう他たちも六人ではなくなつた。飲んだくれの、日本以外の見状持ちの、それである至誠御仁良の「牛の尻尾」と稱名された村島が、赤道直下の瘴氣にたたら

れて、三日とわづらはずに、ころりと死んでしまつてからは、ますます御互の寂しい心をぎつたり抱きしめて、いつしよに生きて行かねばならぬやうな悲痛な氣持が迫つて来るのを感じたのであつた。兄弟の死——所売げのしたボツクヌ製の靴と、一足の古靴と、蠟石で拵へた二つの殺子とを見ると、他たちはしみじみマドロスの一生のはかないことを考へさせられるのだつた。

「あのすばらしい村島が、ああほつくり死なうとは思はれなかつたが、な。」
「さうだ、あのすばらな——」
「よく牛の尻尾を食つてはパントリーにふんぞり返つて世を捨てやがつたな。」
港に近づくに従つて、こんな故人の噂をしてゐるながらも、他たちは五人の間に、大きい團子鼻の、悪黨らしい戴眼の眼のひかつた村島の顔がまじつてゐないことが、何となく物足りなかつた。

日毎に日蔭の中で暮らすやうな氣分が他たち

を襲うて来た。時には、妙な風から、港へつきさへすれば、きつとドックの上に村島の鳥打姿が待つてゐるやうな氣もした。

デラウエヤ河口に一晚の潮待をして、四千噸の重油を積んだ他たちの船がフェラデルフィアの港へついたので、秋ももうめつきり更け五つた十月六日の朝だつた。一月前に檣橋の傍らに咲いてゐたサンフラワアも月見草も、いまはほろほろと枯れ凋んで木の葉の落ちつくした陸は、熱病にかかつたあとのやうな冷たく深深い膚を、氣短な日光の前にさらけ出してゐるばかりだつた。一航海の終りにいつも感ずるやうな、いろいろな匂ひをこめた陸の生活に對する、飛び立つやうな感激を恢復する氣力もなく、他たちは居残りの機關士や水夫の肉を焼いたり血を洗つたり、餘つた食物を檣橋の野良犬に投つてやつたりして、別に他の水夫たちのやうに上陸を急ぐやうな心もなく、ぼんやりとして氣のぬけたやうな港の景色を眺めて一日を暮らした。新しいボーイを捕はねばならぬと云つて、廚長の梅原だけはその朝からニュー・ヨークへ立つて行つた。

「どうしよう？」
翌る日、月給を受取ると、浮かない顔をした中

船と云ふクックの下働きが、それでも上陸の用意をしながら、料理人の谷に對つて訊ねた。「俺らスチーボに借りがあるから、まだこの船からは抜けられない。」

「谷は貰つて来た紙幣の束を数へてみたが、つまらなさうにその小口を指先でばらばら弾きながら答へた。」

「ともかく上陸らうよ。上陸つてトニーのところで一杯やらちやないか?」

「陸へつきさへすりや不思議なほどきびきびして来る皆川が、踵の至んだ靴へ無理に片足をツツこみながら元氣らしい聲で叫んだ。」

「梅原の奴、ボーイを探さなうてうまいことをぬかして、たうとう逃げを張りやがった。あの野郎、俺たちの借も月給を取つてゐて、おまけに肉屋の頭をはれてけつかりながら、なアーんだ、しみつたれ。見ろ。きつと今夜あたり情婦のこへしけこんでやがるにちげえぬえか。」

「厨長を目的にしてゐる上官、食堂附の器具は、どこの籍ともつかぬ、日本語にしては妙なアクセントのある、俺たちだけに通有な流言語で毒づいた。事實、よく考へると、厨長なんてものは、やはり同じ日本人でこそあれ、俺

乗つて機橋へ降りたり、送状と現品をくらべて見たり、啗りがちな英語でアレイを動かしてくる水夫長と喧嘩したり、あわてて馬鈴薯を船底へ仕舞ひこんだりした。食料品の積荷で腹を減らした水夫や水兵たちは、俺たちの働いてゐる厨房の窓から首をつっこんで、リンゴ・サベ式な英語で、がやがや食物の注文をした。

「No Cook, no eat!」
かう叫んだ下働きの中塚は、連日の酔に充血した金邊眼をさよるつかせて、刺いてゐる裏の皮を彼等に投りつけた。その下から、彼は心配さうに、

「ちよッ、谷の野郎。何をしてゐんだらう?」と獨り語つた。

水夫部屋の皆川も、口やかましい水夫どもにせがまれて仕方なしに肉皿を持つて厨房へあがつては来たものの二日明けつばなしにした厨房には、珈琲さへもろくに沸いてゐなかつたので、ぼんやり床に立つたまま、無上に煙草を喫つてゐるのだつた。

「何だか、こんどの航海は、けちがついてゐるやうな気がするな。」
俺はかう云つて、皆の顔をまじまじと覗めた。

だけの眼から見れば一種のブローカーのやうなもので、船長や士官の方へ行つちやおべつかを使ひ、また、こつちへ来ちやいいかげんなばつを合はせてゐる、腹味な職柄なので體のいい遊び人ぐらゐにしか見えはしないのだ。

午後になつて、船の中が空になるとさすがにちつとしては居られなくなつたので、外套も着ない、メキシコ人のやうに黒い俺たち五人は、賑やかな街から街へと押黙つて歩き廻つた。めいめいの煙草とか商標とか云ふ身の周りの小さな買物を終ると、久しく強烈な刺戟にあこがれてゐた俺たちはトニーと云ふ行きつけのイタリヤ人の酒場へ入つて、そこで夜徹し飲み明かしたのち、翌朝に航海の終りには、必ずぞ寄ることになつてゐるマアガレットの家を訪れた。マアガレットと云ふのは、もと料理人の谷の女房であつたが、谷が船乗になつて流轉の生活をし始めてからは、とてもじみかな稼業で自分の生計を支へて行くことが出来なかつたので、たうとう暗い商賣をやり出した女であつた。マアガレットの家には、時とする四人ぐらゐの白粉臭い若い女が圍つてゐることがあつた。

「トニー、ウー」と云ふ合圖さへ知つてゐれば、そこへは誰でも出入することが出来た。俺

村島が、帆布の袋に縫ひつめられて、甲板から、戸板の上をするすると滑つて行つて、脚部に結びつけられた石炭の重みで、碇のやうにどろつた赤道直下の海へ、飛沫もあげずにぶりと墜された瞬間から、俺の心には、この船に對する漠とした恐怖が湧いて来たのであつた。俺には着港後の、船の内外に起つたすべての雑音は、だんだん不思議な他界の呂律のままはらぬどきどき騒ぎのやうにしか考へられなかつた。いままでも當り前だと思つて来た出来事も、妙にその裏に潜んでゐる詭計を探つて見なければやまないやうな、またそれが馬鹿々々しいむだ事のやうな氣も湧いて、生に對するいらいらした猜疑心がいづの間に俺の心に深く食ひ込んで消無し犬のやうに離れようとしなかつたのだ。

「こんどの航海は、俺はもうよさうかと思つたんだがな。」
中塚は壁にかかつたままになつてゐる、かぶりてのなない料理人の白いキャップを嗜あげながら、抽象的に物を考へてゐる思つてさう云つた。一同は彼の眼色に、谷の奴逃げたな、と感してゐるらしい恐怖をありありと讀んだやうな氣がした。

たち五人はトニーの酒場で飲んだ酒の酔を女どもの膝の上で醒ました。折悪しく女は二人しかゐなかつたので、谷を除いた外は四人は、かはるがはる二人の女を共有することにした。

かうががが急いで偷むやうにとつた快樂もほんの東の間で、それが過ぎると俺たちはまたまたすべてを忘れるために飲みなほして底抜けに騒いだあげく、たうとう外套を買ふ管の金もなくなつて、霜の冴えた頃油船へ戻つたのであつた。谷だけは、明日の出發には必ずず間にあふからと云ふ約束で、マアガレットの部屋へ泊ることにして、未練がまじく居残つた。

碇泊三日のうちに、船底の重油をすつかり東都行の貨車に搾り取られてしまつた俺たちの船は、急に重荷を卸して安心したやうに吃水を高めて、解纜時刻までにぞくぞく歸つて来る船員は、みな油でぬめぬめした梯子を小さくなつてよちのぼらなければならなかつた。梅原の注文して置いた山のやうな食料品や水などが、五臺の荷馬車で機橋へ着いたのは、何となく押しつまつた抜擧時刻にまもない正午近くのことであつた。汽車でニュー・ヨークから歸つたばかりの梅原は、帽子を脱いだ彼の赤く食ひ込んだ顔に、珠のやうな汗を流しながら、奮に

その時、厨長がそそくさと入つて来たので、一同はばつたり口を噤んでしまつた。

「君らは何をしてゐるんかね? 谷はどうしたね? 困るなア、見給へ、晝飯もまだ出来てないぢやないか。」
水夫の奴等がうるさいから、早くしてくれんと困るよ。」

梅原の尖つた鼻は、誰でも對手になつた人間を突刺してしまはうとするかのやうに恐ろしく尖りを帯びて、その尖端からはぼたりぼたりと汗の雫が落ちてゐた。俺一人こんなに働いてゐるのに、と云つた風な表情が彼の顔一面に書いてあつた。實際、着港前後の忙しいのは、船の中では厨長に及ぶものはないと云つてもいい。しかし、それも高い給料のつく職業なのだから、仕方がない。

その途端に、厨房の扉があいて、谷の赤けた額と極り悪げな笑顔とがぬーづと現はれた。彼は幾度も途中で考へて来たやうな云ひ言葉を、咄りながら述べるのであつた。俺たち一同は思はずほつと吐息して、谷を馴上げでもするやうな氣勢で、大聲をあげた。さすがは慣れたもので、遅れて来ては如何にも料理人らしい落ちつきを見せて有り合せの肉や野菜物やパンなどをそれぞれに振り充てて、見る間に三十八人分の

（31）

（30）

ランチを拵へてしまった。
「ボーイの奴も遅いな。たしか今朝の八時二十五分でニュー・ヨークから来ると云ふ約束だったが。老爺、ひよつとしたら、誰もないので困つておはしないかしら？」
谷のことで一安心したと思ふと、苦勞性の梅原は、こんどは、幾度も腕時計をのぞいて見ている。村島の代りの遅いのに業を煮やし始めた。彼は幾度も解體時刻を聞き合せに船長室へ駆けつけたり、フォアキャブスルから棧橋の上やごみごみした港近くの監門の上を探すやうに覗めたりした。そのうちにきりきりりと鎖は巻きあげられ、食料品の全部も船へ積込まれてしまった。もう船は、切符を買つてゆつたり船草の一本も喫ひながら、汽車の着くのを待つてゐる旅客かなんぞのやうに、出帆のすべての準備を終つて、うす黄い煙を煙筒から吐きながら、思ひ出したやうに雲の間から射す十月の淡い日光に船腹を曝して待つてゐた。六千噸の船が、一人のボーイを待つてゐる。あり得べからざるやうで、事實さうなのだ。梅原の神經質な大きい眼は物に打當ることに怯えたやうにきよときよと始めた。二時は解體の定期であつた。士官食堂の時計はもう二時半になり

かけてゐた。梅原の頭の中を鼠のやうに駆け廻るいろいろな苦悶が、いたるところで彼に出遇すごとに、ありありと梅原たちの眼に映じて見えた。三時……梅原たちが無限に重りあつた食堂の残滓でいつばいになつてゐる皿を、一枚々々スチームの鏡を捻つて温めた水で洗つてゐるうちに、すさまじい汽笛とともに船はゆらゆらと動き始めた。やつと皿を洗つて、まづ一服と、脂ぎつた手を拭きながら、上甲板の厨房へ入つて見ると、そこには梅原が谷と中塚と、皆川とに對つて、手を合はせるやうにして何かを頼んでゐる姿が見えた。梅原の入つて来るのを見ると、彼は向きなほつて、いきなり、
「ね、春藤君、諸君にも御願ひしてるところなんだが、ぜひこの一航海は君たち五人で何とかに合はしてくれないかね？——どうせ六人と定数のきまつてる船なんだから、諸君の頭わり一人分の月給は割増にするから、そのつもりで、何とかが君と鮎貝君と皆川君との間に水夫と火夫の部屋と水兵の方と士官室とを掛け持つて貰はれないかね。僕も手傳ふよ、どうせこんどのは僕の手落ちなんだから、仕方がない……といかにも情氣り切つて頼むのであつた。

「どうも困るね、それでなくとも仕事に困難なんだから。——それに鮎貝にも相談しなけりや、あのつむじ曲りがまた何と云ふか知れないからね。」
「老爺も老爺さ、あんなに承知して置きなごら……」
梅原の老爺と云ふのは、梅原たちもとはずぬぶん厄介になつたことのある長谷川と云ふ海員下宿の主人で、歐州大戦が始まつてから、各國の船へのボーイの遣り繰りだけで小一萬からの金を残したと云ふ評判の立つた男のことである。
「君がいつしよに連れて来さへすりや何でもなかつたんぢやないか？」
かう中塚に一本ツツ込まれた梅原は、ちつと痛いところへ觸られたやうにあわてて頭を掻いた。
「それが君、食料の注文や何かでどうも僕の方は一刺も猶豫の出来ぬ體だつたんだからね。——大貫と云ふ男だよ、ドックの番頭も船の名もちやんと書いて渡したんだから、間ちがひはない筈だがね……と云つても、もうこの通り船は動いてゐるし、追つかないことだが。」
「べらぼう奴、六千噸の貨物船をボーイ五人で

切り廻した例はあるかい？ 人を馬鹿にするな
い。
突然かう他の背後から大聲で叫んだのは、いまままで士官室の方の掃除をしてゐた鮎貝だつた。よほどのことではけりや鮎貝を背くしたこのない彼も、船長の眼と自分の視線とが合つた時だけは、びりりつと顔に蒼筋を立てて、彼の體を押しつけるやうに前へ衝き出たのであつた。すると、その時厨房の圓窓から水夫長が顔を差し入れて、梅原を呼び立てた。
「さつきから船長が呼んでるよ。」
船長と云ふ一言を聞くと、梅原は、彈機仕掛けのやうに扉口へ飛び出て、急に英語の調子になつて、
「Yes, Sir. Yes, Sir!」と早口に空な甲板へ挨拶しながら、フォア・キャブスルの方へ急いで行つた。
梅原たち五人は眼と眼を見合はして苦笑した。拍子抜けのした鮎貝は握つた拳で自分の額を、とんと殴つた。
しばらくすると、扉口から甲板を覗き見してゐた中塚が急に大きな聲で、
「来たぞ、来たぞ。おい、ボーイが来たよ。」と頓狂に叫び出した。

なるほど、降つて湧いたやうに、前橋のすぐわきに、灰色の中折を脱いで顔の汗を拭ひながら船長と談してゐるのは、まがふかたなき日本人だ。フォア・キャブスルには、梅原たちが「鮎」と稱してゐるノールウェイ人の舟せぎすの船長が、しきりに河を覗下しながら合圖してゐた。
「どうして来たんだらう？」
梅原たちの疑問は、まもなく船のラー・ボード・サイドに刺るやうな汽笛とともに、ぼくりと頭を擡げた一團の煙で、わけもなく説明された。
「間抜け奴、小蒸気で送られて来やがつた。」
近よつて見ると、その男はよく活動寫眞で見る何とかチャプリンと云ふ道化役者そっくりな顔をしてゐた。太棒のタンゴ眼鏡をかけて、機關長でさへ生やしてゐないチヨビ髭を蓄へ、折目のついたズボンをはき、細身のステッキをついて、陸からのほやほやらしい大げさな革靴の靴を持つてゐるのだつた。
「遅れてどうも済みません、實は途中で悪い馬車屋にかまつて、ぐるぐるの方々を廻らせられましたが、どうも済みません……どうもこの港の地理にうといので、幾度も中折をとつて頭を下げながら、かう辯解する彼を、やれやれと云つた

「どうも困るね、それでなくとも仕事に困難なんだから。——それに鮎貝にも相談しなけりや、あのつむじ曲りがまた何と云ふか知れないからね。」
「老爺も老爺さ、あんなに承知して置きなごら……」
梅原の老爺と云ふのは、梅原たちもとはずぬぶん厄介になつたことのある長谷川と云ふ海員下宿の主人で、歐州大戦が始まつてから、各國の船へのボーイの遣り繰りだけで小一萬からの金を残したと云ふ評判の立つた男のことである。
「君がいつしよに連れて来さへすりや何でもなかつたんぢやないか？」
かう中塚に一本ツツ込まれた梅原は、ちつと痛いところへ觸られたやうにあわてて頭を掻いた。
「それが君、食料の注文や何かでどうも僕の方は一刺も猶豫の出来ぬ體だつたんだからね。——大貫と云ふ男だよ、ドックの番頭も船の名もちやんと書いて渡したんだから、間ちがひはない筈だがね……と云つても、もうこの通り船は動いてゐるし、追つかないことだが。」
「べらぼう奴、六千噸の貨物船をボーイ五人で

な。俺はかういふもなく挨拶して、村島のベツドだつたあとをあてがつたのち、あらかじめ俺たちの受持の仕事の大體を説いて聞かせた。彼はやたらに煙草をふかしながら、大儀さうに細身のステッキに顎をのせたまま、俺の云ふことにわかつたやうなわからぬやうな叩頭をしてゐた。

しばらくすると、仕事の手明きになつた鮎貝と皆川と谷とが、物好半分に部屋へ降りて来た。大貫はさつき俺へ云つたと同じやうな挨拶を述べて、しきりに「領事館」を振り廻して、船乗にはがらにもない名刺を分配するのだった。

「ははア、さうかね？ あんたはよつほど偉いんだね。」皆川はかう空とほけた聲で云つて、眼を低い天井へ投じた。谷は大貫の横顔を見成りながら、

「おい、君、もう俺たちは月給がついてゐるんだから、そんなしやれた風をやめて、さつきとしく身支度をせんといかんよ。」と、頗る謹嚴な老人じみた顔で忠告した。

「ヤア、どうも、つい海員生活には慣れんものですからね……」彼はさう云つて、あわてて服を着換へ始めた。

めてゐた四人は、別にさう滑稽にも思はれない大貫のこの言葉をきつかけに、肺の底から聲をあげて高笑ひした。笑はれた當人は、大切さうに、銀の輪の嵌まつた細身のステッキを壁の隅へ立てかけた。

「情けないことになつたぞ。——どうしてあゝ領事館を振り廻すんだらう、ね？」あとで廚長の梅原でさへ、さう云つて苦笑した。

「牛の尻尾」はこんな工合にして「領事館」と代つた。

「おい、中へ入れるんだよ。戸口へ置いたつてなんにもならぬいやないか？」云はれて大貫は、本能的な反抗心を眼色に見せてちよつと躊躇したが、俺と鮎貝の險のある顔を見て腰に脅かされた動物のやうにすぐ羊の死體を曳きすつたまま冷蔵庫の隅を防いだ。

彼は半ば氣の毒にも感じたので、「寒いだらう？」と外から呼びかけた。「アツ、こりや、頭がづきづきしますな——」大貫の聲は、ピーフの林の奥から震へ出た。

「ボーイに憎まれた廚長が、よくこの中へ入つたまま凍つて出て来ることがあるよ。は、は、は——」鮎貝は梯子段の下から酢漬の樽を器用にころがして来ながら、米室の電燈をちらと眺めてにやにや笑つた。俺たちのうちで、いちばん残忍性に富んだ奴は、やはりこの男だらう。

大貫は兩手ではげしく耳を擦りながら出て来た。「冷たいですな。この分ちやもの五分間も入つてゐたら死んでしまふでせう。」

「なアに、慣れつこんななりや、すこしは平氣だよ。大體この船の機關長がまねけだから駄目さ。こんなに氷を積み込むなんて法はないよ。管があるだらう、あの管へもつて行つて機械仕掛けで自然とアイスが出来るもんだが——」鮎貝は野菜物の籠を蜜柑箱の上に積み重ねてから、蔵内の四隅を見廻して、すこしづらゐる船の動搖に蔵品が崩れぬ用心に品物を手でゆすぶつて見たあとで、頭の上のパナナを幹から三つ四つ摘み取つて、俺と大貫とに一つつ渡した。

「御腹がすきますね、海の生活は。」大貫はパナナを一口に頬張りながら悲しさうな微笑をした。

「君の産れはどこかね？」俺は、この瞬間、無遠慮にかう云つた質問を發して見たかつた。

秋の夕暮に、どこの者ともわからぬ人間と、他國の海に漂泊してゐると、時々こんな舊めかしい情緒が心に湧いて来るものだ。

「僕？——東京ですよ。深川の木場ですよ。」彼の答は頗る淡白だつた。

「ははア、東京かね？ 君は書生つぽうだね？」鮎貝は冷蔵庫の重い扉を締めながら振り返つた。

「學生です、つい先達まで商業學校へ行つてゐたんですが、商業の方も面白くないからよしました。」

「飛んでもない鯛が舞ひ込んだもんだ。」鮎貝は鏡を卸るしながら、獨り言のやうにかう呟いて、二三度鏡をがちゃがちゃゆすぶつて見た。

「船は面白いかね？——大貫の言葉には耳をかきずに鮎貝は自分勝手な問を出した。「さうですな、わかりませんよ。——君がたは海に慣れておいでのやうだから苦でもないでせうが、さつき船へあがつた時などはびつくりしましたよ。もうすこし愉快な仕事だと思つたんですが——」

「——さア、むづかしいことになつたぞ。おい、俺たちの村ぢやそんなことを云ふ奴のどこへ嫌にきてはねいぜ。」鮎貝はさう云つてけらけら笑つた。

時、何食はぬ顔で、

「いくら賭けるんです？」と尋ねて、ズボンのポケットから、青札を一束引抜いた。彼の行動は俺たち一同への示威運動でもあった。それでなくともまだ月給の使ひ残りのある航海第一夜のことなので、油の乗りかかつてゐた船員や中隊は、可笑しくもないのに、しきりとえへら笑ひをしながら、大買の味方を始めた。

「ははア、こりやいい運動ですな。」から云つて、大買は居合抜きの場合のやうな掛聲をしながら、慣れぬ手付で床板へ股子を敲きつけた。四五週が廻つた。煙草の煙、猿股の間、筋の張つた腕の筋などから、兎の眼のやうな股子がをりをり小さな陰影を伴つては轉がらつて行つて、ほとんど肉と云ふ感じのしないほど黒い肌や、油じみたスリッパなどの下に委を消した。

「ははア、こりやいい運動だ。」

大買のとぼけたやうな聲が、時折、他の四人の漁師聲にまじつて聞えて、その都度彼のもの肌脱ぎになつた青白い肩の締りのない女のやうな肉が、異様に電燈の光りを反射するのであつた。

「仲々やるね。」

「どうも運がいいや。」

「これで二十弗の出だ。」

「あれ、またやられた。これで四はねえや。」

四人の間には、半分煽てるともつかず、ほんたうに騒ぎ合つてるともつかぬ、そんな言葉がひそひそと交された。大買は勝つ一方だつた。

「盲者蛇におぢずとはこんなこつてせうよ。」

「さア、僕のは張つたきり動かさないうで置きますよ、倍になつたらまたその倍と。」大買は誰か近しい口調でさう云つて、手許に集まつた小百弗からの金を足の指ですこし押し出した。

「やめた、俺らブロークだ。」

「おい、『調尋』、すこし貸してくれ。」

俺は中隊の方へ向つて、頭を振つた。

「村島がたつたな？」

四人の顔には、この不届な新参者に對する口惜しさと、憤怒と、博奕打だけの感ずる信仰にも近い恐怖心が、次第々々に昂つて来たのであつた。

た。往復一ヶ月の航海日数を、たつぷり四十五日に見積つて、梅原は自分の室の眞下になつてゐるフォア・キャブスルの納庫に、六袋の白砂糖と、二罐のモラシスト、大小取りませた砂糖類の瓶を十五六本蔵つて置いた。罐の方の冷蔵庫や、食料品室の論は、谷の手から誰彼の別なく渡されたが、その論だけはいつも梅原の革帯に、時計の鎖といつしよに堅く結びつけられてあつた。

俺たちのうちで、誰しも廚長の機嫌を取らうとすれば、

「スチロージ、こんどは砂糖は澤山あるかね？」と訊きさへすればよかつたのだ。

「こんどこそは君、あんなどちは踏まないよ。」と答へて、彼は第一航海にはかうの、第二回目的の港外碇泊には弱つたのと、さも得意げに談ずに定まつてゐた。

それでも神經營に、幾度も幾度も前途を疑つて考へなほして見れば氣の許せなかつた彼は、萬一の豫算に脅かされて、日に二度の珈琲に普通は食卓のまん中へ、陶器の砂糖壺へふんだんに出して置くべきものを、角砂糖一人宛二つ三つならまだしものこと、珈琲釜へちかに牛乳と砂糖とを混へて、砂糖入珈琲の既成品を

飲ませたのであつた。これは航海當日は無論のこと、船がノルフォーク沖へさしかかつて、さらぬだにけい寒い北流の流れに流されて、滑つた三日目の午後までつづいた。同じ珈琲を飲むにも、自分で欲しい分量だけの牛乳やクリームを注いで、生れるとから匙で掬ひ慣れたとほりの分量の砂糖を芳香の強いコップの中へ沈めるやうに突入れて、何か他のことをでも夢みながら匙を二三度無意識に掻き回して自分で滑らかな味を樂しむ、と云つた風なのは毛唐一般のデリケートな風習らしい。それを、いくら化学的に定量を攝取すれば足りと云つたところ、ざんぶざんぶと大まかに廚房で調合して、さあ牛乳も砂糖も入つてゐる、これが珈琲だ、飲みなさい、ちや、まるで暗の中で煙草を喫ふやうなものだ。こんな繊細な味覺の上の、多少なりと許された享樂を、てんで日本人流に無頓着に顧みなかつたことから、三日目の晩餐には、俺が船乗になつてから未だ曾て経験したことのない馬鹿々々しい、小兒じみた騒動がもちあがつたのであつた。

それはうすら寒い黄昏の日だつた。船のまはりにはどこを見ても襍攘層のやうな汚い雲が低くぶら下がつてゐて、その間からきれきれに、

アメリカと云ふ邦が、好勝手な理窟からヨーロッパの戦争に加擔してからと云ふもの、アメリカ近海に航行する船と云ふ船は、それからクリスリンを採つて弾藥の混和物にするとか云ふ理由のもとに、砂糖と糖分を加味した食物の大制限を蒙つた。俺たちの船は、謂はば社外船で、ペンシルヴァニア州のある私營石油會社のために、世界大のスタンダード・オイルの定期運送船と競争で、メキシコに重油を買ひに行くのではあつたが、戦時禁止令の發布以來、どんな間接な手段を講じてても、制限された以外には砂糖を船へ積むことが出来なかつた。つまり、船の上では許されぬことだ。何となれば、船長の「船」はたとひどんな口實のもとにも、船員に一滴たりとも酒類を船へ携へて来ることを禁じてゐたから、過激な労働に終日甲板の上で日に曝されてゐる水夫や皮膚一面に石灰屑を浴びて機關室に働いてゐる火夫にとつても、もつとも早くカローリを攝取し得たのは砂糖であつた。そこで一人分日に幾グラムと定められた砂糖の量を補ふために、廚長は料理用としてメーブル・シラップや、赤砂糖や、モラシスなどを多量に仕入れて置かねばならなかつ

見るさへひいやりとする銀色の空が、人間のもつてゐる小さな體温とか情熱とか云ふものを、どこまでも冷徹に瞰下してゐるやうな日だつた。俺たちは、用事さへなけりやストイックの火の嚇々と燃えてゐる廚房に塊り合つて、女の話や、日本の追憶などに氣をまぎらはしてゐた。たまに埃などを棄ててに甲板へ出ると、皮膚一面に執拗く粘りつく冷たい飛沫を浴びて歸るのだった。いつになく梅原も來合はしてゐて、士官どもの批評などをしてゐた。

谷と中隊と船員と、大買、梅原、他の五人が集つてゐた。――皆川だけはいちはん人数の多い水夫部屋を所持してゐるので、まだ仕事の手があかぬかしてあがつて來なかつた。

「どうだね、こんどの砂糖の供給法は、成功したぢやないか？」

梅原は思ひ出したやうに、室の隅にある眞鍮の珈琲釜へ眼を轉じてから得意げに云つた。しばらく誰も返事する者がなかつた。それもその筈だ、たとひ帳面づらではいくらいくらと節約出來ても、實際にあつてそれを飲ませる俺たちが、日に三度々々食卓でぶつくさ叱言を云はれてゐれば、何の効果もあがつてゐるわけのものぢやなかつたから。

すると、その時、誰かが表から扉の把手をぐいと捻る氣勢がしたと思ふと、意外にすさまじい勢いで扉全體が廻りを食つて反対の方へ飛んで行つて、危いところを蝶番に支へられた。かつきりと電燈に浮き出た皆川の顔は、いつもの無表情な落ちつきをなくしてゐて、すこし涙ぐんだ眼が殊さらひかつて見えた。

「コック、こんな珈琲、だめだ。――」

と、恨めしさうに口を突らしたと思ふと、彼は片手にもつた大きい珈琲ポットを、入口の流し元へ投げ出して、意味ありげに谷の顔を覗めた。彼の背後の方には、ノルフォークの燈臺が、かすかに赤くちらりとひかつて、流れるやうに消えてしまつた。

「……誰も飲みあしねえ。」かう附け足して、一步間を踏み入ると、彼は險のある眼で梅原の横顔をじろりと睨めた。をりもをりだつたので、俺たちはひそかに心の中ではさまを見ろ、と思つて控んで突つた鼻の兩脇の見る見る白くなつて行く梅原の顔を打つたのであつた。

「――駄目かね？――谷は曇つた喉締ひを一つした。

梅原が何か云はうとした時、俺たちは廚房の圓の外に、風に髪やシャツを扱かれながらのそ

りのそりと近づいて来る一群の水夫どもを發見したのであつた。日に焼けて、眼だけぎよろぎよろした、スウェーデン人、スペイン人、イタリア人、アメリカ人などの性質のよくない奴が、七八名づらりとそこへつツ立つたまま、無言で室内の様子を探るやうに窺つてゐるのだつた。彼等の一人々々はいよいよの珈琲コップを手にしてゐた。開けた口を、そのまま大きく開いた。何だ、何が欲しいんだ？」と、がきつな英語で嗚りつめた。

「俺たちはこの珈琲を貰ひに来たのさ。」

「非常に甘い珈琲だからもつと欲しいんだがね？」もう一人が珈琲コップを差し出しながらそれにつづいた。

「珈琲が欲しいなら、ポイにさら云や食堂でいくらでも飲めるぢやないか？」

梅原は一段と聲を低めた。

「いや、ここで飲みたいんだから――」若い猶太人らしいのが鼻聲で附け足した。

「水夫長の許しを受けて来たのか？」梅原はなほも鋭く詰つた。

「水夫長の知つたことぢやないさ。」藤に居る一人が横柄に梅原を撥ねのけた。

「ま、いや、欲しいなら飲ましてやらうよ。」谷は下頭を動かして中塚へ云ひつめた。

「よしッ、珈琲かい、さアコップを出した。」中塚は元氣のいいブローカー・ニンググリップの掛聲をして、珈琲釜の栓へ手を置いた。水夫たちはにやにや笑ひながら一人づつ把手のついたコップを差し出した。津澤山になつた珈琲は、ごぼごぼと不味さうな音を立ててコップからコップへと注ぎ入れられた。一人々々姿をあらはしては、コップを持つて間に消えて行く水夫たちは、口々に、「い、珈琲だ。」と合圖のやうに呟くのであつた。ものの十五六杯も注いだと思ふと、甲板の方をすかして見てゐた中塚が、仰山な聲を出した。

「ヤッ、みんな海人中へぶちまけてるぞ。」

「梅原と谷とがあたふたと、間まで駈けつけた時には間の中からわあーと嘯ふ聲とともに、熊のやうな足拍子やコップを叩く音なども雜つて聞えた。梅原は、豪猪のやうに怒つた。

「人を馬鹿にしてる！」

俺たちも、外の喚聲に和して、大口を開いて笑つた。半分は梅原の顔の表情が可笑しかつたからでもあつた。

「船長に話してひどい目に遇はせるぞ。砂糖の缺乏してるのは御前たちも承知してるぢやないか？」梅原は扉口の鐵柱をびしびし平手で敲きながら、甲板へ向つて嗚りつた。彼の口先ばかりの英語は、甲板のどす太い水夫の聲にけもなく打消された。

「こんな清水を誰が飲むかい？」

「砂糖、砂糖、ほんとの砂糖が欲しいんだ。」

「艦だつてこんな汚い物ア飲みやしない。」

「明日から珈琲は珈琲、砂糖は砂糖で出さねえと、こつちの方から船長へ云ひつけるぞ！ コック、デム・ジャップ！」

そんな最中へ、やうやく割つて入つたのが、日頃はあまり梅原と何のよくない水夫長であつた。彼は水夫どもを一喝したあとで、いま水浴をとつたばかりらしい顔を大きいタオルで拭きながら、苦勞人らしく梅原の顔を立たした上に、砂糖は砂糖、珈琲は珈琲と調合物は出さぬ約束を取つて、狭い入口を體を三つに折つて悠々と出て行つた。呆氣にとられて、口惜しさうに陰の中を見送つてゐた梅原の背後から一部始終を

黙つて見てゐた大貫は、この時すこし傾いた船に片足を奪はれさうになつてついと出た。

「……甚だ失禮ですが、スチョージさん、一體砂糖はいくらあるんでせうか？」

梅原は赤らんだ眼を彼の太棒の眼鏡の上へじりじりと押しつけて、縮高に云つた。

「君なんか心配しなくともいいよ。黙つて自分の仕事をしなへすりやそれでもいいぢやないか？」

「ですけど、僕も多少計算位は出来ますから、何なら御手傳ひしてはどうかと思ひましてね。」大貫はけろりとしてつづけた。

「スチョージ、領事館はダイヤライタアがやれるんだぜ。」皆川が使喚け半分に言葉を挟んだ。俺たちは、海の者とはまた一風變つてゐる粘り強さを持つてゐる大貫のねちねちした態度に、呆れ氣味になつて、どうなることかと思つて彼等を眺めてゐた。

「砂糖はまあ十分にあるつもりだが、こつちは萬一を慮つて節約してやつてるんだよ。――そりやいくらあるか見せてやつてもいいさ、どうせ僕らは保管する役目に過ぎないんだから。」と云つた梅原の口吻は、やうつと平常の聲健さを恢復してゐた。それから彼は、極り悪げに、ろくろく挨拶もせずに廚房の圓を越えて、二三

歩行つたかと思ふと、間の中から、「君――い、あとでやつて來給へ。」と大貫へ云つて、すたすたの袖の方へ消えてしまつた。

この事件があつてから、梅原の部屋に大貫のロイド眼鏡を見受けることが當り前のやうになつた。中塚や皆川が、用事で船長の部屋へ入ると、彼等は必ず手紙の書き直しや、食料品の注文書などをかつかつ打つてゐる大貫をそこに發見したのであつた。

「あの野郎、スチョージを舐めてかかつてゐるぞ。」

「いけづらうらしい奴だよ。」

「博奕であんなに横取りしやがて、――どうだい、みんなで一つ借りてやらうぢやねえか、養ッ、業腹だ。」

俺たちの二三人は、急に高慢ちきに見え出した大貫の幻像を、目の前で擦き壊さうとするかのやうに、こんな顔口をきいて、ますます自分たちを腹立たしい氣持に導いた。何となく五人の間には、やはり、もとの五人はもとの五人の兄弟だつたな、と云ふ感じが再び根を刺すやうになつた。わけても船員などは、いままでも船長に對して持つてゐた反感と妬心の大部分を、

露骨に大貫に移して、機會があることにつらくあたる様になつた。休息の時間や、就眠の時刻に部屋でいつしよになつた際でも、五人は五人だけで塊り合つて、滅多に彼に口をきく者とはなかつた。大貫は大概、俺たちの本能的な憎みを避けるためのやうに梅原の部屋にゐるか、さもなければベッドへ腰を掛けて「エグレーマンズ」の赤表紙の古典物を、字引も使はずに讀み耽つてゐたりするのだつた。天候のゆるす時には、滑稽じみた顔に、十分の自意識と警戒を見せながら、ひとり海豚の群を眺めたり、都會で流行するらしい小唄を口笛に吹いたりしてゐる彼を見受けた。陸から来た新参者の癖に、別に酔つてゐるでもなく、小器用な都會の知識で當然仲間の體をつくす俺たちを差し置いて、士官室の方へばかり入り浸つてゐる、おまけに博奕は勝逃げをする、と云ふ、甚だ幼稚な低劣な迫害心が、ひがみにひがんだ俺たちの心の隅に深い溝をかまへたのであつた。もう一人の敵が、めいめいの前に現はれたやうな氣持も迫つて来た。

船はフロリダ沖から、動い西北に採られたメキシコ灣のひろい荒海のまん中へ向つて、一時間七澤かそこそこの自動力を持つたマツチ箱かなんぞのやうに小さく弄ばれながら日毎に進んで行つた。事實、俺は嵐にひしがれたやうになつて、橋も煙突もブリツヂも肩を畏縮しながら、狂亂した怒濤の間を辛うじて船がぐり抜けてゐる時も、日一日と士官や機關部の火夫の「ウオッチ、ウオッチ」の交代勤務から、ひた趨りに南へ南へと進路を取つて行くその氣力を、さながら船そのものが村島の墓場へある微細な牽引力で魅引されてゐるのであるやうにさへ感じたのであつた。

鉛色の曇りにふやけて見えるパウロ・ブランカ沖の海の沈黙が背後に敵を意識した場合と同じく、俺の氣持をそれはさへさせた。俺はいく度か村島の死んだ時の光景を心に描いて戦慄した。すべてを覆ひつくす無氣味な、魂の底から底から湧いて来る死の沈黙の恐ろしさを、生きた人間の言葉で何と云ひ現はし得ようか？そこからは幽霊のやうな迷つた幻覺がいくつもいくつもぼび出るのだ。靈魂の實在——俺もいくどかさう信じかけて、わづかに人間の皮一重ぐらゐの厚みで俺の心を包んでゐる理性のため踏みとどまつた。さうだ、蒸氣釜のやうに顔

に村島の働かないのをひどく叱りつけたと云つて、男泣きに泣いたことが、どんなに俺たち一同の眼頭に熱い涙を湧かせたらう。悪役の傳播せぬうちにと云ふので、手慣れた水夫長は船長の命令を聞くと、村島をすぐさま船底の石炭庫へ運んで行つて、誰も見ぬうちに五六人の水夫へ袋を懸はしてしばらくそこへ死骸を安置したのであつた。葬式——眼と眼を見合はしてはすぐ横を向いてしまふ挨拶の仕方も忘れたやうに無言で居ながら脱帽した遠慮深い一團の男たちの、黙りこくつた葬式がどうして記憶の底から剃き去られようか。船は徐行した。死骸の運搬を指圖してゐた水夫長の禿げた顔には、赤道の眼のくらむやうな日光が、油の滴りのやうな汗を流さしてゐた。甲板の日光に俺たちは一種の刺痛を感じた。氣のせむか、すべての人が村島一人の無くなつたために急に元氣が衰へたやうに見えた。船長の「船」だけは、さすがに締まつた足取りでブリツヂから姿を現はした。彼の手にした聖書の天金がびかりとすると、一同は自然に顎を胸へ惹きつけた。黒い物がやたらに列んでゐた。みんなの足だつた。その間に、白つ茶けた帆布の包が横はつてゐるのだ。包の持ち運ばれるのが、機械的に動く黒い物の

間に、際立つて、幾十倍かの容積を増したやうに見えたのだ。動作も従つて幾十倍か遅く、重さうに見えた。海——敵のやうな、それでゐて、母親であるやうにも思はれる海が、唇をひろげて吸ひ取るやうに、甲板の外から、すこしづつ滑つて行く村島を……たうとう呑んでしまつた。ゆるい底濁りのした海のかすかな波動が、見る見る淺黄色な鈍りに掩はれたまま、船尾になつた。俺はその瞬間、村島の鳥打をかぶつた、團子鼻の、戴眼の顔を、構のやうな波の底に、帆布に包まれたままの象で想像した。重い心で厨房へ引返す時、何気なく覗いた海面には、艦の群が、群しく跳り狂つてゐるのを、俺ははつと思つて眺めたのだつた。

一面に熱りを送る海だつた。白い衣類かなんぞのやうに、腫に泳ぎ出る鰻が、いく尾も船のまはりを取り巻いて、俺たちの捨てる食物の滓を意地汚く漁り廻つてゐた。小さな鰻のやうな眼と陳腐な釣のやうな口と、水面へ近づくとまではわからないほどの動作と——俺はよく陸に棲んでゐる人間が、眞夜中にガラス窓の外に、自分の動作を窺つてゐる者に對すると同じ恐怖心で、あの悪良をする魚群を見たものであつた。鰻に對する恐怖は、どうしても、村島の死に就いての恐怖と混同して仕方がない。その時分に村島が死んだ、と云ふことよりもよく考へなほすと、村島の死骸が、ずぼりと海へ墮ちた途端に、はつとなつて鰻を思ひ出した、葬式當時の強迫觀念がどこまでもつきまとつてゐるのだつた。水の缺乏を苦にして、いちいち冷蔵庫から自分で入つて水を汲した梅原を、心から憎み出したのもその頃からだつた。鮎貝と梅原が眼から火の出るやうな口論をしたのも同じ水に就いてであつた。二百ポンドからの水を湯にしたあとで、村島は何も云はずに石のやうに冷たく堅くなつて、三日目の朝、ブリツヂの水先案内者と副船長、珈琲を運んで行く役目の鮎貝によつて発見されたのであつた。剛情な谷が、三日前

それは逆しい海の労働者の、他のすべての希望の否定されたあとに勃発する、しかも潮風と激勢とに磨きすまされた驚くべき嗜慾なのだ。水夫の働いてゐる側を通ると、

「おいメス、今夜は何を食はせるかね？」と腹面もなく大層で尋ねるほど、彼の頭は食ふことをばかり考へてゐるのだ。そこで話がすこし理に落ちるかも知れないが、アメリカ政府の許して一日の食糧は、一人につき二ポンドの肉類と三ポンド以上の野菜物や、その他の副食物であつた。かなり大まかな、ゆとりのある計算らしいが、さて實際に割り宛てたら、天候の肌寒い時などは、どうしてもそんな制限の度を遙かに越すのが例であつた。すくなくとも、四十五人の頭へ、日に六十ポンドの肉は必要であり、それでも不足たらたら水夫や火夫は、夜中にこつそり厨房の窓からしのび込んで来てはパイを偷んだり、砂糖を加糖で滑くやうにして是で舐めたりするのだ。これは、何も他が知つたかぶりをするのでなくて、

「油を積むのか糞を流すのが本職だかわかりませんか？」

とこぼしながら船長の梅原がをりをり厨房へ来てしやべるのを、それとなく聞き覚えたこと

か？……料理人任せなのだからどうも仕方がない。……

毎日部屋に内から鑰をかけて、悪いことをする獨身者だと云ふボーイ仲間の噂にのぼつてゐる二等士官は、なほもアイルランド訛の英語を張りあげて叫んだ。

「……ジャップの貧弱な食物と、我々の食物とをいっしょにされて堪るもんかい……」

どしんと卓を敲る音と、フォークをでも肉皿へ投りつけたらしい響とが、突つた俺の神経に不安な幻覺を起させた。彼は甲板へ出て、同窓から食堂を覗き見した。いつもの通り、日覆のついた海員帽をきちんとかぶつた梅原の鋭い顔と、すこし汗みを帯びた二等士官の枯ら顔とが卓を挟んで對峙してゐた。二人とも立つたまま、白い卓布の距離をもどかしさうに眼で計つてゐた。梅原の顔は多少の恐怖で白かつたが、二等士官の方はあくまで權柄づくで、歪んだ唇に醜い力を籠めてゐるのが、さもなく見えた。二等士官とならんで掛けてゐた副船長は、牛のやうに巨きい體を、廻轉椅子へ投げたまま、卓の上へ組んで兩手の指だけを眺ごっこしてゐた。鮎貝はサイドボードに、知らぬ顔で皿を拭いてゐた。

「よし、船長の意見を一度聞いて見ますから、待つてゐて下さい！」

梅原は卓から離れると、素早く身を扉の外へ跳らして、甲板の上をいっしょにブリツヂの方へ消えて行つた。

「あの船長は、一にも二にも船長々々だ。おべつか野郎！」

二等士官は不興げに呟いた。

「たまには軽い朝餐の方がいいよ、この頃は毎朝肉ばかりぢやないか？」

副船長も、組んだ手をほどいて、眼の前のピーフを載せた肉皿を押しやつて、相槌を打つた。それでも、二人は船長のことか氣にかかるかして、しばらくの間、何かの命令を待つてゐる使者でもあるかのやうに、無言で扉の方を覗めてゐた。

梅原は大版の紙に刷つた物をがさがさ、讀しながら得意氣に駆け戻つた。食堂へ入ると、彼は何も言はずに、留針でその紙の四隅を、士官たちの眞向うの壁へびつたりと貼りつけた。

「そりや何か？」

鋭く詰問する二等士官の言葉に對して、梅原の向けた顔は、いろいろな感情がごつちやになつてかち合つた顔だつた。

に過ぎない。

ある朝のことだつた。かしましと履しつける暑さが、朝のうちから赤みを帯びた日光を煽動してゐて、海の上には低い霧が滑らかな波の軌にしつこくからみついていつまでもその暑苦しさを擁護から御互を離すまいとあせつてゐるやうに見えるのであつた。

朝食前に一互り甲板をホースで洗ひ流す習慣になつてゐた水夫の群も、氣だるい熱帯氣分にけおされて、何となく陰險な猛獸のやうに眼をひからして懶げに働いてゐた。

厨房のすぐ傍にある士官食堂には、特別御料理を持ち運んで出たり入つたりしてゐる鮎貝の姿が見えた。彼は受持の火夫の食物を運んでしまつてから、手があくとして厨房へ来て、眠さうな顔をしてストーヴの前に汗を拭ひながらコルン・ミールを大匙で掻き廻してゐる中塚と、取り留めもない雑談に耽つてゐた。谷は大概朝餐の準備を彼に任して朝餐をしてゐる習慣になつてゐる。すると、何やら騒々しい聲が士官食堂に聞えて、あわただしく鮎貝が駈けて来るのはひがした。

「おい、コック！ 谷はゐないのか？」

かう云つて飛び込んだ鮎貝は、呆けたほど鈍

い動作で動いてゐる中塚の横顔をじろりと一見すると、さもないまいましさにぶいと飛び出して、スターボードの方へ全速力で駈けて行つた。

「どうしたんだ？」彼は、彼の前垂の絡みつく脚を、無理にひろげて駈けてゐる彼の姿を見送りながら云うた。

「鮎貝の氣狂奴、なんかまた一悶着起し居るんだろ。」

中塚は大匙を捨てたまま、案外平氣な顔で燃える海へ膠の粘つた眼を燃さうに向けた。

すこし経つと、士官食堂には、梅原の恐怖したやうな聲と、騒々しい士官たちの英語とが何かを掛け合つてゐるのが聞えた。

「卵を出せ、卵を我々は要求するのだ……こんな腐つた肉なんか、我々の朝餐にならないだ……君は卵で金でも儲けるのかい？」

聲の主は、つねづね船長と何の良くない二等士官であつた。副船長の重苦しい聲もそれにつづいた。

「卵の方が軽くていいんだよ、船長。」

梅原もいつにない尖つた聲で云ひ張つた。

「料理人の方でステーキと定めてるんだから、いまさら變更するわけには行かんぢやないです

「……御覽なさい！ 船長の嚴命です！ 米國政府の食料制限表です！」

彼はいく度も唾を呑みながら、彼の知つてゐる最も正確な英語で云つて、細い體を弓のやうに外らした。

衝動的な動作で、二等士官は壁の方へ體を運んで行つて、表をじろりと一眼に取り入れるとともに手に持つたナフキンをいきなり食卓の上へ投りつけて、何も云はずに食堂から出て行つた。副船長も、吸ひ残した珈琲だけを飲んでしまふと、

「御老爺の命令と云つたね？——と副から下の方に小さく壓まつて直立不動の姿勢を保つてゐる梅原へ蔑んだやうに訊ねながら、のつしのつしと歩いて行つた。

「馬鹿野郎！」

梅原は二人の姿がブリツヂの上へ消えた頃、さう吐き出すやうに云つて、俺の顔を見ると鼻水を吸りあげた。

この事件は、先づ梅原自身に一時の痛快さを味はせただけでこんな風に解決されたのであつたが、船中の彼の評判は決してそれによつて悪化するとも善くはならなかつた。それにはまた理由があつた。梅原は買ひ方が下手なのかそれ

「食べる物が無い?」 驚き返して云つた梅原は、汗のじみ出た眼をしかめて、もう一度水兵の食堂を覗いて見たのち、

「さうですか? 今朝はたしかビーフ・ステーキの御馳走だった筈ですが。」とまで英語で云つて、あとは日本語で、「あれが、君、残つてゐるから持つて来てくれ給へ。」と食堂の中にうろろしてゐる大貫に命じた。

大貫はちよつとどきまぎして、

「彼等は皆な肉を塵埃捨用のバケツへ投り込んでゐるのです。」と、「彼等」に力を籠めて、三人へ對つて云つた。

「あの肉がくはれないと云ふのちや、朝飯を食ふ必要はないと思ひます。そんな口の寄つた人はこの船で食事を取るのは廢して貰ひませう。」

梅原は下腹部へ力を入れてずばずばと砲手長へ云つてのけた。砲手長の綺麗な刺つた顔の下半分が、血の氣を薄めて見えた。船長は、海へ一寸眼を投げて「又か?」と云ふやうな色を見せながら、

「ちや、ともかくもその肉を見ようぢやないか?」と暗示した。

大貫の運んで来たバケツから、一片の牛肉が掘み出された。オート・ミールやパン屑に染れた肉片が間も無く洗はれて廚長の手にぶら下つた。

「これが食へぬと云ふのですか?」

彼は矢のやうな質問を、船長とも砲手長ともつかずに放つて、振り返りざまに、廚房の圓窓からわざと英語で谷を呼びかけた。

「君、この肉だらう、今朝船員一同の朝飯に出したの?」

「いや、ソリヤすこしへんな身がするから士官の方へは出さなかつたんだ。」

谷は日本語で答へた。梅原の眉がびりりと蠢いた。

「クツクは何と云つてゐるね?」 砲手長は臭い物を嗅ぎつけたやうに梅原へ訊ねた。

「He says that was the very same meat that went on every table of this ship!」

大貫はけるりとした顔で、見んごと谷の言葉を裏返しにした誠を云つた。梅原は、無表情な顔で、「イエス、イエス」と叩頭した。

一部始終を口撃してゐた俺たちのうちから、虚偽を憎む者の勇敢な聲があがった。聲の主は思ひもよらぬ中塚だつた。

「ソリヤ水兵の肉、士官の肉これだ。」さう支那人のやうな英語で云つて、厚切りの汁のじくじく滴るタンダーローイアを肉叉に貫いて突き出した彼の顔は、異様な顔へにをのいてゐた。

「君、黙つてゐなさい!」梅原は白い眼でじろりと彼を睨めながら食ひ切つたやうな日本語で叱りつけた。

「論ない、水兵の肉は別だ。」中塚はきつぱりと云つて、青白い顔で俺たち一同を顧みたら、

「さうだ、さうだ。」船長が彼に附和した。

「この船のある人間は近頃急に生意氣になりましたね。共同の食料品を保管しながら、それに自分勝手な細工をするんぢや、困るですよ。」

砲手長はまともに船長の顔を見てさう云つた。「鱈」は彼の言葉に耳を藉しながら、これほどこの男の眼が大きかつたかと驚はれるほど灰色な瞳を睨いて、梅原の眼をちいつと覗めたのであつた。

「水兵は仕事もなくて遊んでるんですから。」

梅原は横を向いて口の中でかう呟いた。彼の言葉が終るか終らぬうちに、船長の側にゐた砲手長の腰が三寸ほど前へ動いたかと思ふと、ど

とも安値で水蔵した品を買ふのか知れぬが、船へ積んだ鶏卵の三箱だけはすつかり腐りかけた品であつた。一箱二百四十個からの卵が三箱も腐つてゐると云ふことは限られた食料品の全般にかなりな打撃を蒙らしたことであつた。彼はそれを絶対に秘密にしてゐて、それと觀るや良い方の卵の箱を上積みにして、悪いのはある晩こそり大貫に命じて、海へ投りこませたのであつた。

それでも、一時に三箱ともなくなつた時には、物見高い俺たちの前にどうしてその事實を掩ふことが出来たらう! ことに、鶏卵の一部が腐つてゐると知つてゐた船員には、はつきりその秘密が讀めたのであつた。彼は士官たちのサラダを拵へるために、誰よりも良く冷蔵庫の中へ出入りする人間だつたから。

「野郎、卵ぢやずるぶん振つたらしいぜ。一つ脅かしてやらうか?」

ある晩彼は俺にそつと耳打して、何かの用向きで俺たちの涼んでゐるのも知らずに、とつと甲板の上を通り過ぎた梅原の姿をじろりと睨んだ。俺は一應彼の説明を聴いてから、あまり確證もないことなのだから、もつとしつかりした證據と證人とをあげなけりやかへつて逆捻

を食ふであらう、と忠告した。

ところが、偶然にも事件は、誰の小細工も待たないで、ひとりでに解決した。それは、ちやうど十三日の航海も終つて、いよいよ明日はいつもの重油場へ着くと云ふ日から始まつたことであつた。

いつたい俺たちの船には、政府の用船ではなかつたが、同じくアメリカ人の事業であると云ふ國際的な理由から、一門の小さな大砲と海軍から乗組ませられた十人の水兵とが三十五人の定員以外に寄食してゐたのだ。その一人は砲手の軍曹で、二十五六の顔の威かつい、手も肩もすべてが四角な感じのする男だつた。その外は、いづれも血氣盛りの、尻の大きい、だらしない二十を越えればかりの青年だつた。彼等の食慾と、砂糖の浪費とはいつも梅原の額に皺を浮べさせてゐた。しかし、大貫が来てからは、彼の流暢な英語の力でどうやら茶目氣と盛衰たつぷりの水兵どもの亂暴も、目立たぬやうに思はれた。梅原はすつかり水兵の存在を忘れてしまつたやうに、水兵の悪口をつかなかつた。殆ど忘れかけた水兵どもの存在を、どうしても梅原が思ひ出さねばならぬやうになつたことは、もつとこんぐらかつた事件の仕様に

もなつたのであつた。

「船長、いま私の方の若い者の云ふことに、今朝ちつとも食べる物をあてがはれなかつたさうです。」

毎朝、朝飯が終ると、役目のやうに艦の甲板を一周して行く「鱈」の横合から、不意に白黒に塗つた水兵の食堂から飛び出て、さう報告したのは軍曹であつた。水兵の食堂は廚房のすぐ横手にあつて、いつも吃水が下つて暴風雨に遇ふごとに食器や椅子などの流される室だつた。二言三言の押問答があつて、船長と砲手長の聲が高まるにつれて、いままだ谷とその日の獻立について話してゐた梅原が聞耳を立てた。

「スチョージ、なんか云つてるよ、あの軍曹の野郎が。」

疾くもそれを耳にした昔川が、まづさう云ひつけた。つかつかと進んで行つた梅原は、わいわい血をナイフやフォークで飲みながら何かわめき立ててゐる水兵どもを尻目にかげながら、船長に一體して、

「何か料理に就いてですか?」と訊ねた。

砲手長は嚴しい英語で、はつきりと云つた。

「さやう。食ふ物が無いと云つて若い者が喰ひ

しんと云ふ堅い板を打つた頭蓋骨の痛々しさうな響がして、府長梅原が大貫のすぐ足元に身悶えしながら打作れてゐたのであつた。砲手長の拳は殿つた情性に運ばれずに、隨意筋の働きてすぐ彼の手元へ第二の身構をして待つてゐるのだつた。

「何をやるかッ？」
「梅原はわりと大きい聲を張りあげて、砲手長を叱りつけた。

「貴方は、船中では何人と雖も他人を直接に制裁することが厳禁してあるのを知つて居るだらう？ 私、私だけが、制裁の絶対権を持つてゐることも熟知して居るだらう？ たゞ、府長がどんな悪辣な奴でも、それを罰する権利は貴方にはない筈だ。よせ、拳を納めい！」

さう云つた彼の聲は、さすがは船長だと思はせるほど、凜として冴えた聲だつた。
「閣下、悪う御座いました、しかしあの侮辱は實にアメリカ海軍にとつて艦旗を汚されたも同然です。」砲手長は拳を曇らせて詫びるのだつた。

作られた梅原は、大貫に助け起されて、下顎を押へながら、口惜し涙をいづばい溜めて、しきりに英語をも日本語ともつかぬことを、唇にの

ぼせてゐた。日本語を唇の先で即座に英譯してゐるやうにも聞えたのであつた。

「よろしい、これから府長は現在の食料品と在來までの消費額とを細密に計上した報告書を私の許へ差し出して呉れ。——それから、砲手長、貴方もちよつと私の部屋まで御出でなさい。」

かう命じたまま、船長は新しい葉巻をポケットから抜き取つて、尖端をいまいましさうに噛み出しながらブリッチの方へさつさと歩いて行つた。

「君たちは、僕に使はれてゐるんぢやないか？——それに何だ、あんなことを云つて僕に取をかせるとは！」

つかつかと大貫の手を離れて府房へ入つて來た梅原は、右の拳を握り締めながら中塚の片腕を捕つた。
大貫もあわてて府長のあとから、くつついて入つた。

「やかましい、貴様に使はれた例はねえぞ。谷の手下なんだ、この野郎、生意氣ぬかすな。い。」さすがに、日本語となると雄辯になつた中塚が、梅原の手を振りほどきながら、眼を吊りあげた。

距離にわけへだてられてゐるのだつた。
そこへのそのと割り込んだ水夫長は、長い髪の下から吸びた聲で腹立たしげに呷つた。
「大馬鹿者奴！」
府房の扉口や室には、水兵の若々しい、ふざけ切つた顔が、キュービーをでも飾りつけたやうに、俺たちを見て笑つてゐるのだつた。

五

梅原が剃刀に縁を巻いたり、ハンマーを腰にさしたりして歩き始めたのはそれからのことだ。それでも、まつたく孤立の地位に陥つた自分を、非常に恐れたらしい彼は、船にある食料品と云ふ食料品を全部この航海で使つてしまはなければ置かぬやうに、どしどし御馳走し始めた。氣の毒ながら、彼の味方は一人も増えなかつた。

俺たちも、もうこの船と府長とに見切りをつけて、何でも彼でも投げやりにやつてのけて、出来るだけ働かない工夫をするやうになつた。寄ると觸ると、俺たちは自慢のやうに、幼い時分から何遍どんな喧嘩をしたとか、どこの國民が喧嘩に卑怯だとか、血闘い話だけで持ち切つた。激昂した神經は誰と話してゐても張りつめ

鮎貝が出た。彼は物をも云はずに、横合からぼかぼかと府長の頬を殴り始めて、殴りながらますます自分のしてゐることに夢中になつた。

谷、皆川、徳、大貫の四人は四つの異つた場所から、一足飛びに三人の狂ひ合つた渦を中心として押寄せた。

「明、派棒！」
「領事館」もやつつけるろ！」
「貴様等船ごろが何んだ！」
「危い！ 危い！」

そんな聲々が、黒い、白い、赤い、めまぐるしい七人の動體から、狭い府房の天井も壁もよとばかりぐわんぐわん湧きあがつた。俺はジャック・ナイフを抜きにかかつた梅原の右手を、齒を食ひしばつて、握へてゐた。谷の向う腹へ一生懸命にしがみついて引付さうとしてゐる大貫の頭を、残忍な顔をして殴りつける鮎貝の委がちらと幻影のやうに俺の眼の前を掠めたと思ふと、俺の鼻尖には、恐ろしく太い赤毛のもぢやもちや生えた腕がぬつと現はれて、梅原のナイフをほろりと引き取つたと思ふ間に、混亂した七人は、血を流しながら、はげしく鼻孔で呼吸しながら、やたらにその邊を蹴返しながら、多数の水夫の腕に一人づつ抱きすくめられて、相應な

た弦のやうに顫動した。が、一方から云ふと、恐れるのは俺たちではなくて、俺たちが恐れられてゐるのだつたから、かなり傍若無人なことを云つたり、大貫の顔へ吐きかけるやうに笑ひを浴びせたりしたのであつた。
船長の方からは、別に誰に對しても手厳しい罰もなく済んだらしかつた。しかし、府長だけは着港少々解能になるだらう、と云ふのが一般の風評だつた。妙にそれは落ち着かぬ眼付で、甲板から冷蔵庫へ、冷蔵庫から府房へ、口を「へ」の字に結んだままゴム靴で歩いてゐる梅原を見るとき、どんなものか俺たちの心にも怒みが動くのであつた。時には、わざと話しかけて見ることもあるが、梅原は聞かぬ振りをして顔を外向けてしまふのだつた。

こんな状態では船はたうとう目的地まで着いた。村島の埋められた場所などは、いつの間にか懐ひ出す暇もなく通過してしまつた。
森のつづいた陸、赤い脂ぎつた海岸、緑に濁つた暑苦しい海、小さな舟でやつて來るまつ黒な土人、いくつもいくつも油のタンクの建てつづけられた砂濱、重油會社の監督らしい丈の高いメキシコ人、そんな景物の間に、俺たちはわづか半日だけ許されてある他の船員の上

陸期間にいつしよになることも出來ず、熱い空氣に喘ぎ喘ぎ、感興のない勞働をしなければならなかつた。水兵や水夫などが、舟で上陸するのを羨しきうに見送りながら、油を積み込む人夫の飯を食はせなければならなかつたことは、どんなに俺たちの人種的な侮蔑のやうに思はれたらう。

船體のまん中へ、一斗樽ほどの太さの鐵管を据まつけて、船底へ船湯のやうにどろどろした重油を、陸のタンクから注ぎこむまでの工事が、氣忙しく働いてゐる俺たちの汗みどろの眼に映じた。派敵のやうな赤い半巾をかぶつた土人が、遅い腕で機を押しながら、いくども船腹を往來した。長い靴を生やした監督の顔も、三度づつ士官食堂にあらはれた。いかにも賤民らしい土人の群が、がやがや罵り合ひながら、陸から次第々々に重油を運ぶ鐵管を敷設して船へ近づいて來た。鐵管の一端が、船體へ觸れると、船からの管とびつたり繋ぎ合はされて、赤旗の信號で、重油はぐびぐび船底へ流れ込むのであつた。
鐵管の横腹へ手を當てると、大動脈の血のやうに流れ込む重油が異常な震動を俺たちの身内に傳へた。油の入ることに一寸二寸と低

くたつて行く船の吃水を見て、
「もう八部通入つた。明朝は出帆かな？
——」から云つて、谷がどろんと落ち窪んだ眼
を、盛りあがつて来る水面に落したこともなく、
第一航海の場合と、第二航海の場合も、寸分の
ちがひもない舉動だつた。それが谷だけではな
く、俺たちすべての上に急に老衰が来たやうに、
何を云つても、どんなことをやつても、みな十
年も前から通り古した、飽き飽きしたことのや
うに思はれたのであつた。

夜は、體を捲うた皮膚が邪魔なほど蒸暑い瘧
氣が波の音一つ聞えない海の上をのろのろと滑
り込んで来た。俺は寝られないために、甲板へ
出て、すつ裸になつて寝ころんだ。北國の空と
はちがつて、頭の上の星は手許にある金剛石の
やうにごろごろ大粒に光つてゐた。深い大霧絨
のやうな蒼空の奥に、水晶の流れのやうに蛇つ
た銀河の中にも、五つ六つきらきらと悪光をは
なつ星があつた。寒い冷たい天體に對する崇嚴
な氣持や、人生の小さなことを感ぜしめる壓迫
するやうな永劫性にはなく、どこもど
く品るみと暖かみと、毒々しさを含んだ宇宙の
別な一面が仄見えるやうであつた。
したたかに重油を呑んだ船は、翌日のし

らしら明けに沖合を出た。夜中備いてゐた土人
は、みな小蒸氣に乗つて、白い水筒器や、空氣
を搾取する手車や、バケツなどの載つた甲板の
上から赤い半巾をかぶつた體を振り立てて、
アメリカの一片とも思はれる俺たちの船に對つ
て挨拶をした。船を繋いだ蛇のやうなロツプが
次第々に船尾に退坐つて、曉の光を吸うた
淺葱色の海は、織物かなんぞのやうにするする
と船から滑り出るとともに、その一端を食ひ留
めた陸を遠くへ遠くへと押距て去つたのであつ
た。

「これがメキシコへ御別れさ。」
さう云ふ言葉が、俺たちの胸に自然と湧いて、
さすがに夏來ても秋來てもすこしも變つたとこ
ろのない赤熱の邦の一端を、惜しいやうな氣持
で見送るのであつた。
油を満した船は、水際から五尺とも離れぬ
ほど低くなつて、船の方などはりをりをぶり
を受けるやうになつた。
時間の變更から、村島の埋められたと思はれ
る邊は、夜のうちに過ぎてしまつた。この航海
をやめてからの前途を考へてゐた俺たちには、
だんだん兄弟の死と云ふ感じが、一番も前の
出來事に對するやうにうすらいで来た。牛の尻

尾もいつの間にか、積分をつけるんだ、などと
云つて食べるやうになつた。そして、これから
どんな風に散り散りになつてしまふことかと思
ふと、五人は急に反動的な親しみを増して、俺
たちを仇敵あしらしひする梅原や、大員に對抗す
る氣持になつた。
北へ滿るに従つて海は荒んだ。曇り勝ち
な場所へ深入りするのだつた。ベンキを甲板へ
塗りなほしてゐた水夫が浪に追つかげられたり
することは別に珍らしくなくなつた。念のため
に、廚師の屋根に蓄へてある馬鈴薯には新し
い帆布がかけられて、太極で結びつけられた。
船室の窓は概ね閉ぢ切られたまま減多に開かれ
なかつた。人間が、いちいちした心からその
所有品や生命を保護すべくするあらゆる努力を
重ねてゐる馬鹿々々しさを、片つばしから切り
崩して行く怒濤が、キューベ近くの海に入るに
従つてそろそろ頭を擡げ始めた。空は次第々々
に海を壓迫して来た。ところどころ蠟のやうに
薄明の漂うてゐる雲の明るみには、すさまじ
い嵐が溜つてゐた。不意に水を引掻き廻す物音
と、機關の底の何やらを響きつけるやうな響
とだけが、どうやら船が進んでゐるのだと云ふ
危つかしい安堵の念を俺たちに與へるだけであ

つた。

はたして暴風雨がやつて来た。あらゆる角度
から船を亂射する雨は、數千の白い馬が甲板を
目掛けて疾驅して来たやうな波濤と相俟つて、
千噸をもつて計へられたる船を、時計の振子の
やうに一秒ごとに右から左へと震盪せしめた。
深い谷から波濤の連立に、死んだ物のやうに打
ちあげられてはまたすぐ引込まれる船は、周囲
幾哩かの水平線の一瞥をだにする暇もなくただ
もうびちびち泡立つた底氣味の悪い眼の前の水
に、滿天の雨を浴びながら蠟の背へでも乗つた
時のやうに飄弄されるのであつた。雨合羽をか
ぶり、腰まで届く護腰靴をはいて、水夫は波に
洗はれながら、憂鬱な恰好で甲板の油口の締
木をなほしたり、ロツプを捲きつたりした。
水夫長が廚師へ、甲板に打上げられてあつたの
だと云つて、料理を頼んだ尺餘の飛魚なども暴
風雨の目でなけりや生れの産物だつた。

やつてゐた仕事に間斷のないオーケストラの
やうな悲壯な音調を與へる怒濤と風音に刺戟さ
れて、俺はだんだん眞面目に生きることを考へ
て見なほさねばならぬやうな氣になつた。あら
ゆる騒音の底からも、海底から傳はつて来るや
うな、死そのものの静寂とも思はれる黙した力

が、だんだん俺の心に滲みとほつて来て、はか
ない生存の苦悶をちつと凝視しても恐ろしくな
いやうな勇氣が血液の中に流れ始めたやうに思
はれた。

暴風雨が響くと、大氣は凍瘃を感じるほど寒
くなつた。キイ・ウエストの沖からは、毛絲の
ジャケツトを着込まないと、とても甲板を歩く
ことは出来なくなつた。
二日、三日——寒い風に煽り立てられた濁つ
た海には、ミシシピイの眞水が雜るやうにな
つた。冷酷な潮流の險所々々を巧みに避けて、
船は引掻く物音と響きつける響とを繼續して、
頑強に同じ方向に進んで行つた。理想、責任、
奮闘、進退……何々それらを混亂の渦中に導く
破壊の力に抵抗して生き動くのが船ならば、
人間の一生とそれはどんな差異があるだらう。
俺はこんなことをしみじみと感じるやうになつ
た。

待ちに待つた着陸の日が、寒い寒い雪雲の密
封した一日にたうとう實現された。河口の檢疫
が済むと、汚いメタンの湧き立つ河を、いくつ
もの鐵橋をかき滑つて、疲れはたした旅人のやう
な油船は、ハムマーの音や、蒸氣の音や、汽
笛や、電車の鈴などの同じ聲に喧嘩してゐる

いろいろな外國語のやうに響いてゐる。兩岸を
無言で通り抜けて、雪になつた午後三時過ぎの
ドックへ、ぐつたりと身を凭れかけたのであつ
た。

俺たちは、嫌がる船長へ無理に強談判をして、
その日のうちに月給と手當とを買つた。別れる
前に一言何か云つて行かうと思つて、五人が揃
つて廚長の部屋へ行くと、彼は大員を對手に熱
心に事務引繼の手筈を定めてゐたのであつた。
さすがにかうなると、彼も喋んだ口を開いて、
「君たちもよすかね？——いや、僕は首尾よく
御拂ひ箱さ。」と苦笑しながら、大員新廚長のた
めにせめて誰か三人ぐらゐは停まつてゐてくれ
まいかと頼むのであつた。
「領事館も、ダンゴ眼鏡の曇りを拭きな
がら、懸命に愛想笑ひをして、同じことを頼んだ。
俺たちは、至極辛氣ない返事をして、ボケツ
トの紙幣をぎゅーと片手に握りながら、元氣
よく棧橋へ出た。

「おい、トニーんとこへ行かう。」昔川は腹で擦
したやうに同じ言葉で、一同の心を煽つた。
それから俺たちは、トニーの酒場で飲んでゐ
た。何日飲み続けてゐたか、それが何日目の晩

「だつたかは、はつきりしない。ただ、俺たちの眼からは無駄事のやうに見えるほど、酒場の人間が交るやつて来てがたびしのストロウにざらざらと小粒な石炭を十能で入れることに、俺は、トニーよ、寒いと石炭があるな、と話したのを記憶してゐる。俺はもうとうに無一文になつてゐて、仲間の四人も酔つたまぎれにどこかへ行つてしまつたのだが、それでも石炭を入れる人間が来ることに葡萄酒を命じて、驚愕な顔をして、寒いと石炭があるな、と言つた。終ひには、トニー云々と云ふ俺の言葉は、俺が最後に話すことの許された、たつた一語の英語でもあるかのやうに、かなり複雑な意味がそれに纏まつて来たのだ。」

「——貴様は何を求めて、この汚い酒場に、風だらけな人間と酒を飲んでゐるのか？ 貴様の飲んでゐる酒には何がある？ 時々聞える話聲は何だ？ 人間の顔は？ ここはいつたいていこのなのだ？——」

さう考へてゐながらも、俺には石炭がざらざらと一抱ひづつ眼の前のまつ赤なストロウへ煙べられることに、トニーよ、寒いと石炭があるな、としか言はなかつたのだ。それををりをり、自分の考へが相手の胸に轟と来ないやうな節が

あると、俺は大聲で何かを露骨に表現して見たいと思つて、また、

「トニーよ……」と呼びかけた。

單調な言葉ほど複雑なものはない。人間はべらべら三文代言のやうに、むだごとを飾りしやべつてゐると、かへつて言葉の奥に潜んだ複雑な力を忘れてゐる。鳥や動物だつて、同じことだ、波羅門教の「オム」と言ふ讚嘆詞だつてさうさ。へば役者の臺詞がどれほど彼の靈の存在と關係してゐるか？ 俺は、いつたいてい俺と云ふ人間は何の爲めに生きてゐるのか？——とまア、じれつたくなるといつつも、痛癢玉を破裂させながらも、不然として、金持の娘が「オマア・カイヤム」でも口吟んでゐるかのやうに、トニーよとやつたんだ。

トニーは辛抱強い男だ。頑丈な、日本人ほど黒い髪を持つたイタリア人で、高い鼻から油断のない眼光まで、どうも希臘人の血が通つてゐさうな、謂はば悪魔面の男だ。トニーの酒場の者も、一人として辛抱強くない奴はない。鼻だつて、娘だつて、給仕の何とか云ふ若い者だつて、皆なさうだ。壁には何十年來ぶら下つて、未だに緑の切れない下手な裸體美人畫がある。天井は今にも落ちさうでつひぞ壁土一増り落ち

て来はしない。卓はいつまでも俺の半身を支へてゐる。椅子、これもちつと辛抱して俺の下に跨まつてゐる。俺の眼に留まる物は皆忍耐力を持ち過ぎてゐる。それが、第何日目かの他の酔つ掛つた眼には、たまらなく瘡に觸つてならない。何でもいい、乞食の帽子でも、女のスカートでも、皿一枚でもいいから、少しは不安定になつて、床の上へ落ちて、乞食なら可憐な聲を絞り、女ならあれ！ と叫び、皿なら皿らしく床板の堅さを證明するほどの響をあげて、くれりや、ちつたあ、俺の氣持も落ち着くのだ。

「おい、君は家がないのかね？」

時折、酒を持つて来たリ、石炭を煙べに来たりするごとに、トニーは辛抱強い聲で、さう俺に訊くのだ。彼はかなり心配はしてゐるらしい。

「ああ、俺のゐるところが家なんだ。」

しまひにはあまり執拗く訊くので、俺もさう答へた。

これもあんまりはつきりしないが、酔つぱらつてぐでぐでになつてゐた第何日か、突然、また谷を頭に、中塚、鮎貝、皆川の四人がぞろぞろと入つて来た。

「たた大へんだ、春蔵。起きろ、起きろ。俺の

「おい、俺たちはこれから、一隊隊で、谷の鼻をみんなで××しに行くんだ！」

かう廻らぬ舌でしやべり立てたのは、鮎貝だつた。何のためにもなく、五人は彼の言葉に非常な偉いことをでも発見したやうに、椅子や卓にのめりながら、大聲で賛成し拍手した。

「よし、俺だつて男だ。俺の一人や二人はいつでも××して見せるぞ。べら棒め、あんな噂なんざア俺さまの行くところにアどこにもござろしてゐるんだ、さア来い、野郎ども！」

彼はいく度もよろける足元を踏み堪へて、腕まくりをしながら大聲で叫びつた。

またまた拍手が起つた。いつの間にか俺たちは屏に押し出されるやうに灯の入つた街へ出て居つた。

どこをどう歩いたか、長いこと方々を漂浪つ

たあと、俺たちが谷の女房の支那街の家まで着いたのは晩の九時頃だつた。青白い、多くの犯罪に汚された壁に、眼が觸れると、百色眼鏡を長いこと覗いてゐたあとのやうな、疼痛が眼の底からちくちく湧いた。

「おい、貴様たちはここで温和しく待つてゐろ！」

谷はさう云ひ捨てて、一人で屏をノックしながら、

「トニーキョウ！ トニーキョウ！」と二度ばかりわめき立てた。

屏が開いて、青い電燈に包まれた光が、ぼんやり谷の女房の横顔を開の中に浮した。ブルンドの、小造りな、ちよつとトニーの鼻に似たやうなところもありながら、サクソン系を帯びた特色を、十分にその皮膚の色や、鼻の外り工合に見せてゐる女だつた。谷は屏を締め切つたあとで、何やら家の中でががや罵つてゐる様子だつたが、しばらくすると、威勢よく屏を開いて、

「One at a time !」

と頭のどこから捻り出したものか、通ぶつた英語で俺たちを呼びかけて、自分は一着背後に列んで、禿げた頭をつるりと撫でた。屏の中へ、

「おい、君は家がないのかね？」

時折、酒を持つて来たリ、石炭を煙べに来たりするごとに、トニーは辛抱強い聲で、さう俺に訊くのだ。彼はかなり心配はしてゐるらしい。

「ああ、俺のゐるところが家なんだ。」

しまひにはあまり執拗く訊くので、俺もさう答へた。

これもあんまりはつきりしないが、酔つぱらつてぐでぐでになつてゐた第何日か、突然、また谷を頭に、中塚、鮎貝、皆川の四人がぞろぞろと入つて来た。

「たた大へんだ、春蔵。起きろ、起きろ。俺の

伯父

「阿呆！」

中村春吉は、かう叫んで、いきなり靴先にぶつかつた石ころを蹴つた。しかし、石ころはわづかに靴の底にかすられただけで、凍りついた地面にしつかとしがみついたままびくともするものではなかつた。彼は、意地づくで一步あともどりして、わざわざ狙ひを定めて、爪先がうづくほど、その醜い石ころをいやといふほど蹴り上げた。

べつかり水から割られた石は、思つたよりも多角形なごつごつした體を、肥つた人間が手足を踏ん張つて轉んで行くやうに運んで、ころころと二又にわかれた太い方の路を、ものの三間も飛んだと思ふと、石板石の記念碑の根かたに仄黄ろい冬の日光を浴びながら、べつたりと納まりかへつてしまつた。彼は、ほんの視覚だけの好奇心から、記念碑の表になが書いてあるかを讀まうとしたが、そのとき、

「萬歳ッ！」

「江藤進七君萬歳ッ！」

と、一途に湧いて来る群衆のどよめきに、思はず視線を轉じて、我と我が身の行爲に責任をもたぬもののやうに、ふらふらと横手の霜枯れのした小丘をのぼつて、マスクの間から深い吐息を洩らした。

もう、群衆は、腹立たしいほど、多く集まつてゐた。彼は、そこに、いろいろな字を書いたのぼりや旗を見た。まつ白い、寒さうな感じのするきれ地に子供の清書風のやうな走り書きのしてあるのが目についた。旗といつしよに、いろいろな服装をした人間が、冷たい日光に顔を晒したり、蔭になつて塊りあつたりして、枯草の上を動いてゐた。元氣らしい聲で語つてゐるものもあれば、ひつきりなしに煙草を吸ふものもあり、また、鹿爪らしく帽子を脱いで長たらしい挨拶をかはしてゐるものも見えた。折日のついた羽織袴に、太い白紐をむすんだ青年が、みんなか

ら肩を叩かれて、擦つたいやうな笑ひにマスクの口をもぐもぐさせてゐるのもあつた。「す」と「し」の正反對になつた、重苦しい土地辯のごつごつした會話が、どの群にもどの列にも賑はつてゐた。

「なにがそんなに嬉しいんだ、愚者めッ！」

春吉は、かう獨語つて、市役所の書附に指定されてあつた旗幟をめぐり、霜の音を踏みながら、雑多な入替者と、見送人との間を、尋ね廻つた。やうやく探して、その列のいちばんあとへ着くと、體中の淋しさが急にこみあげて来たかのやうに、俺は一人だ、といふ感じが鼻と心を刺つた。

「いざとなると、いつも一人なのだ。」

強ひて、自分をまぎらはさうとして、かうどんづまりの心理から打消してみても、すぐその下から、子供の無邪氣な顔が浮んで来た。「そら、微や、おとうちゃんがおいでになるんだよ……おめめをさませないさ、さ、微や！しばらく、おとうちゃんはおゐないわいなんだよ……」

さう云つて妻が振り起さうとしても、子供はなかなか眼を醒まなかつた。彼は、伯父の家の門口まで送つて来た妻の、胸元にまだ眠たさ

うな眼を睨いてゐた子供の、柔かい髪の毛を、擦り取るやうに撫でて、涙ぐましい氣持で、ふいとそこを出てしまつたのだ。

「ああ、なぜもう一年むかうで辛抱して、歸朝しなかつたのか？」

なぜ、なぜ、なぜ！——眼の前に、まだ兵卒になりきらぬ民衆に對して、威嚴と矜負を示すための如く、外り身になつて一同をじろじろ睨め廻してゐる軍曹のあかつ面へ、湯罵を浴びせかけたやうに、春吉は、心の中であらう叫んで、外套のポケットにいくども拳を握つたり開いたりした。

二

幾時間か、同じ營内のグラウンドを、ぐるぐる歩行させられて、頭から釘を打込むやうな旅團長らしい將校の武張つた訓示に耳を傾けたのち、口を開いてぼんやり見てゐる群衆の前を、さまざまな號令が、行つたり来たりして、をりりびかりびかりと脚が日光に反射した。士官といふ士官の顔は、どれもこれも同じやうに顎がツツ張つてゐて、冷徹な小さい眼と、筆に

力を籠めて書いた「一」の字のやうな口とが、外國の排日ボンチ輪に出て来る「ジャップ」の顔そつくりだつた。

ひとときり、また、混濁になつたグラウンドを、上官の人たちにもすばらしい、不規律な後姿を見せるためのやうに、ぐるりと廻つて、反對の方を向くと、列の先頭に立つてゐた古參兵が、汗みどろな額に手をあてながら、

「休めだ、しかし、列を離れてはだめだぞ。」

はひつて来た門口の方を見ると、ゆらゆらと水蒸氣の立ち騰つてゐる數百の靴や足跡や下駄に踏み踏られこねかへされた黒いグラウンドをへだてて、無数の人間が、櫛の間から首をさしのべて、こちらを眺めてゐるさまが、いかにも、二つに分けられた群衆は、もう手と手を取りかはずることが出来ない距離に押しへだてられたかのやうに思はれるのだつた。春吉は、なんだか、今朝別れた自分の妻が、微をかかへて、群衆のうしろから、彼にむかつてしきりに「はいちや！」をやらしてゐるやうな氣がしてならなかつた。

暗い、冷たい伯父の家に、どうしてあの我まを通過したやつが、二年間も厄介になつて辛抱

出来ようか？ 中年ごろまでは、どうやら多年の開業の役得で、地方の郡會議員などもやつた伯父が、胸を煩つて、手に入れた田地も賣りつくしてしまつてから急に吝嗇になり、春吉が一年前に、ぶらりとアメリカから歸つたときも「ハワイさ出稼ぎに行つてゐるこのへんの百姓だいか！」と云つて、十二年ぶりで、無眼のなつかしきをもつて歸つた彼に、庭の掃除をさせたほどの伯父、その男の下に長い長い二年の間、どうしてあの病身な、東京だけに棲みなれた女が男の子を一人かかへて暮らせようか？

かう想像すればするほど、なまじひ、日曜日の外出に子供の顔が見られるなどといふなまやさしい量見を出さずに、妻と子を、彼女の實家の方へあづかつて貰へばよかつたに、と後悔されたのであつた。

春吉の眼は、だんだん霞んで行つて、しまひに、櫛につかまつてゐる見送人の妻さへも朦朧となつてしまつた。彼は果敢的に心の底から底からと押し上げて来る、涙の湧き出る前の、甘酸っぱいやうな豫覺の苦しみを、いくどかちつと休めて、ほかのことに思念を轉じようと思つた。

「君は、どうしてここに来たのしや、やア？ さつきの古参兵が、けげんさうな顔をして、あゆみ寄つて、かう被に訊ねた。

「僕、僕ですか？——永らく渡米してゐたんです、仕方がありませんや、どうせ、國家のためですからな、は、は、は、は——」

彼は、咄嗟の場合の心にもない言葉を、涙っぽい笑ひで誤魔化した。

「なにしてたんですかや？」

「職業ですか？——雑誌の編輯です。」

「雑誌ちやうと、書く方ががすべね？」

「さうです。」

「わだしあ知らねえけど、まづ、あんだなぞア、その方がよつほど國家のためになんべえをね、こんなどこさ來えでも。」

「有難う。どうも運が悪いんですかな。」

「あどで、再検査んどき、なんとかなりすべや。」

「さうでせうか？」

そんなことは、もちろん春吉にとつては、別に希望を置くに足ることではないと思はれた。現に、社會主義者を絶対にとらなかつた筈のものが、最近では、ぼつぼつ入替させて、反つて彼等を軍隊化してしまふやうな噂も耳にはひつ

てゐた。それにつけても、なぜ、徴兵検査に、銀座かどこかで素晴らしい路傍演説をやつて、Aの一番の黒表人物になれといふ、社の連中のヨダ氣分もまじつた忠告を聞かずに、おめおめ検査などを受けたのか……

そんなことを考へてゐる暇に、彼の同列の人々はしどろもどろな足取りで、とぎれる間々を埋めるやうに早足になつて、くわつと陽の照り返つた兵舎の自壁にむかつて進んでゐた。

「さあ、あんたがたア、これから軍人だからね。」

古参兵は振り向いて、慫むやうにも、一時の氣やすめのやうにもとれる言葉で、かう注意してブルドッグのやうな靴にとびりついた泥の塊を、重さうにべちやりべちやりと引擦つた。

「さうです、神田の方に。」

「さうですか、どうもこの土地にお住みの方は見受けられなかつたですよ。わつしも、本所です。工場へ通つて居りましたね。」

「あ、さうですか、お互に、どうも御芽出たいんですな。」

二人は顔を見あはせて苦笑した。

「さうでせうか？」

そんなことは、もちろん春吉にとつては、別に希望を置くに足ることではないと思はれた。現に、社會主義者を絶対にとらなかつた筈のものが、最近では、ぼつぼつ入替させて、反つて彼等を軍隊化してしまふやうな噂も耳にはひつ

うちのみでもらはないとあとで云つて來たつてだめだぞ。」

念を押した上に、班長は、一互り新兵を見廻して、春吉の名を手帳に控へて、士官のあとにつづいて出て行つた。

古参兵の指圖で、めいめいの飯盒は、大粒な大角豆で色づけした赤飯と、野菜や肉の煮染などを、取り入れた。「歓迎」と書かれたげげばしい色彩の型菓子なども各自の前にくばられた。

「おらア、このお菓子、こんで三べん食えすべや。」

仁のよきさうな上等兵の一人が、同僚にさう云つて白い齒の間に菓子をぼきりと缺いて、餛飩だらけな顔で笑ふ拍子に白い菓子粉を下向に熱心にアルミニウム製の箸を動かしてゐる新兵の頭の上へふつと噴きかけた。

春吉は、菓子をポケットに捻ぢ込むと、まだ背廣の古服のまま立ちあがつた。

「ここら、そこら入つちやだめだぞ。」

「これほどの淋病なら、一向差支へはない、早く班へ歸れ！」

そんな崇高な言葉のきれきれが、市場か魚河岸の飯賣をでもやつてゐるときのやうな、雑然とした騒々しさのうちに弾機仕掛になつた器械が、突發的にほかの言葉を弾き飛ばすときの勢ひで、板圍ひの室内にひびいた。

「ここにゐだのが？」

さつきの班長が、紙片を手にして、春吉の側へやつて來た。

「こつちさ來て居れ、早くみてもらふやうにし

された。みんなは思ひあはしたやうにマスクを口から外した。

どれもこれも、ずうずうの、善鈍な顔をした、なんのために軍隊に徴集されたかも知らぬやうな青年たちばかりだつた。初對面の遠慮から、彼等は、ただ窮屈さうに、一等卒があてがつてくれる堅い椅子へかけて、ストローグへ頼んだ自分の不恰好な手だけをもの珍らしさうに眺めてゐるのだつた。抜け目のない班長が間に割り込んで、他の古参兵にいろいろな冗談を云ひかけながら、笑ひといふ共同心理で煽つて、どうやら人々の口を開かせた。

「あなたは、やはり東京に御いででしたか？」

一人の、頭も顔も圓々と肥つた青年が、春吉のむつりした、髭を蓄へた顔をのぞき込んで話しかけた。春吉は、ふいに東京がなつかしくなつた。

「やるから。」
 さう親切に云つて、彼は、寒いのも忘れて服を脱いだり、ズボンをとつたりして、待ちもどかしさうに順番の来るのを待つてゐる青年たちの間を縫うて軍醫の卓の前の棚取りしてある席へ、春吉を誘うた。
 「中村さんきつ！ 中村さん……」
 はつと思つて立ちあがつて、呼びかけた軍醫の卓の方へ歩み出すと、どきりどきりと氣味悪い心臓の鼓動が胸壁に波打つた。彼は、複雑な感傷で壓倒された人間のやうに、無言で軍醫の前に立つて、唾を嚥んだ。
 「お前か、中村さんきつつうのな？」
 「はい。」
 軍醫は、卓の上のうづ高く積まれた書類のうちから、彼の戸籍簿本らしい罫紙をとりあげて、彼の顔等を等分に見くらべた。
 「承らうアメリカへ行つてたさうなんだな？ 昨年十月に歸つたのか？ 職業は何だ？」
 「雑誌記者です。」
 「何の雑誌だ？」
 「普通の雑誌です。」
 「いや、その名は？」
 「政治や文學などを取扱つた『世界主義』といふ

んだ——」
 「『世界主義』？ そりあ、社会主義とは關係があるんか、な？」
 「まあ、あるやうな、ないやうな。インタアナシヨナリズムといふ言葉の譯語で、ロシア革命以後の萬國の無産階級——」春吉は、こんな言葉を、こんな男に話すのが、自分の主義に對する冒瀆のやうな氣がして、思はず、身内がぞくぞくした。
 「よし、よし。それでえいんだ。さそつちさ行つてよく再検査をすて貰へ。」
 指された卓には、四十恰好の眼の鋭い佐官級の軍醫が控へてゐて、さつきの卓から廻附された書類を手に取りながら、じろじろ春吉の七分三に分けた髪を珍らしさうに眺めてゐた。
 「わりに年をとつてゐるな。」
 彼は家畜かなんかを品定めするときのやうに、かう呟いて、視線を外すと、角ばつたゼスチニウアで、聴診器をとりあげた。
 心臓が悪いなどと云つて、恐ろしくて、忌避の嫌を受け、これから二年間古参や士官たちに虐待されたところが、もうこの上は、仕方がないと思つて、軍醫の命ずるままに、胸郭

を出して、深呼吸をやつた。ぐるりを取り圍んだ青年たちの視線を十分に意識しながら、軍醫は春吉の胸を叩いて見たり、背中に聴診器をあてがつたりしてむつかしさうな表情をして首を捻つた。
 「よろしい、上衣をつけていい。——どうも、さし酒を飲み過ぎるな。生命を大切にせんといかん。一年間歸休だ。なほ醫師にみて貰つて、よく自宅で療養せんとならんぞ。つぎッ——」
 五
 春吉は、急流に弄ばれるやうな氣持で、町から町を飛んでゐた。
 どうして歸つたか、ともかく、伯父の家の門口へはひつたときには、うそ寒い夕霧が庭木の間に降りてゐて、遠くの方から、豆腐屋のふれ聲がひびいて来た。あの熱狂した若い者がやがやした聲を酒めた板垣の室内から、ぼつかり歸つて来て、しんとした土族屋敷の木立の奥に反響する、豆腐屋のふれ聲を聞くことは、異種だつた。彼は、久し振りで、平和な豆腐屋の聲を聞いたやうな氣がした。
 電燈はついてゐるが、家の中はしづかだつた。擦ガラスの支關の扉の、談笑と應酬の時間を費

いた金文字だけが、夕闇の中にきらきら眼を射た。そんな文字でも妙になつかしかつた。
 例のとほり、眼鏡をかけて、十握ばかりの電燈の下で、一日讀み飽きた『河北新報』をまださがさ云はしてゐる伯父、まつ暗な臺所で、蠟を煮てゐる伯母、納戸の三疊にたどん一つ埋けたあんかに、徹に酒乳をしてやつてゐる妻、薬の香のぶんと匂ふ取付の藥局、みしんみしんと柱の裂ける音のする奥の八疊の暗がり——かう想像してみると、思はず何とも云へぬ歡喜の情に、眼がしらが熱くなつて来た。
 がらりと、戸をあけた。玄關口が一體にぼつと輝つたやうに見えた。なにかを呼びかけた。度はづれの大聲だつたのに氣がついた。誰かの足音がして、襖が、一二寸ひらかれた。黄ろい電燈の光が、臆病たらしく、間の障子を照らした。ぼそぼそと、人の囁く聲がして、細い手がたてつけの悪い障子の棧にかかつて、一二度突くと、さつと茶の間の電燈が、春吉の顔へ水のやうにかかつた。
 「まあ——？」
 妻だつた。微を抱いてゐた。
 「どうした？」
 伯父の聲がした。がさがさと新聞を巻む手付

が、その瞬間、春吉の頭の隅に映つて、すぐ消えた。
 「どうして歸つたの？」
 妻は、尻上りな仰山な聲を出して、しばらく彼の顔をあかりにすかして見て居つたが、やがて急激に心理活動を刺戟されたもののやうに、ふり返つて茶の間の方へもつと大きい聲で叫んだ。
 「春吉が歸つて参りましたの——」
 「一年間歸休だとき！」
 彼も、もどかしさうに、靴の紐と争ひながら、大聲になつた。
 家の中は、大勢の人間が圍入したやうに、急に騒々しくなつた。はひつてみると、近在に嫁いでゐる春吉の實母も來あはしてゐた。伯父、伯母、妻の四人は、目新しさうに春吉の頭から爪先までを、じろじろと見廻した。呆れたやうな表情が、人々の顔に漂つた。
 「心臓ださうです。心臓だなんて、實は口賣らしいんです。聞かれるもんだからね、すこし立ち入つた説明をしたんです。すると、軍醫が、氣を利かして、自宅療養をやらんといかん、酒がすこし過ぎるやうだ、なんとうまく撥を合はしてくれたんです。」

「まあ、よかつたわねえ。」
 妻はさううしろから云つて、子供を拘きなほした。
 「——どうも今朝から、わたし、そんなやうな氣がしたんですもの。なんだか、あなたが、ひよつとしたら、歸されて御いになるやうな、ね。さう申しましたね、伯母さん。」
 彼女は、嘘すやうに、伯母の顔を見た。
 「さうさう、富子さんも、なんだか、あの年齢になつて徴兵にとられるなんて、ほんとのやうな氣がしないつて、さつきも云つてたことだをんしや。」
 伯母は、やや東京辯にちかい仙臺辯で相槌をうつた。
 「誰だ、軍醫は？」
 職業から、伯父はそんなことを仔細らしい顔をして、訊ねた。
 「や、おつかさん、つい御挨拶もしてませんで。」
 春吉は、田舎辯らしく、眉毛を刺つて、鐵槌をつけた母親に、頭をさげた。

「まづ、まづ、よがつたべつちや、そんでは、これがら、あんだも精出して仕事して、御恩になつた伯父さんさ、早く御恩返しするやうにすさいんちや。」
母親は、仙臺より、もつと重苦しい言葉で義理のある兄の手前を仰つたやうに、かう云つた。
「伯母さん、今夜は僕が酒を買ひませう！」
春吉はさう云つて、酔つたやうな足取りで立ちあがつた。

六

まぢかの酒屋へ一升壺を注文して歸ると、伯母が、つい揺れちがひに、廊下から春吉は無事に歸宅したかどうかを聞き合せて憲兵がやつて来たといふ話をした。
「そんでは、ゆつくり鹽釜の牡蠣でも食べてけるさ。」
伯父もすこぶる上機嫌で銅壺のガラス徳利の腹を撫でながら、春吉夫婦を顧みた。
「困つたな、しかし、東京の方は、社も代りの人を入れて来たし、家もすつかり豊んで来たのだから——」
春吉は、猪口を受けながら、心配さうに富子

に云つた。
「さう、ね。でも、なんでせう、わけを話して太田さんに御願すりやなんとかなるんでせう。」
太田といふ「世界主義」の社長の記憶を、彼女は女らしい依頼心から呼び起したのであつた。
「うむ、どうせ、出るときにもあんなにまでしてくれただからな。よし、電報を打たう。——おつかさん久し振りですな、御愛りもありませんか？ 今夜は、ゆつくり飲みますよ。」
春吉はさう、意味ありげに云つて、じろりと伯父の顔を見遣つた。

伯父は、にがにがしげに、口籠を噛んで、鼻のやうに眼をしばたきながら、ぢいと天井裏の木目を数へてゐた。
春吉の母は、彼が入替するのために、一家を豊んで伯父の家へやつて来た三日以前から、伯父甥の間の問題になつてゐたのだつた。
彼女は、春吉の父にあたる大酒飲みの最初の良人と別れてから、二三度他家へ縁づいたものの、生れつき剛情で、ものに飽きつぽい性質だつたので、いつもそこを退ひ出されては、兄の家へ厄介になり歸つた。彼女の兄は孤兒同然な春吉を、小さいときから引取つて學校へ通は

酒の商賣を廢めさへすりやいいぢやありませんか。眼の前に酒を置いて、飲むな飲むなといふは、云ふ方が悪いんだ。伯父さんだつて飲むし死んだ御祖母さんだつて飲んだのだし、そりやおつかさんにだけ飲むなと云へるわけはないと思ひますが——」
伯父が、頭から母親の品性を罵つたとき、春吉はさう云つて辯護して置いたのであつた。
「伯父さん、いかがです、もう一つ。」
春吉は、ちびちび壺の縁を舐めてゐた伯父にむかつて、自分の盃を差した。
「いや、俺はこれから病家を通つて来るところがあるんだ。お前たち飲み助の對手は出来ねえ。」

七

かう云つて、伯父は、春吉の盃を撥ね返すやうにして、禿げあがつた顔をつりりと撫であげて、座を立つた。
「あなた、あんまりめしあがると、よくありませんよ。」
春吉の妻は、鏡子をとりあげた良人の手を控へた。
「まづまづ、兵隊の方さへきまれば結構なことさ。」
彼の母親は、酒ぼてりのした顔を撫でて、燃

えつくやうな瞳の濃い眼元で、一生懸命がなつて、ろくろく親子の挨拶もかけない息子の成人した姿を、いままさらなつかしむやうに凝視めるのだつた。
伯父の歸りは遅かつた。
着て出た二重廻しには、砂粒のやうな笑が肩りついて居つた。
「さあさあ、口締りをして、お小夜、もう寝ろ、寝ろ！」
彼は叱責するやうに、まだ長火鉢のわきに坐つてゐる伯母に命じた。
春吉は、身内に廻る酔がすこしづつ心臓の鼓動を昂めて行くのを感じたほど、快い気分になつてゐた。飯をしまつて、伯母のあとに、風呂をもらつてゐるので、富子は座を外してゐた。
「おあんさん、降つて来ただけえ？」
湯上りの、てかてかした顔を、兄の方へむけて、すこし舌たるといふ調で春吉の母親は訊ねた。
伯父は、春吉の側に、残りすくなになつて立つてゐる一升壺や、チャブ臺の上の食ひ荒らし

せてゐた。ゆくゆくは、子供のない夫婦仲に、美子にするつもりらしく、自分の稼業の醫術を習はせようとつとめた。春吉の母が、現在の田舎のある百姓家にかたづけられたのは彼が伯父と外りが合はずに、東京へ飛び出して、そこから、ある恩人の世話でアメリカへ渡つてしまつたあとのことであつた。彼女は、北上川の食ひ百姓村に、北國の風として、若い後継者があれば、主人夫婦に隠居のやうに、全然家事に干渉しないといふ習慣上、良人と二人で村役場の前に、雜貨や食物や酒類などを商つてゐた。ところが、田舎で酒を商ふことは、切實に靴を踏み入れた客を相手に、熱燗のコップ酒を酌してやることだつた。勢ひ、酒の上からの客と店主の間の應酬が起つて、酒の手がのぼると同時に、店の商品は燻燻や草鞋を賣るやうに簡單なものではなくなつて来た。村での噂は、彼女は、自分の店の酒に泥酔して、いろいろな男と酒飲み友達となつた、といふのだつた。至極御仁良の、彼女の良人も、つい黙つて引込んでゐるわけには行かなくなつて、たうとう義兄のところへ相談しに来た。
「酒を店さきに置いて、田舎の風習がどうしてもさうでなければ酒が賣れんとなら、いつそ、

た者などを、尖つた眼で睨め廻して、病氣あがりらしい弛んだ頬の皮をひくひく云はして居つたが、妹の間に對して、無愛想に、
「ふむ。」
と答へたきり、あとは、唇を唇の中へ埋めて、投げばなしてある春吉の敷島の袋から、一本抜いて、火の氣のない火鉢の灰を掻き立てた。
「伯父さん、いかがです、一杯、御寒う御座いましたらうに。」
春吉は、あらたまつて、盃を差した。
「俺は飲まねえ。お小夜、その壺かたづけしてまへ。あればいつまでも飲むんだから、この野郎は。」
不興げに、伯父はさう云つて、あらためて春吉の胡坐をかけた姿を、親しみのない眼付でにらみつけた。
「いや、僕は今夜は酔はして戴きたいんですが、伯父さん！」
「もう、酒はやめろ、飲むなら料理屋なりどこさなり行つて、年中になるほど飲め。」
「ですが、折角、かうやつてお母つさんに御會ひしたんですしね、僕の歸休もあつたんですから、一升位はいいでせう。まあ、さう被仰らず

「伯父さん、いつしよになつてやびをわけて下さいな。——どうです。たつた一杯。」
 春吉は、すこしつこくなつて、盃をすすめた。
 「飲まねえちたらわからねえやつだな、貴様も。」
 彼はそりの高い鼻を、つんと上へむけて、草の煙を吐いた。彼の視角の中にはひつた、伯母と春吉の母親とは、云ひ合はしたやうに顔をお向けた。
 「すんきつ、貴様俺の家を酒屋だと思つてるか？ この前、アメリカから歸つた當座のやうに、貴様はこの伯父を馬鹿にしに來たんだらう？——よし、俺も飲む。飲んですこし話がある！」
 半分ばかりともつた數滴を、ずぶりと灰の中へ埋めて、やにはに、春吉の手から、銀子をひつたくと、彼は罵だらけな顔をあんぐりあいて、ありつたけの酒をこぼこぼと口の中へ漉ぎ込んだ。春吉は、半ば笑ひながら、伯父の衝動的な行爲を眺めてゐた。飲み終ると、伯父は、はげしく吐込んで、いくどか半巾を出して唾を吐いた。
 「伯母さん、もう一本！」

と、春吉の聲をさへきつて、伯父は、威丈高になつた。
 「つけんな！ 酒はこんで深山だ。——親子揃ひも揃つて俺を侮辱しやがる。」
 「ごくりと喉を鳴らしてさう云つたかと思ふと、彼は聞きなほつて、春吉の方をむいて、
 「俺は、お前がアメリカへ行くととき渡米費用を出したのは、俺が悪かつた。いま改めて、謝す。」
 「そりや、伯父さんから別別は戴いたには戴いたんですけど、旅費は大抵増富さんに出して戴いたんですから……」
 「なにしろ、俺の出した百圓はアメリカへ渡る旅費になつたらう？」
 伯父は、眼の縁をぼつと縋らめながら、そろそろ醉の暗んだ理窟を云ひはじめた。春吉は、またかと思つて横をむいた。

八

「席の上から、御前をとりあげたなア、誰だと思ふ！ 貴様は、貴様の今日あるのは、誰の御蔭だと考へるのだ？ だから、俺は、貴様のやうな社會主義者をわざわざアメリカくんたりまで行つて推へさせた、俺の罪を、あらためて返した。」

「そりや、伯父さん、無理です。伯父さんは、すこしばかりの財産とか、金とかいふもの以外に、人間の價値のおわかりにならん方ですから申上げますが、僕には、そんなものはんで眼中にないんです！ ちつとばかりの池津會社の株券がなんです？ 次の時代にあ、そんなものは紙屑になつてるかも知れんぢやないですか！ それから恨んやと、いやにしちくどく仰有るけれど、僕は、ここに居る母が勝手に生みつけて、貴方の手に頼んだ者の生長して今日になつたのであつて、なにも僕から明にしてくれと申上げて約束付で生れたんぢやないではありませんか。貴方にして、自分の爲めにするところがあつてか、一時の玩弄物としてか、僕を引取つたに過ぎないと思ひます。僕は——僕は九つの時、貴方の家を飛び出したことがありました。僕の天性と思つた學問に、貴方はどれほどの同情と援助とを下すつたか？——正直を云ふと、僕には、親も伯父も親戚もないんです。僕の志すことは、たつた一つで、それがためには、足手纏ひになる家族なんてものは、どうでもいいんですよ。もつと、申しませ、僕は、伯父さんの前ですから、今まで黙つ、仰有る通りに、天下に謝す。貴様のためにも、貴様のお袋のためにも、俺は、なぜ貴様などに百圓の金を呉れたり、中學へなど通はせたかと、いまになつて後悔しとる。墨屋の銀鬼は墨屋にして置けばよかつたのだ。」
 伯父の紋切型の口調は、春吉に、「河北新報」といふ新聞の社説を懐ひ出させた。
 「そりや、伯父さんの被仰ることはわかつてゐます。——つまり、僕が、世間の奴らのやうに御恩返しが出来ないからなんではせう？ いつまでも、こんな境遇にぶらぶらしてゐて、またまた、御厄介にならうとして來たためではせう？」
 「そんでねえ、貴様の性根が腐つてるからだ。」
 「いいや金の話でせう？ ハワイへ出稼ぎに行つて百圓のやうに二千と三千とまとまつた金をもつて歸つて、土地でも小買ひにして、新歸朝者はちがつたもんだ、なんて世間には言はれたためではせう？」
 「あにが金だ！ 生意氣云ふと、敵りつけるぞ。」
 彼は拳を振つて、甥の方へじりじりと詰め寄つた。
 「よろしい、御殿りなさい。決して御手向ひは

「馬鹿になつてゐたんですが、そんなことを仰有ると、回復のつかぬことになりやしないかと思ひます……」
 伯父は、聞かぬふりをして、火箸で灰の上へなにやら文字らしいものを書いては消し、消しては書いてゐたが、春吉がここまで云ふと、かちりと火箸を捨てて、血走つた眼で、彼をちつと睨めながら、
 「非國民！」
 と咆へつて、いきなり彼の髪を掻き撚るなり、下げた頭に、薪を割るやうな音を立てて、骨ばつた拳をつづけさまに打當てた。甥は笑ひながら、伯父の拳を受けてゐたが、そのうちに、拳の痛みよりも、悲しい氣持に襲はれて自然と、涙が滲み出て來るのを感じた。伯母が、駆け寄つて無理々々伯父を奥の間へ連れて行つた。
 「まあ、なにごとが起つたんでせう？」
 春吉の妻は、補袴一枚の姿で、次ぎの間から首を出した。
 「もつと御殿りなさい！ 伯父さん！ 伯父さんには、決して抵抗しませんから！ もつと御殿りなさい！ そんなことで參るやうな僕でもないですよ。」
 春吉は、ぼろぼろこぼれ出る涙を拭ひなが

ら、狂人のやうな聲を立てた。

「あんたも、酔つてらつしやるとき、こんなこと仰るちふふことがあるもんですか！」

伯母のおろおろ聲が、伯父の體と押しあひながら奥の八疊に、寒さうにひびいた。

「よし、出る！ おい、支度をしろ。絶縁された家になんぞ、一刺もあつてもんか。」

春吉は、突然、胸のまん中を突刺したやうに憤怒に驅られて、ついと立ちあがつて、富子に命じた。

「こんな天氣に、出るも引くもあんめいッちゃや。」

母親は、あわてて春吉の手を取つて引留めた。

「なに、僕は、永久に仙臺とは用がないんだ。こんな牢獄のやうな家へ、誰が二度と足踏みをするもんか！」

云ひ捨てて、彼は、納戸の三疊へはひつた。しばらく経つて、微をしつかりと背負つた富子連れて、彼が、伯父の門口を滑り出ると、あとから、小聲で彼を呼び留める者があつたので振りむくと、突に濡れきつた母親が、軒燈の蔭に彼を待つてゐるのだつた。彼女は、鼻にかかつた聲で、なにか、くどくど云ひながら、無

理に息子の手に五圓紙幣を一枚握らせるのだつた。

「荷物は、明日ホテルから取りよこさせます。おつかさん、早く在へ御座んなさい！」

春吉は、振り返りながらも、せはしく降りしきる雲が、中村醫院と書いてある、燭力の弱い軒燈の陰影と共に、見る間に彼女の姿を呑んでしまふのを見た。

「これで完全なる非國民になつたわけだ、な……」

彼は、淋しさうにかう云つて、くらい空を振り仰いだ。

太陽の黒點

太田爲吉は、跛であつた。

労働者に生れつた彼は、組合幹部の徽章をぶら下げたり、轉轍手の赤旗を振つたりすることが出来なかつたために、三種の職業に従事してゐた。もつとはつきり云へば、毎日三種の安價な商品を、三人のちがつた行商人として賣つて歩いた、といふ方が正しいかも知れない。つまり、普通の家庭で朝の新聞を開く暇まで納豆を商ひ、午前中は學齡未満の兒童を顧客にして鉛を賣り、電燈のつく前後にゆでだし饅頭の車を曳くといふことが、それであつた。

この三種の商賣は、それを商ふ方法に確乎とした分岐線のない小商ひにちがひなかつたが、それでも、一人の脚の不自由な人間が、一日に三人を兼ねるに十分なほどの商法上の約束と變化があつた。爲吉は長いことこの仕事をづづけて来た。納豆は、原價二十五錢の十本が、辛子だけ自分持ちで五十錢になつた。こ

れは問屋で配達してくれる代りに残品は引取らない。鉛は、氣おれな子供相手の商品なので、二十錢も仕入れると、まるまる賣れて、三十錢と儲けられない。饅頭の方は、車、原料、鈴まで向う持ちで賣の子一枚に三十玉の、三枚以上を捌くことは不可能である。一玉の純益は五圓、とんとんに行つて、三枚四十五圓以上の純益はなかつた。そこで、彼は、朝は聲を資本にせいぜい二十錢ほどの利益を得、晝までには鉛と聲を資本に二十錢の賣り上げを見、晩は運が良くて五十錢近くの儲けを——都合、一日、約一圓弱の収入をもつて暮らしてゐるのである。

この蠅眼鏡で見なければ見えないやうな収入をもたらした労働の合間には、彼は、そのために郷里の田を失つたほど一生の邪魔物になつてゐる左の脚を曳摺つて古新聞の一面に貼つてある家の中を絶えず歩き廻る習慣を持つてゐた。

最初の合理的な目的が、寒さと風を防ぐこと

にあつた家の大部分を保護してゐる古新聞紙は、次第に、爲吉の生涯に重大な役割を演ずることとなつて、今は更らに合理的な第二の目的を帯びるやうになつてゐた。つまり、習慣の屋内散歩の暇に、退屈しのぎに讀んだのが、いつの間にかそれを讀むことが日課になり、しまひには、それらの新聞紙は、人生の研究資料——爲吉の社會觀となつてしまつたのである。新しい新聞を讀むことの出来ない彼は、換、障子、壁板、便所、押入、天井の蟻ひなく貼りこられた、三四年來の古新聞を讀んで世の中のことを知つた。

そんなわけから、爲吉の頭脳には、ウイタミンAといふものも、労働争議といふことも、社會主義といふことも、あまり明確には系列されてゐない、むしろエレメンタルな知識體系としてもうろうとした存在を營んでゐた。

「清朝遂に絶ゆ」といふミダシの下には、どうして支那の先代の王さまが、馮玉祥といふ男のために皇位を御奪されて、一平民となつたかが書かれてあつた。さうかと思ふと、「防火宣傳の映畫」を見て放火をした子供もあつた。「五年目で出獄其日また泥棒」とか「警官廿餘名の怠業」といふ記事は別な新聞にある天

文學の講話と略同じ程度に、彼をして人類生活の複雑なことを思はしめた。皮肉なことには、いつも細君の枕元には「誘惑される女」があり、自分の寝る場所には「生きた地獄」といふ記事があつた。

「震災のどきどきに妻を突き殺す」とか、「不景気に祟られて親子五人の身投げ」とか、「争議遂に暴動化する」とか、「血に飢えた鼠ども」とか、「名古屋の八人斬り」とか——かういふもの凄惨な事件が、大小縦横の活字で、彼の視力の達する範囲に、まるで彼一人に犯罪の秘密と記録を託して置くかの如く潜伏してゐるのが、彼の家の構造であつた。煤けて、細かい記事の大部分は不明になつてゐるが、今では、どの釘の傍にはどんな戦争があり、どの壁板にはどんな學説、どんな教人があつたか、場所と期日と出来事とが、學者の頭に海藻や昆蟲の名が泛んで来るよりも速く懐ひ出されたのである。わけても、「東京朝日」の次のやうな記事は、讀むごとに、彼の體を、互きい機關車の側を通つたときのやうに非常な熱をもつて温めずには置かなかつた。

「……小兒國有の理想の一端がはしくも此處に面白く現はれて来たのである。僕は

ほど、食事は一家の重大な興味であつたが、その最も華やかで、幸福であるべき場合に、彼と彼の妻とは、ががつした小氣味良いほど動物的な食慾に支配され、一杯でも粥をよけいに吸らうと箸を握つて喧嘩してゐる三人の子供達を、上からちつと見おろしながら、すこぶる絶望的な、涙ぐましい微笑を交換するであつた。

それから、産兒の問題である。現に、彼の妻の麗子は、人間の女として孕み得る責任数を超過して、十歳を頭にした三人の子供達と一人の乳呑兒と、おまけにもう一人懐妊してから五ヶ月にもなるらしいのだ。

二人 東京の近郊でも、彼の棲んでゐる町ほど不思議な町はなからう。その町といふのは、高い結土の崖と、荒れはてた無住寺の境内とに挟まれた、恐ろしく窮屈な谷あひにあつて、戸数はすうつと前から十三軒しかなかつた。

將來のソギエトの小兒は總てあんな工合に養はれて行くのではないかと考へて見た。幼兒と十歳未満の兒童と十歳以上の青年期に入るまでの少年少女が極めて面白い工合に按配され、共同の家屋、共同の食堂、共同の庭園に樂しく生活しつづつ、労働の出来るものは養蜂、養蠶、耕作又は花園の手入、卸物、手工等に至る迄自分に一番趣味のあり可能性のあるものをやらせる。労働の遊戯化は經營者の特に意を用ひた處であつて労働は決して苦しい仕事でない、舞踏や唱歌と同じやうに人生になくてならぬ一種の享樂だといふことを道德的に説かずして實地にやらせてゐる。……資本主義の諸國家の家族制度は餘りに個人主義的(家族を單位とする、従つて相続財産を中心とする)に出来上つてゐるのであるから擴充せられた規律ある共同生活を行ふのは下手である。それに拘らず青年が一定の年齢に達すれば労働者にせられたり兵隊にとられたりする。其處に個人主義的に教育された労働者兵隊が共同奉仕をするの大變な無理が出来る。従つて爲政者はどうしてもその二元的な精神を調和さすため

た。子供を一人生むごとに彼女の高い鼻は益々高く、益々間投けて見えた。次には、子供の教育であつた。善良なる國民の一人として、爲吉は子供達の普通教育に對する父としての義務は痛切に感じてゐた。しかし、實際のところ、長女ひさ子と長男の力一は、彼の意志から通學してゐるのではなく、學校で慈善的に通學させてゐるのである。筆も紙も讀本も、みな教師が教員會議に提出した事情報告に基いて、學校の資金のうちから給與された。

この記事は、續き物らしく、貼附けられてある三疊の間にも、その他家のどの隅にも「十三」章としかなく、題は「ソギエト露西亞で感じたこと」としてあつて、その下に「黒田禮二」といふ人間の名が記してあつた。恐らくそれは新聞社の通信員とでもいふ人の名前らしく思はれたが、もし、その人と何かの機會で爲吉が出遇すやうなことがあつたとすれば、彼は、その文章の一字一句まで書いた當人よりも良く讀んじてゐることによつて、黒田禮二氏を驚かすことが出来たであらう。

金を納めてある人間の住宅区域が江戸時代の古い骨格を埋めた面積よりも遙かに狭い、と感づくものなどは皆無であつたのである。墓地を五町も迂回した、その實、この町からは直徑四五十間の距離まで、瓦斯や水道や電話が来てゐるのに、谷あひへ追ひつめられたこの種族だけは、平氣でさういふ生活必需品を要求しようとは思はないのだ。

一方、岸の上には、太い起重機のやうな電柱が突立つてゐて、それから数條の電線が、小さな町を宙に横み上げるやうに、谷底の十三軒の屋根へ手を伸ばしてゐた。その岸のむかう側には、日あたりの良いならかな傾斜に、ラヂオを曳いた瓦葺の住宅や、ピアノの鳴りひびくパンガローなども隠見するが、それらは岸の下とは正反對の方向——文明の方をむいてゐるので、町とは外圍ほどにも關係がない、町には、岸のむかうを見わたすほど高い建築もなかつたし、それに、この住民は、物産等以上に高いところを瞻上げるやうな習慣を持たなかつたのである。

そこで、たつた一つある共同井戸はいつも同じ粘土色に濁つてゐ、廣場から蒸れ出す水蒸氣は殺人的であり、各戸の便所から發散する排

い、業、業、業の勢力圏内に、辛うじて自分だけの職業を固守することによつて、その存在を認められるに過ぎなかつた。この町でも、やはり数は勢力であつた。いつも窓を半分開けて何かしてゐる栗山といふ男は、ときどき外へ出て行つては、ひどく酔つぱらつて歸つた。夜番の爺さんは夜になるとこつそりほかの町へ橋を打ちに出た。爲吉は爲吉で、被褥自の生活方法があり、メリヤス工場は無類に同じ型の腰巻とズボンを織ひ出してゐたのである。

遺物の臭氣はあらゆる食物に加味し、震災以後牛小舎を建てなほして六軒に分割した爲吉等の長屋には、永遠に牛の糞の臭が惡甘く漂つてゐた。

十三軒のうちの一軒は、町の入口のメリヤス工場であつて、煤つぼけた不眠症のガラス窓の下には、毎日十四五人の女工が、柿の帯のやうに頭を鳩めて、どこから注文があるのか、誰も穿きさうにもないほど大きいズボンや、ダリヤ色の都服などを無限に製造してゐた。工場に向ひは、鼻紙や懐爐やサックを商ふ紙細工のやうな煙草屋であつた。この二軒の入口を滑る梯子に、寺の突端から折れて来る路は、全然道路といふものの性質を失つて、軍隊の機動演習に踏み固められた田圃のやうに、必要のある地點へ最近距離をめぐり分岐してゐるだけで、桃色の消毒紙の散つてゐる三軒の藝者屋の戸口と、筋向ひの、無住寺の境内へが、どう返しの抜け孔を持つてゐる梅鉢といふ料理屋と、廣場の隅の井戸端から牛舎を建てなほした六軒長屋へ通じてゐるに過ぎなかつた。

六軒長屋は、箱屋と同様してゐる常習津の師匠なるもの家からはじまつて、爲吉の古新聞で張つてある家で終つてゐる。この兩極の間

飯、人間の糞、魚の頭、大抵の尻尾、草の葉のきれなどといふ汚い廢棄物が、女の長い髪に毛に巻き止められたままになつたり、如蜘蛛の死骸と同じ色に腐つたりしてゐても、誰一人としてそれを掃き流さうと試みた前例がない。土管はところどころちがはぐになつて、そこからしみ微つた汚水は、地層を腐蝕して床下に侵入し、息の寒いさうな臭氣の中にあらゆる種類の蟲けらを培養してゐるのである。次に、この町はたつた一つの共有地とも云ふべき廣場であるが、そこへ立てかけられた高低十組の物干柱には、恥も外聞もなく町のどこからでも見とほしのつくやうに、一見用をひそめさせるやうな色彩の不潔な、露骨に隣り合はせた、いゝ、や、道化じみた男の、などが毎日空へ高くと陳列される。それから、この物干柱に圍まれた廣場には、雨が降らないときは、どこから集まるともなく、あらゆる顔つきの子供達が、朝から晩まで操鳥の群よりも賑々しくむらがり立つてゐる。それらの子供達は、ただに廣場を排洩物や紙屑や紙屑などで蹴すだけではない、彼等獨特の實社會の模倣を行ひ、洋傘ごっこ、競争ごっこ、探偵ごっこ、めんこ、賭け獨樂、(販妻ごっこ)にいたるまで、ことごとく

に、いつも窓を半分開けて何かしてゐる栗山といふ男の家と、夜警の爺さんとその娘の家と、長町の師匠なるもの家と、爲吉と隣り合つたおちやら姐さんの家との四軒が挟まれてあつた。これらの長屋から奥へ墓地寄りに、土壁一尺ほどの優越感を誇つてぼつんと建て離されてある平家が、或る請負師の妾をしてゐる「とんぼ」如さんの家であつた。メリヤス工場、煙草屋、三軒の藝者屋、あいまいな料理屋、六軒長屋、一軒のいもたや——總じて十三軒。このほかに、爲吉の長屋と隣つて、岸の下に設けられた鶏小舎を除いては、遺棄物といふものは絶対になかつた。この統計が示すとほり、岸の下の町は、藝者屋町としてはあまりにみすばらしく、それかと云つて、貧民窟にしては地價や家賃の高過ぎる——謂はば、そのどちらよりも劣つてゐる、最下級の藝者屋町——淫賣窟であつたのである。

この淫賣窟で、實際に淫賣窟なみの職業に従事してゐたのは、一梅鉢の女將と想へ、藝者、三軒の藝者屋の女達が七八人、それに、名義上、常習津とか長町とかの職業を出して男の集會所を開いてゐる「御師匠さん」達や、爲吉の隣りのおちやら姐さんなど、——都合で十三四人はあつた。そのほかの塵氣な連中は、この町し

人間の世の浅ましさを演じつくし、その上に、内輪もめで家の藪や他人の軒下から大聲で悪意をつきあふのである。彼等は仲間うちで、めいめいの袴を奨励しあふやうな道徳を尊重し、陳さへあれば誰の物でも掻つ拂つて、墓地の奥や慶寺の廊下へ逃げ込んで分配し合ふ。警察権に見捨てられたやうなこの町では、深夜が夜の引明けまでも、男女の談話喧嘩があらうと、酔漢のごたくさがあらうと、三味線を鳴らさうと花札を引かうと、絶対にそのうちうちの勝手であつた。もちろん、刑事は巧みにさういふ時間以外のときしか、この町へ入つて来なかつた。師匠達の聲き鳴らす三味線や、料理屋藝者屋の亂氣騒ぎや、子供達の不絶の喧嘩などは、岸と寺の境内とに三方を塞がれたこの町に反響し合つて、いつも何かの騒々しい取引に聲を張りあげたり、どうにかして人の注意を惹かうとして手當り次第に器物を鳴らしたりしてゐる、場末の市場のやうな感じを與へた。

どんなに長屋の亞鉛屋根が破損し、皆が塵埃捨場を荒さうと、どんなに危険なガラス屑が廣場に散らばつてゐようと、どれほど「梅鉢屋」の前に、いゝ、紙が落ちてゐようと、この町の女達から、化粧の本能だけは奪ひ去ることが出来

なかつた。だが、化粧といふことは、この町では衛生と婦人美を無視した、文字通り他人を一時にささむ意味の化粧に過ぎなかつた。それは、大概の場合、銭湯で三日前に結つた髪へ更らに臭い油を加けることであり、髪から上だけ白く、あまりにも白く塗り立て、脂ぎつた足や、まつ黒な爪の變化した手は、全く自分と關係のない誰かの肉體でもあるかのやうに、自然のままに放置してある種類の美容術であつた。それと同様に、この女達は、半襟と上衣一枚だけは比較的高價な物を着てゐたが、襦袢腰巻足袋履物などは、ほとんど實用性をさへ失ひかけた品物で間に合はせた。同じことが、彼等の會話、食物、流行、支出收入、心理生活のすべてにも行なつてゐた。そこで、性質上、清潔で派手であるべきこの町から、いろいろ汚らしい裏面が暴露した。「栞屋」の二階には、梅毒第三期の顔死のとも奴が毎日女將に、
「死ねの待たれてゐた。」
「梅毒」の抱への秀きちといふ藝妓は、何かの罪物のために、決して電燈をともしずには、しなかつた。「中村屋」の女將は、首に出来てゐるぐりぐりを隠さうとして年中半巾を巻いてゐた。顔面に、女達の不節制の祟つた例として、

て、とんぼ姐さんの息子は癡呆症で、鰹口のやうな唇から留度なく涎を流してゐた。どこから来るのか、新しい田舎女が来たと思ふと、半月ほどで忽ち町の化粧法を覚え込み、眼薬を買つたり、洗滌劑を入れた繻を下げて病院通ひをしたりした。

太田爲吉は、この十三軒の町を人間の創作し得る最極限の地獄だと思つてゐた。しかし、人間は、どんな地獄の底に於いても何等かの方法で経済生活を営んでゐるものだ。爲吉と彼の一家は、この地獄のどんづまりの牛小舎を建てなほした長屋に、一年半以上の家賃の滞納を來してゐたのである。——私達は、そこで、爲吉のことと前後して、屋の下の鶏小舎のことを語りたい。それには、どの町にもある鶏小舎といふものでさへも、この町では一つの不思議な存在であるといふ事實を、私達は見送したくないのだ。

第一、この小舎は爲吉の、三疊のつい窓の下にあつた。

三

輸入されてから、町の景気がぐつと引立つやうに見えた。關係のないやうなことだつたが、爲吉の家の夫婦喧嘩でさへも、重心の置き處が、鶏小舎の方へ幾分移つて行つた。家賃といふものが、どんなに人間の社會へ貢獻するところの多いものであるかは、飼主の姐さんが急に早起きをするやうになつたり、サツクを賣る煙草屋に「うみだての卵あり」と書いて卵の所在地とは反對の方を指さしてゐる指標が出たり、「梅鉢」へ御用を聞きに来る鳥屋が鶏卵の値下げを斷行したりするやうな、有機的な變化よりも、むしろ、町に漂はすところの牧歌的な効果にあつたといふべきであらう。飽食した雄鶏が、鶏冠を振り立てながら、日ねもす音響機西洋音楽のやうな音吐で、騒々しい岸の下の町へ、豊饒と幸福の歌を唄ひかける——それを聞いてゐて、心から伸び伸びとする村落的情緒にこそそれぬものがない。更らに又、雌鶏のくらくらく、くらつく、こう、こう、といふ家族的な聲を聞いてゐると何かの聯想からどんな無頼漢でも自分を生んだ母親を懐ひ出すにはゐられない。町が町であつただけにかういふ微妙なニュアンスはむしろ途方もない錯誤としか思はれなかつたが、おちやら姐さんでさへも淫賣業者以外の

何かの家庭的な本能を持つてゐることを證明しただけでも、それ相應の價値があつたかも知れない。「うみだての卵」と小さな看板を揮毫したお禮として、爲吉一家が大小四つの卵を寄與され、それらを四日ばかりで食べたことなども、恐らくはその餘徳の一つであらう。

二三ヶ月のうちに、幸福はレグホンの一夫三妻を見舞ひ、小舎には眞綿の團塊のやうにふくふくした、歩行するのが不思議に思はれたほど玩具の雛つ子に似た、七羽の生きた小さな鶏が姿をあらはした。雛つ子のどれがどの母親の直系であるかは判明しなかつたが、いづれも兩親の茶柄に白まだらを遺傳してゐて、鶏としての立派な將來が彼等に約束されてゐた。それらを孵すまでの姐さんの苦心と、暫し終へてからの助産婦的維持とは、最も良く爲吉夫婦によつて耐へ忍ばれた。彼女は留度なく話すのである、まるで話してしまはなれど忘れてしまふ懼れを感じてゐるやうに。——もちろん、泥水稼業にはうんざりしてゐた。この七羽の雛つ子が七七の四十九羽に殖えて見なさい、大小五十二羽の雛を引率して、お天道さまがどこから上つてどこへ落ちるか見定めつつやうな原っぱの一軒屋を借りなきあらぬ、さうなりや

ろぼろな強鉛板と、姉妹のやうにたるみきつた金網とを結びつけ、單に家高の脱出を防ぐといふだけの原始目的をもつて設けられた小舎で、その創造主は、その小舎のやうに頭の單純な、爲吉とは壁一重障りの、年増藝妓のおちやら姐さんであつた。

それが出来あがつた當座は、金網も強鉛も新しく、姐さんの評判もよかつた。

「あれがうまく行けば、下手な情人など持たんでもいいわけだから。」

彼女のだらしなさを知り抜いてゐる爲吉でさへもその當時は隣家へとかねほどの聲でかう雛子へ語つたものであつた。もちろん、かういふ利殖の方法が、突如、町の傳統を破つておちやら姐さんの頭から發明されたについての驚嘆の裏には、この町の反語として、彼女が黒ん坊のやうに黒く、年配も悪あがきをし出す頃合ひの年増である事に、どうも男に縁がうすくて、いつも旦那に逃げられる女なのだから、といふ意味も潜めてあつた。

鶏はレグホンといふ種類であつた。群でも生やしてゐるやうな、遅しい一羽の雄鶏と、白い肉感的な三羽の雌鶏——營利事業となるとうしても一夫多妻でなければいけない、それらが

差し向き爲吉さんに小舎の掃除やら何かを頼ひして、毎日オムレツにチキンカツだけ食べてゐられる、——かういふ話に聞き惚れてゐると、雛子の洗濯石鹼がひとりで盥の水へ落けてしまふのであつた。

しかし、鶏の運命といふものは、人間が禽獸の一部を家畜化して以來、人間の社會組織と密接な關係のあることは、おちやら姐さん以外の大概の人が知つてゐる事實であつた。雛つ子が生れて、七七四十九羽どころか、野良鶏のために二羽誘拐された頃から、何といふわけもなくおちやら姐さんの本職の方が、雛はなくなつてしまつた。それには世の中全體が幾分不景氣になつたといふこともある。現に、爲吉でさへも毎朝納豆が六本しか賣れなくなつてゐた。それにしても、姐さんがあまりあけすけと泥水稼業を覗つたことが、檢番の方へひびいたといふこともあつたらしい。さうなると彼女もべんべんと鶏ばかり可愛がつては居られなくなつた。姐さんが躍起となつて稼ぎ出してから今度は、ほんたうに世の中の方で不景氣になり出した。世の中が不景氣になるといふことは、町の女達にとつては寺の角を曲つて二三町先の檢番から形式だけでも来る迎ひの者が來な

三疊の窓から、この光景を眺めてゐた爲吉は、「くそッ！」と叫んで、いきなりおちやら姐さんの茶の間と隣り合つた壁板へ細長い體をどしんと打ちつけた。壁のむかう側には、目ざましと茶壺とが長火鉢の上へ轉がり落ちた。男と女の金切聲に對して、彼は、壁越しに、「鶏を見ろ！」と罵り返した。

翌朝、廣場の隅には、又、羽根枕を毀したほどの雄鶏の羽毛が散らばつてゐた。最後に生き残つた雄鶏は、それ以来、急に老衰して中風に罹つた人間のやうに絶えず體中にかすかな痙攣を見せ、いつも白い眼を睨つてゐるので、眠つてゐるのか死んでゐるかわからなかつた。しかし、たしかに生きてゐたことは事實であつた。何となれば、夜の六七時頃になると、彼は突然怯えたやうに眼を睨いて、血を吐くやうな割を告げたのだから。

この憫むべき家禽と、人間太田爲吉との間には、別に直接の有機的な關係がある筈はなかつた。

しかし、最近、爲吉は、世界で一番よく自分に似てゐるものはその中風患者のやうな、ひとりぼつちの雄鶏であるやうな気がしてならなかつた。

客に對して物を賣つたり、問屋の番頭と話したりしてゐながら、彼は、よく自分のみすばらしい、左の脚を曳指つた姿を心に描いた。さういふ空想は、いちじるしく彼を臆病にするやうだつた。尤もその姿は、決して、鶏ほどにみじめなものではなかつたが、居酒屋の壁のやうに褪せた色の袴に包まれ、頭に箱を吊し、草履のやうにすりへつた下駄を穿き、いつも何か口走りながら町を歩き廻つてゐる自分のどこかに、あの鶏と共通した本質的な何物かがあるやうな悲哀に打たれるのであつた。

實際のところその雄鶏よりも彼は淋しかつたのだ。ただ彼に於てはほんたうに淋しい人間のやうに、それを口に出して云はなかつただけである。

單調な一日の生活を調べて見ると、よくそれがわかつた。――長屋で高く鳴る時と云つては長町の御師匠さんの家の柱の一つあるだけだつた。毎朝、それが、二軒むかうから、四つ

ことがある。ソギエト共和国の子供國有政策を知つてゐる、彼が！

ほんのすこし前までは、生命のない古ぼけた屋や、追害的な門の連続であつた町へ、今度は爲吉は全く新鮮な人生觀で眼を配るのである。この場合の心理は、野犬撲殺人が犬のゐさうな横町や露地や藪つばい廣場などを物色してゐると大差はない。彼は、小さな権木で鉦をかんかん叩いて、一種の狩獵的本能から昔くその邊を廻つた。もしこのとき、小さな顔が、町のどこかの隅からちらりとでも露はれたなら、彼は急に活氣づいて、「サノサ節」や「ストン節」を大聲で唄つた。

「おくれ！」

「頂戴な！」

子供達は、嚴密に彼の職業と人柄を検査したあとで、そつと手を出すのであつた。一本三厘五毛の小旗は、たしかに彼等の購買慾をそそがずには置かなかつた。二人が三人になる。爲吉は、賣り出すと、むやみに大聲でたはけた歌を唄つた。卑猥な歌――十三軒の町はその學校みたやうなものであつたのだ。子供達は、赤い小旗を振りながら、工場の罷業團のやうに、猥褻な歌を唄ふ男についてまはつた。新しい参加者

打つと、爲吉は櫻木のやうに、がわりと跳ね起きた。納豆は、夜前に會社から届けてくれたのを、甕子とてんでの籠へ分けて、いつでも持つて行けるやうにしてあつた。籠を洗ふと直ちにその籠を頭へぶら下げた。家を出しなげに、疲れはてて腐つたやうに眠つてゐる妻を、子供達の眼を醒さぬやうに揺り起した。町へ出ると、ぼつぼつ割引電車を利用する人達が、淡い電燈の下を歩いてゐた。納豆を賣り込むのは、割引電車を利用する家庭に限つた。――職工や、安月給取りや、電車の車掌の家族。かうしてもの十二町も歩いた頃には、町の表面から霧がとれて、すべての物にくつきりした光と影が浮き出し、提つて、納豆といふ商品にもあかあかと幻滅的な日光が照りつけるのである。彼は疲れて、自分の家へ歸つた。それと前後して、いつも幾らか彼よりも賣高の勢い甕子が、ほかの町から鼻を赤くして歸つて来た。子供達はまだ眠つてゐる。だが、彼等の朝飯はまだはじまるのではない。爲吉は船代を差引いた金を残らず彼女へ渡した。渡された金と、自分の方の賣り上げとを、掌の鞆の中へ大事に疊んで、甕子は白米屋へ行くのである。夫婦は寺の角まで同行して、そこで別れた。爲吉の頭には、今度は船

があるごとに、子供達は獨自の宣傳で互に勧誘し合つた。船は子供達が朝飯を終へ、最初の小遣をねだつた一時間と、悲しくとが書入れどきであつた。しかし、非常に飽きの早い彼等はいつも同じ船屋から同じ船を買ふことを拒否した。もし爲吉の方で、執拗に同じ區域をまはらうと主張したとすれば、彼は、「やア、いや、駄の馬鹿船い！」

「買つてやらないよウだ！」

と云ふやうな、腹立たしい非買同盟に出遇した。いつも區域を變へる必要があつた。

船が終ると、爲吉は、あらゆる商工業組織の節からふるひ落されたやうなそれらの銅貨を数へながら、頭のとつべんまで空腹を感じて家へ戻つた。家では妻が餉臺の前で待つてゐた。子供達は、遊びに出るものは出、學校へ行くものは行つてゐた。爲吉は、船和を長押の一番高い釘へ吊して食事にかかつた。あかるい、餉臺のむかうに、ばりばり漬物を噛み、賑々しく湯粥を吸る妻のすさまじい食慾を目撃してゐると、いつも彼は、そのあさましさと同時に、憎むべからざるものを憎んでゐる氣まづさを自覺した。

打つと、爲吉は櫻木のやうに、がわりと跳ね起きた。納豆は、夜前に會社から届けてくれたのを、甕子とてんでの籠へ分けて、いつでも持つて行けるやうにしてあつた。籠を洗ふと直ちにその籠を頭へぶら下げた。家を出しなげに、疲れはてて腐つたやうに眠つてゐる妻を、子供達の眼を醒さぬやうに揺り起した。町へ出ると、ぼつぼつ割引電車を利用する人達が、淡い電燈の下を歩いてゐた。納豆を賣り込むのは、割引電車を利用する家庭に限つた。――職工や、安月給取りや、電車の車掌の家族。かうしてもの十二町も歩いた頃には、町の表面から霧がとれて、すべての物にくつきりした光と影が浮き出し、提つて、納豆といふ商品にもあかあかと幻滅的な日光が照りつけるのである。彼は疲れて、自分の家へ歸つた。それと前後して、いつも幾らか彼よりも賣高の勢い甕子が、ほかの町から鼻を赤くして歸つて来た。子供達はまだ眠つてゐる。だが、彼等の朝飯はまだはじまるのではない。爲吉は船代を差引いた金を残らず彼女へ渡した。渡された金と、自分の方の賣り上げとを、掌の鞆の中へ大事に疊んで、甕子は白米屋へ行くのである。夫婦は寺の角まで同行して、そこで別れた。爲吉の頭には、今度は船

三時頃には、鐘え臭い、ひやりとした製菓會社の痛だらけな土間に立つてゐた。メリケン粉と水と機械力で、長い算盤を弾いてゐる會社は社是として、一玉の饅頭から、賣子と同じく五厘しか儲けないといふ利率の均等分配を誇つてゐたが、その實、個人賣子は一晩に五十玉とは賣り得ないところを、會社は、幾多な手を経て、瀑布のやうにこの機械廻を市民へ供給してゐたのだ。爲吉の藍色の手車は朝妻と同じ陰鬱な輪郭の、しかし今は黄昏の迫つた町を、繪まりのない舌のやうな鈴を鳴らして、低く遠くまでさまよつた。夜の七時頃會社の店先へ車を留めると、戦場では賣れ残りの分を控除して、一玉につき原價一錢五厘づつを請求した。戦場で擲つたあまりは、爲吉の全收入であつた。

一日の日光が收縮すると、労働者の慾望は先づ胃の腑の一點に集中される。彼は寺の角を曲るときから藥所で誰を刺んでゐる。姐の音を聞いた。途中で、乞食のやうな力一と留吉とが南京袋を抱へて、薪を拾つて歩くのに出遇すこともあつた。家族のものが、幽霊のやうにぼやけた影を投げながら、その癖、影の主はみなこちんと鼻の上へ硬まつて、熱心に彼の歸りを待つてゐることもあつた。赤ん坊が、どこかうす

間の宙間に、肺甲斐ない人生を罵倒するやうに泣きわめいてゐることもあつた。
「歸つたよ、——ほら、米代！」
もの賣り人の常として、町へ出てゐるときは、顔面筋肉の上だけでも樂天的に口軽くしようとする偽造心理から、まだ全く脱けきらぬ爲吉が、戸口でかう高らかに叫ぶと、忽ちそこには無数の小刻みな動作を凝らした歡聲があつた。父、母、子供達四人——家族はここにはじめて一日の最初の會見をするのだ。しかも、父親は米代を持つてゐた!

米屋へは五六町あつた。使ひはひき子の役である。もつと近間にも店があつたが、遠い方では、量もよかつたし、ときどきは子供に菓子や果物などをくれた。一家はひき子の歸りを待ちあぐむ。途中でこぼすといふ憂ひもある。誰か貧乏人に掠奪されるといふこともあつた。その間、子供達は、父親の命令で、いろいろな角度に缺けた食器類を母親の手から受け取つて、解臺の方へ運んで来る。石油罐で掃へた塵の中からは、町の四方から蒐集された燃料がいつばいにつまつてゐる。皆はひき子の顔が見えるまでは、不安を紛らはすために、いろいろに手足を動かす。米屋から家まで何分かかるか、母親

は時計がなくともちゃん時間を知つてゐた。……ひき子が来た。米、米が来たのだ! 爲吉の一家は、約束したやうに藥所の前へ集まる。ろくに磨がれぬ米が、釜の中へあけられる。その上へ點火するのは、爲吉の嚴かな役目であつた。この家では、一個一錢もするマツチを、好奇心に富んだ子供達に玩具にさせることは許されぬ。籠の中には杉の葉木屑古下駄、バナナの皮、ボール紙などが不規則な火焰をあげる。それらは大部分、火にならずに家中へ黒い白い怪物となつてとぐろを巻くのだ。次男の留吉が、籠の口へ小さな手を解してせがむ。
「ごはん、まだア? 早くよう、母ちゃん。」
すると、いつもきまりきつた教訓をもつて、長男が、弟をたしなめた。
「先きにお欄を取つて……それから。」
欄は末女の赤ん坊へ母の乳代りに與へるのだ。雙子は三人目の子供から乳がばつたり留まつてゐた。粥が茶から搾り取られると、次に、姐の上の歯磨きか、一握みの鹽といつしよにふり撒かれ、更らに朝の二倍強の水が釜の中へ注ぎ込まれた。それがふつふつと沸騰するまで、爲吉は、簡易食堂で食はせる。白っぽい粒

の揃つた焚き立ての、井飯や、もつと上等な、黒い櫃へぎつしり詰まつて、蓋を取るとぶーんと稻の香のする飯などを想像して、食慾を刺激した。粥が出来上つた。母親が上澄みと下のどろどろを掻きまはすのも待ちきれずに、子供達は各自の茶碗を差し出して、熱い汁を立ちながら吸つた。
「一度でいいから、俺あ鹽味で焚き立ての白い飯が食つて見たいな——」
爲吉はよくこんな贅澤を云つた。

かういふ混沌とした熱い流動物ですらも、腹へ詰められるだけ詰めたあとには、食後の満足といふものはあつた。その満足を出来るだけ長びかせながら、爲吉は、頭を抽象の世界へ走らせて、毎晩のやうにツギエト・ロシアには子供達のための、共同の食堂があつたのだと考へるのである。

——かういふ日々の生活は、彼に一種の社會觀を與へた。それは、もし彼の隣りの鷓小舎の雄鶏が社會觀といふものを持つてゐたとしたら、その社會觀を極度に人間大にした度合と相似てゐた。爲吉には、どんな人どんな家、どんな町を見ても、それらが彼の商品に對する購買力であると思へなかつた。そして彼自

身鷓小舎の金網の目から店主の投げる餌を待つてゐる。鷓のやうに、それらの町や横町や裏通りを、いろいろな聲で觸れまはるることによつて、誰かがそれに注意を惹かれて購買力を發揮するのを待つよりほかなかつたといふことを知つてゐた。行商人としての彼の活動範圍はつまり、鷓の活動範圍を幾十倍にか擴大した區域に過ぎないといふ事實が近頃ややつきりと彼の頭に萌して來たのである。
さう考へることが、爲吉でなかつた爲吉に、人間的な淋しさを誘つたことは争はれない。

五

——と、同時に、不景氣といふ大きな力は、決して、鷓小舎の中とごく小量の物質だけで均衡を保つてゐる爲吉の一家だけを、切離してゐるわけではなかつた。

それは、實際、眼に見えて、十三軒の町を、一日と萎縮させつあつたのだ。それは先づ、首にぐりぐりのある女將によつて經營される藝者屋「中村屋」をしてこつそり町から夜逃げさせた。時間的に考證するとそれはおちやら姐さんの鷓小舎に、鷓が三羽しかゐらなくなつた當時の事であつた。「桔梗屋」「ときは」「中村屋」

と、三軒ならんだ藝者屋のうちの、緒土の嵐へ喚び込むやうに建てられてあつた最後の一軒が「中村屋」である。あとから債權者の一人によつて發見された空家の中には、無数の紙屑と、鼠のやうな古い電と、しづく一滴も出で來ない富の債權者の押収するところとなつた。

藝者屋が一軒廢業したといふこと、それだけでは町へ不可抗的な不景氣が侵入したといふ事實を立證すべくあまりに根拠が薄弱であるが、その際、何よりも町の人達を脅かしたことは、今まで殆んど誰一人として氣がつかなかつた、この町の地主の出現といふことである。地主といふのは坂の上の町の、「仁丹」のイルミネーションの眞下にある、第×××銀行といふ、妙な數字で築き上げられた名の小さな銀行であつた。銀行の支配人をしてゐる、「仁丹」の紳士のやうな男が、「中村屋」の逃じした一週間後に三人のこの町の家主達や藝者組合の役人達と會合して、酒を呑んだり藝者をあげたりしたあげく、恰も當夜の遊興の費用を、思ひつきで、町の人達に負擔させようと試みたやうに、地代の値上げを彼等だけで申合せたのである。家主達としては既に、彼等の借家人の大部分が家

うに青髭れになつてゐるのを見た。大體他人の足に對して、彼は普通人以上に神経質なところがあつた。翌朝になつて、何げなく爲吉がその長屋の前を通るといつも半分閉まつてゐるその窓が、からりと開いてゐて、そこからうもると立ちあがる煙の中に、昨晩見た圓顔の男が口笛を吹きながら廣場の隅の塵埃溜を漁つてゐる野良犬を呼んでゐるのに出遇した。栗山がこんなに早起きをするとは絶対になかつた。

「やあ、昨晩は失禮。わかりましたよ。——君は、何をしてゐるのですか？」

その男は、かう仰れ仰れしく爲吉に問ひかけた。尤もはじめてこの町へ来た人間で、爲吉の頭に吊された筒袖と、彼の不恰好な顔との對照に不審を抱かないものはないのだ。

「これですか？ 筒ですよ。食ふに困るので、こんな物でも賣るよりほかはありませんよ。これから問屋へ行くところです。」

爲吉は、何の特色もないその男のうす汚い顔に、強ひてほかの部分よりも多少人間並であるといふまでの、黒味の勝つた眼を覗めた。それは正直な眼であつた。爲吉は安心して話の出来る人間だと思つた。

と云つて、火鉢の傍へ、重苦しさうに坐つた。爲吉は頭から箱をおろした。

「栗山は、かういふ大商家だよ。」
彼は、机の上に載つてゐる大型の實業雑誌を開いて、『第一本の資本で五萬圓儲ける法』と書いてある記事を差して見せた。そのあとで二人は又聲を揃へて笑ひ出した。

「へえ——」

爲吉は、呆氣に取られて、雑誌を手を取つた。それは、或る種の實業雑誌で、老人に讀ませるやうな大きい活字で印刷してある、政治のことや、立身訓や、地方人向きの利殖法などを書き立てたものであつた。

「君も、金儲けがしたけりやかういふ學者に相談することだよ。」

その男は、癖らしい貧乏推しをしながら、横から爲吉の顔をしげしげと見つけた。
「この雑誌には、何か太陽の黒點と不景氣の關係について書いてありませんか？——あのお天道さまに黒い星が見えるでせう、あれと世間の不景氣とが關係あるつてことを新聞で讀みましたかね……」

爲吉は、雑誌を押し返しながら、突然かう質問した。このとき、七輪を兩手に抱へながら、と

「筒とは面白いね。でも、何かほかにないものですか？——馬鹿々々しいぢやありませんか？」

「ところが、駄目なんです。脚が悪いのでね。一度などは、大船の大正電機へコイル捲きに行つたんですが、試験のときは棒立ちになつて誤魔化せても監督の奴に作業中にめつかつてね、三日目に追拂はれましたよ。——栗山さんはありますか？」

その男が何か云はうとして内を振り返つた途端に、奥から太いがすがすした聲で、無造作に爲吉へ答へた。

「あ、居るよ。——入り給へ。君はよく働く人だね。」

家は、爲吉の家と寸分ちがはぬ構造で、破損の程度から云へばむしろの方がひどかつた。ただ、最も爲吉の眼を驚かしたのは、この家は一面にあらゆる形の古雑誌で埋まつてゐたといふことである。古いビール箱を造りつけた机が一つ、その傍に煙草の吹筒で盛りあがつた海戸火鉢があり、卵の殻のやうに裂けた電燈の管が、その二つの道具の上に舞ひ下つてゐる——目ぼしい道具と云つてはこれだけだつた。栗山は、鐵條の眼鏡を掛けて、臺所で古雑誌を引寄せ

つとと臺所を走り出た栗山が、ちよつと肩をひそめて彼を覗めたが、やがて、瓦斯のやうな苦笑を洩らした。

「そりあ、世の中を不景氣にするのは、太陽の黒點よりも恐ろしい奴があるからだよ。——そんなことを云ふ奴に限つて、太陽の黒點のやうに眼黒い奴らの手先にちがひないよ。」

「いや、栗山はね、圓顔の男は、火に手を觸しながら説明した。『十四で千圓儲ける方法』とか、日銀の金利はどうだとか、そんな大きなことばかり書いてゐる鮮に、當人はいつもびびりなんだよ。」

その日の午後にもう一度遊びに行つて見ると、栗山はどこかへ外出して留守であつたが、昨晩の男だけがぼつねんと障子の下に胡坐をかきながら、バットを喫つてゐた。どういふわけかこの男ほど他人を珍らしがる人間はなかつた。彼は、爲吉といふ人間を、まるで骨董商が道具を捻くり廻すやうに、方々から眺めるやうな眼付をして見るのであつた。二つ三つちよつとした話をしたあとで、いきなりその男は、

爲吉の度塵を抜くやうなことを語つた。
「ね、君、君は——僕が、北海道の監獄から出て来た人間だと知つたら驚くだらうね？」

がら七輪の火をおこしてゐた。
「全く、感心するよ、君には。毎朝よくあんなに早く起きられるもんだね。そりやさうと、僕んとこへは、昨晩から坊主頭の鴨が来てね、これで、當分は男やもめも淋しくはないといふところさ。」

彼は、どこか東北人らしい訛りを含んだ言葉で氣輕に話しながら、ちよいちよい眼鏡越しに相手を批評的に見る癖があつた。前から爲吉には、この男にはいろいろなことが訊ねて見たい氣持があつた。しかし世の中で、何が一番爲吉をおどかしたかといふと、それは眼鏡であつた。彼は先天的に眼鏡を掛けた人間は、自分とは絶対に別な階級に屬してゐる高貴な人間だと思ひ込んでゐた。

「貴方は——一體、何をなさるんですか、御商賣は——その、文士とでもいふんですか？」

彼はやつとこれだけを上り樞から臺所へむかつて云ひ掛けた。この臆病たらしい質問は、二人の男達の突放すやうな笑ひ聲で打消されてしまつた。昨夜の男は、歩く拍子に、青髭れのした足で室内の雑誌類を蹴飛ばしながら、
「まあ、そんなところに踏んでないで入り給へ。」

爲吉の頭は非常な速度で、自分の家の新聞紙記事を開から隅へ捜しまはつた。世間の出来事で、そこに貼付されてゐないものは殆んどなかつた筈だ。

「いつ頃のことですか？」

「君は、あの米騒動を知つてますか？」

「米騒動といふと、大正……さうつと昔のことぢやないんですか？」

「まあ、寺内内閣當時だね。大正七年さ。——もちろん、米騒動とは別なんだが、やはりあれに關係したことで、僕は網走へ収監されたのさ。それから、八年、見給へ、僕の手足はこんなにひどくなつちまつたんだ。——しかし、まあ、お蔭で僕はあの震災當時のどきどきは道れたわけだね。」

「すると、何ですか、貴方は、何か、その主義者とでも云ふ方の——？」

「まあ、そんなものかね。——つまり寺内内閣の總辭職を少しは手傳つた方かも知れんて。」
爲吉は、壁板の『東京朝日』の記事について詳しいことを尋ねて見たかつた。しかし、考へて見ると、八年も刑務所にゐた人間が、三年前の記事のことについて知つてゐる筈もないと思つたので口を緘ぢた。對手はしみじみと、何かを

思ひあたるやうに述べた。
 「だが、何だね、僕も長いこと牢獄にゐたんだから、ちつとあせつて出る日にあ世の中が善くなくなつてゐるかと思ふと、一變つてゐるのは、監獄のことを刑務所だなんて鹿爪らしく呼ぶことぐらゐるものさ。それで監獄と刑務所との間に、どれほど囚人待遇が改善されてゐるかといふに……へッ、いや全くあきれた世の中だよ！——俺は、考へても腹が立つよ。何のために俺達がわざわざ辛い思ひをして、ソノ犠牲になつてゐるかと思ふとね……」
 「變りませんか？——でも、世の中つて、そんなに早く善くなるものぢやないでせうが。——ひよつとしたら、悪くなる一方の、」
 爲吉は、西日を受けた古障子にぼんやり眼を向けた。
 「そりや、僕達が急ぎ過ぎるといふことはある。しかし、もうロシアあたりでは、民衆は成功してゐるんだからな。——ともかく資本主義といふものが、矛盾を持ちながら大仕掛にどしどし行きつく處まで行かうとし、情力といふ奴でどうしても引返しがつかなくなると、世の中も不景氣になる一方さ。」
 かういふ話になると、この男は奥から奥か

らと、蜘蛛の絡みたるやうな議論を無限に抽出してくる人物らしかった。監獄にゐながらリロシアのことなんかちやんと知つてゐた！「資本主義」なんてものも、野良猫の首筋を掴まへてゐるやうに、きゆうつと押へつけて話してゐる！
 障子の表面がうす暗く蒸つた。爲吉は驚きの眼をもつて、そこに圓い人間の團塊になつたと見える細走とやらを出て来た男を睨めた。對手は、しんみりとした口調で云つた。
 「君も貧乏人だね。貧乏人は何のために貧乏してゐるかを悟らんといかぬよ。それがはつきりわかれば、僕達に力が出て来るんだ。むが夢中で、何年何十年——一生貧乏したつて、世の中は平氣だからな。そりや、俺が、監獄へ入つて、一人で焦燥つていららして、早く世の中を善くしたい、一日もこの格子と壁と板の間から飛び出したいと思つて、いざ出た、自由だと思つて来て見ると、一向に俺のやつた仕事で世の中に利き目になかつたのを見ると、左程ちがつてはしないんだ。しかしだ、しかししつかりと理論を把握して資本主義の行くべき必然な標路を見ながら、それを一日も早く驅逐したいと思つてする貧乏も、も、ただぼんやりとする貧乏や、の、防備軍をみんなで講じなければならぬんだ。——いきなり、突飛に、太陽の黒點が餘計に現はれたから、地球の上は一大不景氣に襲はれるなんてことを云つたとしたら、それこそ果山ぢやないが爲めにする者の宣傳にしか過ぎないんだ。人類社會に、不景氣を來させるやうな仕組みがあつて、それが必ず何年目かに襲つて來るといふ事がわかつてゐる現在だ、——さういふ經濟的根拠を投つといつてからに、それは太陽の黒點さまの仕業ですは、ちと過が良過ぎるよ——そんなのは、ざらにある低級な科學的迷信だ。ともかく、不景氣はでたらめな資本主義政策によつて起るものだ。太陽の黒點、養

七
 不景氣は爲吉の場合に於ても、二元的に作用してゐた。
 彼の年來の三種の商賣が、一向に振はなかつたことが一つの現象であつたとすれば、もう一つは心の中で彼の今迄の社會觀を磨きか

らと、蜘蛛の絡みたるやうな議論を無限に抽出してくる人物らしかった。監獄にゐながらリロシアのことなんかちやんと知つてゐた！「資本主義」なんてものも、野良猫の首筋を掴まへてゐるやうに、きゆうつと押へつけて話してゐる！
 障子の表面がうす暗く蒸つた。爲吉は驚きの眼をもつて、そこに圓い人間の團塊になつたと見える細走とやらを出て来た男を睨めた。對手は、しんみりとした口調で云つた。
 「君も貧乏人だね。貧乏人は何のために貧乏してゐるかを悟らんといかぬよ。それがはつきりわかれば、僕達に力が出て来るんだ。むが夢中で、何年何十年——一生貧乏したつて、世の中は平氣だからな。そりや、俺が、監獄へ入つて、一人で焦燥つていららして、早く世の中を善くしたい、一日もこの格子と壁と板の間から飛び出したいと思つて、いざ出た、自由だと思つて来て見ると、一向に俺のやつた仕事で世の中に利き目になかつたのを見ると、左程ちがつてはしないんだ。しかしだ、しかししつかりと理論を把握して資本主義の行くべき必然な標路を見ながら、それを一日も早く驅逐したいと思つてする貧乏も、も、ただぼんやりとする貧乏や、の、防備軍をみんなで講じなければならぬんだ。——いきなり、突飛に、太陽の黒點が餘計に現はれたから、地球の上は一大不景氣に襲はれるなんてことを云つたとしたら、それこそ果山ぢやないが爲めにする者の宣傳にしか過ぎないんだ。人類社會に、不景氣を來させるやうな仕組みがあつて、それが必ず何年目かに襲つて來るといふ事がわかつてゐる現在だ、——さういふ經濟的根拠を投つといつてからに、それは太陽の黒點さまの仕業ですは、ちと過が良過ぎるよ——そんなのは、ざらにある低級な科學的迷信だ。ともかく、不景氣はでたらめな資本主義政策によつて起るものだ。太陽の黒點、養

とちがつて、重大な意義があるよ……」
 雲切れがしたのか、障子の下の方がほんのりと白くなつて、そこだけ掌で抱つたほどの日光が射した。障子の一番下の部分に廣場の物干柱の一本が淡い影になつてぼんやりと、對手の男の、圓い鼻のあたりに無數の針で突つたやうな孔があいてゐて、そこからちかちかと白っぽい太陽の光がちかに射込んで來た。
 「太陽の黒點といふのは、やはり先朝栗山さんが仰つたやうにあまり不景氣とは關係のないもんですかね？——私は、その記事をこの障子の夜番の爺さんの死骸の枕元に見つけたのですがね。まだよく私には腑に落ちないんです。」
 爲吉がから訊ねるまでには、障子は、もとのやうにあかした陽を受けてゐて、對手の頭の下には、長唄の御師匠さんの襟袷らしいものさへくつきりした片袖を見せてゐた。その男は、喘んで喘めるやうに話した。
 「ははア、そんな理由かね、その太陽の黒點といふのは、——そりや君、人類が太陽系の一惑星であるところの地球の上に繁殖してゐるんだから、いろいろ天文學的な意味で太陽の影響を

なんぞのやうに腐蝕して行つた。この二つの現象は、決して離ればなれに爲吉といふ人間を表裏から攻めたのではなくて、そのどちらが先に來るともなく、相繼いで起つた破壊作用であつた。ただ、それらの内訌を來した根本の原因は、やはり不景氣といふことであつた。
 彼は、納豆をやめるとともに、餡の方も手を引いた。ゆでだし餡だけはどうやら續けて行つたが、それも、成績はむらであつた。日中の間は栗山とその同居人の貝島といふ男に頼まされて、方々の工場や商店に、職業を探しに廻つた。電車賃ぐらゐは栗山が持つてくれた。
 崖の下の町から出て見ると、體臭い、害のやうな自分の家で考へてゐるよりも、世の中はけばけばしい眼の眩むやうな服を着てゐる若い女も居れば、塗り立ての腕のやうな光澤の自動車も走つてゐた。高いビルディングには、何千人といふ人間がきちんとした洋服を着て、どこが不景氣といふ風が吹くかといふやうな、何やらめいめいの仕事を忙しうにやつてゐた。活動寫眞はどこにも赤い旗を立ててゐたし、電車はどれもこれも満員だつた。誤つて銀座あたりの大通りへでも踏み込まうものなら、カフェには綺麗な女が肥つた紳士に媚びて

のである。彼等は、兩親を斃してしまふまでも食はうとした。その主義主義にも當然の権利はあつた。

かういふ間にも、無慈悲な思想が、ぐんぐん爲吉の心に成長しつゝあつた。それは、個人の生活、家族の生活をば冷酷に振り向きもせず、それ自身の成長を遂げようとしてゐた。泣きついて十銭の饅頭を買つて貰つてゐる爲吉の頭に、買つてくれてゐる富人をすらも、その同情をすらも、全然買収制度から離れた、大きい社會構成の一階級として取扱ふやうな皮肉な氣持が自然と湧いてゐた。爲吉は、普通の社會人のさうであるやうに、決して、窘しめられてゐる現在を苦痛だとは思はなかつた代りに、その現在の延長を懼れた。どこまで自分の思想が發展し、どこまで一家の貧乏が續するか——その二つの線がいつどんな場所まで一家の上に悲惨な大爆發を伴つて相交するか。それを考へると、彼は眼が眩んで一日も先きのことを想像することが苦しかつた。そして最も悪いことには、その爆發を伴ふ交錯が無限に緩漫に、日一日と延期されて行くのであつた。昨日よりも今日は、すこしだけ苦しかつた。今日よりも明日は、もうすこしだけ苦しむにちがひな

日ろくでもない長談議に耳を傾けてゐるのは、あの二人のためではなかつたか？ 労働者に何の理窟があるものか——あんな下らないことを議論し合つたつて、この不景氣はどうなるといふのか、四人の子供達に何を食はさうといふのか？ このままで行くなら一家はみすみす食でもして、野糞に死するよりほかにないぢやないか？——かう思ひ込むと、彼女は、顔を含めるごとに、あらゆる手段をつくしても、二人から爲吉を遠ざけようとして、二人の社會主義者は、彼女の主義によつて、極端に漫畫化され、怪物化されなければならなかつた。およそ人間に生れた二人の男のうちで、栗山と貝鳥ほどに思はしい、醜い、意氣地なしの、陰險な悪漢はなかつたのである。それも、一人は、監獄に八年もぶち込まれてゐた四人ではなかつたか！

栗子のこの主張は、どんなことがあつても任げらるべくもなかつた。家計が困れば困るほど、彼女の眼の前には、世の中を嘲笑つてゐる二人の悪漢の姿が、悪魔的に影映して行つた。彼女の雄辯の下に、二人は首屋の機械によつて伸ばされたり捻られたりおされたりする餌のやうに變化した。

爲吉の一家は、實際、幸福ではなかつた。米がないと云つては夫婦は喧嘩し、米が漸く買へたと云つては又喧嘩した。子供達は父親がむきになつて母親を敵をのを、學生がラグビーの試合を見物するやうに嘲し立てるほど、一家の不平和は平氣で昂じて行つた。備れた傷口を觸るやうに、雙方のどちらかがたつた一言云へば、それで今にも崖崩れのありさうな喧嘩を惹起すに澤山であつた。これらの荒みきつた貧乏の象徴でもあるかのやうに、まだ乳離れのしない息子子は、母親の背の上でめきめきと捲せ細つて行つた。長女と長男とは、學校の先生が月に三回も呼びに来たほど學校へ出なくなつた。彼等は、貧乏によつて、ますます密接に母親の手元へひきつけられるやうに見えた。栗子は、用のないときは、子供達をぐるりと自分のまはりに坐らせて、留度のない涙とともに父親の愚物であることを教へ込んだ。

どんなに節約しても、現代の世の中で、親子六人が、一日五十錢足らずの収入では成つて行けない。しかも、そのうちの四人は、無限大の食慾を持つた、子供達である。不幸なる兩親は、自分達の食物を減らして子供達へ分けてやつた。しかし、子供達には、不景氣はなかつた

或る晩、二人が昂奮して話し合つてゐるところへ入つて行つた爲吉は、かういふ栗山の話を聞いて、何かしら彼の生涯にも最後の決定すべき時が近づいたやうにどきりとした。

「ちや、何ですか、そのアパートメントを建てるために私達を道拂はうとするんですか？」

「きつとさうだよ。いくらかの涙金を出して、ここを引移れと云ふにちがひないよ。いいかね、そのとき、三十や四十の端金に目をくれて、はいと云つて追んで見給へ、君の家族は差向きの翌日からどこに棲むか？ 家一軒借りるには愚劣な敷金なんでも取る悪家主が多んだ。その涙金は、敷金にも足らぬとしたら、どこへ行くんだ！ いいかね、太田君、もしそんなことが持ち上つたら、私達は閉鎖するんだ。そして、飽くまでもここに住んでゐる權利を主張するのさ！」

人間の居住權の主張！

と貝鳥は、理窟つぽくそれを云つた。

栗子は、栗山と監獄から出た「前科者」とを、女として憎み得る限りの憎悪をもつて取扱つた。良人が、稼業の方はそつちのけにして、毎

い。そして一年の後には手も足も出ぬほどに苦しんでゐるにちがひない。それは、すこしづつづつ死であつた。

或る晩、爲吉は、珍らしく酔つぱらつた栗山と、坂の下でばつたり出遇した。それは、酒世のどこかにクリスマスといふ賑やかな催しのある夜だつた。

「やあ、今日はすこし原稿料がはひつた、一杯やらう！」

栗山は、古洋服のポケットに、銀貨をちやちやら鳴らして見せた。

「いや、御機嫌ですか。」爲吉は淋しさに笑つた。「目目ですよ、私は、これから、米を買ふので、家で銀貨が待つてますからね。」彼は、鶏だけの食ふくだけを食べ、四人の子供達の顔を一瞬間の間の中に思ひ返してゐた。

「米——？ うむ、と。他人のパンを食はざる時、菓子を食べふ勿れか。よし、米は俺が買つてやる！ 米屋へ行かう！」

栗山はかう云つて、よろめきなから米屋の前に立つた。一圓だけの二等米を、彼は、酔漢らしい聲で注文した。

それが済むと、無理に爲吉の手を取つて、すこし後戻りしながら、泡盛屋の繩暖簾へ無理に

取らないか——何だ、こんな金なんざどうせ他
だつて他人の金を貰つて来てるんだ。取れ、こ
んな物に未練はありやしないんだ——取れ！
ようし、取らねえな、そら、持つて行け！」か
う云ひ捨て、彼はいきなり掌の中の煙草屑
やら銀貨やらを、精一杯爲吉の頭の高を目かけ
て投げつけた。銀貨は、店の中の敷所に鐵砲
玉のやうに鋭い音を立てて散らばつた。呆れは
てた爲吉は、雪に滑つた馬のやうに平突張つて、
床の上や客の椅子の下などから銀貨を拾つてや
らなければならなかつた。

酒場の人達は、一齊に大笑で笑ひ出した。そ
れが、栗山を笑つてゐるのか、爲吉を笑つてゐ
るのか、薄つべらな鋭い刃物で身内のどこかを
快く刺られてゐるやうな酔ひにうつとりとな
つた爲吉には、よくわからなかつた。彼は、人
達の無制限な笑ひのうちに、その笑ひを打消す
ためだけに、栗山の金を全部拾ひあつめてや
らねばならぬやうな気がして、長いこと膝を折
つて蹲まつてゐる自分を意識した。

不圖、人達の笑ひ聲が頭の上で留まつた。
「三つ番だ！」
「火事だッ！」
「どこだ、どこだ！」

「寺の背後だ。」
「あ、あの崖の下か？」
はつと思つて立ちあがつた爲吉の耳に、鮮か
に半鐘の音が、一つ、二つ、三つ——性急に打
撃と打撃とが重なり合つて、ひびき出した。それ
は、萬物が限りなく騒いでゐる上に、冷静に牙
えた聲で、世の中の終末を告げてゐるやうに聞
えた。

彼は、何かを踏めてゐる風に、宙に睨つた栗
山とばつたり顔を合せると、殆ど對手を片手で
曳摺るやうに、引張つて、
「行かう。大變だ——家が焼ける！」
と云つて膝と思はれぬほどの足取りで駆け出
した。

無住寺の境内を駆け抜けたときには、町のま
ん中には凄じい火の屏風が立つてゐた。
「火元はどこだ、どこだ？」
やつと、足元に、自分達の長屋がまだ無事で
横はつてゐるのを見ると、彼はこんな役にも立
たぬことを口走つてゐる自分に気がついた。ど
こではぐれたのか、栗山は、もう側面にゐなかつ
た。

燃えてゐるのは、「桔梗屋」とときは「であつ
た。雙方の扉から渦を巻いて膨れあがる煙は、

火焰に反射して、谷合一圓を眞赤に照り返して
ゐた。火は、狭苦しい二軒の藪者屋の屋根の下
から窮處に押進められてもがいてゐる。怪獣の
やうに、隙さへあれば手當り次第に何にでも獨
みかかりさうな勢ひで、巨大な尻尾や四肢や
鬣などをあらゆる障壁へ打當てた。そこから
吐き出される怪獣のいぶきは、壱と谷底全體を
煽り立てて、見る見るすべての物を火力の焦點
へ吸ひ込み捲き上げずには置かないやうに見え
た。酸漿のやうに根らんだ巨大な煙の層が、何
かの加減でばつと消えて、より黒い第二の煙團
に移らうとする途端に、町角やメリヤス工場
の屋根に詰めよつた人間の垣が、ひらひらと猛火
のむかう岸に、小さな動作を替へてゐるのが見
えた。早鐘の音が、悲しげに叫ぶ人間の聲と火
勢の間に、無様な磔つぶてを投げ込んでゐる
やうに、ありありと縮小されて聞えた。

「馬鹿ッ、何をしてゐるの、この人は！」
爲吉は、勝手元で、鬼のやうに髪を振りかぶ
つた體子に、びくんとするほど嗷鳴りつけられ
た。そこは、気のせむか、もうぶーんと黄な臭
い匂ひが漂つてゐた。次男の留吉が、四半半の
體子に映る火を見て、ほとんど揮擲けさうに立
ちながら泣いてゐた。

「子供はどうした？——子供は？」
體子はそんなことに答へようともせず、爲
吉の上半身をめがけてまつ黒な恐ろしい物の
團塊を、異常な力をもつて投げつけた。爲吉
は、前から約束してゐたものやうに、ぐにや
りと腕の間に柔かになつたその團塊を受取る
と、
「留吉ッ！ 留吉ッ！」
と、四疊半にむかつて叫んだ。
子供は、いつの間にか、小脇にびつたりと寄
添うてゐた。

「子供達は、お寺の本堂だよー！」
體子の金切聲があとから追ひかけた。
「早く来い、道具なぞどうでもいいから——」
爲吉は、花筒を片手に、足袋はだして露地をう
ろろしてゐるおちやら姐さんを押しつけたが
ら、簾筒やら壺やら米櫃などの引出された間を、
夢中で杉の密林へ駆けあがり、そこで、
「ひさ子！ 力——ひさ公ッ！」
と呼び立てた。

墓地の中は、人間でいっぱいだった。漸く本
堂の方へ滑り抜ける、と、いろいろな提灯の下
に、極度に昂奮して、何を云つてゐるのか自分
達でもわかるまいと思はれるやうなことをてん

でに口走つてうろろしてゐる人達の顔が、も
うろうとした他界の光景のやうに見えた。ど
んなに聲を暖らして叫んでも人達の聲で爲吉の
呼び聲は一般の騒動の中へ溶け込むだけであつ
た。彼は本堂の階段の處へ駆け寄ると、小脇に
抱へた留吉を脚した。右手に抱へてゐる柔かい
物が蒲團であることにはじめて気がついた。
「ここにゐるんだぞ、いか、御父さんが歸つ
て来るまでちつとしてゐるんだぞ！」
彼はしくしく泣いじやくつてゐる子供を、し
つかと蒲團でくるんで、階段の下へ寝かした。
再び長屋まで取つて歸す間、彼は無氣とは知
りながらも、まだ長女と長男の名を呼びつづ
けた。

ばりばりと木材の燃え裂ける音の中に、彼は、
かすかに赤ん坊の泣き聲を聞いたやうな気がし
た。しかし、それは、ほんの瞬間の、わずかに
觸皮質を掠め去つた想像にしか過ぎなくて、次
の瞬間には、
「あッ、『梅鉢』へ火が通つたな。」
と叫びながら、我が家の中へ躍り込んでゐ
た。

體子は、押入から引出したごたごたした諸道
具を、室内へ積み重ねたり、その一つ一つへ手

を掛けて見たり、さうかと思ふと、天井の塵落
するのを懼れるやうに上の方を見つたりして
ゐた。

今度は、爲吉の罵る番だった。
彼は一枚の蒲團を抱へると、いきなり體子の
手を握つて、もと来た道を駆け出した。良人の
姿を見て、急に気が弱つたやうに彼女は半ば
曳摺られながら、口惜しさうに聲を立てて泣い
た。

坂のむかうの方から、蒸氣ポンプの疾驅して
来る氣はひがした。「梅鉢」の角の、町の共同井
戸から湧みつくせる丈の水が湧み出されたか
し、ポンプの吸引力を失つた聲が喘息病みの
やうにかすれて聞えた。咄嗟の間に、平和状態
が自然力の闘争へ急動員された。あらゆる身装
の人間が、防備の部署を捨てて、火を避けたが
ら寺の境内へ押し寄せて来た。持ち出された道
具類は、途中で何かの機みに顔落すると、忽ち
人間の波に押しひしがれて、何の形をも留めな
かつた。

消防隊、青年團、警官などの間から、幾
民は狼狽した、頓狂な聲を立てて、各自の家族
の名を呼び立てた。
「——あのとも奴ださうですつてね、なんて鬼

人物
 丈三郎 婦長 (労働運動者)
 友三郎 同 (同)
 ダイヤク (刑事部長)
 ストロング (刑事部長)
 モーファ (刑事部長)
 ウィリアム (刑事部長)
 酒場の主人
 柘榴鼻の爺
 ドイツ女の女中
 保長
 ベンキ屋 二人
 裁判長
 その他、警官、辯護士、給仕、酒場の群衆、通行人、傍聴者等大勢。

第一場
 酒場。電気がともつてゐる。舞臺斜めにバアが設けられてある。大勢の群衆がその前でビールやウイスキーを飲みながら、騒々しく談笑してゐる。バアのうしろに、酒場の主人が忙しうに立ち働いてゐる。その頭上に午後一時五十分を指さした大時計が動いてゐる。酒場の奥から厭的なジャップ・バンドの騒音が群衆を打ちのめすやうに響いて来る。日本人、丈輔、ひとり外国人の間に立つてうろろしてゐる。

丈輔。(ポケットの金を探り出し) ええいッ——

拵へられた男(八場)

—Tom Mooney 事件の再録—

アメリカの都會

ゴッテム！ 八仙しかありあしない。ま、飲むか！(バアへ向ひ) ビアを呉れ給へ。
 酒場の主人。ビアと云つたね？
 丈輔。イヤッブ！(ビールのコップ受取る)
 キーファ。(ウイリアムと共に突然丈輔を押退けるやうに入り来り、何かの重い手は足元へ置きながら) おい、ウイスキーをくれなにか？ それから、葉巻もね。
 ウイリアム。(稍低聲に)——その別腹は、かつきり二時十分になつてるのかい？
 キーファ。あ、二時十分が一秒たりとも狂つちやいけねえのさ。手筈はちあんとままつてるんだから、お互ひに飲み過ぎないやうにしないと腹存だぜ。
 (丈輔の方からサンドウィッチを持ち来り、頬張りながらバアへ手をのばして自分のコップを取る。何気なく二人の會話に耳を傾ける様子)
 ウイリアム。仕掛い事ちあ他もちよいちよい君の厄介になるね。(ウイスキーのコップをかち合せ) ちや、ゴッド・ラック！
 キーファ。ゴッド・ラック！(乾す) おい、ウイスキーをもう二つ！
 ウイリアム。聴けあ、トラストの親玉から五十

のやうな女でせう。あんなことを——出来ずなんて！
 「でも、あの女は焼死んださうですよ。」
 「自分で自分の體へ火をつけたんですつてさ。こともあらうに。」
 人達の間には、火元の噂が立つた。それが何となくこの町の恐ろしい秘密をあとからあとから發き立てる最初の前兆のやうにひびいた。
 爲吉と豐子とは、人間の一人一人の顔へ觸つて見るやうにして子供達を捜した。
 と、ばつたり本堂の石燈籠の下に、貝島と佇んでゐる二人の子供達を發見した。
 「まあ、なんて馬鹿なんだらうね！」
 母親は腹立たしうに、びしやりひさ子の頬を敲つた。それは、同時に、子供達を發見した嬉しさの表情でもあつた。
 「長屋へ火が廻つた！」
 誰かがさう叫んだ。
 「焼ける！ 焼ける！ 焼けるまへー！」
 爲吉は思はず大きい聲で云つた。

かわからぬ栗山甚作は、突然人達の前へ大きい亞鉛屋根の一部を曳摺つて来て、
 「さあ、バラックだ！ 早くバラックを建てよう！」
 と叫んだ。
 いろいろな流言蜚語のうちにも、梅毒第三期のとも奴が、我と自分の部屋に火を放つて殺したと、慈善會といふ財團法人が数名の役人をこの町へ送つて、現に焼けた跡を見聞してるといふ噂とが、事實となつて残つた。
 その日の午後までに、粗末な亞鉛小屋が出来あがつて、それに爲吉の一家と栗山と貝島とが、焼けた材木の前に掛けてゐた。亞鉛はまだ人達の頭の上にほつてゐた。小舎の前には「居住難費得同盟」といふ紙へ大書した文字が見えた。
 子供達は、青年團の焚き出しで、白い飯の食べられるのを欣んだ。
 力一は、崖の下から、雄鶏の焼けた死體をぶら下げて来た。——それは、もう鶏ではなくて、燃えさした木の枝と大差のないものだつた。栗山は、午後になつて歸つて来て、一同へ云つた。
 「さア、これから演説會を開くんだ。あの寺の境内で！」

萬弗のタイプが出るんださうぢやないか？
キーファ。マツカツシイの親方あ、こんだぎゆ
うぎゆら云はされて苦しんでるんで、さすが
の探り屋も出すことになつたよ。(五本の指
をひろげて見せる)

ウイリアム。二時十分だつたな？ 俺あ、何だ
かこの足元の赤ん坊が、今にも大聲で泣き出
しさうな気がしてならないよ。(片足にて靴
を指し示す)

キーファ。(慌てて仰山に對手の足を掴む)よ
せよ！ 君は、相變らず向う見ずな男だ
な？ まあ、飲まう。(時計を見上げながら
飲む)

柘榴鼻の爺。(客から客へと群りつくこく細り歩
きながら、確と丈輔に行き會ふ)よう、こり
あ珍らしい。——ジ、ジャツア先生で御座る
な。(酔つてゐる) 満堂の酒呑み及び紳士諸
君よ、諸君が、茲に發見せられるのは、名に
し負ふ東洋一の柔道の名人ジャツアと御座い。
彼等黄色伶俐なる猿と人間との混血兒は、
頗る侵略的にして、日露戦争に於て巨大な
る熊ロシアを倒して以来、此の酒場のピア
樽をこぼしたやうにアメリカ内地に御入來に
なり、ジヌウジツと稱する妙な輕業を以て

ぢありませんか？ (稍酔ふ)うはははは——
はア！
キーファ。(急に眞剣な顔になり) お前、何か
知つてるのか？
ウイリアム。貴様、何だ？
丈輔。いいえ、私は——私は、ほんの、何も、
いや、ただ貴方がたのお話もこの通り聞いて
知つてると申し上げたまでなんです。その
——その、つまり、内容ですな、お話の内容
は何も知らないんです。
キーファ。(ウイリアムに胸をせしながら) まあ、
いい、さあ、葉巻でも吸ひ給へ。

丈輔。そりあさうと、且那方、先刻のお話の
時間もそろそろ迫つて来るぢやございません
か？
ウイリアム。ああ、うるさい奴だな！ お前の知
つたこつちあないから、黙つて飲むんだ！
キーファ。(手靴を取り上げ) ビル、ぢあ、急
がう。(酒場の主人に向ひ) おい、いくら？
(銀貨を五六枚無造作に投げ、そそくさと出
て行かうとする。丈輔つかつかとあとを追
ひ)

丈輔。ぢあ、グッド・バイですな。どうも御禮
走さまでした。(手を差し出す)

我々ヤンキーを倒し、いつも國事探——いや、
その、まあ、こんな事を云つたところが、(丈
輔の胸を叩く) この先生には一向珍義漢書に
はちげえねえんですがな——

丈輔。(ビールをぐつと乾して) やれ、やれ、も
つとやつて見ろ！ 俺だつてお前らの喋舌る
ぐらゐのヤンキー英語がわからないでどうす
る？ (老人驚く) かう見えてもな、このア
メリカにあ十年近くもあまり旨くねえ珈琲を
吸つてゐるんだ。いいか、君らのその個狭な
人種差別……迫害の氣持さ、それが、つい此
頃まで働いてゐたペンキ屋から俺を追い出さ
せたんだぞ！ 俺あ癪に觸る！ 俺だつて
ブラツシュとペンキを帯てあ生優しい労働
組合のペンキ職なんぞにあ負けぢあゐるな
んだ。ペンキ職職工の組合に入つてゐない
と云つて俺は働きの口を追い出されてしまつ
た、そんなら俺を組合へ入れるかと云ふに、
組合ぢあ俺が日本人だから駄目だと彼かしあ
がる！ みんなお前のやうな人種差別待遇を
するからだ！ もつと働かざるなら、饑舌つて
見ろ！ 舌でなら取れねえぞ！

柘榴鼻の爺。(悉くしく禿げつちよるの山高を
眺ぐ) ほほう、これは、これは。——いや、
キーファ。(腹立たしげに、握手を握みながら)
ジャツア奴！

第二場
ロドニー・ホテル前の街角。同日、數分
後。
右端にホテルの入口、建物は舞臺中央で一
定の角度を持ちながら奥へ切れ込む。稍幅
廣い街を隔て左端中程から奥へかけて、街
の向側。そこには、店の前に古本が横たつて
ある。古本の前に「25」及び「50」の札が立て
掛けてある。
街路側。サイド・ウォークなど。

丈輔。(ホテルの前を遠巡勝ちに歩み來り) む
るかな、ぬないかな？ (ポケットの中から銅
貨を一つ取り出し) 奴が居れば名前だ。ぬな
けりあ型さ。(銅貨を指に弾きあげ、兩手を
合して受け止む) 名前だ！ むてもちよつと
都合が悪いな。よし、今度は、貸すか貸さぬ
か、貸すなら名前、オーライ、シュート！ (再
び銅貨を飛ばし見る) 何んだ、型だ！ 畜生
ッ、貸さねえのか？ この前から、もう七八

十弗借りてるからな。——でも、俺がこんな
に困つて、酒場を出ると、銅貨が三つしかな
い、なんて聞いたらやつぱりあいつも社會主
義者だのなんのつてむづかしい本を讀んでる
だけあつて、幾何か同情はしてくれらだらう。
五弗でもいいんだ……三弗でもいいや。今夜の
宿費が十仙、あと二弗九十仙ありあ、まあ
明日明後日ぐらゐまでは支へられる。そのう
ちに桂庵へ通つてゐりあ、どうにかなるだら
う。友三郎！ おい、居てくれ、貸してく
れ！ マイ・ディア・トモ！ ああ少し酔つたか
な。今のあの二人の奴等、一體何んだらう？
拳闘士みたいな凄い顔をしてやがるのと、も
う一人は狐と狼の混血兒みたいな野郎だ。
あんなのがゐるから、アメリカも物騒なわけ
だ。(古本屋の方へ歩み寄り、本の列をぼんや
り眺め居る)

ダイク。(ホテル内からつかつかと歩み出づ。
手に郵便物及び電報を持つ) おお——
ストロング (左端より旅行靴を持ちて急ぎ來
る) 同志ダイク！
ダイク。同志ストロング、職職はどう？
ストロング。(烈しく握手しながら) ケーブル
のやうに緊張してるよ！ 久しぶりだね、本

柘榴鼻の爺。(客から客へと群りつくこく細り歩
きながら、確と丈輔に行き會ふ)よう、こり
あ珍らしい。——ジ、ジャツア先生で御座る
な。(酔つてゐる) 満堂の酒呑み及び紳士諸
君よ、諸君が、茲に發見せられるのは、名に
し負ふ東洋一の柔道の名人ジャツアと御座い。
彼等黄色伶俐なる猿と人間との混血兒は、
頗る侵略的にして、日露戦争に於て巨大な
る熊ロシアを倒して以来、此の酒場のピア
樽をこぼしたやうにアメリカ内地に御入來に
なり、ジヌウジツと稱する妙な輕業を以て

丈輔。ぢあ、グッド・バイですな。どうも御禮
走さまでした。(手を差し出す)

丈輔。ぢあ、グッド・バイですな。どうも御禮
走さまでした。(手を差し出す)

丈輔。ぢあ、グッド・バイですな。どうも御禮
走さまでした。(手を差し出す)

丈輔。ぢあ、グッド・バイですな。どうも御禮
走さまでした。(手を差し出す)

群集一。ジャツア、しつかりやれ！
群集二。爺、むやみにへこたれるな！
群集三。日本人オーライだね！
群集四。まあ、喧嘩せず一杯飲み！
キーファ。(丈輔をバアへ引き寄せ) 偉い、偉
い、で、君は殊のほか労働組合が嫌ひらしい
ね。まあ、ウイスキーの一杯もやらんか？ (酒
を命ず)

ウイリアム。日本人でこんなうまい英語を飽舌
る奴は初めてだな、——え、君、大學へでも
行つたのかね？
丈輔。(ウイスキーを飲みながら) 何、労働者
ですよ。大學なんぞへ行きたくとも行けあし
ませんよ。それでも、普通世間様の御話な
ら、まあ大抵のところは聞きつけるつもりで
すがね。——貴方がたの最近からの話だつ
て、よく聞いてますよ。それ二時十分の
仕掛仕事、それから「マツカツシイ・トラ
ストの親玉が五十萬弗のタイプ」でね、ど
うです、この「赤ん坊が大きな聲で泣き出す」

丈輔。(ウイスキーを飲みながら) 何、労働者
ですよ。大學なんぞへ行きたくとも行けあし
ませんよ。それでも、普通世間様の御話な
ら、まあ大抵のところは聞きつけるつもりで
すがね。——貴方がたの最近からの話だつ
て、よく聞いてますよ。それ二時十分の
仕掛仕事、それから「マツカツシイ・トラ
ストの親玉が五十萬弗のタイプ」でね、ど
うです、この「赤ん坊が大きな聲で泣き出す」

丈輔。(ウイスキーを飲みながら) 何、労働者
ですよ。大學なんぞへ行きたくとも行けあし
ませんよ。それでも、普通世間様の御話な
ら、まあ大抵のところは聞きつけるつもりで
すがね。——貴方がたの最近からの話だつ
て、よく聞いてますよ。それ二時十分の
仕掛仕事、それから「マツカツシイ・トラ
ストの親玉が五十萬弗のタイプ」でね、ど
うです、この「赤ん坊が大きな聲で泣き出す」

丈輔。(ウイスキーを飲みながら) 何、労働者
ですよ。大學なんぞへ行きたくとも行けあし
ませんよ。それでも、普通世間様の御話な
ら、まあ大抵のところは聞きつけるつもりで
すがね。——貴方がたの最近からの話だつ
て、よく聞いてますよ。それ二時十分の
仕掛仕事、それから「マツカツシイ・トラ
ストの親玉が五十萬弗のタイプ」でね、ど
うです、この「赤ん坊が大きな聲で泣き出す」

丈輔。(ウイスキーを飲みながら) 何、労働者
ですよ。大學なんぞへ行きたくとも行けあし
ませんよ。それでも、普通世間様の御話な
ら、まあ大抵のところは聞きつけるつもりで
すがね。——貴方がたの最近からの話だつ
て、よく聞いてますよ。それ二時十分の
仕掛仕事、それから「マツカツシイ・トラ
ストの親玉が五十萬弗のタイプ」でね、ど
うです、この「赤ん坊が大きな聲で泣き出す」

丈輔。(ウイスキーを飲みながら) 何、労働者
ですよ。大學なんぞへ行きたくとも行けあし
ませんよ。それでも、普通世間様の御話な
ら、まあ大抵のところは聞きつけるつもりで
すがね。——貴方がたの最近からの話だつ
て、よく聞いてますよ。それ二時十分の
仕掛仕事、それから「マツカツシイ・トラ
ストの親玉が五十萬弗のタイプ」でね、ど
うです、この「赤ん坊が大きな聲で泣き出す」

丈輔。(ウイスキーを飲みながら) 何、労働者
ですよ。大學なんぞへ行きたくとも行けあし
ませんよ。それでも、普通世間様の御話な
ら、まあ大抵のところは聞きつけるつもりで
すがね。——貴方がたの最近からの話だつ
て、よく聞いてますよ。それ二時十分の
仕掛仕事、それから「マツカツシイ・トラ
ストの親玉が五十萬弗のタイプ」でね、ど
うです、この「赤ん坊が大きな聲で泣き出す」

丈輔。(ウイスキーを飲みながら) 何、労働者
ですよ。大學なんぞへ行きたくとも行けあし
ませんよ。それでも、普通世間様の御話な
ら、まあ大抵のところは聞きつけるつもりで
すがね。——貴方がたの最近からの話だつ
て、よく聞いてますよ。それ二時十分の
仕掛仕事、それから「マツカツシイ・トラ
ストの親玉が五十萬弗のタイプ」でね、ど
うです、この「赤ん坊が大きな聲で泣き出す」

丈輔。(ウイスキーを飲みながら) 何、労働者
ですよ。大學なんぞへ行きたくとも行けあし
ませんよ。それでも、普通世間様の御話な
ら、まあ大抵のところは聞きつけるつもりで
すがね。——貴方がたの最近からの話だつ
て、よく聞いてますよ。それ二時十分の
仕掛仕事、それから「マツカツシイ・トラ
ストの親玉が五十萬弗のタイプ」でね、ど
うです、この「赤ん坊が大きな聲で泣き出す」

丈輔。(ウイスキーを飲みながら) 何、労働者
ですよ。大學なんぞへ行きたくとも行けあし
ませんよ。それでも、普通世間様の御話な
ら、まあ大抵のところは聞きつけるつもりで
すがね。——貴方がたの最近からの話だつ
て、よく聞いてますよ。それ二時十分の
仕掛仕事、それから「マツカツシイ・トラ
ストの親玉が五十萬弗のタイプ」でね、ど
うです、この「赤ん坊が大きな聲で泣き出す」

丈輔。(ウイスキーを飲みながら) 何、労働者
ですよ。大學なんぞへ行きたくとも行けあし
ませんよ。それでも、普通世間様の御話な
ら、まあ大抵のところは聞きつけるつもりで
すがね。——貴方がたの最近からの話だつ
て、よく聞いてますよ。それ二時十分の
仕掛仕事、それから「マツカツシイ・トラ
ストの親玉が五十萬弗のタイプ」でね、ど
うです、この「赤ん坊が大きな聲で泣き出す」

部の連中は皆な達者か。
 ダイタ。銅鐵のやうに頑丈だよ！ 久しく會
 はなかつたが、ますます健康ぢやないか？
 こちらは、いよいよマツカッシー・トラストの
 薙め、悲鳴を上げて、新聞を買収してスト
 イキについちあ一言半句も書かせやしない
 だ。輿論を恐れ出したんだ。それに、聞く
 ところによると、暴力團を列車買切りで送る
 うだよ！
 ストロンク。ふむ、その話だがね。——まあ、
 立派も出来まい。俺も君の部屋でちよつと休
 まして貰ひたいんだが、何か用事で外出す
 るところか？
 ダイタ。いや、電報を二三通、こいつだけはホ
 テルのボーイになんぞ頼んだら早速スパイの
 手に渡るから、ちよつとそこまで行けあいい
 んだ。
 (この對話の間、キーフアとウイリアムの
 兩人、右端より旅客を呼んで来かり、
 ホテルの口に立ち止まつて、二人の對話
 に耳を傾け居る)
 ストロンク。ちあ、歩きながら話さうぢやない
 か？
 ダイタ。(後方をふりかへる。キーフアとウイ

リアム、ぎよつとして、つかつかとホテル内
 (へ入る) 近頃は、どうも怪しい奴が始終この
 ホテルに廻り込んでゐるんで、うるさくて仕
 様がな。——行かう。(二人ホテルの壁に添
 うて奥へ退場)
 丈輔。また、あの二人の野郎共が、——一體、
 今日のは何時になつたら彼奴らに會はずに
 済むだらう？ (左奥へ歩みながら) どれ、
 友三郎、五弗か、三弗か、——それとも機嫌が
 よくて、十弗貸してくれるか、もう一度銅貨
 を飛ばして見るか！ フリッパ・ゼー・アイツ
 ト・ゴース！ (歩み行く)

第三場
 富豪の邸宅、地下室。同日、三四分後のこ
 と。
 色の天井の低い小部屋、右隅にベッド、
 右側に明り取りの小窓、それ等の前に一脚
 のテーブル、椅子二脚。左奥壁に洋服そ
 の他の掛けたクロセット、その横手に形ば
 かりの切り燵。マントル・ピースの上は日
 覺時計。その傍に十二三冊の部厚な洋書。
 丈輔。さあ、何んしよ友三郎は、あの通りな
 人で、道樂は社會主義の本を讀むことばつかり
 だ。それでなければ、新聞の切抜きさ。いつ
 来て見たつてあの男が新聞の切抜きをしてゐ
 ないことはないんだから。——まさか、情
 婦でもあるまいぜ。第一、貴女も知つてると
 ほり、あの男つぷりではね——あははは！
 ドイツ女。それあ、トモより、貴方が好い
 男だよ。
 丈輔。そんなに煽つてたつてアイスクリームなん
 ぢは奢りませんよ。兎も角、待つてゐるとし
 よう。まあ、こつちへ入り給へ。一寸接吻し
 て上げようか？
 ドイツ女。嫌だよ、この人は！ わたし、貴方、
 紳士だと思つてゐたのに。(ドアより笑ひな
 がら逃げ去る)
 (丈輔その邊を忍び足にて見廻す。と、こ
 の刹那、突然全都會を震憾せしむるやうな
 大音響が起り、ベッドの上の窓硝子、粉々
 に砕けて落ち来る。丈輔立ち竦む)
 ドイツ女。(いきなりドアを開いて、若い顔を出
 す) 何んでせう？
 丈輔。地震かね。それとも、あ、わかつた、
 貴女がキッスさせないから神様が怒つたんだ

リヤム、ぎよつとして、つかつかとホテル内
 (へ入る) 近頃は、どうも怪しい奴が始終この
 ホテルに廻り込んでゐるんで、うるさくて仕
 様がな。——行かう。(二人ホテルの壁に添
 うて奥へ退場)
 丈輔。また、あの二人の野郎共が、——一體、
 今日のは何時になつたら彼奴らに會はずに
 済むだらう？ (左奥へ歩みながら) どれ、
 友三郎、五弗か、三弗か、——それとも機嫌が
 よくて、十弗貸してくれるか、もう一度銅貨
 を飛ばして見るか！ フリッパ・ゼー・アイツ
 ト・ゴース！ (歩み行く)

第三場
 富豪の邸宅、地下室。同日、三四分後のこ
 と。
 色の天井の低い小部屋、右隅にベッド、
 右側に明り取りの小窓、それ等の前に一脚
 のテーブル、椅子二脚。左奥壁に洋服そ
 の他の掛けたクロセット、その横手に形ば
 かりの切り燵。マントル・ピースの上は日
 覺時計。その傍に十二三冊の部厚な洋書。
 丈輔。さあ、何んしよ友三郎は、あの通りな
 人で、道樂は社會主義の本を讀むことばつかり
 だ。それでなければ、新聞の切抜きさ。いつ
 来て見たつてあの男が新聞の切抜きをしてゐ
 ないことはないんだから。——まさか、情
 婦でもあるまいぜ。第一、貴女も知つてると
 ほり、あの男つぷりではね——あははは！
 ドイツ女。それあ、トモより、貴方が好い
 男だよ。
 丈輔。そんなに煽つてたつてアイスクリームなん
 ぢは奢りませんよ。兎も角、待つてゐるとし
 よう。まあ、こつちへ入り給へ。一寸接吻し
 て上げようか？
 ドイツ女。嫌だよ、この人は！ わたし、貴方、
 紳士だと思つてゐたのに。(ドアより笑ひな
 がら逃げ去る)
 (丈輔その邊を忍び足にて見廻す。と、こ
 の刹那、突然全都會を震憾せしむるやうな
 大音響が起り、ベッドの上の窓硝子、粉々
 に砕けて落ち来る。丈輔立ち竦む)
 ドイツ女。(いきなりドアを開いて、若い顔を出
 す) 何んでせう？
 丈輔。地震かね。それとも、あ、わかつた、
 貴女がキッスさせないから神様が怒つたんだ

丈輔。さあ、何んしよ友三郎は、あの通りな
 人で、道樂は社會主義の本を讀むことばつかり
 だ。それでなければ、新聞の切抜きさ。いつ
 来て見たつてあの男が新聞の切抜きをしてゐ
 ないことはないんだから。——まさか、情
 婦でもあるまいぜ。第一、貴女も知つてると
 ほり、あの男つぷりではね——あははは！
 ドイツ女。それあ、トモより、貴方が好い
 男だよ。
 丈輔。そんなに煽つてたつてアイスクリームなん
 ぢは奢りませんよ。兎も角、待つてゐるとし
 よう。まあ、こつちへ入り給へ。一寸接吻し
 て上げようか？
 ドイツ女。嫌だよ、この人は！ わたし、貴方、
 紳士だと思つてゐたのに。(ドアより笑ひな
 がら逃げ去る)
 (丈輔その邊を忍び足にて見廻す。と、こ
 の刹那、突然全都會を震憾せしむるやうな
 大音響が起り、ベッドの上の窓硝子、粉々
 に砕けて落ち来る。丈輔立ち竦む)
 ドイツ女。(いきなりドアを開いて、若い顔を出
 す) 何んでせう？
 丈輔。地震かね。それとも、あ、わかつた、
 貴女がキッスさせないから神様が怒つたんだ

と「カーン・マルクス——資本論か！ 旨い、三冊物だ。——あの古本屋！ それから女三郎に會はぬやうに一直線に下町へ取つて歸す。あとは支那街のスウちゃんか？ 占め、占め！ (マントル・ビスより赤い三冊の洋書を抜き取る) 待てよ、いくら親友の間でも、筆啓上とやつて置からうかい。(テーブルの上のペンとインキにて走り書きす) わが親愛なる女三郎よ、失業一ヶ月にしてアイ・ム・オール・ダンかね。このハード・ラックを如何せんやだ。昔日の讀みに應じて、最後のヘルプを君に乞ふべく来りしが、矢も楯もたまたらずに公然と茲に三冊のマルクスを暫時拜借す。もともと、社会主義の原理たるや貧しき者を助くるに在りと君より聞くこと久し、マルクスも以て厭すべしだね。女よ、恨むな、景氣が出たら金は返す。(資本論)は彼の生活の資本になるのだ。安心して可なりさ。親愛なるジョウより。……ヘン、どんなもんだい。必要は發明の母なりつてな、俺もこんな名文が書けるとは思はなかつた。ぢあ、グッド・バイ！ (片手に部屋一杯に向つて接吻を投げかく) 待てよ、四邊の形勢はどうぢや？ (ドアを開けて外部を覗ふ) 占め、占

め！ (去るに臨みドアから首だけを出し) でも、社会主義者からマルクスを盗むなんて、世の中はよつほど皮肉に出来てゐるやがらア。ひヒヒヒ——

第四場

料理屋のカウンター。翌朝。安料理屋の汚らしげなカウンターが、舞臺中央奥から右端へ走つてゐる。客七八人目白押しにスツールに掛けながら、食物を食ひ居る。待ち遠しがつて皿を叩く者、薄汚いジャケットを着た給仕が註文品を奥へ通す聲。斜めに射込む日光に、食物の湯氣と煙草の煙が絡む。スツールの一つに、丈輔他の客を押しながら夢中で新聞を讀み居る。給仕その前に註文の品を置く。

丈輔。や、こいつは、何處かで見た男だよ。こいつは、確かに、極く最近——はてな、昨夜の支那街の女郎と一緒に飲んだ酒が祟つてるか、どうも今朝の頭は痛つてゐる。(客を押し退け、舞臺前方へ歩み出る。廻りに宿醉の

頭を振る) ヨーク街爆撃事件の顛末。レーキ炭坑ストライキの指導者、巨魁ダイク、ストロングの兩名、現場に於て捕縛さる——マツカフシイ・トラスト直屬の銀行ユニオン銀行強力なる爆弾によつて危く全部崩壊を免る——ストロングはレーキ炭坑よりひそかに銀行破壊を目論みて昨日當市に到着——ダイクの部屋に時計仕掛の爆弾數個及び手榴彈その他の兇器發見さる——連類者續々検挙、全米の右傾労働組合もその爲めの影響頗る大ならん——わかつた！ この二人は、あのホテルの前で出遇した二人だ！——待て、待て！——最近急激に左傾したる争議團本部は、ストロングが到着するや否や、直ちにユニオン銀行へ向ひ、午後二時十分(正刻)に、二個の強烈なる爆弾を投じた！——午後二時十分……待てよ、午後二時十分、これか、確か、あの酒場の二人が云ひ合はした時間だぞ！ 午後二時十分——粉の中の赤ん坊が大きな聲を立てる——マツカフシイ・トラストから五十萬弗——親方もいよいよ運の詰りだとか何とか云つたな！ ふむ、これあからうして居られないう！ 兎も角銀行へ行つて見て、どんな事だか確かめて見よう！ (丈輔、新聞を巻んであ

たふたと駆け出す) 給仕。おいおい、御客さん註文の品を食はないのかね？——待つた、待つた、金を拂つてくれよう！ 丈輔。(振りかへり) 金か？ 金なら、マルクスを賣つた十五弗の残りがちつたああるよ。ほら——五十仙？ (銀貨を給仕へ投げつけ去る) 給仕。(兩手を鎌谷の邊へ當てがひ、鳥の羽搏きするやうな恰好に動かし) あれもキ印か！——

第五場

街角。第四場より間もなく。硝子屏の悉く毀れた煙草屋、それを鍵の手に圍繞して多数の見物人通行人の徘徊する廣い街路。破壊された銀行及び隣家は見えぬ。左端に一本の太い綱が張つてある。その前に群集。

見物人一。ひどい事になつたもんだね。それで、銀行だけは助かつたらしいね。見物人二。隣家の邸が、あれ御覽なさい、あの

通りめちやめちやになつて、人死にがかなりあつたさうですよ。見物人三。かうなると警官も邪魔なもんだね。僕達の好奇心を一向に満足させてくれんからな。見物人四。せめてから綱を張らないで、邸内へだけ入れないやうにするといひですがな。見物人五。ところが、まだ死體は壁の底に埋まつて發掘中さうですからね。見物人六。ほんとに社会主義者がやつたんでせうか？

見物人七。新聞に出てゐるところによると、かつきり午後二時十分となつてますが、わしの家の時計は二時十三分で止まつてゐましたよ。

見物人一。わしもその點はちよつと疑問を持つてるんですがね。しかし悪漢のホテルの部屋から爆弾が出たといふんぢや、やはりほんとなんでせうよ。

見物人三。すこしこの事件は臭いね。見物人五。叱ッ。そんな事云つたら、貴方も連類者にされますよ。見物人十。(演説口調にて) 我々アメリカの市民は、言論の自由を持つて居る——

警官。(左からあらはれて) コシツ、こんな處で演説をやる奴があるもんか。貴様、怪しい奴だ。こちらへ来い。(舞臺奥へ引きずり去る) 丈輔。(群集の中よりぼつくり顔を出す。手に澤山の新聞紙を圓めて持ち居る) ひどい事になつたもんだな。きのふここに立つてゐて、あの大時計を眺めた時にちやうど二時と一分過ぎだつた。——あの時計はすつかり失くなつちまつたが、俺の記憶は確かなんだ、それからからぶらぶら女三郎の働いてゐる家まで五町、古本屋の前で道草を食つて着いたのが、二時十分だ、あのドイツ女のおたんちんをかちかつてゐて、彼女が顔を引込めると鳴り出したのがあの大爆撃だ！ 二時十三——四分、とまあ見えていいんだ。それを、新聞ぢあ、どの新聞も二時十分と書いてゐる。それから、あの酒場の二人が打合せした時間が二時十分。これあ、どうも俺には解けない謎だ。(右端へ歩み出で、立話してゐるキーフアとウイリアムを發見する) おお、お早う！

キーフア。(愕然として) ああ、お前け——昨日の酒場の——？ 丈輔。昨日は非常に御馳走さま。それで、貴方

その鍵を自分のポケットへ入れる。いいか、この鍵は、お前か俺か——どつちでも生き残つてこの部屋を出て行く人間が使ふんだぞ！ 酔つてゐるやがる、開けな！ 椅子を取つて、掛ける！

丈輔。(隣の椅子へ手をかけ) な、何を—— 解つたよ、それ、君の留守の間部屋へ入つたことも悪かつたし、それから、あのマルクスだつてな……

友三郎。(丸テーブルの前の椅子を示し) 技へ来い！ 掛けい！ 今日、今日こそは、貴様と俺と生命の取りやりに話を付けるんだ！ (丈輔、云はれる通りに椅子へ掛ける。友三郎、ベッドの前へ椅子を運び来り、腕組みしながら掛けて、對手を熟視す)

丈輔。(ポケットから夥しい紙幣束を取り出し) 資本論の三冊や三十冊の金は、これ、この通り。な、山口、お前にもこの二三年はほんとに厄介ばかりかけて俺あ済まなかつた。(泣き出す) 君の友情がなかつたら、どうして、この淋しい、淋しい外国で俺は暮して来たたらう？ (狂的に) だが、喜んでくれ！ ほんとに、喜んでくれ！ この通りだ！ これから俺は一生樂に暮して行ける

んだ！ 俺は、たうとう掛へられた男—— と呼ばれるまで出世したんだ！ 金は一生樂に食つて行けるほど、何處からでも降つて来る。君の社会主義の研究も、俺はこれからどしどし後援して立派にやり進めさせて見せるよ……な、おい、友三郎、何か云へ。どうして、そんなに俺を脱めてゐるんだ？ 二十弗で深山か、それとも、この前の分も入れて、二十五弗——三十弗ぐらゐるかい？

友三郎。馬鹿ッ！

丈輔。まあ、さう怒るなつてことよ、取り敢へずこれからそこへ一杯お祝ひに交き合つてくれないか？

友三郎。犬ッ！——この、日本人の皮を着てやつた奴！ べらべら饒舌らずに、黙つて掛けとれ！

丈輔。何んだか知らないが、いやに今日はお天気が悪いね——べらべら饒舌るなど云つたつてお前、このジョウ小山さんが、人並以上にアメリカの slang やカッスや通俗語が達者なもので、それ、正當な學問こそしないが、英語を饒舌る段になつたら下手な外交官などより遙かに達者だからこそ、今度のやう

な一生に一度の幸運に出遇したんだ、いいか、今ちよつと公明正へ起つた時の證言の練習をして見せようか？

友三郎。(いきなり立ち上つて、丈輔の頭を掻きざまに十回ほど殴る) これでもか？——これでもか？——まだ、これでもか？ (泣く)——口惜しいッ！ 俺は、口惜しい！——この、犬ッ！

丈輔。(倒れて下から) ど、ど、如何したと云ふんだ？……おい、理由を云へ、理由を聞かせてくれ！

友三郎。(丸テーブルの上の新聞を取つて、烈しくテーブルを叩く) 畜生、理由が聞きたければこの夕刊を見ろ！

丈輔。(新聞へ顔を突つ込みながら) なあんだ——これだよ。これでこそ、俺が儲けることになつたんだよ。

友三郎。(烈しく友人を觸み立て、ドアへ押しこくりながら) この野郎、まだ、貴様にはものが解らないんだな？——貴様こんな事を正氣でやつてるのか？ それとも、貴様は、アルコールのために、この醜い腸の底まで腐りきつてしまつたのか？ さあ、理由を話せ！ 話せ！ どうして貴様は犬になつたの

で居りましたのが、下町のオールのホテルと申します二十五仙宿で御座います。

係長。ははあ。仲々難儀しとる様子だな。では、お前小遣も不自由であらう？

丈輔。まつたくもちまして、もう一仙も餘裕は持ち合はせないので。

係長。では、キーマ君、君、ちよつと會計へ傳票を書いてやるから、よろしく證人の手當をして置いてくれ！

(キーマ頷く)

丈輔。旦那、ソリヤほんとですか？ ウイリアム、お前さへしつかりしてりあ、一生この事件で樂に暮して行けるんだ！ だが、よく注意して置く——いいか、お前は、法律によつて、正當な理由から、謂はば、掛へられた男なのだ！ 決して今練習した言葉を忘れてはならんぞ。お前の役割はそれだけなのだ。それ以外の事を饒舌つても、又それを饒舌らないでも、お前の一生の幸福は来ないんだぞ！

係長。(立ち上り) 掛へられた男、よくこの言葉を覚えておけ！

丈輔。(夢中で大聲) 掛へられた男——掛へられた男！ へえ、掛へられた男で……

第七場

丈輔の宿泊してゐる安ホテルの三階の一の間。同じ日の数日後。

中央右寄りに恐ろしく長い階段が上まで立つてゐる。階段の端きた所にドア。其處から左奥へかけて、高く設けられた灰色の一室へ入る。

階段の上の一つの電燈が灯つてゐる。舞臺の右と、部屋の下全部は暗黒である。

室内は、何處となく小ぢんまりしてゐて、舞臺奥と、左側とに開いた窓からの外光によつて、不思議な光線の縞れを見せてゐるやうに明るい。左隅にベッド。その傍に椅子二脚、中央に丸テーブル。ベッドの下に靴。室の右隅に化粧臺、洗面器、タオルなど。もう一脚の椅子がテーブルの傍に置かれてある。安手のカーペット。天井に電燈。

山口友三郎、頭りに丈輔の歸り待ち俺びて、部屋の中を歩きまはつたり、正面奥の窓から街向うの建物を、二人のベンキ屋が塗り壁へようとして足場を掛へてゐる光

景を眺めたりしてゐる。

丈輔。(階段を千鳥足で昇つて来る、口には金びかのレツテルを貼つた巻葉) たしかに、ホテルを左へ、ユニオン銀行の方へ曲つて行つたのを、私がこの二つの眼で睨んだので御座います——私は、法律の正當な理由によつて、謂はば、その、掛へられた男、へえ、その男で御座いまして、いや、こいつは必要以外のことであつたかな！ 二時十分ですよ！ それに間違ひはないんです。(ドアの前で立ち止まる) おや、誰か御在宅かな？ 鍵は、この俺様が一つ持つていらつしやる。(友三郎、丸テーブルの前に掛けて友人を持つてゐる) ほかのもう一つの鍵は、閣下の帳場で持つてゐる。この錠がひとりでに開くといふのは……(錠を室内へ入れる) ヤッ！ 君か？

友三郎。待つてゐた。

丈輔。(室内へ入る) やあ——君か？ 俺、無理もない、悪かつた。——ほんとに済まん。實に、實に、悪い事をしたよ！

友三郎。(つかつかと丈輔のそばへ歩み寄り、手から錠を奪ひ取り、かちりと錠を叩ろして、

か？ 一體、貴様には、この無産階級の身命を賭して闘つてゐる大闘争がわからんのか？

——云へ！ なぜ貴様が偽りの証人に立たなければならぬやうになつたのか、その次第をこの俺の前で逐一白状しろ！ 貴様、この銀行破産事件がブルジョア新聞の「タイムス」や「ジャーナル」の書き立てるやうな、労働運動者が窮乏の一策としてやつた、小泥棒式な事件だと思つてゐるのか。

丈輔。(したたかに友人によつてベッドの上へ叩きつけられ) 俺、俺には、そんな事はちつとも解りあしないんだ。——俺は、そんなむづかしい事とは思つてやしないんだ。俺がどうして証人になつたかつて？

友三郎。さうさ、偽りの証人さ！

丈輔。偽りだか何だか俺には解らない。——まあ聴け、それはかうだ。一昨日の晝過ぎよ、お前のところへ、困つたから金を借りに行かうと思つて、何気なく酒場の前へ来かると——あの大通りのキウテといふキアペレのある酒場さ——あすこでビアを一一杯飲まうと思つて立ち寄ると、ごたごたしてゐるうちに、二人の毛唐にウイスキーを奢られたのさ。その毛唐がひそひそ話をしてゐるのを聞

くと、何でも午後二時十分には手筈がきまつてゐる、仕掛仕事だ、マツカッツイ・トラストの親方から五十萬弗出るさうだ、彼等の持つてゐた手籠の中の別荘とか、赤ん坊とかが、今にも大聲で泣き出す——そんな話を聞いてゐたんだらう。それから、お前のところの二町手前のロードニー・ホテルの前で、俺は、昨日の新聞に出てゐた、それ、大工さんだとか、何だとか云ふ二人の男の會ふのを見たんだよ、すると、不思議なことに、その二人のうしろへ、先刻酒場でウイスキーを奢つた二人の奴等がやつて来たぢやないか？——少し變だとは思つたが、俺の方はお前に會ふ用事を控へてゐたんで、そのままお前の部屋へ行つちまつたのさ。それ、無断でお前の部屋へ入つたり、又「資本論」を持ち出したのは俺が悪かつた。しかし、満更ありのリーザの奴だつて知らんわけでもない。それに、お前、あの爆弾だらう——？

友三郎。お前は、あの爆弾の音のした時、何時だか覚えてゐるか？ 時計でも見たか？

丈輔。さうだ。——その、初めからしまひまで、俺の頭にこんぐらかつて解らないのは、爆弾の破裂した時間だよ。新聞ちあ二時十分と云

ふし、役所でも二時十分と云へといふし、何のために二時十分が大切なのか、一向に筋に落ちないんだ。そして、俺の見當ちあ、どうあつたつて、二時十分にあ破裂してゐないんだ。午後二時と——十三、四分の間だね！

そいつだけいかに力を入れやがるんで、俺も、いくらアメリカの裁判だつて變なものでとは思ひだして来たんだよ。

友三郎。それが、お前、尤も重大なところなんだ。——いいか、仕事は仕掛仕事さ。前から、役人と新聞社とトラストとが、三つ巴になつて、ちあんと謀し合はしてやつた仕事なんだ！ あの、ロードニー・ホテルのダイクの部屋へ兇器を持ち込んだ奴等が、ちよつとした酒場での飲み過ぎから、二分か三分遅れたんだ。手下を使へばよかつたのだらうが、それには秘密の洩れる恐れもある。奴さん達が、二分か三分の遅刻で、新聞社の方ではちあんと刷り上がつてゐるものをどうとも出来ない、そこで二分か三分の遅れを誤魔化すためにそんなことを云つてゐるんだ。その證據にあ昨日の夕刊を見ろがいい。俺達の社會主義新聞を讀むがいい。はつきりと示してこそはるないが、どいつもこいつも皆午後二時

十分過ぎになつてゐるぢやないか！ それを、トラスト系の新聞が朝刊にさう書いたからと云つて、無理に十分に引き戻すといふのは怪しいぢやないか？ しかも、トラスト系でない夕刊の方では、誰がどうして銀行の附近へ爆弾を仕掛けたかをちつとも示してないぢやないか？

トラスト系の新聞だけが、警察と符號を合せて「犯人の一舉一動まで詳細に洗ひ立ててゐるのも不思議だ。どうして、二三時間の相違で、夕刊と朝刊とがかうも記事を違へることが出来るのか？——朝刊は大概トラストに買収されたからだ。朝刊は、この事件が起る前から、犯人を知つてゐたからだ。朝刊は、トラストのために、ストライキに煽まされて、工場へ石炭の送れないマツカッツイ・トラストのために、役人と一緒になつて、前から犯人を拵へてゐたからだ。誰が、爆弾を投じたか？——朝刊だ！

トラストだ！ マツカッツイだ！ 貴様、それを知らねえのか？

丈輔。(呆然としてゐる) うむ、俺は知らなかつた……

友三郎。貴様、何も知らずに、己が腹を肥やしたために、小金に釣られて、むざむざと、

百十三人の犠牲者、わけても世界の無産階級運動史に力強い腕を揮つてゐる二人の闘士を——まかり間違へば死刑に處してしまはうとするのか？

レイキ炭坑の争議に、百五十日も悪戦苦闘してゐる、二萬五千の炭坑大を、貴様の三寸の舌でむざむざと見殺しにしてしまふつもりか？

丈輔。……さうか？

友三郎。(躍りかかつて) さうかぢやない！ 起つて！——貴様の魂に、まだ人間の血が流れてゐるなら、よしや、日本人としての一片の封建的な虚榮心でもいい、男として貴様がほんとに生き返らうとしたら、この時だ！

いいか、お前のあの目見た通り、聞いた通り、役所でいひつかつた通り、時間の點を一秒、一分もおろそかにせずにつくり、そのままを今度の公判廷でぶちまけるんだ！——出来るか！ (烈しく丈輔をゆすぶる)

丈輔。(泣きくづれる)……悪かつた！ 濟まない！——俺は、こんな事とは思はなかつた。許してくれ！ ほんとにお前さへ許してくれらるなら、俺は死んでもその事をやつて見せる！

友三郎。うむ、よく云つた！——死ぬ、よし、

死んだらお前の首は折つてやる。立派にそれをやり遂げる、いいか、お前が一言いふ爲めには、全世界の無産階級が力拳を入れてあとから助けて居るんだぞ！ あとから押してゐるんだぞ！

丈輔。(舞臺奥の窓から破方を指さし) 山口、俺は、ペンキ屋だつた。同じ職人が今二人、向側の建物を塗り直してゐる。あの黒いのがだんだん隅から赤くなつて行く——さうだ、俺も塗り直す！ 人間だつて塗り直せんことはない！ やつて見せるぞ？ (二人固く手を握る)

第八場

法廷。数日後。

舞臺。左前方から奥へかけて、高いデスクの列が並んでゐる。その一段下の欄干。舞臺中央から右端にかけて全部暗黒。幕切れの刹那、左端の光消えると同時に、中央から奥へかけての群衆の顔の見える程度の光が射す。

幕開くと、法官二三、デスクの背後に

控へ居る。櫻子の前に、光を浴びた丈輔が、狂気の如く手足を振りながら絶叫してゐる。

の姿が躍り出る。前方に友三郎の顔。(幕)

丈輔。……二時十分ぢやない！ 二時十三分！ 二時十三分です！——私は海へられた男ぢやないんだ！ 私は世界の無産階級運動のために、二時十三分であつたことを主張します！——二時十三分！——午後二時十三分！——午後二時十三分！——午後二時十分と三分です！

法官の一人。警官、これは證人ではあるまい、この狂人を彼の属する場所へ押し込んで置け！ 神聖な法廷はこんな偽りの證人によつて汚されるべきものではない！

(突然暗黒中より警官二人躍り出て、丈輔を拉し去る)

丈輔。(なほ叫び狂ひながら、半ば闇の中にて) 二時十三分です！……世界の無産階級運動……十三分！ (去る)

(突如法官の側の電燈消えて、舞臺暗黒になると、左端の傍聴席に群集の一角に叫ぶ聲。一瞬にして、電燈傍聴席の上に向く。其處には、手を振り絶立ちになつた傍聴者

敗軍(一幕)

人 茶館の亭主(老人、好人物) 若い女の客(斷髪、輕装) 逃げて行く男

その妻 掃妾の農夫 黒い服の青年 將軍(古いタイプの軍人、いろいろ勳章をぶら下げてゐる、長靴)

副官(黄士らしい男) 兵卒二十人ほど(地方督辦によつて備はれた寄せ集めの土團である。灰色の服)

敵の偵察隊員(苦力に假装した青年士官二名) 將軍の妾

時 現代、或る春の日の午後

處 中部支那、町はづれの茶館

舞臺 田舎らしい、古びた茶館の内部である。室内は、灰色な、ところどころ土の軒げ落ちた壁に包まれてある。この壁を割り抜いて、三つの戸口が開けてある。——正面奥の左右兩端と、右手の壁の中ほどに一つ。左手の壁稍前方には、家の上方へ通ずるちよつとした上り段があつて、そこから梯子で二階へ昇る心。

器具類は、正面奥の壁に凭せかけてある大型の卓、椅子二三脚その他、室内の隨所に客が掛けて茶を飲むやうに出来てゐる小卓と場席とが設けてあるほか、右手の汚い帳を垂れた厨房へ通ずる戸口の前にある木製の低い寢臺だけである。いづれも不完全なもの。打撃く騒亂のために、すつかり

舞臺 田舎らしい、古びた茶館の内部である。室内は、灰色な、ところどころ土の軒げ落ちた壁に包まれてある。この壁を割り抜いて、三つの戸口が開けてある。——正面奥の左右兩端と、右手の壁の中ほどに一つ。左手の壁稍前方には、家の上方へ通ずるちよつとした上り段があつて、そこから梯子で二階へ昇る心。

器具類は、正面奥の壁に凭せかけてある大型の卓、椅子二三脚その他、室内の隨所に客が掛けて茶を飲むやうに出来てゐる小卓と場席とが設けてあるほか、右手の汚い帳を垂れた厨房へ通ずる戸口の前にある木製の低い寢臺だけである。いづれも不完全なもの。打撃く騒亂のために、すつかり

舞臺 田舎らしい、古びた茶館の内部である。室内は、灰色な、ところどころ土の軒げ落ちた壁に包まれてある。この壁を割り抜いて、三つの戸口が開けてある。——正面奥の左右兩端と、右手の壁の中ほどに一つ。左手の壁稍前方には、家の上方へ通ずるちよつとした上り段があつて、そこから梯子で二階へ昇る心。

器具類は、正面奥の壁に凭せかけてある大型の卓、椅子二三脚その他、室内の隨所に客が掛けて茶を飲むやうに出来てゐる小卓と場席とが設けてあるほか、右手の汚い帳を垂れた厨房へ通ずる戸口の前にある木製の低い寢臺だけである。いづれも不完全なもの。打撃く騒亂のために、すつかり

から右へ、つなされた驢馬のやうにぐるぐる廻りをしてゐる。

若い女の客 お爺さん、お湯をさして頂戴。
茶館の亭主 おら、お湯どころでねえだ。お前さま一人で注いで下され、臺所にわいてるだに。

若い女の客 そんなこと云ふもんぢやなくつてよ、あたしは御客ぢやないの。そんなに拜んだつて、戦争が急になくなりやしまいしよ。——ごらんよ。あたし女でせう、女のあたしがちつとも怖がらないのに、お前さん、男の顔にみつともないぢやない!

茶館の亭主 (気がついて) まだ、お前さまそこにござつたかい?——さ、早く逃げなさい。危い、危い。若い女子がああ狼共に掴まつたら、それこそ何をされるか知れたもんぢやない!

若い女の客 あたしの欲しいのは、お湯なんですよ! (茶碗を鳴らす)
遠くの銃聲。

茶館の亭主 (茶碗を半分手をかけて) まだお茶を飲むんですかい? (右手へ退きなごら) おらがとこのお茶あ、よつほど氣の強くなる。

黒い服の青年 常に、同志方春青! 茶館の亭主 (進み出で) 一體、あんた方はどうなさるつもりかな? 表をしめきつてしまふと、この洞穴のやうな家には逃げ路はなくなるんです。——見たところ、この邊の人道でもなささうな方達だ。あの、狼どもが押破つて来たたら、錢でも着物でも何でも掠奪られつちまふだよ! それから、若い女子の人なんぞと来たたら、一溜りもなく女子でなくなるだでな。——ああ氣が氣でなんねえ——困つたな、二階へでも隠れるか、さうだ、二階にしたせえ。おらとこの爺さんだけだ分には、高々取られるもんと云つても知れたもんさ、この男の爺と、おらの一昨日つぶした仔豚の片身ぐれえなもんだ。さうしなせえ、早い方がいいだよ!

若い女の客 お爺さん、すつかり御心配をかけた済まないね。でも、あたしは此處にゐるの。まだ、用があるわ!
辯妄の農夫 何だつて?——物好きなあねさんだな。

なるお茶でもあるかな……。

逃げて行く男 (左奥より登場、しきりに手招きしてその妻をうながす、やがて、息を喘ませて左戸口から駆け込む。その妻被につづく) 爺さん、何故扉をしめねえのだ?

茶館の亭主 扉かい!——それだ、おれ何だか先刻から忘れてゐると思つた。(茶碗を取落して駆けつける)
この間、若い女の客、ピストルを取り出して弾丸をあらためて見る。逃げて行く男の妻、はつたり右側に仆れる。

辯妄の農夫 (立寄り) おれも、先刻から何だか變だと思つてゐただよ。早くこの扉をしめなさせえ。
逃げて行く男 (その妻を振り起し) これ、お前、もう歩けねえのか? ああ、困つたな。兵隊はどんどんやつて来るし、これ、これ! (妻がすかすかに頷く) お前、彼奴等来たらどんな悪さをされるか知れねえんだぞ!

若い女の客 どうしたの?
茶館の亭主 表の扉をしめはじめ。辯妄の農夫、手傳はうとしては、鶴に逃げかけられ、鶴を捕へては地團太踏んでゐる。逃げて行く男 意氣地のねえ奴でしてな、ほん

黒い服の青年 僕もこの店を守つてゐて上げるよ。それはさうとお爺さん、前掛か何か、かうボーイの掛ける物はないかね、何でもいいや。汚れてゐる方がいいんだが?
銃聲次第に近づく。辯妄の農夫扉へ駆けつけて、外の様子を見ろ。

茶館の亭主 あれだ! もう来る、やつて来るだに。
黒い服の青年 前掛だよ、給仕の締めるやうな!
茶館の亭主 ほんとにこの陽氣の良いのに、戦争なんかおつはじめ馬鹿の氣が知れねえだよ。——前掛か、前掛なら、うむ、おれの締めてるのを貸してやるべえ。(渡す)
若い女の客 昔から、春になると戦争をはじめるのは、支那の病氣ですよ。でも今度の戦争だけはちがふわ。これからすつかり戦争をなすための戦争なんだから。
茶館の亭主 みんな戦争する奴は、どいつもこいつもそんなことを云ふだよ。
黒い服の青年 ところが、今度のは北伐革命軍と云つて、わざわざ廣東から湖南、江西、湖北と悪い奴をみんな退治して来た新しい軍隊なんだよ。孫文先生の三民主義によつて露俄

の二里ばかり駆けるともうこの通りですよ。

若い女の客 そりや、貴方がた男の人が、いままで裸足などをして、女性を家の中へ閉ぢ込めてゐたからですわ。まあ、可哀さうに。(二階を指さし) あすこは、どう?

表の扉を全部しめきらうとする途端に、黒い服の青年が飛び込んで来る。茶館の亭主、扉へ門をかける。黒い服の青年手傳ふ。
逃げて行く男 (表の方を顧み、焦燥的に) ああ、もうからなつちや、逃げようつたつて逃げ終せるこつちやなし。——さうしませう、さう致します。(妻を抱き上げて階段へ昇る) 有難うございます。(去る)
表の扉が全部しめる。

黒い服の青年 (若い女の客へ近より) おお、同志!——こんな處に? (手を伸べる)
若い女の客 (振手) ここなら大丈夫——きつと来るわ。あたし、先刻から待つてるの! ピラは?

黒い服の青年 (馬蹄の下から赤いピラの束を出して見せる、直ちにもとへ収める) もうここからあとは、町はないんでせう?
若い女の客 次は、龍花村——それに、敵は士

若い女の客 (笑つて) そんなこと云つたつてわかりやしないわよ。學生マルキストさん。それよりは、ボーイ支度が出来たらお茶を一杯おくれな! (黒服の青年舉手の禮にて右手へ去る)
辯妄の農夫 (駆け戻り) 来たよ、来たよ——やつて来るぞ。聲がすらすらア……ぞく、ぞく、ぞく、とな。(顔へてる)

茶館の亭主 あれ、鐵砲の音も近くなつた。何だ、今のは——大筒の車か?
辯妄の農夫 爺さんや、二階へ逃げべえよ。(階段へ昇りかける)
茶館の亭主 (若い女の客へ) 暇だよ。いいか、わかつたかな? 彼奴等に八裂にされたとして、おれを恨むぢやねえぞ、あんた! (少しづつ階段へにじり寄る。このとき、黒い服の青年、茶を捧げて来る) あれだ、魂消た二人だ! (昇りつつ) おら、お茶より生命の方が大事だ……(農夫と共に去る)
若い女の客 黙つて茶を飲む。夥しい聲が左から右へと近づいて来る。黒い服の

若い女の容、顔を拭いてタオルを渡し、卓へ置いたシガレットを積み上げる。黒い服の青年一禮して厨房へ去らうとする。

兵卒の一 待て！

兵卒の二 二人とも手を挙げる！(銃を振す)

兵卒の三 怪しい奴だ！

兵卒の四 こりや、意外な獲物だな。

兵卒の五 別れだ——こいつア、おい、銃引だよ。

兵卒の六 スパイかも知れない。

兵卒の二 手を挙げる、こつち向け！(二人命ぜられたとほりになる)

兵卒の一 もつとほかに逃げ込んでるかも知れない。家捜しをしろ！

兵卒の七 二階がある。——臭いぞ、この家は！

兵卒の八 用心しろよ、途中に爆弾が仕掛けてあるかも知れん。

兵卒の三 大丈夫さ、まさかこの二人が下にゐるんだもの。

兵卒の五 行かう。(一同躊躇する)

兵卒の九 意気地なしだな。俺が先頭に立つ。(四五名彼につづく、去る)

兵卒の二 誰か上官へ云つて来い。(兵卒の置け。俺は生きてるか、ちや、足を縛れ。よし。(捕虜一同に對してピストルを突きつけ)お前達は、その影臺の前方へ列べ。(若い女の客の卓へ置いたシガレットを見て)ふむ、「キャプスタン」か？ 洒落てるぞ、こいつ。(椅子へ掛ける。つづいて、兵卒達へ)誰か、二人だけこいつらの番をして居れ。——ゆつくりと調べてやる。(兵卒二名、彼等に銃を握らす)

兵卒の二 閣下、ゆつくりは出来ません。敵は後方附近に迫つて居ります。

副官 やかましい、貴様等の知つたことか！(兵卒の二、他と顔を見合はせて引込む)ふむ——仔豚の糞漬、鶏が二羽、油菜が少量、別帳が二人、あとは弾丸が三發で足りる野郎共、いや、まだある、口紅のついた「キャプスタン」下、どれ、間接接吻とは、どうぢや！(煙草を喫ひながら一同をじろじろ睨める)ボーイはお前か？

黒い服の青年 へえ、私で。

副官 この茶館の主人は？

黒い服の青年 この人——これが、私の主人でございます。

副官 主人、この女は何だ？(若い女の容

をピストルで指さす)

茶館の亭主 おいらにア、顔とその何です、御客さままでございやすだ。唯のお客さまで、はい。

副官 これは？(逃げて行く男の姿を指さす)

茶館の亭主 その方も、やはり、御客さま、はい。

副官 この男は？(逃げて行く男を指さす)

茶館の亭主 やはり、さうで。

副官 その辨別は？

茶館の亭主 近在のもので、陳明正といふ小百姓でございやすだ。

副官 よし、男子はみな死刑だ。女は、これへ進め、身體検査をしてやる！(立ち上がる)

將軍、このとき何気なく入つて来る。兵卒の十、五色旗を持つてついで来るが、軍旗は戸外に立てて置く。

將軍 待て、待て。その捕虜はわしが、一應見てやる！(兵卒達一同敬禮する)ほほう、お前達の容易に退却せんのも無理はないな——こりや、なかなかの美人ぢや。副官、君も、ひどい男だ——かういふ意外な獲物を釣り占めにしようとは！(兵卒の一、腰掛を運び来る)よし、よし、暫時休息ぢや。かう朝から退却

四、表へ駆け出す)

兵卒の一 次は食物だ！

兵卒の三 あるぞ、きつとある。こんな家に限つてし、たまに隠してあるんだ。

兵卒の一 誰かもう一人来い、そこを見よう。(厨房へ兵卒の三と共に去る)

兵卒の六 (若い女の客に小腰を踏みながらそるそる近づいて)堪らねえなア……どうだい、この腹は！

兵卒の四 (あわてて駆け戻り)おい、上官が見えるぞ！(兵卒の六、急に身を退く)

副官 (ピストルを手に、つかつかと入り来る)何だ？——捕虜か？(様子を見て、傾きながら、兵卒達へ)よし、銃を下ろせ、俺が調べる。(男女の二人、手をおろす)

二階から悲鳴を擧げて、茶館の亭主、辯製の農夫、逃げて行く男女、の四名が引立てられて来る。兵卒等銃を振して、彼等を副官の前へ整列させる。鶏は兵卒の手にある。同時に、厨房から、豚豚の片身と菜づ葉を下げて二名の兵卒あらはれる。兵卒達、腹かにざわつく。或る者は鷄ひ取らうとする。

副官 静かにせい。みな、その食料品をここへばかりしつづけては、お前達の足も堪るまい。さあ、すこし遠慮せい。今度の村は、まだ我軍の荒したことのない村だ。あそこへ着けば、お前達の思ひのままの掠奪をゆるしてやる。全くこの戦争といふ奴は、たまたま村の掠奪でもないし無聊さはまるもんでなう——副官、阿片の用意は出来とるか！

兵卒達やや遠退く。將軍歩み寄つてにやにやしながら、若い女の容の頬をちよつと突く。やがて、裏臺の上へ寝そべる。捕虜達位置を換へて、正面中央に立ち列ぶ。

副官 阿片は、この前の御休憩の時ぢやうど切れましてございやす。

將軍 (憤然として起き上がる)何、阿片を切らした？この馬鹿者め！貴公は、何のためにわしの軍隊に高給を以て抱へられて居るか！——こともあらうに、陣中阿片を切らすとは、どうして戦争が出来ると思ふか！(苛々してその邊を歩き廻る)よし、死を犯しても一小隊だけ何處からなりと阿片を調達して来い！(副官不承不承に戸外へ出る)ほう、なかなか御馳走もあるな。(兵卒達へ)こら、炊事の係を呼べ！

兵卒達一同 私達は皆炊事係であります！

黒い服の青年 (屹となつてピストルを表の方へ振す)やつて来た！ 来ました！

若い女の客 ボーイ、熱いタオルはないか？

黒い服の青年 は、見て参りませう。(硬ばつた笑で厨房へ退場)

表の扉を敲く音。次に銃の裏尻で敲く音。——左右の扉、門を軋ませて烈しく揺ぶられる。若い女の容、シガレットへ火をつける。左扉の一端がばりばりと裂ける。二本の腕が門を外す。扉がたがたと外れる。黒い服の青年、ホット・タオルを袖へ載せて、恭しく女に差し出す。七八名の兵卒がどやどやと雪崩れ入る。右扉、内側から開かれる。そこからも二三名の兵卒が駆け込む。兵卒等一同、二人の男女を見て踏み留まる。

若い女の容、顔を拭いてタオルを渡し、卓へ置いたシガレットを積み上げる。黒い服の青年一禮して厨房へ去らうとする。

兵卒の一 待て！

兵卒の二 二人とも手を挙げる！(銃を振す)

兵卒の三 怪しい奴だ！

兵卒の四 こりや、意外な獲物だな。

兵卒の五 別れだ——こいつア、おい、銃引だよ。

兵卒の六 スパイかも知れない。

兵卒の二 手を挙げる、こつち向け！(二人命ぜられたとほりになる)

兵卒の一 もつとほかに逃げ込んでるかも知れない。家捜しをしろ！

兵卒の七 二階がある。——臭いぞ、この家は！

兵卒の八 用心しろよ、途中に爆弾が仕掛けてあるかも知れん。

兵卒の三 大丈夫さ、まさかこの二人が下にゐるんだもの。

兵卒の五 行かう。(一同躊躇する)

兵卒の九 意気地なしだな。俺が先頭に立つ。(四五名彼につづく、去る)

兵卒の二 誰か上官へ云つて来い。(兵卒の

置け。俺は生きてるか、ちや、足を縛れ。よし。(捕虜一同に對してピストルを突きつけ)お前達は、その影臺の前方へ列べ。(若い女の客の卓へ置いたシガレットを見て)ふむ、「キャプスタン」か？ 洒落てるぞ、こいつ。(椅子へ掛ける。つづいて、兵卒達へ)誰か、二人だけこいつらの番をして居れ。——ゆつくりと調べてやる。(兵卒二名、彼等に銃を握らす)

兵卒の二 閣下、ゆつくりは出来ません。敵は後方附近に迫つて居ります。

副官 やかましい、貴様等の知つたことか！(兵卒の二、他と顔を見合はせて引込む)ふむ——仔豚の糞漬、鶏が二羽、油菜が少量、別帳が二人、あとは弾丸が三發で足りる野郎共、いや、まだある、口紅のついた「キャプスタン」下、どれ、間接接吻とは、どうぢや！(煙草を喫ひながら一同をじろじろ睨める)ボーイはお前か？

黒い服の青年 へえ、私で。

副官 この茶館の主人は？

黒い服の青年 この人——これが、私の主人でございます。

副官 主人、この女は何だ？(若い女の容

將軍 (苦笑) 馬鹿な、お前達に任せたら、わしは何も食はんことにならぬよ。副官はどうした？ 阿片で行つてるか？ 誰か、その邊でこの鶏を殺け！ わしの眼に見えんところで作らんぞ。君子は厨房を遠ざくちや。生きた物を殺すのは、見るに忍びんこつちや。(兵卒の三、鶏を掴んで厨房へ去る) 次には豚ちや。(兵卒の四) お前、これを料つて来い。それから、お前(兵卒の二) その大きい卓を掃除して、食卓の準備を。(兵卒の四去る) 次にお前だ、(兵卒の五) どうか酒を見つけて来い。(兵卒の二、卓を引張つて来て、中央へ据ゑる) よくこの家のものどもに訊ねて見るがよい。(捕虜一同) お前達の生命は、わしの手にあるうちは安全ちや。さあ、酒はどこにあるかの？ それを云へば、きつと保護してつかはす。どうちや、誰か、この家の持主は？

茶館の亭主 わしでございます。——今仰有りました、生命だけは御助け下さるのでございませうか……？

將軍 お前か？ なかなか人相の良い老人だ。助けてつかはすとも。その代り、酒を出せ。酒に限らず、すべて食料品は残らず正直に

これへ提供せい。兵卒共は空腹ちや。これも皆その方達が、赤い軍隊に虐殺されるのを救ふために、かうやつてわしの軍隊が聞つとるのちや。保護してとらせるから、安心して、貯蔵品を全部これへ持て！

茶館の亭主 それなら、大將さま、ちよつと御腰をお上げ下さりませ。——實は、その寢臺の下へほんの少しばかり、わしの食ひ分だけ残してありますので……。

將軍 よし、よし、自白すれば、それでよい。(兵卒の一へ) その下を探せ。(兵卒の六七) この老老に用はない。外へ引出して銃殺せい！ 慈悲の死刑ちや、赤い軍隊に見つかつたら、それこそ車裂きに會はうも知れぬ奴だ。(茶館の亭主、兵卒二人に手を取られて、必死になつて争ふ) これ、これ、手荒くしちやならん、悪みを加へてやれ！

茶館の亭主 (號泣する)……そりや、約束がしがひますだ！……約束がしがひますだ！……わしを何のために殺すのだ！——ええ、畜生ッ、鬼ッ！ (悪罵！) (去る)

將軍 (兵卒二三へ) 酒もある、粉もある、いや、いろいろとあの老老め、貯へて置いたもんだ！ それを全部あちらへ運んで行け。

久し振りの酒宴だ！——(兵卒二三廚房へ去る)

戶外に茶館の亭主の泣き叫ぶ聲。だんだん遠くなる——突然二發の銃聲。

將軍 (ほかの捕虜達を顧み) これは軍律ちや。人道に忍び難いことちやが、如何ともしがたい。お前がた、少しゆつくり休憩せい。(残つてゐる兵士達に) 別に危険はない。あちらへ行つてくれ！ (黒い服を着た青年、頻りに若い女の容へ胸を突く。後者は知らぬふりをして、椅子の一脚へ腰を下す。他の者もそれにならぬ)

將軍 (ボーイの假装をした黒い服を着た青年へ) お前は何か？

黒い服を着た青年 (暫く苦悶しながら) 僕は北伐革命軍政治部委員の一人だ！ (一同愕然とする)

將軍 (突立ち上がり) 何と云つた？——北伐革命軍……(慌てて腰のピストルを取り出す) よし、お前の立場には同情する。その同情が、この弾丸だ！ (ピストルを振す) しかし、待てよ、わしは手づから生物を屠るのはわしの趣味でない。(戶外へ向つて) 誰か、副官を呼べ！

副官 狙へ！

兵卒達將軍(銃口を向ける)。

將軍 な、何だ？——間違つちやいけない。狙撃するのはわしぢやないよ。それ、そこにゐる若い者だ。副官、感違ひをしちや困る。軍律は、何處までも軍律ちや！

副官 (氣色ばんで) 李將軍、もうその軍律は私達の間にはおしまひだ！ 兵卒達は、女と酒と肉とが欲しいのだ。將軍の獨り占めにしてゐる物が全部欲しいのだ！ それを渡すか、それともこの際際で、潔く往生をするか、私は、兵卒全體の意志を代表して、貴方に宣言しに来たのだ！

將軍 さては、反逆だな！ (口惜しさうに身悶えする) よし、生物の血を見るのはわしの趣味ぢやない。——潔く、せつかくの女と、

酒と、肉とが全部お前達にやらう。(歎息しながら寝臺へどつかと腰を下す) わしも、こんなに部下の者どもに見知られるやうになつたのか？ 世の中はだんだん迷になつて行く。強い者が弱くなり、弱い者が強くなる。頭のある人間が馬鹿になり、馬鹿な人間が賢くなる。金を持った奴は貧乏になり、貧乏人は富豪になる。——あさましい世の中ちや！

廚房に働いてゐた兵卒達、それぞれの料理や酒などを持ち運んで、中央の卓へ並べる。副官と彼の引率した兵卒達、それを見ると俄かに銃を棄てて、卓へ押寄せ来る。この時黒い服を着た青年、飛鳥の如く身を躍らして、梯子段の上から食卓めがけて、赤いピラを叩きつける。と同時に、若い女の容、素早くその場をくぐり抜け、卓の一端へ駆け上がる。戶外の銃聲ますます近づく——將軍きよつとして起ち上がる。

若い女の容 (一同へ呼びかける) 飢ゑたる兵士諸君、今諸君の手に取つてゐる傳單は、諸君が何故こんなに飢ゑてまで戦争をしなればならないかといふ理由を、極く簡単に説明してゐる！ それは、諸君の、ほんたうの諸君の戦争でないからである！ 諸君は外國人の

犬であるこの老老な怪物の金によつて雇はれ、彼の私腹を肥すがためのみ戦争するからだ。諸君の戦争がほんたうに正義の爲め人道の爲め、諸君自身の爲めならば——

副官 (ピストルを向け) 赤賊だ！——ボルシェヴィキ！ (狙撃せんとす)

黒い服を着た青年 (副官を背後より射る。副官驚る) 皆な、黙つて聴け！

若い女の容 ——それは先づ、かういふ軍閥を餓死せしめてこそほんたうの戦争としての意味を持つのだ。われわれ北伐革命軍は、さういふ主義のもとに廣東を出發した。われわれの軍隊は決して街や村を、戦争の報酬として掠奪させはしない。諸君の妻や娘を、諸君自身に姦淫させるやうな悪虐な戦争はわれわれの戦争ではない。われわれは、中國四億の諸君と同じやうな民衆の中から生れた軍隊である。決して、個人督辦や地方の軍閥が金で集めた軍隊ではないのだ。しかし、韶關から長沙まで、長驅何千里の間、わが北伐軍は到る處諸君の喜び迎へる處となつてゐる。それはどういふ理由か？——阿片を喫ひ、婦女子を弄び、私財を貯へ、外國の資本家の金に買はれて、戦争を賭博だと心得てゐる

上海の宿

上海では、まる三月とも、同じ宿屋に居つた。この宿といふのが、頗る妙な場所にあつて、四方ともに藝者屋に囲まれてゐるといふ、全くの狭斜の巷だつたので、最初、私は、そこへ私を同伴して宿の主婦に紹介した、五十嵐君を、一種の憎しみと侮蔑とをもつて考へたのである。それには、こちらにも幾分落度がないとは云はれない。はじめての支那への旅を、全然、無紹介で冒険した上に、着く當時からの秋の雨に、支那語のわからぬ支那へ来て喘と當惑したN.Y.K碼頭で、誰一人タキシードの乗りやうひとつ教へてくれるものがないところから、ついそれまでデツキを散歩し合つたり、サロンでいつしよになつたりした五十嵐君に御案内を一任してしまつたのである。「まあ、わしの宿へいらつしやい。」

氣輕にから承諾してくれた、その宿が、かういふ場所だつたのである。五十嵐君とは、長崎からかうつと同室で、その職業の造船技師であること、邸が長崎にあつて家族が幾たりあること、上海にもと或る汽船會社の支店長をしてゐたこと……などを知つた上に、その特徴のある相貌に、性格に、多少行ずりの興味とでも云ふやうなものを感じてゐるではなかつた。五十嵐棟助、といふ名前からして、どちらかと云へば、記憶に引つかかりやすいところがあつた。その五十嵐棟助君は、私達の眼から見ると、典型的な小ブルジョアであつたのである。大概の小ブルジョアがさうであるやうに、彼は、醜い趣味を持ち、不徹底な女性觀を抱き、あまり健康でない胃腸を所有してゐた。——かういふ抽象性の具體化を、私は、彼の相貌と、十二三歳の御みやげ物らしい松茸と、尠大な旅行靴とに見出した。一見、五十嵐君は、風采の揚らぬ紳士であつた。四十を越した自分などから見ても、もうい

い年配の、赤けのきは立つて来る頃合ひに見え、たし、それに、胃腸病患者特有のあざくろい皮膚と、栗の果のやうな頭に角ばつた頸を併有してゐて、おまけにひどい近視であつたのである。この近視は、レンズの強度なせむか、とすとすると眼鏡が裂けてゐるのではあるまいかと思はれるほど、彼の眼球に、異様なフォーカスの散大した瞳の持主であるやうな外見を興へた。最も彼の印象的であつたことは、その音聲である。アメリカに永らくゐた自分は、よくアメリカ人らしい日本語を話す高等移民を知つてゐるが、五十嵐君の長崎辯は、それにそつくりだつたのである。むやみに調子高で、これといふ可笑しみのない事柄にまで大聲で笑つたり、演説のやうな口の切りかたをするところなど——どうしても、加州邊のチャイオンで話し合ふ細高さと共通した點を看通すわけには行かなかつた。職業によつては、内地の、東京あたりでも、かういふもの云ひやうをする人間も見受けられないが、あつてもごく罕である。「むやみにしやべくる男だな。」ふだんはむつたりやなので、私は、必要以上にならなかつた話に力點を置く人間を嫌ふところ

る、その將軍のやうな利己主義な怪物が、われわれの軍隊にはゐないからだ！ われわれの軍隊は、民衆によつて組織された大きい力だ！ 苦力に變装した、北伐軍の二人の偵察隊員、將軍の妾を引き立てて入り来る。將軍彼女を見て色を變へる。將軍の妾（號泣しながら）……閣下、御降伏なさい！ わたしはたうとう隠れ家から見出されました。しかし、いつもの戦争とちがつて、この人達は何も悪いことはしませんでした。……お願ひです、降参して下さい！（苦力の手から離れて將軍の膝元へ泣きくづれる）將軍（推然として）どうも、世の中はすつかり逆さになつたやうな氣がしちよつた！ 強者が弱くなり、弱者がだんだん強くなるんぢや！（この時、苦力に扮したる偵察隊員、つかつかと詰め寄つて將軍の兩腕を捉へる）いや、御急ぎには當らん、わしもかういふことがあるかも知れんと思つてな、今度の戦争へ出發するときから實はかういふ物を持ちんと用意して居つたのぢや。これを見られい！ 將軍懐中より折疊んだ、敵方の軍旗、青

天白日旗を取り出し、轟と一同へひろげて見せる。兵卒達、室の中央に茫然としてその旗の動くのを見成つてゐる。ごく間近に銃聲と吶喊の聲。將軍 おいお前達、早くこの旗を軒端へ立てい。そしてあの古い旗は、引きおろして、そこに死んでゐるわしの參謀の死體を包んでやれ！（兵卒達五六名、彼の下知に従ふ）——まあ、敗軍の將だ。わしを何とでも勝手にしてくれ！ 苦力に扮した偵察隊員の一人、いや、恐らく閣下は、このまま無抵抗で兵卒全部を擧げて御降伏になれば、わが軍では、閣下を再び起用して、新に北伐軍に編入することせう！ 若い女の客、兵士達諸君、これが支那の戦争である！ われわれには、本来、敵も味方もなかつた筈だ！

ろから、船の中では、なるべく自分だけの考へに心をまとめる方針でゐた。それが、碼頭の數百人の苦力の羅々しさの中へ投げ出されて見ると、やむを得ず、より羅々しくない五十嵐君を頼るやうにさへなつたのである。

宿屋は、支那家屋を無理に日本造作に起用したところから、よくニュー・ヨーク遠に見受けられる植民地式の日本間で、壁のペンキ塗りに天井のプラスチック、それへ墨を敷いて、連磨の掛軸をぶら下げるといふ趣向なのである。雨の中を自動車で来て、何の豫想をめぐらす機会も與へられずに、暗い階段を案内されたのが、ガラス天井に兩脚がしきりと踏つてゐる、水族館の底のやうな部屋であつた。

そこへ茶を運んで来て、旅館といふものに残存する日本の封建主義を、そのまま一わたり踏襲して客に見せないと承知しないのが、主婦といふ口忠實な女性である。ひどい骨ばつた長崎辯なので、この方は、男の五十嵐君の場合よりもつと困つたのであつた。が、どうせわかつてもわからなくともいいやうな事情をしか云つてゐないので、私は、勿々に食ふ物を呼んで、そのまま、いとも一重にまで迫つてゐる支那の最初

の夜を見物に表へ飛び出したものである。が、雨のさ中である。外套も洋傘も持ち合はさない自分は、昔のアメリカ放浪時代のやうに、サック・コートの襟を立てて、びしやびしや濡れたサイドウオークを歩いてゐたのであつたが、不圖、古着屋のいっばいに立ならんだ通りへ出ると、せめて古物のレイン・コートでもひやかして見ようといふ氣になつた。

「ハオ・マッチ・ジュー？」
大型の外資や、馬の毛で織つたやうな洋服などをぶら下げた支那人の店々を、いかにも支那人にわかりよきさうな口調で云つて、値踏みをして歩いた。こちらで氣を利かして、わざとビブザン・イングリッシュを使つてゐても、一向それをわかつてくれずに、何やら大聲の支那語でわめき立てられるには、追がに苦勞がひがなかつた。だんだん考へて、私は手眞似を使用することとした。ともかく、同じやうな店を、十三四軒も漁つたのち、一着のレイン・コートを十一弗で購つた。それを着込んで、そのまま、途中であらと見た日本料理店の電氣行燈の出でゐる家まで戻つて、頗る熱かつたり、反對にぬるかつたりして出現する鏡子を四五本脱すと、大體の道のりを教へて貰つて、上海の銀座であ

る恰好をして見せては、彼女として一番優雅な支那語を使用するらしかつたが、私は、箸を持つた片手で小蝦の酸漬を叩いて見せて、「食べろ！ 食べろ！」と大聲で囁つた。卓の上の物がすつかり揃きてしまふと、娘はしきりに私の手を引いて、隅の小さなベッドの方へ連れて行きたがるのである。極端に性病を懼れる自分は、娘が上着と下着を外して、ベテコート一つだけになるのを見て、大股にそこを歩き出した。血を掃除してゐた婆さんが、階段の中しきりになつてゐるカーテンから首を出して、ベッドの方へ人さし指を突きつけながら、わいわい忠告するのであつたが、やや酔の廻つた自分は、口を大きく開けて婆さんの無表情な表情を笑つた。

娘はごく簡単な上下の着物を又着なほすと、ぶつとさひひながらベッドのカーテンをからりとものやうに開いて、婆さんの方へ向き直ると高い聲で挑発的に話しかけた。婆さんも取けてはゐぬらしく、さかんに音楽的な感言を飛ばす。かうして、つい十分前までは、三人が笑つてゐた一室が、妙に氣まづい言語の交戦場にな

る大馬路附近まで黄包夫を頼んだ。見るもの聴くものが、全然目新しい支那であつたので、私には、特別に一般の風習になつてゐる「支那の淫賣を買ふ」といふやうな、選定された目的はなかつたのであるが、或る狭い露地に立つて、日本などでは縁目でもないと思つて見受けられない賑やかな光景を覗いてみると、不意に横合からあらはれた婆さんと娘とが、私の鳥打を一人が、ステッキを娘がといふ風に、何のことはない強奪して行つて、何やら云ひながらどんとん奥へ逃げて行くので、急にむかつ腹が立つて、二人を追ひ駆けて行くと、それが私のやうな掠鳥を釣る手らしく、娘と婆とは、一軒の怪しげな家の中へ身を跳らして、中からお出で、お出でをして見せてゐるのであつた。

「畜生ッ、なるほど素早いや！」
私は、半ば苦笑しながら、その支那家舎へ飛び込んだ。
「あんたは、實に大膽だね、——無謀ですね。」
あとでよく人からかう注意されたのであつたが、考へて見りや、實際、中から何が飛び出すやうなわかつた筈のものでなく、殊に多少なりと金を懐中してゐた關係上、現在の上海に於ては、かたし無謀な行爲にはちがひなかつた。全

然支那人を懼れないことは、ときに支那人が全然こちらを懼れないことになり得るのである。私達三人は、暖の親子のやうに、その野鷲の種家である二階の一室に、おびしい雨の音を聴きながら、窓の下で老酒を酌んだ。料理を注文するにも、何が何やらさつぱりわからない自分は、原始的に筆と紙とを借りて蝦の畫を描いたり、鶏といふ文字を書き込んだりした上に、大きく「老酒、一元」として、二枚の銀貨を婆さんへ投げ出してやつた。

残された娘は、しきりに壁に垂れ下る前の切髪を吹きかけながら、いろいろと支那語で話しかけるのであつたが、言葉こそわからなくとも、その流暢と媚めかしく傾けた首の表情で、何を暗示してゐるかがわかつた私は、ノオ、ノオ、の一點張り、酒を呑む恰好を示してゐた。

婆さんが、二本の錫の徳利と皿に載せた料理を二品ほど運んで来た。先方でもわからぬ支那語を使ふのだからと思つて、こちらもどしどし日本語で物を云つてやつても、やはりそこには無理押から来るごちなさがあつて、結局、黙つて呑むものは呑み、食ふものは食つてゐた方が、雙方の得手らしく思はれた。

「結局、安く済んだといふものだ！」
自分は、實際のところ、二階から降りる途端に、階下で三人で麻雀をやつてゐたうちの一人が、屈強の若い壯漢であるのに氣がついてゐたのである。
翌朝、夜前の経験を話すと、五十嵐君は、瓦を敲き刺るやうな聲で、
「あんた、上海がおはじめだなんて、私等を

「おんなはつたな！ ええこつちやござんせんぜ、そんげな誑つきなはつと！」
と云つて一向に取合はなかつた。
長崎辯と云つても、五十嵐君のそれは、多分に大阪調を加味した種類であつた。これは、彼の梅津な過去の経歴が、数ヶ所の語源を綜合化せしめた餘儀ない事情にもよることであらう。

2

私は、その翌日南京へ出發した。
内山書店の主人がわざわざ訪ねて来てくれ、一互りの上海學を講義した上に、南京行の希望に對して、北スティーションまで見送るといふ最も具體的な面倒を見てくれたのであつた。
南京へ行くといふことは、私の元來の目的ではなかつたのだが、支那へ来て、ちよつと事情を説明して貰ひたかつた人が、私よりすこし先に着いて、南京へ出發したといふことであつたからである。南京への旅は、まる二日を終つて、會はうとした村松君にも會つたのち、私は、むしろ騒々しい上海に幾分なりと親しみを覚えて、三日目の朝、同伴の人に宿まで送つて貰つた。四十を出た男が、停車場から宿まで獨りで歸れない、といふ愚劣なほどの不便さには、

迫がに閉口した。
「どうしたら、支那語を習はずに、最も短時間のうちに支那を知ることが出来るか？」
こんな不自然な、矛盾そのものである命題から出發して、私は先づ手あたり次第に、支那に關する日本語や英語の書籍類新聞類を漁りはじめた。見るまに、私の卓の上には、もとは「上海」案内記しかなかつたものが、各種類の著書で山が築かれてしまつた。恐らく最近の私の生活で、上海へ着いた一ヶ月間ほど、活字と活字の間から何かを發見しようと思つて努力した時間はなからう。

新聞に名前などが出ると、半ば好奇心から、半ばは親切氣から、毎日のやうに宿へは人が訪ねて来たのであつたが、私は、出来る限りそれらの人達から彼等の經た支那生活を吸収しようといふため、能ふ限りの時間を割いて、いつしよに街へ出たのであつた。
一度などは、長い髯を生じた老人がフロックコートを着ていかめしい雅號を刷つた名刺を通じて訪ねて来たので、何かの反動團體の來訪かと思つたら、過去四十年間の上海生活を物語りはじめ、支那の電力會社に對して訴訟を起してゐるのだが、日本領事館では一向に取合つて

くれないから、是非、この由を日本の言論界に訴へてはくれまいか——と云ひ出して、謄寫版刷の訴訟提起の始末書を置いて行つたやうな篤志な客もあつた。この篤志な客人は、本來同情すべき立場にあつた人らしいが、年々訴訟の延期されるにつけて、彼の損害賠償の要求額が多くなるとかいふので、實は上海での「奇人」の一人に數へられてゐる人物らしかつた。
一體に上海の共同裁判所である會審衙門は、陪審官は各國の副領事が出席し、檢事や判事は支那人がこれにあたり、訴訟を提起するには先拂で訴訟費用として一萬元を供託することが必要とされる。その金額を一應受理すると、法廷では第一審の開廷を通知して、型のやうな姓名年齢の訊問で閉廷する。それから原告も被告も、第二第三審といくら待つてゐても、訴訟に對する結審は更らにない。どうしてないかといふに、これは支那側では治外法權の撤廢を主張してゐるので、その國辱的案件的整理を經ないうちは、本當の裁判は行はれないと云ふ理由からなのである。そのため、會審衙門には、無数の訴訟事件が時代の堆積で黄ろくなつて停滞してゐる始末であるが、それを外國人はどうともすることは出来ない。

私が殊更らに、こんな裁判の事情などを書いたのは、單に書記の長靴の老人を憶ひ出したが爲めではないので、實は、そのことが五十嵐棟助君の生活と、やや深い關係が存在したからである。

彼は、よく時偶の會話を挑む私を、「裁判、裁判」と云つては、通けるやうにしてタキシード何處かへ消え失せる習慣を持つてゐた。好奇心に驅られた私は、めしの給仕にやつて來る女中を掴まへて、
「一體、五十嵐君は、毎日何をしてるんだね？」と訊ねて見るのであつた。

「五十嵐さまでございますか、しよつちう御出かけでいらつしやいます。御いでになれば、書き物をなさつてでございます。電報だの、御手紙だの——何でもいつも御忙しくいらつしやいます。あの方も、貴方さまがどうしていらつしやるかツて、御飯のたんびに御訊ねなさいませが——」
受持の部屋を共通してゐる女中は、小さな眼をまぶしさうにしばたいて、膝の上の盆を曲藝のやうに廻轉するのである。
五十嵐君の部屋は、家の東側にある、ほかの室から全く隔離した、うす暗い箱のやうな一室

で、物干臺をへだてて隣家の「梅もと」といふ藝者屋の窓と對してゐた。
ときには、同じ呆けた表情の女中は、「ただいま、あの別嬪さんが来ていらつしやいます。などと密告することもあつた。
そのうちに、私も一向に落ちつきのない自分の部屋を、ほかの靜かな部屋と變へることになつた。

一體、この宿には、支那風な中庭を圍んで、四面に、兩端をびんと張つた、細かい魚鱗のやうな窓を載せた二階があつて、かれこれ十四五室の客間を持つてゐるのであるが、あとから建て増した分が、東側の五十嵐君の部屋と、西の隅つこにある私の移つた部屋とであつた。西の隅つこといふのは、二階へのぼつて階段のわきの、戸棚の蔭になつた入口を持つてゐる、殆ど誰にも氣づかれないやうな小さな部屋で、レベルも普通の廊下から三尺ほど低い、そこだけ支那人の住宅區域に突出してゐる一室であつた。

探光の方法などはてんで考慮に入られぬ支那家を、買ひ潰したのへ疊を敷いたものだけに、窓には鐵網が張つてあり、空氣の流通が悪くて、日中は半鼠のやうに暗かつた。窓の下には長方形な壁に切られた、塵埃箱のある袋

町があつて、そこには終日乞食や物賣りが大聲でわめいたり、子供が蹴鞠をやつたり、ホテルのボーイ達が来て博奕を打つたりするセメントの露路が展けてゐた。窓から見えぬ入口から、いろいろな女達が出て來たり、廣東風な人形芝居を催して客を接待する隣家の壁などが聞えた。

「あの下のねえ、支那人がやかましくうてな、どうぢやろと思つて下さい。」
主婦はこんな云ひわけをして氣の毒がつかう。しかし、たまじ日本人の言葉などよりも、わからぬ支那語の方が、直接何の聯想も呼びおこさぬところから、それは苦ではなかつた。私は、そこへ古新聞の山を積み重ねた。一度に七八冊の本を開いておいて、革命以來の一人の人間の動きを調べたり、終日電燈の下で毛筆のやうな文字の散らばつた粗惡な地圖を眼が修むまで眺めたりした。部屋掃除の権利を主張する女中に、しばしばそこを追ひ出されることもあつた。

近代的な神經や感覺の持主にとつて、日本の舊式の旅館で二日以上を生活するといふことは、きはめて苦痛なこととなつて來た。そこには、封建時代からの追従と敬語とがあり、無意味な器物と眼だけの食料品がならべられ、あ

らゆる不便と不健康とを忍んで、客は高價な費用を負担せられるだけなのだ。他人の邪魔をせずに廊下を散歩するわけには行かない。愚劣な會話の相手にならず、風呂を浴びることは出来ない。自分の行動をスパイされずに劇場から靴を取つて貰ふことは出来ない。嫌ひなキントンや薪鉢を除けば、オムレツにはエキストラがつく。そして、無暗に嗜みたくもないお茶を注いで、取りかへしのつかぬほど遺憾な口調で、お天氣の曇つたことに運命的な申込みを述べる女中が存在するのである。

私の上海の宿は、それに、一言の言語も通ぜぬ空漠とした支那の世界を辿らしたものであつた。その支那の世界から、時折、各自の好奇心を尊重する日本人の客がやつて来た。客の大部分の人は、妙に私が文學と議論とが好きなのだと思つて、部屋中をロシア文學談や支那革命の理論でいつばいに満ちたが、さもなくば、四等品級の輸出税を拂ふ日本酒を飲んで、その際、何かしらアルコールの作用で常識から離れた行爲を言ふかと思つて自分を觀察する癖を持つてゐた。それらの人達の多くは、何も知らないからこそ支那へ研究しに来た私に、支那に關するあらゆる意見を徴収した。一人の友人

間が、一日に一回私を訪問することは、その人にとつてはむしろ好意を示してくれることに該當するのであつたが、同じやうな好意の持主が同じ日に五人もあるとなると、好意といふものの限られた人間的表現に對して、それを受けられる方がやや倦怠を感じることは免れ難いのである。それは、人間が活字の上を眼をさらして居られる時間が絶対に無限でないと同じことであつた。又、それは、毎日十二時間づつ、若い議論好きな人と革命理論を議論し合ふことの不可能さとも共通してゐた。

私はそろそろ苛々し出した。朝、眼がさめると、窓の下では、透き徹るやうな聲をした老人の配達が、新聞を解れ廻つた。「申報！... 申報！」それが済むと、焼餅賣が来た。そのあとからは、西瓜子の女が「きやんわーつ！」といふやうな奇聲を張り上げて執念深く角に陣取つた。次には瀬戸物屋が茶碗をかち合はして大聲叱呼して退場すると、太鼓と鐘を車刺しにして、それに四つに分銅をぶら下げ、その樂器の柄を廻轉することに、日本のチンドン屋以上のオーケストラを出す小間物屋が、すこぶる猥褻な感じのする支那語で、總體で五元ともしないほどの荷

物をむやみやたらに觸れ廻つて歩いた。これらと、ほかに無数の野菜賣り、太刀魚賣り、菓子賣りなどの立てるオベラ的叫喚のうちに一日が暮れると、今度は同じ執着性を持つた雲吞屋と、揚豆腐屋とが、夜の二時頃までは、日本の火の番よりも確實に大聲でその町を見廻るのである。ことに、雲吞屋のかち合はせる木製の樂器と來たら、雲吞の必要でない人間にとつては、純然たる耳の兎器であつた。

これらの袋町の音楽をも、私の神はだんだんに憎惡の對照として行つた。「又、申報から、わんたんみいーンまでの一日か？...」私は活字に眼を凝らし、支那人の名に瓦斯のやうな頭痛を感じ、議論の響きが鍼力屏を詰めた龍のやうに頭に充滿すると、怒りつぽく、狂人のやうに部屋の壁を蹴つたり、窓を開けてみたり、閉ぢたりした。「何のために、あんな大聲でわめきやがるんだ、馬鹿ッ、ちゃんころ！ そんな二東三錢の品物を、誰が買はうつていんだい！」

されて行くのを知つた。私の思想が、憂鬱な分解作用からニヒリズムに變りつつあるのを知つた。私は、不意に誰かが私の部屋へ入つて来て、不必要な議論をすることを恨れた。それが女中であつて、無言で火鉢に炭をついで行くのでも、あらゆる場合に關する疑惑を彼女の一舉一動に感した。

同じ疊がいつまでも足の下にあるといふことに、私は非常な腹立たしさを覺えた。ものを考へようとする私の頭腦が、まるで支那家屋そのもののやうに、單なる壁を持つた空隙であるやうな気がした。机といふものも持久力、それに終日肘をついて暮す私が、だんだん、机と同じやうに四脚で自分を支へてゐる、平面的動物かなんどのやうに想像されて来た。私は一日に幾度か、溺れかかつた嬰ん坊のやうに窓をあけて、新しい空気を吸ひ込むのであつたが、窓の下を見るときとつとした。そこには、無表情な支那人が、無表情に激動してゐるのである。その手や足や、汚い馬褂や、厭々しい言語から、私は強い電流のやうなショックを受けた。彼等を心から同情してゐる筈の私が、その癖、彼等とは一番關係の遠い人間のやうに思はれた。

に疑ひを持つた。と同時に、私の心は、「大家へ！ 大家へ！」と不斷の要求を感じてゐた。むちやくちやに大道へ飛び出す日數がつづいた。ちつとして蘇州河の河岸に佇んで、半日も荷役の苦力の奔き争ひ、唾を吐き、一輪車を押し、銅貨一つで喧嘩をするのを眺めた。行ずりの黄包夫の肩を敲いて、彼等の好きな居酒屋へ同行して、銅片二三十枚の酒を鍼力罐であたためて呑み合ふこともあつた。工場に、郊外に、大道に、露路に、商店に——私は、つとめて、それらの底に動いてゐる「労働」を見ようとした。いつも、大家を。

物と考へてゐないことだつた。その世界に絶望して歸る私には、より憂鬱な自分の部屋が待つてゐた。その部屋には、人間一人を封鎖して置くだけの空間があるきりである。部屋の周囲には、現金を持つた人間だけを尊敬する植民地人が歩いてゐる。私は、終夜、その部屋の中で、急に白髪が殖えた髪を掻き捲つて、火のついた動物のやうに歩き廻つた。ときには、ヒステリー女のやうに涙を流した。又、ときには、自殺といふことの卑怯さを思ひながら、機械の廻轉に惹込まれるやうに、自殺した自分の姿を考へて見てゐた。部屋の隅には、鏡臺といふものがある。それに自分の顔を覗めた私は、こんなことを鏡にむかつて語つた。「お前、こりや、アメリカ時代の植民地生活と同じぢやないか！ お前が、あの時分の氣持に逆戻りしてゐるのか、それとも植民地には人間をかういふ風にする雲團氣があるのか——そのどつちかだらう。しつかりしろ。眼を開けて、ほんとの支那を見ろ！」

して、自分の苦悶にだけ没頭してゐた私は、いつの間にか、同宿者の五十嵐棟助君も、やはり東側の同じやうな部屋で、何かに煩悶してゐるだらうことをすつかり忘れてゐた。

3

「どうしたんだい、五十嵐君はゐないのかね？」から訊ねると、デスクの番頭は、變色した金齒を見せて笑つた。

「おいでなんですが——ちよつと、その、理由がありません。」

それから、私は、すぐさま、東側の暗い階段をのぼつて、彼の部屋をノックしてゐた。返事があつたので、ドアを開くと、すつかり瘦せ細つた五十嵐君が、丸々と肥つた女と酒を嚙んでゐるのに出遭した。

「いいんですか？ 御邪魔ぢやありませんか？」
「いいえ、そげんこたなか——なかですばい。ま、お入り。」
すつかり弊ひの廻つてゐた五十嵐君は、長崎

辯と東京語をちやんぼんに使つて、私によりも、氣兼ねをしてゐる女の方へ片手を振つて見せた。二人の間には、花相が散離してゐた。私が何かのうちに挨拶をすると、猪口を取つて私にさした。膨んだ指に、深くルビーが食ひ込んでゐた。

「こりや、わしの神経衰弱の看護婦でしてな、よろしく。——どうです、瘦せたでせう？」
海へ来てから、一貫五百日も減りましたぜ。女子見たかて慾望なんかないんですが、獨りでゐますと堪りませんのでな。」

「五十嵐君は笑ひながら、女の肩を敲いた。弾力のなささうな頬に、女は笑顔を見せた。

「なかなか良い看護婦ですね。——そりやさうと、訴訟の方は？」
「いや、この通り。もうわし一人ぢややりきれませんから、本社から誰かに来て貰ふことにしています。」

かう云つて彼の指さした机の上には、開いたままになつてゐる切抜帳と、英字新聞や日本語の新聞の切抜がこまごまと載つてゐて、その傍には「肉弾」といふ小説が置いてあつた。
「貴方も切抜をやるんですか？」
「そりや貴方がたのはちがひましてな、わし

のは、裁判事件の方のだけでござへ。」
「ふむ、事件と云へば、その事件は一體どんなことでしたつね？」
五十嵐君は、ものごささうな顔で、机の上の切抜帳を取り上げた。貼つてある記事は、私にも時折目についた「新明報事件」といふ、支那の汽船と日本の社外船との衝突した事件であつた。

「あ、このことですか、貴方の關係して居られる裁判事件は？」
私の不用意さに對して、彼はすこしむつとしたやうな口調で答へた。

「この前話したやうに覚えてますが——しませんでしたかしら？ とまかく訴訟がややこしいんです。それに、支那側と英國人の辯護士が共謀になつてゐるんで——内々一二萬弗は貰つたでせうと思ひますが——わしの上海を留守にしている間に、すつかり悪化しちまうたんです。」

私は、切抜帳から、その事件の發端とも思はれる箇所を拾ひ讀みした。それによると、楊子江下流の黃浦江と呼ばれる上海に面した河の上で、支那側の汽船がジグ・ザグの航路を取つたために日本の第二淡路丸と衝突して、乗組人員三十五名は溺死してしまつた、衝突の前に、日

本汽船が警笛を鳴らさないのが悪い、しかし、日本側から云はせると、當夜は濃霧で、連も新明報の燈は見えなかつた、それに、パイを境界線にした港の問題があつて普通黃浦江の航路筋にあつて、どれほどまでの角度で船が迂迴した際にはどういふ規則に觸れる……といふやうな、技術上のデリケートな問題まで書いてあつた。もうすこしめくると、今度は裁判所では、支那側に支拂ふべき日本の汽船會社の損害賠償は三百何十萬弗とかで、それ以外に溺死者の遺族へ、弔慰金を出さなければならぬ、といふ判決が下されたと書いてあつた。

私は、直感的に、この五十嵐君の住んでゐる部屋にも、私の部屋と共通した何かがあるやうな氣がしたので、あらためてその變を見廻した。窓は二つあつたが、煤けたガラスからは、一定の水滲を通過したやうな光線しか射して來なかつた。同じやうなベンキ塗の壁に、鼠色で描いた杭州あたりの風景畫の軸がかかつて居り、人間と同じ天井によつて壓迫される二三のキャビネットや机や火鉢が、小さく隅々に散らばつてゐるに過ぎなかつた。總じて、この部屋は、私のやうな無一文の人間ではない五十嵐君が入つてゐるところとしては、いろいろな點で不向であつた。第一に、彼の所有品である偉大な筆が、このペンキ塗の壁に不調和であつた。安物の宜興燒の火鉢の傍らには、金時計がころがつてゐた。それに、夏の白布をかぶせたままの座蒲團の上には、膝をくづした藝者が坐つてゐた。——私には、彼が、謂はば「大班」級の彼が、何を好んでこんな一室に煙ぼつてゐるのかが疑問となつた。

五十嵐君は、女に命じて、隅の鈴を押させた。酒を追加するつもりしなかつた。暫くして出て來た女中は、私がこの部屋にゐるのをちよつと憚つたやうな顔をしてゐたが、鏡子を置くとき低

人といふのを見ようとしたが、入口には風呂番と番頭が三人立ちはだかつてゐて、今しも訪問者を送りかへしたばかりの興奮を見せて聲高に罵つてゐた。

冷たい雨の降りつづく日が来た。日本の都會のやうに、泥濘と紙の屑から来る、限りなく寒さと倦きはなかつたが、空虚な厭々しさと、憂鬱な建物や舗石の上に降り積る雨には、しみじみと人間の窮迫を惨めに思はせる冷無情な無關心があつた。都會の底では、苦力は素足で車を曳いた。笠を着たり、傘をさしたりする労働者は、殆どまれである。しとしとと降る雨の中に、都會はそろそろ冬に入つてゐたのだ。濡れたサイドウォークにぼんやり影を映してうろついて歩く失業者の群が多くなつた。牝猿のやうに子供を腹へ纏りつけて、藁の帯をしめた女を食が、人を見ると二町も三町も濡れながら睨んで来た。街角といふ街角は閉絶するやうに突出される掌でいつぱいになつた。茶館や料理屋には、野鶏が客の數よりも夥しかつた。フランス租界のある支那旅館へ、人を訪ねて行くと、廊下にむらがる淫賣婦の數は、混み合つた電車を思ひ出させた。その一人一人が、飯店の扉をノックして、性の取りに從事し

てゐるのである。曾て、私が第一夜に飛び込んだ大馬路附近の淫賣窟は、市の新しい區劃整理のためにすつかり道拂はれて、女達は夜になると、永安公司の前や天蟾舞臺附近、さては北四川路の方へまで流れ込んで、寒さうに肩をすくめながら、男を漁つた。雨に濡れた白蘭花は、通行人の鼻へ突きつけられても、それを嗅いでやるほどの嫌客もゐない。どの町へ出ても、あまりに多數の人間が、一度に街へ押寄せて来たやうな氣がした。

私が、五十嵐君によつて、近所の料理屋へ招待されたのは、かういふ一夜であつた。「こつそりとね——わしは、いつも裏口から行つて、黙つてずんずんわしの特別に上ることになつてゐる裏二階へ入るんです。それで、入口だつて、わざとこの汚い裏道を行くんですよ。」彼は、宿の傘に隠れながら、先に立つて城壁の下のやうな小便臭い細い通りを歩いた。そこから、高い鐵柵のある門口へ来ると、横手には無數の貧民の手で掻き廻された塵埃箱があつて、紙屑と糞とがその邊へ氾濫してゐた。水溜りのある丸石の鋪いた通路の行詰つたところに、四角な電燈がついてゐて、その下に支那人の巡警が私達の姿を見て、腰の邊まで低頭した。石段

を三つほどあがると、あくどい衝立があつて、その蔭から中年の女があわてたやうに飛び出して来た。五十嵐君は黙つて入つた。彼は何やら濃い色の和服を着流してゐるのである。二階——きはめて高い洋館の階段をあがると、倉庫のやうにがらんとした家のうちに三味線の音がした。素足に廊下がひたひたと粘りついていた。二人は廊下の奥の別な階段をもう一つ下つて、遂に五六段のぼつた中二階めいた座敷へ通つた。

中年の女と彼は抑れ抑れしい口を利いたのち、一定の食物と酒とを注文した。あとからあとから、火や座蒲團や餉臺を据ゑにやつて来る女達とも、彼は、口を大きく開けて笑つたり、長崎辯で聲高に冗談を云つたりして、よほどその家には舊くから顔が知られてゐることを示した。酒が出て、河豚料理が運ばれた。そこへ二人の女達が三味線を持って入つて来た。河豚ちりを拵へてゐる中年の女と、三人の女性を對手にして五十嵐君は、さかんに上海のゴシップをはじめた。酒が廻るにつれて、彼の聲は益々高くなり、話題はすつかり自己中心主義になつた。

「この男は、何のために俺をこゝへ引連れて来たのだらう？」

私はから思ひながら、鹽酒を呑んでゐた。「さあ、何か叫びませう——お明ひなさいよ。そちら、いかが？ 一つお惚氣を？」女達の二人は三味線を取上げると、撥で私の方を指した。これも植民地の脂肪に感肥りのした女である。「冗談、俺は呑む一方さ。」私は所在なさに五十嵐君の方を向いた。彼は、その晩は、どうして自分の偉大な人物であるかを、あらゆる人間に見せようとする本能に驅られたかのやうに、瘦せた體を膨らせてゐるいろなことを吹聴してゐた。總體に、頗る利己主義な酒らしい。女の弾いた三味線は、飾つた倉庫のやうな建物に二倍ほどの反響を伴つて鳴つた。ほかの女達も、一刻も早くその冷たい室内から、藝者屋特有の陰鬱な淋しさを驅逐してしまはうとするやうに、むやみにわからない言葉ではしやぎ立てた。厚い支那家屋の壁は、その騒々しさを、ぐわんぐわん鐵で蔽かれるやうに反響した。だが、不思議と、かういふ努力にも拘らず、その場の空氣は一向に暖かにもならず、豫期され

たやうな氣も湧かなかつた。だいが酔つて来た五十嵐君は、四角な顔をして、まだ大聲で自分のことを傍若無人にわめいてゐた。その妻は、私の眼には、一生懸命に息を吸つて自分の體を膨らせようとする滑稽な仕事に從事してゐる、骨つぽい魚のやうに見えた。

「……川を渡つておそひ来る不逞のやからの、そのために、妻も——銃取り、應戦す。」私はぐつと唇を咬んだ。「何だ、そりや？」「これですか、こりや、あんた、いま流行の鴨線江くづしですわい。」一方、膨らむだけ自分を膨らませることに飽きたらしい五十嵐君は、今度は、もう忘れられてゐる筈の私の存在を憶ひ出したか、俄かに向きなほつて、かう云つた。「——へ、どうです、わしも一度は貴方へ上海を御目にかけようとは考へとりますわい！ まま、一杯！ これで、折角、お近づきになり

まして、あんな、支那人めがうるさうで、よう御目に掛けられまへんのぢや。まことに、誠實に失禮の段々……」

私を受取らうとすると、もう彼はどかんと後へ倒れてゐた。私は、禮を述べて、足に絡まる座蒲團を蹴ると、もう一度金屏風の衝立の前で、支那巡警の最敬禮を浴びながら、そとへ出た。「妙な男だな！」

「さあ、それも考へては見たのですが、どうもね、男として、今更投り出すといふことは。」

「だが、一體、この事件は、貴方が見てどちらが悪いと御考へなのですか？」

「わしの考へでは單なるアクシデントとしか思はれないのですが、——」

「では、日本側でそんなに大金の賠償を拂はねばならぬとはどういふ理由からですか？ 何かそこに弱點がなぐちや？」

「損害と人命の點ですな、ほかに何もないのです。ですが、現在の支那は金がなくて困つて居るでせう——それで、何かしらからいふ口實をまうけては、外國から金を取らうとするんですよ。その遺り口は非常に悪辣です。」

突然憤慨し出した彼は、一紡績會社が職工の過失で死んだのに弔慰金を出さうとする、その職工の家族なるものが四組も五組もやつて来て、終ひにはどれがほんたうの遺族であるかわからないところから、弔慰金を領事館へ委託して、警官立合の上で、送ることにすると、遺族と稱する者は、今度は大勢の無賴漢を驅り立てて、暴力をもつてその金を警官や役人から強奪して行つた、といふ一例を話した。

そこで、私は、最初は支那の民衆から國家の

ね？——」

「立派な一流の紳士ですよ。ボスですね、つまり、ソリヤ、貴方、支那には秘密結社といふものはいくらもありですよ。まあ、この上海で羽振りを利用してゐるのは青幫かね。この男は、青幫ぢやないかね。」

「そんなことまでして、汽船會社の賠償金を減らしてやる必要がどこにあるかしら？」

「いや、今までも、この事件を種に、随分と強請に来る奴が多いのです。だから、わしは隠れて會はんことにして居るんです。日本人方面に疎に多い。二百や三百の端金です。それがどんなことを云つて来るかといふと、みんなやれ支那の輿論を左右してやるとか、大きい方面へ渡りをつけてやるとか、實にいい加減な嘘八百なんです。出さないと脅迫がましいことを云ひやがるんです。それから一番困るのは、遺族の奴等ですよ。」

「溺死した人間の？」

「それですよ。」

「本社では一體何と云ふのですか？」

「その本社といふのが、實に何もわからんのですからね。日本と支那の事情などはてんでわかつてゐない所に、やれ強硬談判をせよとか、

、主義で分捕つたものを、支那の民衆が今なき、いづくしに恢復しつゝあるのではないか、それが厭なら、日本人は全部支那から手を引いたら良からう——とまで註釋した。

彼は、それには答へずに、時間がないからと云つて、そそくさと部屋を出て行つた。

5

その後、私は、五十嵐君の事件がどうなつたか、暫く様子を見かねて、宿舎に接しなかつた。宿舎を變へようと思つても、前からの宿料を借りてゐるので、ついそれもする事になつて、一月もまぢかに追つて来た。が、私の調べてゐる事柄にも、二三の有力な知人があらはれて、こちらの希望どほりの参考書を借り受けることも出来、やや系統立つた支那大衆の動向の方向についての示唆を得たやうな氣持になつた。

私は、それまで氣がつかなくかつたが、カール・マルクスにこんな豫言があつたのであつた。

「ヨーロッパの反動主義者どもが、追ひつめられて、アジアを通じて、逃げる試みる際、最後に支那の壁に、原始的反動と、原始的保守主義の安全地帯に通ずる門に行きつく

てるといふ風でね。こりや、ここだけの話ですが、秘密結社の親方なですよ、凄しい男です。人を殺してくれと云へば、いつでも殺つてくれる、ストライキを潰してくれと云へば苦もなくストライキのかたをつけてくれます。實に恐ろしい勢力を持つてる奴でしてね、今度の裁判事件も私の方の事情を嘆きつけてからに、賠償の半分ぐらゐは敗けるやうに運動してやらうと云ふんですよ。——どうでせうな、こんな男に頼んでみては？」

この唐突な質問に對して、勿論、私に出来合ひの返答のあるべき筈はない。

「——ぢや、これからその男に會ふんですか？」

「會ひます。今、電話で私にこれこれの處で何時までに會はう——と會見を申込んで來て居るんです。」

「頼んだとして結果はどうなるか？ 法律上、それから社會問題として？」

「さアそこだが——こりや、やはり、會審衙門の陪審官に出る副領事の意見を聞いた方がいいかも知れない。」

「一體その男はどんな人間ですか、風采とか性格などは？ 支那にはそんなのが多いのですか

、いゝのことだから値切られるだけ値切れとか、非道い返電をよこすのです。仲に入つたわしこそ、ほんとこんなになつて居るんですからね。」

彼は、頬のこけた頬を、冷たさうな指で撫でおろした。

「すると、貴方の立場は？」

「いや、これには前後の事情を御話せんとわからんのですが、わしはもと滿鐵の技師だつたのです。この汽船會社が上海に支店を持ちたいといふので、わしは滿鐵をやめて支店を取締ることになりました。その後、間もなくわしはその汽船會社と關係を絶つたのですが——事件といふのは、その後につつたことなのです。しかし、いざとなると、かういふことに當る人間はないのです。わしも頼まれてみると氣の毒でもあり、多少の責任も感じますので、是非一肌ぬいで解決させてやらうと思つて來たわけなんです。ところが、實際にあつて見ると、どうも問題が複雑してゐましてね、外國人が入る、支那人が騒ぐ、日本人が強請る——みんなで、この新明號事件を食ひ物にしようとしてかかつて居るのです。全く以て御話にならない——」

「ぢや、貴方が手を引いたらどうですか？」

とき、誰か知る、その壁に「支那共和團、自由、平等、女愛」なる題字の書かれてあることを！

マルクスのこの豫言は、レニンによつて忠實に科學的に研究されて、支那に於ける列國資本主義の亂舞に、強硬な無産階級の抗争が試みられ、その方策は、レニンが死んでからも、スターリン、ブハーリンによつて受継がれて居るのである。

現在の新興軍閥とブルジョア建設のための南京政府は、さういふ大きい史觀からすれば、或る程度までの過渡的役割を演じてゐるものとして、それにはその存在理由があつた。しかし、一面、新しい支那に新しい資本が集中すると同時に、世界の帝國主義戦争の再勃發の危機は、刻々としてその裏に動き聚まつてゐるのだ。同時に、そのことは、かういふことを意味する。

一日武漢政府の失墜と、廣東三日ソヴェットの暴壓ののち、俄かに潛行戦術に、農民運動に方向を轉換した支那共産黨は、あらゆる機會に、あらゆる排外運動に、あらゆる労働争議に、あらゆるボイコットに、常に勞資間の空隙を求めて、幾萬人の犠牲の血で塗られた戰術的闘争をゆるめないものだ。

私は、上海總工會の華々しかった活動の歴史を辿つた。そして、文字の上でそれを知り、數字で記憶すると共に、暇にまかせて、日本人の自動車屋の大連公司といふギヤラーチのある横町に入つて行つては、その當時、反動白崇禧の軍隊と果敢な市街戦を挑んだ便衣隊のピストルの音を、その狭い小路から聴き取らうとした。關北の商務所書館の一室には、總工會の前衛が軍隊に包圍されて歩兵解除を行はれた本部があつた。私は黄包夫を雇つて、現在の支那に、四十二事件當時の支那を歩いた。滬寧鐵道北ステーションの傍には、いまだに取除かれぬ、枯れた蔓草のやうな一聯の鐵條網がある。黃浦江に面した、大阪商船會社碼頭の前の空地には、退却する北軍の捕虜を、英國軍が一週間雨の降る中に立たして置いて、日に一回づつパンを投つてやつたといふ空地がある。一度、足を南市の郊外に向けると、そこには、過去數ヶ年の支那革命に重要な役割をはたした龍華といふ桃の名所がある。そこにある警備司令部は、たしかに上海のバスチールに相違ない。

私は次ぎ次ぎと、かういふ最近の史跡をあさりはじめた。さうして、歩いてゐるうちに、私の頭の中には、最近の支那革命の生きた地圖が曳かれて行つた。フランス租界の Route de la Tour に、「觀我廬」といふ屋敷を持つた、最近の蔣介石の住宅を發見した私は、どんなに發見の欣びを感じたことか！そこへ、鉄釘をつけた兵卒を、幅の大きい自動車の前後左右へ立たせて、出来るだけクツシヨンにそりかへつて、宋美齡夫人と、英雄のやうに乗りつける新軍間の面影を思ひ返して私はひそかに苦笑を禁じ得なかつた。私の手帳には、その第三百十一號といふ番地と、安壯な純西洋風な建物のメモとが書き入れられた。さう云へば、現に、私達の泊つてゐる宿にも、一つの革命ローマンスがあつた筈だ。それは、番頭の一人に聴いた事であるが、李宗仁と關係のあつた一人の日本婦人が進々李宗仁を諷して上海へ来て、彼に約束の履行を迫つたが、いくら書面を出しても李は會見しなかつた。終ひに、番頭同道の上、彼をホテルへ訊ねて行つたが、廣西派の頭目である李宗仁はたうとう彼女に面會をゆるさなかつたといふことである。

「こんな事件の根を一つ一つ掘つて行くと、そこにはブルジョアジイが封建支那と代つて行く大きな時代の個々の社會相が、激しい革命の火に燃かれたまま史實の金地のやうにころがり出るのである。私は本と新聞を離れて、地圖と足とで研究しはじめた。かうした忙しい或る日、視察するところから歸つて来た私は、旅館の前に、異様な人だかりのしてゐるのを見て、最初はいつもの物賣りぐらゐに思つて入つて行つたのであつたが、旅館の關をまたぐと、そこに起つてゐる騒動の——しかもその中心に、五十嵐君の居るのを知つて、びつくりしたのであつた。宿の玄関には、入る勝手に洋館まがひの應接間が設けてあつて、來客はすべてそこで待つことになつてゐた。今その應接間の中央には、まつ着になつた五十嵐君が、しきりにもう一人の日本人と口論をしてゐるのである。對手の日本人といふのは、四十がらみのでつぷり肥つた、血色のいい男で、日本から来たばかりらしく、しきりに何かを日本語で嗚咽つて、

「そんなことは、このわしには通譯出來ん！——第一わしを通譯だと思つたら間違ひや、あなたはい！」

五十嵐君は頑固に頭を振つた。

「しかし、こんなちやんころに取つてどうするのか、貴方は？——こいつらの云ふことをそのまま聽いてやつたら、日本國民の恥辱だぜ！——叱り飛ばして、さつさと退散するやうに話さないッ！」

新しく来た男の地位も漸くそれで讀めたやうに思はれた。彼は汽船會社の代理として、恐らく訴訟事件の事務引繼にやつて来たものであらう。

旅館の階段の前では、しきりに主婦が電話をかけて工部局を呼び出してゐた。

支那語のわからぬ私には、支那人達が何を要求してゐるのか皆目見當がつかなくかつたが、それでも、めいめいに何か叫んで二人の前へ掌を突出すので、大概の推察はついた。彼等は、新明號の溺死者の遺族と稱するものであら

う。つひに五十嵐君の恨れ避けてゐた事實は、到來したのであつた。

「あなたのやうな、支那の事情もわからん人が来たんぢや問題が紛糾するばかりぢや！ よろしい、それぢや、あなたは自分で通譯でも何でも頼んで、しゃべりたいことをしゃべるがいい。わしは、この事件から全然手を引くから！——さあ、勝手におやんなさい。」

かう云ひ捨てたと思ふと、五十嵐君は、横のドアから勝手へ抜けて、どこかへ姿を消してしまつた。あとに残つた肥つた男は、しばらく眼の前の苦力達を睨め廻して立つてゐたが、急にまつ赤になつて、

「馬鹿野郎！」

と敗戦すると、これも急いでドアから姿を消さうと、體をひるがへした。その途端に、相手を失はうとすると思つた支那人達は、いきなり手を伸ばして、その男の體を八方から押へつけ

「この俺をどうするんだ！」

押へられた方は、驚い顔に鼻も口もいっしよに大きく開いて、波に揺られでもするやうに上下へ身悶えしながら絶叫した。

「馬鹿野郎——おい！ 人殺す、金よこす、當り前！ 金出せ、金出せ！」

一人の苦力が、隅の方から、かう日本語らしいもので叫んだ。

この混亂を、宿の者達はみなまつ着な顔をして、應接間の四方から眺めてゐるだけであつた。私も、むしろ、かういふ現象が必ずどこかで出現するであらうことを待つてゐた一人のやうに、空しく傍觀してゐるばかりであつた。戸外の苦力達は、内の騒ぎに気がつくやうに戸外へ群れ集まつて、見る間にガラス戸を打破してしまつた。土間を踏む、素足と支那靴の音が、ど、ど、ど——と人間の屍を踏みまじるやうに陰気に響いた。

新しく日本から来た代理人島海吉次君が、この支那群衆の數十本の手から救はれたのは、彼が殆ど氣を失ひかけた頃到着した一群のライフルを持つた巡警とピストルを持つた日本人の警官達によつたのである。……

私はこの事件のあつた翌の日廣東にむかつて出發した。

支那の現在の物語のやうに、この話にも別に結論といふものはないのである。

四十二歳の現在迄

私の貧弱な自傳は、概ね私自身だけの問題で埋まつてゐる。それが、讀者を裨益しようなどとは、どう考へても思はれない。要約して記述すると、それも、ごく簡単な左の數十行で終るのである。

明治二十一年十一月十三日が、私の生れた日である。場所は、東北の仙臺市、父は木工、母は藩の小祿ものの末女であつた。何かの手落から、私は戸籍面では、私生児といふことになつてゐる。父母の結婚關係が圓滿に行かぬところから、私は幼年時代から伯父の要之助の手許に引取られ、東京や仙臺や、もつと北の田舎町へ轉々として移住した。伯父は開業醫であつた。小學校へ入つたのは、宮城縣と岩手縣の國境の若柳町といふところであつた。その高等科第二年で、仙臺の第一中學校へ入學し、十五歳頃から社會主義思潮の洗禮を受けて、衝動的に官學を呪つた。伯父の意志に反

して十七の時に上京した。東京では苦學生のむさくるしい生活に沈んだ。十九歳の春、徳富健次郎先生に拾はれてアメリカへ渡つた。アメリカでは、與へられた限りの勞働に従事した。三十三歳の春、滿三半の異國放浪を切り上げて、再び生活難に面すべく歸國した。やがて雑誌「中外」の編輯に従事したのち、最初の小説「三等船客」を同誌に發表した。——震災、その他の日本に於ける特殊な反動思想と闘ひつつ、依然として私自身の主義に據りながら、今日に到つてゐる。三十三歳の五月に結婚、現在四十二歳の五月までに、三人の子供達の父親となつてゐる。

特別な研究でない限り、これ以上を私に就いては、自分で書きたくはない。それに、凡ての作家のやうに、私の大部分の體驗や思想や感情は、私も、自分の作物の多くにどんなかの形で發表してゐるのである。それから、又、私と

ヒントをフランスのジュール・ロマンのユナニズムから得た。主人公のない小説、すべての人物が主人公となる小説、群集それ自身の占有する小説の舞臺——から企圖して描出したのは、「三等船客」である。

次に、私は、反抗意識を帯つた貧乏人達を書かうとした。「脱船以後」とか、「赤い馬車」は、熊さんの死などは、かういふ漠然ながらも社會主義的目的を持つて書かれた作物である。

しかし同じ社會主義的作物であつても、讀者に讀まれる種類の作物でなければならぬ。それは單純な社會主義童話であつてはならない。就中、それは先づ藝術品であることが必要だ。この決心から、私は、自分の知つてゐる限りの外國語の知識や漢語、日本語の知識を動員して、語彙を豊富にする努力をした。こんなことを云ふのもすこし氣障な話だが、「三等船客」としてあの船で日本へアメリカから歸る船路に、私は尅大な「漢和大辭典」を一冊、めぼしい字句や面白い文字を、毎日ハンモックの上で筆記して歸つたのだ。横濱へつく時、ちやうど、字典一冊が不要になつて、私はそれを海へ沈めた。これは一癖であるが、文學の技術的方面に對する私の苦心は、蓋し本能的であつた。

その當時、日本の文壇の一隅に、ごくさ、やかなうすつべらな「種蒔く人」といふ國際主義の文學雑誌が出版された。私の妻が重病で、濱田病院に日に十圓以上の金を使つて居り、私は失敗して無一文であり、書いた物も買はずといふ境遇にあつたが、私は、この「種蒔く人」の傾向に大體賛成であつた。まもなく、雑誌の編輯に出すと小牧近江、村松正俊の二人が私を訪れ、その同人となることを奨めた。その前に、私も「自由」といふ雑誌を出したが、これは一號雑誌で最期を遂げた。そこで「種蒔く人」の同人となつて、私はその小さいながらも團結力の強い集團の一人として働いた。全然何もない私に、彼は二百圓ほどの負債を拵へて、妻は一日故郷の千葉縣へ病氣保養に行き、病院で危ふく流産することから救はれた長男「力」を生んだ。何か書かなくては食へぬ私は、「早稲田文學」とか、「雄辯」とか、手當り次第の三流どころの雑誌へ投書した。そして少しの餘裕を作ると、千葉縣御宿町の一家にわび住ひを營み、はじめてあやす長男の泣聲を珍らしがりながら、取つて投げるやうに焦躁的な作物の山を築いた。この頃は、私の思想も、一番に緩漫な濼みを作つてゐて、その頃の作物である「ロ

でも、まだまだ追憶に耽るやうな年齢でもないのだ。

しかし、この自傳の断片が、ただそれだけに終らない爲めに、私は、書いた作物の發表されたそれぞれの時機にあつたつての、社會的環境——状態ともいふべきものを、歴史の覗き眼鏡のやうに書いて見たいと思ふ。

私は、野心と希望と漠然ながらも社會主義的階級意識を持つて、三十三の春に日本へ歸つて来た。私の歸つた當時の日本の文學界は、狭い日本國中だけの汎日本主義思想が充溢してゐて、マルクス主義も一部の運動者や理論家だけの掌中高となつてゐて、文學に於ける社會主義運動は、一向に發展の餘地がなかつた。私は、暫くデカダニズム、神祕主義、人道主義、古典主義、合理主義、自由主義などの諸思想の底にちつとしてゐて、日本の文壇や劇壇の傾向を知らうと力めた。それを知るまでには、さほどの努力も必要としなかつた。

私は一つ新しい運動を起さうと思つた。それには、私小説でふやけきつた文壇の空氣を一掃するやうな物を發表することが動機とならねばならない。それには、新しい地平線を文壇へ展開する作物であらねばならない。私は、その

それから暫く「大毎」や「週刊朝日」、「サンデー毎日」などに關係がついて、「種蒔く人」(曾成)、「拳銃を買つた男」などが發表された。中央の文壇と云つても、私を對手にしてくれたのは、わづかに「新潮」ぐらゐのところであつた。

しばらくして震災が襲つた。この震災は、大杉榮を殺し、平澤計七を屠り、私達をも反動思想の白刃で脅かした。一般に社會主義思想に對する國民のボーコットが開始された。プロレタリア文學を、「種蒔く人」を中心に提唱して来た私達が、すつかり職場封鎖を食つたのは、いかに日本の資本主義の根柢が薄弱であつたかを示す好材料であらう。衣食の道を絶たれたさうになつた私は、止むを得ざる方向轉換を行つて、出来るだけ技術方面の勝つた作物を書かうと思つた。「佐古の父親」、「慈善」、「三人の女」、「日撃者」、「最後に笑ふ者」などといふ中は、その當時の或る種のプロレタリア作家のやうに、反動思想に苟合したやうな作物だけは書

かなかつた。

つづいて、私は長篇『大暴風雨時代』を書いた。これは、私のアメリカ物の結末であつた。いままで、アメリカの労働生活や、樹くとも私の目撃したアメリカだけを書いてゐた私は、これで總決算をして、今後は日本の無産階級生活の中へ食ひ入つて書くつもりであつた。しかし時代は、反動の波と、資本主義の周期的循環としての不景気が跳梁してゐた。私は、日本のプロレタリア文學の戦術の新轉回の一助にもと、アプトン・シンクレア氏の『ジャンゲル』を譯した。續いて『ジミー・ヒギンス』。

さうしてゐる間に、日本のプロレタリア文學運動にも、一つの外在的な勢力が押し寄せて来て、私達の陣營を漸次に侵蝕して行つた。それは、根幹の方針を第三インターナショナルの指導方針に置いた、日本の共産主義運動の轉向によるインテリゲンツィア層の没溺であつた。「種蒔く人」の震災以後の後継者である「文藝戦線」には、ロシア流な帽子を横ちよにかぶつた青年が、冷然として私達を睥睨しながら、福本イズムを説いた。文藝の分野へ、直接の政治目的の置換へが行はれようとした。

て、「文藝戦線」とも「前衛座」とも直接に關係してゐることが出来なかつた。しかし、考へて見ると、實踐的に大衆の獲得出来ない極左的マルクス主義者が、學生運動だけで終始してゐるやうな「マルクス主義文學運動」に、私は賛成出来なかつた。その意味で、私は群馬縣から福本イズムに抗議を發表し、同じ意味からその年の「改造」の六月號に「太陽の黒點」を發表した。「現實の日本を看よー」これが「太陽の黒點」のテーマであり、イデオロギーであつた。

「文藝戦線」は二回の脱退者を出して整理された。それは同人にとつて非常に力つよい刺戟であつたと共に、日本のプロレタリア文學運動にとつても、マルクス主義の再見直しに資するところの多い試煉であつた。私も及ばずながら、福本イズムに取つて代るべき純正マルクス主義の把握につとめた。その時代から今日までに書かれた作物が、主として「ムツソリーニ」や「獸蹄」や「クレオパトラ」、「捨へられた男」のやうな暴露的題材を扱つたのは、かういふ理由からである。

支那革命運動に關する作物を、私は今後もしどし書いて見たいと思つてゐる。世界は、今後支那を中軸にして、一週轉するかも知れないのだ。――

前田河 廣一郎

村で一番の栗の木
落葉日記
紙風船
ぶらんこ
命を弄ぶ男ふたり

岸 田 國 士

私はこれまで戯曲のために戯曲と書くこと
 1か考へなかつた。
 人間、魂の最も韻律的の要素を捉へ、そこ
 に言葉の瞬間的生命を散見すること、その
 創作活動を支配する意味の全部であつた。つ
 まり、これまでの私は、何が言ふために戯
 曲と書くのでなく、戯曲と書くために何か
 知ら
 言へばよかつたのである。

昭和四年六月 山行田國士

村で一番の栗の木 (五場)

亮太郎
 あや子
 その他無言の人物数人

第一場

山間の小驛——待合室
 真夏の拂曉

発車の直後といふ氣配。
 二三の旅客に交つて、都會のものらしい
 夫婦連れが、改札口の方から現れる。一
 隅を選んでそこに手荷物を置き、汗を拭
 ひ、左右を顧み、やがて、女が先に、男
 がそれに續いて腰を下ろす。
 他の旅客は、待合室を通り過ぎるだけで
 ある。
 男は出来合ひらしい白の洋服、女は現代

風の可なり整つた身じまひ。——手荷物
 は、服装の割に野暮な信玄袋と行李籠、
 それに、中型のシューケース。

亮太郎 疲れたらう。
 あや子 やつぱり眠れなかつたわ。どつかに顔
 洗ふところないか知ら……
 亮太郎 朝飯を食へば、前の宿屋で洗へるけれ
 ど……まだ早すぎるだらう。それとも輕便を
 一つ待つて、六時に乗つたつていいや。
 あや子 六時のだと、何時に着くの。
 亮太郎 七、八、九、まあ、九時だね。
 あや子 それでもいいわね。折角買ったお辨當
 が無駄になるけど……
 亮太郎 お土産に丁度いいよ。
 あや子 お辨當のお土産つて、あるか知ら……
 (問) あたし、さうする。
 亮太郎 待つてよ、一寸、見て来よう、もう起き
 てるかどうか。(出て行く)
 あや子 (待つてゐる間、信玄袋の上に兩腕

を託し、それに顔を寄せてゐる。
 亮太郎 (首を振りながら入つて来る) 駄目。
 駄目だ。あと一時間かかるつて……。それぢ
 や六時の間に合はない。
 あや子 その次は何時?
 亮太郎 (時間表を見ながら) 六時の次が、七時
 三十分……その次が九時三十分……
 あや子 ぢやいいわ。まだおなかはすいてない
 し、それに、顔なんかどうだつていいんでせ
 う。見る人なんかあやしないわね。

亮太郎 見る人はゐるよ。みんな見るよ。それ
 こそ、通る奴通る奴、みんな振り返つて見る
 よ。君のやうな女は、開闢以來、あの村に
 現れた例はないんだから……
 あや子 いやな方……。でも、お化粧なんか氣
 をつけて見る人はないでせう。これでいいの
 よ。
 亮太郎 でも氣持がわるかないかい。
 あや子 いいの、面倒臭いわ。
 亮太郎 そんならいいさ。輕便一時間半、馬車
 一時間、谷を下り、坂を上ること二十分、橋
 を渡ること二度、梯子段十七段、門から玄關
 までざつと十間、廊下二十歩、それでやつと
 座敷へ通ると、おやぢとお袋の口上が短く

亮太郎 そんなもんさ。
 あや子 さうでせうね。あたし、早くお父さんが見たい。
 亮太郎 おやちの方で腰をぬかすか、君の方で眼をまはすか、僕も早くそれが見たいよ。
 あや子 なぜ？
 亮太郎 なぜって、お互に意外だらうからね。君が想像してる僕のおやちと、おやちが想像してる僕の家内と、その両方とも、僕にはどうやら見當がついてる。實際と違ふ程度が、どつちも同じやうなものだよ。
 あや子 さうか知ら。お父さん、お話を生やしてらっしゃる？
 亮太郎 さあ、疑つていふより、毛に近いものを生やしたかも知れない。どうして？
 あや子 髪は分けてらっしゃる？ それとも……
 亮太郎 禿げてるかつて云ふんだらう。まだ禿げてやしなかつたらう。薄いには薄いがね。だが、分けてるなと思ふと大間違ひだぜ。第一……もう止さう、そんな馬鹿な話……君は、駄目だよ。わからないかなあ、田舎の百姓爺がどんな恰好をしてるか……あや子 百姓爺つたつて、普通の百姓ち

あや子 ええ。
 亮太郎 話はやめようか。
 あや子 いいのよ。聴きながら眠るから……
 亮太郎 洒落たこと云つたらあ……君に、栗の木のこと話したか知ら……
 あや子 なに？
 亮太郎 栗の木さ……屋敷にある大きな栗の木さ。
 あや子 ええ。
 亮太郎 話したかい。
 あや子 ええ。
 亮太郎 なんて話したつけな。
 あや子 村で一番の栗の木だつて……
 亮太郎 あれや、全く見ものだよ。二抱へある栗の木つて云ふのは珍しうだらう。栗が落ちる頃は、毎朝、うちぢうの女が出て拾ふんだが、朝の間だけでは拾ひきれないほどなんだ。
 あや子 ……
 亮太郎 此の秋は、東京へ送らせることにしよう。獨りぢや、栗を焼いて食ふ氣にもならなからね……(間) だけど、家ん中が破いのをびつくりしや駄目だよ。田舎の家なんていふものは、古いのを自慢にしてるんだからやないんでせう。
 亮太郎 その差大ならず。僕が柿を使つてたら、息子が女の眞似をするやうになつたつて村中云ひふらしやがつた。
 あや子 まさか。
 亮太郎 (笑ひながら) まあ、そんなもんだよ。(間) 今のうちに眠とけよ。
 あや子 もうねむくなつたわ。少し寒いから……
 亮太郎 自分はどうなんだい。羽織はすぐ出せるやうにしてあるんだらう。朝晩はこの調子だよ、これから……
 あや子 夏涼しいと變ね。
 亮太郎 夏だと思はなけれやいさ。なにしろ、裏の森ぢや鶯が啼いてるんだからね、今頃……
 あや子 さうですつてね、去年の夏、輕井澤へ行つた友達がさう云つてたわ。輕井澤とそんなに違はないんでせう。
 亮太郎 もつといいとこだよ、變な毛唐たんかうるうるしてなくつて……
 あや子 あなたは西洋人が嫌ひね。
 亮太郎 嫌ひだよ、あんな化物みたいなもの……それはさうと、僕の方の田舎にね、初

ね。煤けるほど値打があると思つてるんだ。その代り、風が吹いたつてぐらぐらするやうなことはない。
 あや子 もうあと幾分？
 亮太郎 三十分。
 あや子 まだ三十分？ さつきとおんなじね。
 亮太郎 おんなじだ。
 あや子 時計が止つてやしない？
 亮太郎 止つてやしないよ。
 あや子 ……
 亮太郎 輕便まで誰か迎へに来てるかも知れないよ。弟が來てるか、おやちが來てるか。
 あや子 お父さん、そんなにお速者なの。
 亮太郎 速者もなにも、急ぐ時でなきや、馬車なんかへ乗りやしないよ。
 あや子 お歩きになるの、馬車で一時間の處を……？
 亮太郎 あたり前さ。田舎者つて、そんなものだよ。如だつて、自分でするんだよ。
 あや子 あら……だつて、人を使つていらつしやるんでせう。
 亮太郎 使つてるさ。使ふもんも一緒になつて御くんだよ。
 あや子 そんなもんなの。

見積つて酒々十五分、着物を着替へて風呂へはひり、昨夜は寝てないからと云つて一休みするまで、なかなか暇がつかぬぞ。
 あや子 いくらなんだつて、着く早々寝られやしないわ。お母さんは優しい方？
 亮太郎 だから不眠さう云つてるぢやないか——お袋は、僕の云ふことならなんでも聴く。恐らくお袋さんにも同様だらう。うちに女の子がゐないから、きつと珍しがらうよ。甘えてやり給へ。
 あや子 甘えられるお母さんだといいわね。(間) ねむいのよ、あたし……(また信玄袋の上につ伏す)
 亮太郎 寝てるよ。まだ三十分ばかりある。(間) 恐ろしい癖だ。
 あや子 あれ、袴なの。さうだわ、變ね、あたし、さつきから、なぜ嫌みみたいなものが一杯あるのかと思つてたの。やつぱり氣候のせゐね。
 亮太郎 氣候のせゐさ。海拔二千九百尺、これからまだ登りになるんだ。君は白樺と云ふ木を見たことはないだらう。それから、落葉松、えぞ松と云ふやつ……(間) 眠れるかい。

あや子 ……
 亮太郎 此の秋は、東京へ送らせることにしよう。獨りぢや、栗を焼いて食ふ氣にもならなからね……(間) だけど、家ん中が破いのをびつくりしや駄目だよ。田舎の家なんていふものは、古いのを自慢にしてるんだからやないんでせう。
 亮太郎 その差大ならず。僕が柿を使つてたら、息子が女の眞似をするやうになつたつて村中云ひふらしやがつた。
 あや子 まさか。
 亮太郎 (笑ひながら) まあ、そんなもんだよ。(間) 今のうちに眠とけよ。
 あや子 もうねむくなつたわ。少し寒いから……
 亮太郎 自分はどうなんだい。羽織はすぐ出せるやうにしてあるんだらう。朝晩はこの調子だよ、これから……
 あや子 夏涼しいと變ね。
 亮太郎 夏だと思はなけれやいさ。なにしろ、裏の森ぢや鶯が啼いてるんだからね、今頃……
 あや子 さうですつてね、去年の夏、輕井澤へ行つた友達がさう云つてたわ。輕井澤とそんなに違はないんでせう。
 亮太郎 もつといいとこだよ、變な毛唐たんかうるうるしてなくつて……
 あや子 あなたは西洋人が嫌ひね。
 亮太郎 嫌ひだよ、あんな化物みたいなもの……それはさうと、僕の方の田舎にね、初

ね。煤けるほど値打があると思つてるんだ。その代り、風が吹いたつてぐらぐらするやうなことはない。
 あや子 もうあと幾分？
 亮太郎 三十分。
 あや子 まだ三十分？ さつきとおんなじね。
 亮太郎 おんなじだ。
 あや子 時計が止つてやしない？
 亮太郎 止つてやしないよ。
 あや子 ……
 亮太郎 輕便まで誰か迎へに来てるかも知れないよ。弟が來てるか、おやちが來てるか。
 あや子 お父さん、そんなにお速者なの。
 亮太郎 速者もなにも、急ぐ時でなきや、馬車なんかへ乗りやしないよ。
 あや子 お歩きになるの、馬車で一時間の處を……？
 亮太郎 あたり前さ。田舎者つて、そんなものだよ。如だつて、自分でするんだよ。
 あや子 あら……だつて、人を使つていらつしやるんでせう。
 亮太郎 使つてるさ。使ふもんも一緒になつて御くんだよ。
 あや子 そんなもんなの。

いければ、一里手前から見える。
 さや子 あたし、お辨當たべようか知ら...
 お茶がないわね。さうだ、お茶がない。どう
 するつもりだったのか知ら...
 亮太郎 飲まないつもりだったんだらう。水で
 我慢するさ。此の邊の水はいいよ。それに
 薬かも知れないよ。ラヂウムなんか含んで
 て...

あや子 そんなら、済まないけど、汲んで来て
 頂戴。
 亮太郎 何へ？
 あや子 何かへよ、きまつてるぢやないの。そ
 の邊に空堀か何か落ちてないこと？
 亮太郎 よし、君が、それだけ徹底して呉れり
 や、水も汲んで来甲斐がある。待つて給へ。
 (出て行く)

あや子 (辨當を開いて食ひ始める)
 此の間に、温泉廻りの上方者らしい男
 が、藝者か仲居風の女を連れて、汽車の
 時間表を見に来る。が、しばらくすると、
 また何處へか行つてしまふ。
 亮太郎 (ビール壺を提げて歸つて来る)
 あや子 (片手でそれにさはつてみて) あら、熱
 いのね。お茶を買つてらしたつたの。

亮太郎 男子意気に感ずれば、お茶ぐらゐ買つ
 て来るよ。僕も食ふぜ。(腹をおろし、辨當を
 食ひはじめ) 此の魚、大丈夫か。
 あや子 お茶、どうして飲むの。
 亮太郎 自分で考へる。
 あや子 かうすんの？ (と云ひながら、喇叭飲
 みをしようとするが、思はしく行かない。徒
 らに唇を尖らすばかり)
 亮太郎 (素知らぬ顔で) 飲んだら、こつちへよ
 こせ。

あや子 (すぐに) ぢや、はい。
 亮太郎 何だ。飲んでないぢやないか。(流石
 に、手際よく壺を傾ける)
 あや子 これで、折角の、紳士旅行も臺なしね。
 亮太郎 臺なしなものか。
 あや子 だつて、あの汽車の中の済まし方はど
 う。あたし、可笑しくつて... 不潔のみも
 しない葉巻なんかふかしてさ... 脚をかう
 組んで、顔にハの字をよせて、そして文藝春
 秋を讀んでる光景は、たしかに歴史的よ。
 亮太郎 君はどうだ... 止さう、顔が紅くな
 る。

あや子 おつしやいよ。あたしのどこが可笑し
 い？

亮太郎 可笑しいさ、あんなに何通も時計を見
 ちや...
 あや子 時計？ あら... (笑ひながら) 汽
 車に時間はずきものよ。
 亮太郎 驛長ぢやあるまいし... しかし、君
 は案外可愛らしいところがあるよ。四十圓
 の腕時計で、たうとう一晩の睡眠を棒に振る
 なんて。

あや子 (もう相手にならない) おいしくない
 のね、此のお辨當... (一寸顔をしかめ) ど
 ら、お茶を飲まして...
 亮太郎 おやちより、弟を見てびつくりしや
 しないかなあ。
 あや子 なぜ。
 亮太郎 無愛想な奴だからさ。
 あや子 そんな？
 亮太郎 いつか、模範青年つて云ふんで観て表
 彰されたんだがね、なんでも、そんな時、知事
 なんかある前で、此の免状みたいなものは、
 なんにもならないから返すつて云つて、問題
 を起しやがつたんだ。
 あや子 でも、痛快な方ね。
 亮太郎 痛快でないこともないが、誰にでもそ
 の調子だからね。君なんかにも、平氣でどん

なことを云ふかも知れないよ。
 あや子 それがわかつてればいいわ。でも...
 亮太郎 亂暴なことはしやしないよ。あるかゝ
 りないかわからないやうな男だからね。十日も
 口を利かないことがあるよ。
 あや子 まあ。
 亮太郎 だから、こつちから、あんまり話なん
 かしかけない方がいい。うるさいと思ふと、
 返事をしないんだ、誰にでも...
 あや子 あなたにでも...
 亮太郎 (曖昧に) うん。(間) 自然、みんなと
 の折合が悪くつてね。それはまあ、近頃のこと
 となんだがね。

あや子 みんなつて、おうちの方と...?
 亮太郎 それより、村の顔役なんかとね。その
 くせ、備人にはいらしんだ。變なもん
 だ。備つてるものの評判は馬鹿にいいん
 だ。
 あや子 社會主義ぢやない？
 亮太郎 さうかも知れんよ。(間) そんなこと
 もあるまいがね。
 あや子 ずつと、おうちにいらつしやるのね。
 亮太郎 師範を中途でよしてね、嫌ひなんだ學
 校が... 本はなかなか讀むらしい、何處で

探して来るか。
 あや子 でも、さういふ方も面白いわね。あた
 し、朴訥な方、好きよ。
 亮太郎 馬鹿ぢやないんだよ。
 あや子 馬鹿なんて、そんな... ぢや、東京
 の者なんかはお嫌ひでせう。
 亮太郎 都會といふものを輕蔑はしてゐるね。あ
 れで、なかなか、理窟を云はせると、云ふら
 しいね。
 あや子 油断がならないわね。兄さんを負かし
 やしない。
 亮太郎 こつちは、理窟は苦手だからね。農村
 問題なんか、眞平だ。
 あや子 あなたは、もうすつかり都會人ね。
 亮太郎 さうでもないが、所謂根こぎにされ
 たもの一人には違ひない。その點、弟の
 偉いところも、わかるにはわかるんだ。
 あや子 それやさうだわ。生れた土地を離れな
 いつて云ふことは、善し悪しは別として、美
 しいことだわね。
 亮太郎 (妻の顔をつづくで見つめ) 君にし
 てその言あり、世は擧げて紳士主義に酔か
 と思はれるね。あ、あ、山川にして情あらば、
 嘗て一度志を立てて郷關を出でたる我れ、

けし帯、ちやんとなつてる？
亮太郎 なつてる。
兩人、再び歩き出す。

第二場

山の中腹にある農家の前庭
日盛り
大きな栗の木の前も、藤が敷いてある。

亮太郎が藤の上に腰をおろして、ぼんやり遠くを見てゐる。
そこへ、あや子が現れる。

あや子 もうおすみになつて。随分長いお話ね。

亮太郎 ……
あや子 あたし、ああいふ時、何處にゐていいかわからないから、困るわ。お母さんは、どうしても、あたしに、お仕事のお手傳ひをさせて下さらないの…
亮太郎 長くゐるんぢやないからいいけれど、もう少し、「うちのもの」になれないかなあ…

あや子 あたし？
亮太郎 君が努めてるつていふことはわかるよ。努めたつて無理だつていふこともわかつてるんだが、どういふか、一々、いろんなことにこだはらずに、平気でやれないもんかなあ。

あや子 そんなこと？
亮太郎 どんなことつて…例へば、芋の皮をむくんだつてさうだ。やれ、お手傳ひしませうとか、やれ上手にむけるか知らとか、やれ、何んだとか、かんだとか、わざわざ、自分を自分で特別扱いにしてるところがあるよ。
あや子 保次郎さんが、何か、あたしのこと、おつしやつたんでせう？

亮太郎 保はなんにも云やしないよ、君のことなんか…まあ、あんまり、あれこれと氣遣はない方がいいよ。どうせ、しつくりは行かないにきまつてるんだし、しつくり行つたところで、どうにもならない話なんだ。もつと、呑気にして給へ、呑気に…その方が、お互に樂だよ。
あや子 あたしだつて、何も、それほど氣遣つてるわけぢやないよ。かういふ生活に慣れようと思へば、それや、もつと、どうにか

しやうがあると思ふわ。だけど、やつぱり、お客さん氣分なんだから…
亮太郎 それや、さうさ。僕が第一、さうなんだ。これが自分の家だと思つてみたところで、これをどうしようつていふ氣にはなれない。そのことで、今、保とも話をしたんだが、さしづめ、あいつから、無責任呼ばはりされても仕方がないわけさ。

あや子 無責任だつておつしやるの。
亮太郎 まあ、さういふ意味なんだらう。それが、家運隆盛なら、僕が知らん顔をしてゐたつて、問題は起らないわけさ。——餘程苦しいらしいんだ。

あや子 ……
亮太郎 君は、こんな田舎で暮さうとは思はないだらう。
あや子 事情によつては、そんなこと云つちやをられないわ。
亮太郎 その覺悟があるか。
あや子 だけど、あなたがここにいらつしやれば、どうにかなるつていふの。
亮太郎 それや、わからないさ。保の言ひ分は、はつきりしてる。——ただ自分たちが働いて、ただけで追つ附かない、人の物を押り取ら

なければ…と云ふんだ。物事をさういふ風に考へるやうになつてゐるんだよ、あいつはね。

あや子 何時でも何か考へてらつしやるやうね。——あの眼は、とても素敵だわ。此の間も、草鞋を作りながら、本を讀んでらつしやるのよ。あたしがそこへ行つたら、ちいつと眼をあけて、こつちを見てゐるの。その眼の美しさつたらなかつたわ——澄んでて、深みがあつて、そのくせ、冷たい感じはしないの。

亮太郎 馬鹿に感づけるね。あいつは、案外、角が取れてゐるよ。もつとゴツゴツしてるかと思つたら…君なんかには、なかなか優しいさうぢやないか。

あや子 ええ、それや優しいの。あなたのお話ぢや、どんなこはい方かと思つたわ。ただ、物を言ふのがお嫌ひね。どうかすると噂みたい。何を云つても、首を振るだけなの。都合ひがないつたら…少し、取かしのね。まだ、子供よ。
亮太郎 さうか知ら…だけど、何か君、見たつて云つてぢやないか、二三日前…
あや子 あれは、あなた…それや、子供つて

云つたつて、丸つきり子供ぢやないんですもの…それくらゐのこと…でも、あれを見て、あたし、ほんたうに綺麗なものを見たやうな氣がしたわ。

亮太郎 綺麗なものか…つまり、ロマンスにしてゐるのさ、君の方で…
あや子 それはどうでもいいの。なんだか、あたしたちのさういふやうなもの、全く違つた種類の…別の世界にでなければならぬやうな、——だと思つたわ。

亮太郎 そんな大袈裟なものぢやないんだらう。——二十三にもなれば、男の戀愛は空想でなくなるよ。——誰もゐない川で、魚の泳ぐのを見るやうなふりをして、そこへ來かかつた女の子を、呼び止めて見るぐらゐの度胸はついて来る。そればかりぢやない。

あや子 もう止ませう、そんな穿鑿は…
あたし、そんなつもりで云つたんぢやないの。ただ、さういふところを見て、自分でハツと氣を振めるやうな、そんな印象を受けなかつたことが不思議に思へたからなの。つまり、それほど、現實はなれがしてんだわ。あの女の子、なんていふ名かしら。何處の子

かしら…落葉の舞の舞らしいのよ。
亮太郎 益々詩的ぢやないか。パストラルだね。

あや子 さうよ。なに、そんな笑ひ方して…いやな方ね。(間)また少し歩いてみないこと、その邊…さうさう、あたしと一緒に歩くのは、何んとかつて云つてらしたわね。

亮太郎 目立つんでね。
あや子 (溜息をつき) 窮屈ね。
亮太郎 窮屈だが、仕方がないさ。強ひて周囲の感情と調ふ必要もないさ。

あや子 さつきは、もつと平氣になれつておつしやつたのよ。
亮太郎 だからさ、もつと平氣で土地についた生活をすればいいんだよ。わざわざ、都會人ぶらなくつたつて…
あや子 變なことをおつしやるのね。もう、わからない、あたし…あなたは、もつと、人の氣持のわかる方だと思つてゐたわ。丸で無茶よ、この頃、あなたのおつしやることは、どうかませうよ。このままぢや、お互がつまらないでせう。あなたは、何かの不満を、あたしの處へばかり持つていらつし

あや子 さうなさる？
 亮太郎 さうするより、しやうがないだらう。
 あや子 今日は、いい方を着てらして、それを、あした、なにしたらどう……。一日ぐらゐのびたつて……
 亮太郎 それぢや、まづいよ。すぐ出してやり給へ……
 あや子 お母さんは、やつぱり、保次郎さんが可愛いのね。
 亮太郎 だから僕が可愛くないつていふわけぢやないよ。
 あや子 いいえ、少し變だと思ふわ。あたし、そんなこと、云はれてするのは、いやよ。だつて、あの方、着物なんて召すことがある？ないぢやないの。あたしが、行李を開けるのを御覽になつて、急にそんなことおつしやるのよ、お母さんは……。ちやんとわかるわ。年寄りつていやなものね。
 亮太郎 おい。
 あや子 はい……。御免なさい……。(間)あ、あの馬車でせう。あんなに埃を立てて……。
 兩人去る。
 舞臺、しばらく空虚。
 保次郎、うつむき加減に、鏡を肩にかついで、流れて行くやうな気がするんだ。
 あや子 もう遅いのよ。何時だと思つてらつしやる？ やすみませうよ。
 亮太郎 まあ聴けよ。此處に立つてゐると、此の栗の木の下は暗いやうだらう……。葉が茂つてゐて、此處だけが影になつてゐるせむだ。處が、遠くから見ると、そら、あの道の曲つてるところね、あの邊から見ると、此處のところだけが、うつすらと、妙に光つて見えるんだ。木の葉を透して来た月の光は、やつぱり青くなるのかね。青く、しかも、濡れたやうな光り方がする。その光の中に、無論、君のさうしてゐる姿が浮き出してゐたよ。誰かもう一人ゐたやうだつたが、それははつきり見えなかつた。おほかた、君の影だらう。それとも、木の枝の影か……。さうだ、此の枝だ……。(頭の上の枝を仰いで見る)なるほど、此處にかうしてゐると、自分ゐるところさへわからないね。(間)をかしな木だよ、此の栗の木は……。夜見るとなほ不思議だ。まるで、木の下にあるといふ氣持はしない。何か、かう、覆ひかぶさつて来るね。この二三日珠にさう思ふんだが、この木は、何か考へてゐるよ。何かしようと思つてるよ。人が此處へ

で、ゆるやかに歩を運んで来る。彼は、古い紺のズボンに赤脚絆をつけ、上はシャツ一枚、無帽で髪を長く伸ばしてゐる。一寸立ち止つて、あたりを見まはす。また歩き出す。栗の木のもとに、鏡を投げ出し、兩腕を腰にあてて、一時、眼を細くして遠くの方を見入つてゐる。不圖、何か考へ込むやうに、空を仰ぐ。溜息をつく。どつかと、藁の上に腰をおろす。小型の書物を取り出して、頁を繰るが、それを讀み続けるでもなく、下に置いてまた溜息をつく。首をやけに振る。頭を木の幹にもたせかける。
 第三場
 前場と同じ。
 月夜。
 遠くで太鼓の音がする。
 あや子が栗の木の下にしやがんでゐる。
 亮太郎が現れる。
 あや子 何處を歩いてらしたの……。こんな

に遅くまで……。みんな心配してたのよ。
 亮太郎 心配することはないさ。まさか自殺もすまいからね。
 あや子 そんな心配ぢやないのよ。あなたは、すぐそれね……。(間)途で、保次郎さんにお遇ひにならなかつた？
 亮太郎 保は、今、そこゐるぢやないか。違ふかい。いや、遇はなかつたよ。月夜で道を迷ふ心配はないし、水車を抜けて、釣橋のところまでぶらぶら歩いて行つたよ。頭が痛いのもなほつた。
 あや子 それやよかつたわね。あたし、また、何處へいらしたのかと思つて……。散歩の時は、何時でもさう云つて出てらつしやるの……。
 亮太郎 その邊を一寸ひと廻りして来るつもりだつたのが、つい、引張られて行つてしまつたんだ。
 あや子 ……
 亮太郎 月の光に……。月の光といふものは、人をどこまでも引張つて行くものだよ。あれや、確に變だ。吸ひ込まれて行くとしてもいふか、自分が歩いてゐるんぢやない、自分のまはりにある空氣が、からだを包んだまま
 が、僕はもう、この木の下は暗い。今日限り、此處へは来ないよ。(間)どうしてそんな處に立つてるの……。もつと側へ寄れよ。誰も見つてやしないよ。さ、ここが平でいい。
 あや子 (云はれるままに腰をおろす)
 亮太郎 そろそろ東京へ歸りたくなつたらう。それより、もうとつと此處がいやになつてるかも知れない。よく辛抱してくれなね。
 あや子 どうしてそんなことおつしやるの。ちつともいやになんかなりやしませんわ。ただね……？
 亮太郎 ただ……？
 あや子 ただ、あなたが、あんまり鬱いでばかりいらつしやるから……。
 亮太郎 さうか、それぢやもつと愉快にならう。君、今日は、午前中、何をした。
 あや子 今日はね、此間から溜つてる新聞を讀んでしまつたの。
 亮太郎 何か面白いことがあつたか。
 あや子 あなた、御覽になつたんぢやない。
 亮太郎 笑話だけさ。それと漫画……。「ダブとドブ」ね、時事の附録さ、あれは傑作だね。
 あや子 さう？ あたし見ない。
 亮太郎 お話にならん、あれを見ないなん

あや子 さうなさる？
 亮太郎 さうするより、しやうがないだらう。
 あや子 今日は、いい方を着てらして、それを、あした、なにしたらどう……。一日ぐらゐのびたつて……
 亮太郎 それぢや、まづいよ。すぐ出してやり給へ……
 あや子 お母さんは、やつぱり、保次郎さんが可愛いのね。
 亮太郎 だから僕が可愛くないつていふわけぢやないよ。
 あや子 いいえ、少し變だと思ふわ。あたし、そんなこと、云はれてするのは、いやよ。だつて、あの方、着物なんて召すことがある？ないぢやないの。あたしが、行李を開けるのを御覽になつて、急にそんなことおつしやるのよ、お母さんは……。ちやんとわかるわ。年寄りつていやなものね。
 亮太郎 おい。
 あや子 はい……。御免なさい……。(間)あ、あの馬車でせう。あんなに埃を立てて……。
 兩人去る。
 舞臺、しばらく空虚。
 保次郎、うつむき加減に、鏡を肩にかついで、流れて行くやうな気がするんだ。
 あや子 もう遅いのよ。何時だと思つてらつしやる？ やすみませうよ。
 亮太郎 まあ聴けよ。此處に立つてゐると、此の栗の木の下は暗いやうだらう……。葉が茂つてゐて、此處だけが影になつてゐるせむだ。處が、遠くから見ると、そら、あの道の曲つてるところね、あの邊から見ると、此處のところだけが、うつすらと、妙に光つて見えるんだ。木の葉を透して来た月の光は、やつぱり青くなるのかね。青く、しかも、濡れたやうな光り方がする。その光の中に、無論、君のさうしてゐる姿が浮き出してゐたよ。誰かもう一人ゐたやうだつたが、それははつきり見えなかつた。おほかた、君の影だらう。それとも、木の枝の影か……。さうだ、此の枝だ……。(頭の上の枝を仰いで見る)なるほど、此處にかうしてゐると、自分ゐるところさへわからないね。(間)をかしな木だよ、此の栗の木は……。夜見るとなほ不思議だ。まるで、木の下にあるといふ氣持はしない。何か、かう、覆ひかぶさつて来るね。この二三日珠にさう思ふんだが、この木は、何か考へてゐるよ。何かしようと思つてるよ。人が此處へ

で、ゆるやかに歩を運んで来る。彼は、古い紺のズボンに赤脚絆をつけ、上はシャツ一枚、無帽で髪を長く伸ばしてゐる。一寸立ち止つて、あたりを見まはす。また歩き出す。栗の木のもとに、鏡を投げ出し、兩腕を腰にあてて、一時、眼を細くして遠くの方を見入つてゐる。不圖、何か考へ込むやうに、空を仰ぐ。溜息をつく。どつかと、藁の上に腰をおろす。小型の書物を取り出して、頁を繰るが、それを讀み続けるでもなく、下に置いてまた溜息をつく。首をやけに振る。頭を木の幹にもたせかける。
 第三場
 前場と同じ。
 月夜。
 遠くで太鼓の音がする。
 あや子が栗の木の下にしやがんでゐる。
 亮太郎が現れる。
 あや子 何處を歩いてらしたの……。こんな

に遅くまで……。みんな心配してたのよ。
 亮太郎 心配することはないさ。まさか自殺もすまいからね。
 あや子 そんな心配ぢやないのよ。あなたは、すぐそれね……。(間)途で、保次郎さんにお遇ひにならなかつた？
 亮太郎 保は、今、そこゐるぢやないか。違ふかい。いや、遇はなかつたよ。月夜で道を迷ふ心配はないし、水車を抜けて、釣橋のところまでぶらぶら歩いて行つたよ。頭が痛いのもなほつた。
 あや子 それやよかつたわね。あたし、また、何處へいらしたのかと思つて……。散歩の時は、何時でもさう云つて出てらつしやるの……。
 亮太郎 その邊を一寸ひと廻りして来るつもりだつたのが、つい、引張られて行つてしまつたんだ。
 あや子 ……
 亮太郎 月の光に……。月の光といふものは、人をどこまでも引張つて行くものだよ。あれや、確に變だ。吸ひ込まれて行くとしてもいふか、自分が歩いてゐるんぢやない、自分のまはりにある空氣が、からだを包んだまま
 が、僕はもう、この木の下は暗い。今日限り、此處へは来ないよ。(間)どうしてそんな處に立つてるの……。もつと側へ寄れよ。誰も見つてやしないよ。さ、ここが平でいい。
 あや子 (云はれるままに腰をおろす)
 亮太郎 そろそろ東京へ歸りたくなつたらう。それより、もうとつと此處がいやになつてるかも知れない。よく辛抱してくれなね。
 あや子 どうしてそんなことおつしやるの。ちつともいやになんかなりやしませんわ。ただね……？
 亮太郎 ただ……？
 あや子 ただ、あなたが、あんまり鬱いでばかりいらつしやるから……。
 亮太郎 さうか、それぢやもつと愉快にならう。君、今日は、午前中、何をした。
 あや子 今日はね、此間から溜つてる新聞を讀んでしまつたの。
 亮太郎 何か面白いことがあつたか。
 あや子 あなた、御覽になつたんぢやない。
 亮太郎 笑話だけさ。それと漫画……。「ダブとドブ」ね、時事の附録さ、あれは傑作だね。
 あや子 さう？ あたし見ない。
 亮太郎 お話にならん、あれを見ないなん

て……

あや子 どういふ話なの？

亮太郎 どういふ話つて……いろいろあるさ。それから、笑話にもなかなかいいのがある。近頃感心したのにこんなものがある——男が、女を自分の横に坐らせて自動車走らせて来る。奴さん、片手にハンドルを握り、もう一方の手で女を抱いてゐるんだ。それで、お巡りさんが、「こら、こら、両手で持たにやいかん」と注意したもんだ。すると「自動車がどつちへ行くかわかりません」とやつたね。

あや子 (ぼかんとしてゐる)

亮太郎 わからんのか。

あや子 (やつとわかり) ああ、さう……。面白いわね。

亮太郎 面白くなさうな面白がり方だな。そいぢや、これはどうだ。(間) おい、聴いてるのか。

あや子 聴いてますわ。(間) でも、あなた御自身が、無理に面白がつらつしやるんぢやない、今日は……。お加減が悪いなら、もう家の中へおはひりになつたらいいか……。だんだん冷えて来ましたわ。また風邪でもめすと……

亮太郎 もう少し、ね、いいだらう。もう少し饒舌らしくてくれ。面白くなければ、黙つてほ

かのことを考へてみていい。饒舌りたいといふ本能は死も恐れないといふ話がある。このまま黙つて寝ると云はれば、僕は、死を選んで。そこで、ええと、なんだつけない、君は、僕のうちを、もう少しどうかしたうちだと思つてたらう。かう聞くと君は、なんと答へていか解るまい。ぢや、言ひ直さう。僕がどうして君をこの家に連れて来たかと云へば、勿論、こんなぼろ家を見せた

いからでもなければ、おやぢやお婆に君を引合はせて、大に孝行振りを示さうとしたわけでもない。君はどう思つてるか知らんが、それは發つ前にも云つた通り、おやぢもだんだん年を取るし、弟は家の身代を固めるといふことに興味も希望ももつてゐないし、やつぱり僕が一度歸つて、おやぢが死ぬまで相當に暮して行くだけのことではして置かなければならぬと気がついたからなんだ。そこで、歸つて見ると、もう遅い。少しばかりあつた山も如も、大方は人手に渡らうとしてゐる。君は、その時だね、ある失望を感じやしなかつたか。

あや子 ……

亮太郎 この栗の木も、そのうちに、誰かが来て、伐り倒して行くかも知れない。さういふ日が来るやうな気がするんだ。

あや子 あなたの心配してらつしやることは、あたしには、ちつともわかりませんわ。あなたのおうちの財産がどうであらうと、それが、あなたに取つてどうもなければ、あたしだつてどうもありませんわ。あなたは、そんなことを気に病んでいらつしやるの。

亮太郎 そんならいいさ。ぢや、もうなんにも云ふことはないよ。(頭を抱へて、かすかに身悶えする)僕は、やつぱり東京へ歸らうと思ふ。その方がほんたといふ気がする。つまらんと云へばつまらんが、あんなものの研究も、しかけてみれば、續けてやりたい氣もするしね。さう云へば、此の邊には、編織が多いんだよ。それ、昨夕も臺所にゐたぢやないか。今、葉を見つけてゐるんだ。

あや子 ぢや、毎日、森の中を歩いていらつしやるのは、それなの……。お父さんが笑つてらしたわ。子供の時分は、あんなぢやなかつたつて……。いやね、黙つて……。亮太郎 (妻の意外にも快活な調子に驚き入れ)

第四場

前場と同じ。朝——霧が降つてゐる。

あや子 いいわ、そんなら……。亮太郎 怒りなくつたつていいさ。(間) さつきから太鼓の音がしてゐるね。お祭の稽古だな。長い沈黙。

あや子 (おぼしやしないかい) 亮太郎 別にな……。でも、お父さんは面白いわね。時々人を笑はせるやうなことをおつしやるのね。

亮太郎 馬鹿な……。あや子 それ御覽なさい。長い沈黙。亮太郎 そんなことぶふもんかい。君がさう思ふから云つたんだらう。白黙しる。

あや子 あなた、しつかりして下さい。お苦しかありません。大丈夫ですか。おつむり冷

やませうか。待つてて……。あや子 (金盃に水を入れて持つて来る) いま……。あや子 (かう云ひながら、甲斐々々しく手拭を絞り、それを額に當て) いやよ、あなた、あんなことなすつちや……。亮太郎 (割合にはつきり) 保を見て来い。あや子 いいえ、あの人は大丈夫……。亮太郎 保はさせやしなかつたか。あや子 いいえ、大丈夫……。でも、あぶな御座んしたわ、両方とも……。あや子 (あなたがおわりのよ、あんなことをおつしやるから……。もつとひどい保我でもなすつて御覽なさい。それこそ……。どうしてまた、あんな保をなすつたの……。いや、いや……。亮太郎 少し亂暴だつたな。(間) 保を呼んで来てくれ。あや子 まだいけません。もつとあとにしませ

るもの……

あや子 あたし、もう、ここ、いや……。な
んて遊んだ生活なんぞせう。二人つきり
れば、どんなに苦しんだって苦しみ甲斐が
あるわ。道は一筋といふ気がするんです
の……

亮太郎 だから、東京へ歸るよ。明日にでも
歸るよ。(不圖耳をそばだて) また向うが騒
がしいぜ。どうしたんだか、見て来て御覽。
(間) あれ、保の聲だらう。何んと云つてる?
誰だい、あの聲は……。おやちやないか。
これや、いかん。早く見て来い。

あや子 (夫から離れ、用心深い足取りで奥に
去る)

長い間。——此の間に、亮太郎は、静か
に立ち上り、栗の木に手を支へながら、
首を伸すやうにして奥の様子に聴き耳を
立てる。

再び騒々しい喚聲が聞える。それが一
しきり鎮まると、今度は、年を取った女
の、かき口説くやうな泣き聲が、手に取
るやうに聞えて来る。

あや子 (足音を忍ばせて歸つて来る)

亮太郎 なんだ。

あや子 保次郎さんが、またお父さんと……

亮太郎 なんだつて……

あや子 よくわからないけど、お父さんは、今
すぐに出て行け、貴様こそなんとかつて大變
な御幕なの。保次郎さんの方は、變に皮肉な
笑ひ方をしながら、勿論、なんとかとなんと
かは兩立しないんだから、こんな家にはむら
れないつて、さつさと脚絆を穿かうとしてる
の。それをお母さんが泣いて止めてらつしや
ると……

亮太郎 耳を傾けながら、(観するやうに) よ
し、よし……

第五場

第一場と同じ。
深夜

あや子が腰かけてゐる。その前を亮太
郎が行つたり来たたりしてゐる。

やや長い間。

あや子 あなた、腰かけていらしたつたら……
何んだか、気がせかせかして、なほ時間がた

つのが遅いやうだわ。

亮太郎 静かになつたね。雨も止んだやうだ。

あや子 もつとひどい嵐になるかと思つたの
に……

亮太郎 ああ、いふ時、君はなかなか勇敢だね。
雷が鳴るたびに、眼の色は變つてたが、あ
れツとかんとか云つて、人に抱きつかない
ところは、たしかに女丈夫の面影がある。

あや子 おだてないで頂戴。

亮太郎 おだてるんぢやないが、あれでは、側
についてる男が物足りないよ。こつちは、一
通り壯烈な氣持になつて、君の出方一つでは、
僕がついてるから安心し給へつてなことを、
涙ぐらる眼にためてだれ、あれでも、云つて
みたかつたんだ。

あや子 馬鹿にしてるわ。

亮太郎 僕には、どうも近頃、さういふ欲求が
あるやうだ。

あや子 あたしが、勝氣すぎるつておつしやる
んでせう。

亮太郎 さういふわけぢやない。

長い沈黙。

あや子 あしたの朝、着いたら、すぐ髪を洗ふ

う。(顔を手でさはつてみて) 此處、お痛
いでせう……。お氣分はどうもありません、も
う……?

亮太郎 どうもない……。さつき、少しふらふ
らしたただけだ。

あや子 さうですとも、あんな太いもので……。
だけど、當りどころがよかつたんですわ。

亮太郎 (苦笑しながら) うまく當ててくれた
んだらう。こつちは夢中だつたが……

あや子 あなたの、そんなにひどく當つてま
せん。だつて、丁度あん時、手でよけたの、
あの人……

亮太郎 詳しく見てたね。

あや子 さうぢやないけど……。あぶなくつて
留められないんですもの……。それに、あの
人たち、見てる人も見てる人ですわ。

亮太郎 あの人は、自分でやりたい人た
ちだ。人のでも、止めるのは、勿體ないと思つ
てる。(急に跳ね起き) もういい。(さう云つ
たものの、ぐらぐらと眩暈が来て、思はず妻
の肩に手をかける)

あや子 あぶない。だから、もつと静かにして
らつしやい、ね、もうしばらくの間……
(そつと亮太郎を寝させる) ひどいわね、見

舞にも来ないで……。このままうつつちやらか
しとくなんて……

亮太郎 おやちは……?

あや子 向うにいらつしやるでせう。

亮太郎 お袋が心配してるといけないから、一
寸、もう何でもないつて云つて来てくれ。

あや子 あつちからいらつしやるのが當り前
ですわ。

亮太郎 外のもの手前、来れないんだよ。一
寸行つて来てくれ。それから、保にも、氣の
鎮まるやうに、僕がわるかつたつて謝つて来
てくれ。

あや子 あたし、いや、そのお使ひは……

亮太郎 おい、そんなことを云つてないで……
あそこへ来てる奴等には、さうした方がいい
んだ。おれは、弟と喧嘩をして、此の家を出
て行く氣にはなれない。まして親類の奴等か
ら後指をさされるのはいやだ。あとになる
と工合がわるいから、今のうち、あつち下
に出て置かう。おれもよつほど馬鹿だよ。

あや子 それぢや、あなた、あんまり、御自身つ
ていふものが無すぎますわ。かうなつたら
かうなつたで、理窟はありますもの……

亮太郎 あつても、それはまづいいよ。保が僕に

向つてああ云つた。——百姓の子は百姓
をしると云つた。それをむきになつて怒れば
怒る方がわるい。

あや子 でも、あんな云ひ方をしなくつたつ
て……

亮太郎 そこだよ。あいつの腹は解つてゐる。
こつちを侮辱することは、自分の主張を燃
え立たせる手段なんだ。あの時代には考へさ
うなことだ。あん時は、どういふものか相手
が弟だといふ氣はしなかつた。なんだか、
仕事の敵といふやうな氣がした。いや、それ
より、不思議なことは……自分の生活を脅
す……悪魔のやうな氣さへしたのだ。

長い沈黙。

あや子 また興奮なさりやしない?

亮太郎 僕は、かう見えて、腹痛なんだよ。(ま
た起き上らうとする) もうよからう。

あや子 (押へつけるやうにして) 後生だから、
もう少し横になつて頂戴。

亮太郎 (笑ひながら) だつて、ここはお前、寝
るやうにできてないんだぜ。(頭を振つてみ
て) どうもないよ。こら、どうもない。ぢや、
少しもたれさせてくれ。(半身を起し、妻の方
に寄りかかる) をかしたもんだね、かうして

それを事毎に喰ひ合つたもんだ。村で一番の金持が誰、村で一番の年寄が何處の誰つていふ、それをまた、子供達までが聞き覚えてね、随分滑稽な話さ。僕なんか、小さいくせに、その頃村で一番の美人だつたお初さんといふ娘を見に、そつと、その家の庭へ忍び込んで行つたもんだ。勿論、一人でぢやないよ。(間)今ぢやもう、そんなことを問題にしなくなつたらしいね。世間が廣くなつたんだ。(間)村で一番の栗の木つて云へば、だから、その時は、相當自慢の稱さ。どうして笑ふの。だから、今ぢや、自慢にもならないつて云つてゐるぢやないか。(間)君は、今度、僕の家つてものを見て、がっかりしたらう。

あや子 また、そんなこと……

亮太郎 やつぱり、あの栗の木だけかな、さうしてみると、君に見せるつて云へば……

あや子 それを伐らしておしまひになるのは惜しいわ。

亮太郎 どうせおやぢが承知しやしないよ。そこで、もうこつちは、栗の木なんかには用はないんだから、さつさと、こんな處は引上げて、もつと氣の利いた生活を始めると、それでいい

いぢやないか。(間)さ、もう少し愉快な話をしよう。

あや子 ……

亮太郎 僕はね、今度東京へ歸つたら、どつかで借金をして、家を一新建てるよ。自分で設計をしてさ。此の間うちから、それを考へてゐるんだが、庭はどういふ風にしよう。木を植ゑるとすると、どんな木がいいかね。

あや子 サルスベリつていふ木ね、あの木、あたし好き……

亮太郎 サルスベリか、あれもいいね。

あや子 栗の木は……?

亮太郎 おい、よせ。

長い沈黙。

あや子 なによ、そんなに大きな庭を出して、見つともないぢやありませんか。

亮太郎 やつぱり云つてしまはう。いいか、君は、僕にかくしてることがあるだらう。栗の木が何んだ。どうして、君は、そんなことを云ひ出すんだ。栗の木の下でどうしたと云ふんだ。それを云つてみ給へ。

あや子 なにおつしやるの、あなたは……

亮太郎 なんにも云やしないよ。君が云ひ出すのを待つてるんだ。今日まで、どんなに我慢

をしたか。もうよからう、この邊で、解決をつけよう。

あや子 なんの解決……?

亮太郎 駄目だ。君にさう出られると、やつぱりこつちの負けだ。なんでもない、其處で、その庭だ。サルスベリを一本と……

あや子 なによ、はつきりおつしやいよ。栗の木つて云つたのがわるかつたの。

亮太郎 悪かないよ。まあ僕の云ふことを聴け。庭にはサルスベリを一本と……僕はね、伊太利風の庭園にしようかと思つてるんだが、どうだらう。

あや子 どうも變だと思つたら、やつぱり、さうなのね。そんならさうと、どうしてもつと早くおつしやらなかつたの。

亮太郎 なんでもないつて云つてるぢやないか。それとも、少し植木に金をかけて、純日本風の庭をこさへようか。サルスベリだつて植ゑられるよ。

あや子 ねえ、あなた、今のお話、ちやんとして下さらない。何時までも、そんな風に思つてらつしやるといやだから……

亮太郎 もういいんだよ。僕が悪かつたよ。家の方は、そんなに廣くなくつてもいいね。

の。

亮太郎 君はもうさういふことを考へてゐるのか。(間)僕の奴、きつと東京へ出て来るぜ。あや子 ……

亮太郎 保のことを云ふと、君はすぐ變な顔をするが、あれでも、僕に取つては一人きりの弟だ。ああして家を出ては行つたものの、今頃、何處で何をしてるかと思ふと、一寸暗い氣持になるよ。同じ家を出るのにしても、僕たちのやうに、ほかに生活の基礎があれば、また別だがね。(間)突然、窓の外に向ひ、誰だ、そこに立つてるのは……

あや子 (ギョツとして、そつちの方を見る)

亮太郎 なあんだ、電柱か……

長い沈黙。

あや子 あなたは、ほんとに、どうかしらしてらつてよ。

亮太郎 どうかしてるね、確に……。あの栗の木の下がいけないと思つてゐたんだが、此停車場もよくない。ああ、眼が眩みさうだ。(どつかと腰をおろし、頭を両手でかかへる)

あや子 靜かにさうしてらつしやい、黙つてね……。つまらないことばかりおつしやるか

らいけないの。なんでもないことを變にお取りになるからいけないのよ。

亮太郎 それさうだ。君はなんでも知つてる。答だ。早く東京へ歸らう。

あや子 ええ、歸りませう。

間。

亮太郎 田舎つていふところは、どうして、かう、總てが陰氣に出来てるんだらう。山も陰氣だ。森も陰氣だ。谷も陰氣だ。家も木も草も、動物も人間も、みんな陰氣だ。陰氣ばかりぢやない。毒氣を含んでゐる。僕だけが知ら、さう思ふのは……?

あや子 あなただけよ。あなたのさういふ氣持が、あたしにもうつたといふだけよ。

亮太郎 君にもうつたつてね。それぢや、君は、なにか、あの家を、初めは陰氣だと思はなかつたかい。

あや子 陰氣だとは思はなかつたわ。

亮太郎 それぢや、どう思つた。

あや子 どうつて別に……

亮太郎 あの栗の木だつてさうだ。

あや子 また栗の木……

亮太郎 さうだ、よさう。(間)だがね……。さうだ、よさう。

長い沈黙。

あや子 東京はまだ暑いでせうね。

亮太郎 暑いだらうね。(間)どうして、そんな晴い方ばかり向いてるの。誰かそこにあるの?

あや子 (哀願するやうに) あなた……

亮太郎 (自分を叱るやうに) 馬鹿なことを云ふもんぢやない。(起ち上り、またその邊を歩き廻る) おやぢはね、おれが死ぬまで歸つて来んでもいいつて云ふんだ。それはどういふ意味だと思ふ。君には、あまり口を利かないやうだつたね。

あや子 ええ。

亮太郎 しかし、君のことを感心してたよ、よく氣がつくつてね。田舎者が感心するつて云へばそれくらゐのときさ。(間)お袋は、君を人間扱ひにはしてなかつたね。いや、ほんとだよ。少くとも、ただの人間だとは思つてなかつたよ。お袋はばかりしてたぢやないか。あれも、變な婆さ。笑つていふことを忘れてしまつたんだね。

あや子 ほんとに……

亮太郎 昔から、あの村では、村で一番の何々つていふ工合に、いろんな名物を數へ上げて、

あや子 そんなこと、いや、誤魔化さうとなす
つちや……。あたし、聴かないから……(首
を振る)

亮太郎 だから、僕がわるかつたつて云つてる
ぢやないか。もうわかつたよ。何とも思つて
やしないよ。

あや子 ほんとね。

亮太郎 ああ、ほんとだよ。

あや子 きつとね。

亮太郎 きつとだよ。そんなにむきになる奴が
あるかい。冗談なんだよ、あれや……。

あや子 また、そんな……。

亮太郎 だから、それでいいつて云ふのに……。
うるさいなあ。(いきなり、急ぎ足で外に出
る。が、しばらくして、戻つて来る)綺麗に
晴れてる。星が一杯だよ、空は……。此處へ
着いた時は朝だつたね。さうさう、そこで辨
當を食つたつけな。あん時は、それでも、大
いに歸省気分なんかで、輕便の時間を待ち
遣しがつたもんだ。一月のうちに、變れば變
るもんだね、氣持なんていふものは……。し
かし、人間には、ほんたうに故郷といふものが
必要なかねえ。君なんかどうだい。東京が
戀しいといふのは、故郷だからといふよりも、

あや子 それ、なんの歌……?

亮太郎 知らないのか。秋の歌さ。——秋風わ
たる青木立……と續くんだが、それはまあ、
それとして、向うから、誰か提灯をつけてや
つて来た。

あや子 この汽車に乗るんでせう。

亮太郎 提灯は二つだ。發つ人、送る人か。

あや子 ……。

亮太郎 (あや子の傍に座を占め) 此の停車場
も、これではばらく見納めだ。

あや子 さう思ふと、やつぱり、一寸變でせ
う。

亮太郎 變なもんかい。(間)しかし、君はう
れしさうだね。ほんとにうれしいのかい。東
京へ歸るのが、そんなにうれしいか。

あや子 ええ、うれしいわ。

亮太郎 もう、二度と此處へは来たくないか。

あや子 来たくない。

亮太郎 そんなことがあつてもか。

あや子 離れない。

亮太郎 そんなことがあつてもか。

あや子 (うなづく)

亮太郎 (起ち上り) よし……。

あや子 (顔をそむけ、指の先で、そつと涙を
ふく)

亮太郎 (その邊を歩きまはりながら) 村で一
番の栗の木よ、今年もうんと實が生れ。

都會だからといふ理由の方が主だらう。僕が
東京を戀しがるのと同じわけに違ひない。都
會に住んでみないと、ほんたうの有難味がわ
からない。田舎の生活は、想像してゐる方が
楽しいといふのは眞理だね。

あや子 それも、人によりはしないこと?

亮太郎 人によるかも知れないが、田舎はもう
戀り懲りだ。

あや子 やつぱり、家といふものが中心になら
なければ……。

亮太郎 それや、さうだ。結局、情愛の問題
だね。親とか、兄弟とか——君はまあ、さ
ういふものはないからいいけれど——煩はし
い關係といふ以外に意味のないものかも知
れないよ、どうかするとね。

あや子 それが不思議よ、あたし……。

亮太郎 僕だつて、不思議でないことはないさ。
こんな筈ぢやないと思ふこともあるが、さう
思つても、やつぱりどうすることもできない
んだからしやうがない。

あや子 不孝ね。

亮太郎 フカウ……?

あや子 ふしあはせね。

亮太郎 ああ、さうさね……。まあ、しかし、

それもどうかかわらないさ。肉親の愛だけ
が、人間を育てて行くわけのものぢやないか
らね。

あや子 夫婦の愛は……?

亮太郎 それは口に出すべきことぢやない。

あや子 あら、どうして……?

亮太郎 さういふものなんだよ。(時計を見な
がら) もう、ぼつぼつ、切符を賣りさうなも
のだね。(切符賣場の方へ近づく)

あや子 秋みたいね、今夜は……。

亮太郎 ……。

あや子 全く秋だわ。

亮太郎 しみじみとかい?

あや子 ええ、しみじみと……。

亮太郎 駄目ぢやないか、先を云はなけれ
や……。

あや子 だつて、何にも云ふことはないわ。

亮太郎 ぢや、しかたがない。(朗吟するやう
に)

けふつくづくと涙むれば
悲みの色口になり
たれもつらくはあたらぬと
なぜに心の悲める。

落葉日記 (三場)

東京の近郊
雑木林を背にしたヴィラのテラス

老婦人

アンリエット

弘

秋の午後

長崎子が二つ、その一方に老婦人、もう一方に青年が寄りかかつてゐる。それが毎日の習慣になつてでもゐるらしく、二人とも、極めて自然に、ゆつたりとした落ちつきを見せて、静かに讀書をしてゐる。老婦人は、純日本式の不躰着、ただ、肩

から無造作に投げかけた毛皮の襟巻が、さほど不調和に見えないほどの身ごしらへ、身ごなし。青年は軽快な散歩服。無帽。

收 (書物が手から滑り落ちるのを拾はうともしないで) 少し歩ませませう。

老婦人 (書物から目をはなさずに) もうあと二三枚……

收 (立ち上り、黙つて相手が読み終るのを待つ。が、なかなか済みさうもないので、また腰をおろす)

老婦人 (目をあげずに) 静かになさいよ。

收 (漠然と) 静かにしてゐます。

老婦人 (獨語のやうに) あなたほどのお年になられても、まだ、ものに凝るやうなことがおありと見えますね。

老婦人 ……

收 (ものに凝るといつても、そのことに熱中す

る、つまり、われを忘れてどうかうといふやうなことはおありにならないでせう。やめようと思へば、何時でもおやめになれる……。それをやめないでいらつしやるのは、ただ、ほかになさることがないからなんぞせう。少くとも、ほかのことをなさると、別に違ひはないからでせう……。さうでせう。してみると……

老婦人 (相變らず目を伏せたまま) また、うるさいから……

收 (笑ひながら、しつこく) ねえ、お祖母さま、あなたは、世の中の人間が、みんな、さういふ風に、老眼鏡をかけ、背中を丸くして、宗教の本を讀んでゐれば、それで間違はないと思つておいでになるんでせう。

老婦人 (間違がなけれや、どうなのさ。やかましいね、ほんとに……) (書物を青年の鼻先に突きつけ) これが宗教の本ですか。

收 (脚か拍子抜けがしたやうに) なんだ、アナトール・フランスか……。 Les veils fleur……。 あんな爺にかかり合つてると、ひどい目にあひますよ。

老婦人 (餘計なことを言つてないで、用意をなさい。(立ち上らうとする))

收 (それを制して) その前に、お祖母さま、一寸、お話ししておきたいことがあるんです。

(間) 此處でもいいでせう。

老婦人 ……

收 それぢやどうぞ……(と、老婦人を再び座につかせて) 變だな、すこし……?

老婦人 なにさ、早く云つたら……

收 今、言ひます。かういふ話をする時は、そんな顔を見ないで下さい。

老婦人 あなたが下を向いてゐればいいでせう。それで、わたしに、どうしろといふのさ。

收 もう御存じなんでしょうか。

老婦人 なにを……。まあ、いいから云つてごらん。

(間)

收 お祖母さまは、アンリエットをどういふ處へお嫁にやらうと思つていらつしやるんです。

老婦人 あの娘をお嫁にやるのは、わたしぢやない。立派なお父さんがあるんだもの……

收 しかし、そのお父さんは、外國にばかりいらつしやるし、お母さんが亡くなられてからは、お祖母さまのあなたが、何もかも引受け

ていらつしやるんでせう。さうすると結婚のことだつて、あなたが、いつておつしやるは……

老婦人 まあ、お待ち……。わたしには、それや、幾分の責任はある。しかし、ただそれだけさ。あの娘は、自分で自分の道を選ぶやうに教育してあるんです。

收 どうかしら……

老婦人 なんです、失敬な……。お前こそ、まだ海のものとも、山のものともわからないぢやあないか。今やつてゐる法律なんか、何になるものか。アンリエットは、あれで、なかなか頭のいい娘だからね。

收 僕には勿體ない……。お祖母さまは一體、どういふ男が、お好きなんですか。

老婦人 わたしがかい。

收 (一寸まごついて) お年は別として……

老婦人 どうして? だから、お前は駄目なんだよ。若いばかりが女ぢやあるまい。笑ふなら云つてあげようか、氣障でしやうがない、お前みたいな男は……(怒つたふりをする)

收 (とぼけて) お婆に、松葉がひかつかつてゐますよ。

老婦人 (こたはらずに、取つて棄てる)

收 お祖母さまは、いくつ年の年にお嫁にいらつしやつたんです。

老婦人 どうしてでも……

老婦人 わたしは、早かつた……。十八の春……。アンリエットの年に、わたしは、もう女學校をすまして、例のバリアニさん、あの人のお母さまのオリガさんのところで、伊太利語の勉強をしてゐたものだ。

收 お祖父さまが、羅馬から迎ひに来て下さるのを待つていらつしやつたわけですね、お祖父さまが、その頃……?

老婦人 お年かい? さあ、兎に角、お前みたい若くはなかつたよ。口髭を生やして、堂々たる紳士だつたから……

收 堂々たるはいいな。お祖母さまも、その頃は、楚々たる令嬢で……

老婦人 あたり前さ。お前のお母さんほど丈は高くなかつたけれど、アンリエットみたいに、おちびさんでもなくさ……

收 さうですとも……。その上、乗馬と輻跳びがお得意でね……

老婦人 (笑ひながら) それはうそ……

收 ねえ、お祖母さま、あなたが、お祖父さま

と御一緒に巴里でお寫しになつた寫眞が、この間、お母さまの手文庫から出て来たんですよ。裾のしぼんだ黒いカブを、かう、軽くひつかけて……。あれは、ルネクサンアウルでせう、誰かの像の前で、鳩に餌をやつてらつしやるところ……。かういふ手つきで……。それを見て、僕は、「へえ」つて云つたきり、そこへすわつてしまひました。

老婦人 そんな寫眞があつたかね、お祖父さまはどうしてのさ。

收 お祖父さまは、これはまた、どうかなさればよさうなものを、ステッキを両手で、かう、水平に持つたまま――器械體操でもするやうにね――つくねんと、若い美しいお祖母さまの横顔を見つめておいでになるのです。

老婦人 何を云ふんです。

收 なるほど、疑だけは立派ですね。

老婦人 さうですか。

收 さうです。

老婦人 あの頃の寫眞は、さうだ、随分長く出して見ないから……。わたしの處にも、そんなのがある筈だ……。へえ！ ちや、あん時だ、きつと……。

長い沈黙。

收 お祖父さまと云ひ、うちのお父さまと云ひ、アンリエットのお母さまと云ひ、みんな早死をしたんですね。

老婦人 早死をしたね。イヴオンヌなんか、まだ三十にもなつてなかつたんだからね。

收 僕も早死をしさうだな。今度は、まあ助かつたやうなものだけだ……。

老婦人 お前は、それがいけないんだよ。すぐに自分を弱いものと決めてしまつて……。

收 決めてやしませんよ。だから、今日だつて、テニスをやらうつて云へば、例の、柔道二段が、君は駄目だつて、やらせないんです。アンリエットはまた、それをいいことにして、僕の方を振り向きもしないんです。

老婦人 「Papa, Papa」

長い沈黙。

老婦人 寒くないかい、お前、何も上へ着なくつて……。今日は、風が冷たい。

收 一月ぐらゐ、すぐたつてしまひますね。

(間) ここへ来た時は、まだ白楊の葉が、こんなに黄色くなつてゐませんでした。兎に角、もう、病人とは見えないでせう。

老婦人 見えない。だけど、もうあと、一年間

は用心をするんだね。また何時かのやうなことがあると……。

收 (急に暗い顔をする) 海岸行きを止めて、もう少し、ここにゐたいなあ。

老婦人 寒くさへならなければねえ……。何しろ、冬向きぢやないよ。ここは……。

收 どつち道、僕はここにゐない方がよさうです。

老婦人 どうして？

收 どうしてつて……。お祖母さまは、一番、そのわけを御存じなんです。

老婦人 さ、もう、そのことを云ふのはおよし。男らしく、さつきと發つておしまひ、ね。お祖母さまもわかるかつた。もつと早く、お前の心持を酌んで、できるだけのことをすればよかつたんだけれど……。もう、今になつては、どうすることもできない。お前はこれから、どんな幸福でも……。

收 得られるつておつしやるんでせう。僕さへ、それを望めばね。しかし、お祖母さま、僕は今が一番幸福なんです。いいえ、ほんとは、アンリエットは、まだ時々僕と二人きりで遊んでくれます。朝の食卓は、毎

日僕たち二人だけの爲めに用意されてゐるでせう――お祖母さまは、遅くお目覚めですかね。

老婦人 「L'heure, Monsieur」

收 今だつて、御覽なさい、もう日が暮れるました三人きりになれる。さう思つただけで、気分がこんなに、いいぢやありませんか……。

老婦人 (青年の肩に手をかけ) 気分がいいなら、泣くのはおよし。さ、その邊を一廻りして来よう。

收 ……。

老婦人 さ、お起ち……。

この時、運動服姿の少女が、ラケットを振りながら、現れる。

アンリエット ああ、喉が渴いた。

老婦人 もう済んだの。

アンリエット だつて、ボールが見えないんですもの、暗くつて……。

老婦人 それや、さうだらう。

アンリエット でも、まだ御飯ぢやないでせう。

あら、どうなすつたの、收兄さま？

老婦人 シャトオブリヤンに泣かされたんですつてさ。

アンリエット 小説を読んでお泣きになつた

の？ 可笑しいわ。

老婦人 それより、お前、弘さんは……。

アンリエット ええ、それがね、お祖母さまのそこへ、左様ならをしに来ようとしてらしたのよ。さうしたら、そら、あの柿の木を見て、柿を取るつてきかないの。だから、あたし、お祖母さまに何つて来るから、待つてらつしやいつて、さう云つて来たの。

老婦人 まだ熱してやしないでせう。

アンリエット でも赤いことは赤いわよ。だから、取つていいこと？

老婦人 ああ、それやいいけれど、怪我をしたいやらになさいよ。

アンリエット ええ。(行きかける)

收 (起ち上り) 僕も取らう。(かう云つて少女の後を追ふ)

老婦人 つるやにさう云つて、物乾竿を出してお貰ひ。

收 ああ、さうだ。(裏の方へ走つて行く)

老婦人 (叱るやうに) また、走るんぢやありません。

すると、入れ替りに弘が現れる。

アンリエット あら！

弘 もう遅いから、僕、歸りますよ。また叱ら

れぢやわ……。

アンリエット (つまらなさうに) どうして……。

弘 柿は明日でいいでせう。

アンリエット 明日でいいでせうつて、御自分で云ひ出したくせして……。

弘 (快活に笑ひながら) さよなら、小母さん。(靴子を脱ぐと、いきなり、全速力で走り出す)

老婦人 みなさんによろしく。

弘が去つた後へ、收が竹竿を持つて出て来る。

アンリエット (その竹竿を取らうとする) どうら、貸して……。

收 君ぢや駄目だよ。

アンリエット いや、あたしが取る。

老婦人 アンリエット！

アンリエット (その方をちらと見て、投げ出すやうに竹竿を收の手に渡す) あたしにも取らしてね。

二人姿を消す。

老婦人 (兩人を見送つた後、再び書物の頁を繰る)

長い沈黙。

アンリエットの聲 あれがいいわ。もつと、こ
つち……、そら、そらよ……。志いのある
ぢやないの……盲ね。

老婦人 (時々聲のする方に氣を取られるらし
い、それでも、すぐに、書物の上に目をおと
す、音讀をし始める) J'étais loin d'être un
beau garçon et le fils est que j'ai manqué
de hardiesse. Cela me nuisait auprès des
femmes.

アンリエットの聲 まあ、そんなにひどくしち
や、傷がついてよ……。あたしに貸して……
(間) 大丈夫よ……見てごじや。

老婦人 (音讀する) Car j'estimais que le
plus grand péché d'une femme est de
n'être pas belle.

アンリエットの聲 どうするの。樹に登る
の……。あふないわよ。

老婦人 (一寸、耳を聳てる。が、すぐに) Je
remarquais que dans le monde, beaucoup
de jeunes gens, qui ne me valaient
pas, plaisaient et réussissaient mieux que
moi.

アンリエットの聲 その枝に、いつばい赤い
が生つてゐるぢやないの。ええ、その、あなた

が乗つてごじやる枝……。

老婦人 J'ai toujours cru que la seule
chose raisonnable est de chercher le
plaisir.

アンリエットの聲 (一段聲を張り上げて) あ
ら、お祖母さま、あのねえ、收兄さまがね、
柿の樹の高い處へ登りました。

老婦人 (顔を上げて、心持眉をひそめるが、す
ぐにまた目を落とす) Il n'est pas difficile
de s'élever si un homme est heureux
ou malheureux. La joie et la douleur
sont ce qu'on dissimule le moins, surtout
dans la jeunesse.

アンリエットの聲 いやよ、いやだつてば……。
お祖母さま、收兄さまが、あたしに、溢柿を
ぶつけます。(はしやいで) そんなことをす
ると、かうしてよ。

長い沈黙。

老婦人 Ils étaient jaloux, haineux, ambi-
teux, j'étais indulgent et paisible; j'é-
tais Gnoaris l'ambition.

アンリエットの聲 あら、いいの、そんな無茶
なことをして……。

老婦人 O va de ces passions violentes

qui font les grands hommes et dont je
n'avais pas l'étoffe.

アンリエットの聲 お祖母さま、收兄さまが
ね、柿を皮ごとたべますよ。……よろしいん
ですか。ずるいわ、そんな……。

老婦人 (だんだん、落ちつかぬ様子を示した
す。目を書物から放し、時々、聲のする方を
見る)

アンリエットの聲 お祖母さま。
老婦人 なんです、やかましい。

アンリエット お祖母さま、あのね。(姿を現
はす) あのね、收兄さまがね、柿の樹の上
でお書物をするんですつて……。目をつぶつ
て、腕組みをして、眠てるの。いくら柿でつ
ついても、起きないわよ。

老婦人 いたづらするんぢやありませんよ。も
う降りるやうに、さうお言ひ……。

アンリエット (笑ひながら去る)

老婦人 (しばらく沈黙を續けてゐる)
アンリエットの聲 收兄さま、早く探つて頂
戴よ、暗くなつてよ。(間) いやね、もう少
し左、左よ、左だつたら……。それや、
右ぢやないの……。そこよ、手がさはつて
るのわからないの、それ、それ、ええ、それ

老婦人 (再び音讀を始める) Mais ce dont
je m'aperçus au près une longue observation,
c'est que le désir embaillait les objets sur
lesquels il pose ses ailes de feu, que sa
satisfaction, décevant le plus souvent, est
la ruine de l'illusion, sans vrai bien des
hommes.

アンリエットの聲 もういいわ、それくらゐ
で……。ほんとに、いいのよ、もう澤山……。
(聲がふるへる) もうよして頂戴……。そん
なには、あぶなくつてよ、ねえ、收兄さま、
もういいつて云ふのに……。泣聲になる。急
に、高い聲で) お祖母さま、收兄さまが、云ふ
ことを聴きません。ずんずん高い處へ登つて
行くんですよ……。細い枝のところへ……。

老婦人 (びくつとする) 收、もういい加減に
しないかい。

長い沈黙。

アンリエットの聲 それ御覽なさい。(間) え!
みんなで……? 随分あるわ……。一、二
う、三、四、五、六、七、八、九、
十、十一、十二……十三……。

老婦人 (また、讀む。今度は、やや、高い調子
で)

老婦人 (また、讀む。今度は、やや、高い調子
で)

P)

O Theïains ! jusqu'au jour qui
termine la vie.

Ne regardons personne avec un oeil
d'envie.

Pour-on jamais Prévoir les derniers
coups du sort?

Ne proclamons heureux nul homme
avant sa mort.

アンリエットの聲 あら、どうするの、そん
な上へ登つて……收兄さま、駄目よ、駄目
よ、その枝は駄目、……後生だから、降り
て……。

老婦人 (此の時、突然何かに怍えたやうに、書
物を放した手を、痙攣的に、口のところにも
つて行く。そして、アンリエットの「あッ、あ
ぶないッ!」といふけたたましい叫び聲が聞
える前に、もう立ち上つてゐる)

幕

老婦人
アンリエット
一枝

弘

翌年の三月下旬の朝

前と同じ長椅子が二つ、その一方に老婦
人、もう一方にアンリエットが寄りかか
つてゐる。

二人とも、讀みかけの書物を膝の上の
せたまま、黙つて、何か考へてゐる。
少女は喉に湿布をしてゐる。

老婦人 もうぢき本郷のお叔母さまが見えた
ら、御挨拶だけして、すぐあしたのおさらひ
をするんですよ。

アンリエット ええ、でも、十時には弘さんが
いらつしやるのよ。

老婦人 今日は、まだ、テニスはいけません。
アンリエット どうして……?

老婦人 どうしてつて、お前、やうやく熱がと
れたばかりぢやありませんか。

アンリエット ぢや散歩は……?
老婦人 今日、一日、ちつとしておいで、ね、

「好い子だから……この次の日曜は、テニスでもなんでもなさい。弘さんには、著音機でも聴かせてあげ……」

アンリエット あの方、著音機なんかお嫌ひよ。

老婦人 そいぢや何が好きなのさ。

アンリエット あたしの聲を聞くのが好きなんです……

老婦人 (可笑しさをこらへて) お前の歌かい?

アンリエット 歌でもなんでもよ。あたしが黙つてると怒るわよ。

老婦人 「怒る」とはなんです。

アンリエット お怒りになります。そいぢや……

老婦人 やれやれ……。お前のお相手には持つて来いの人だ。ぢや、お祖母さんには、後生だから、もう少し黙つておくれ。お前と一緒にゐると本なんか讀めやしない。

アンリエット だつて、お祖母さまは……

老婦人 もう深山……。口を縫ひつけとくから……

アンリエット (唇を結んだまま——口を縫はれたつもりで——聲を立てて笑ふ)

老婦人 (それには相手にならず、書物の頁をくる)

長い間。つる現る。

つる お手紙が参りました。

老婦人 (手紙を受け取り、開封する) 本郷へ電話をかけてね、もう奥さんはお出掛けになつたかつて聞いてごらん。

つる はい。(去る)

老婦人 (手紙を讀む。手紙は外國郵便である。可なり長文である。それは、身内の者からの懐しい便りに相違ない。それはまた、ある重大な意味を含んだものでもあるらしい。そして、最後に、いろいろな云ひ知れぬ感動を、讀むものの心の隅々に残すものでなければならぬ)

アンリエット (この間、祖母の顔色と、その心持ふるへてゐる手先に、不意の注意を拂つてゐる。つひに堪りかねて) お父さまからでせう。

老婦人 (黙つてうなづく)

アンリエット (雀躍して) なんて……。あたしには……

老婦人 (手紙の頁を一枚一枚あらためて見る。封筒の中をのぞく) 御免、御免、これがさう

く氣をつけないと、さういふ取り返しのつかないことになる。お前に怪我がなくつて、まあ、よかつたが、本登りなんか、女の子はしない方がいい——しない方がいいですつて……

老婦人 (目に涙をためて) 牧のことはそれだけ……?

アンリエット ええ、それから、ここは飛ばしと……

老婦人 どこを飛ばすのさ。

アンリエット ——「この次は佛蘭西語で手紙を書いてごらん。お祖母さまに直していただかないでだよ」おつと……讀んぢやつた。

この時、つるに案内されて、一枚が現れる。裏中に相應はしい日本語。

一枝 お變りはいらつしやいませんか。

老婦人 ありがたう。あんたこそ……

一枝 御勉強? アンリエットさん。

アンリエット (會釋)

一枝 お風邪はいかが……もう、およろしいの。

老婦人 家に引込んでるのが嫌ひな娘で……しやうがないんだよ。よく、早く出て来られたね。

だ……。さ、あつちへ行つて、ゆつくりお讀み……

アンリエット どうして、此處で讀んぢやいけないの。

老婦人 此處でもいいさ……。少し、静かにして……。(讀みつづける)

アンリエット (これも夢中になつて、手紙を讀む)

老婦人 (一度讀みをはつて、更に讀み返す)

つる現る。

つる あの、本郷の奥さまは、もう一時間ばかりまへにお出掛けになつたさうでございませう。

老婦人 ああさう。ぢや、もう見える時分だから、用意をしてね。

つる はい。(去る)

老婦人 (手紙を封筒にしまひながら) お父さまから、なんて?

アンリエット 一寸待つて頂戴よ。むつかしいことが書いてあるの。あたし、わからないわ、ここんとこ……

老婦人 讀んでごらん。

アンリエット いやあよ。

老婦人 おや、お祖母さんにも……?

一枝 でも、楽しみにしてゐたんですもの。(あたりを見廻し) 一箇月ぶりですわね。すつかり春らしくなつて……

老婦人 ぢや、あつちへ行かうか。

一枝 いいえ、ここがよろしいの。(椅子を引き寄せる。すわる)

アンリエット ぢや、叔母さま、御ゆつくり……(去らうとする)

一枝 あら……どこへ?

老婦人 あんまり長く外にゐると、またなんだから……。あとで、呼んであげます。

アンリエット (去る)

一枝 もう大丈夫だと思つてゐましたのに、此處へ来ると、やつぱり……(目にハンケチを當てる)

老婦人 それや、さうだらう。

長い沈黙。

一枝 柿の木、もうお伐らせになりましたのね。

老婦人 あれで、なかなか手間が取れたんだよ、運び出すのに……。まる一日がかりだつた。倒したのを見ると、随分、大きな樹さ。根も掘り出して、持つて行かせたの。あの跡には牧の好きだつた「もつこう齋飯」でも植ゑよう

かと思つて……

一枝 ……

老婦人 わたしも、秋から、すっかり老い込んでしまつた。

一枝 そんな心細いことをおつしやらないで下さい。お母さまは、あたくしなどよりは、ずつとお元氣ですわ。お楽しみがおありになるせんでせうね。

老婦人 楽しみみつて、あなた……

一枝 あたくしなんか、その後、本を讀む氣もしませんもの……

老婦人 それはまた、別さ。わたしのは、これや、病氣だもの。

一枝 そんな御病氣なら結構ですわ。でも、こんなことぢやいけないと思ひますの。近頃、また、更紗を描いてみてるんですよ。疎なものは出来ませんけれど、あれでまあ、暇潰しにはなりますから……

老婦人 それはいい。こんだ、見せて貰ひに行かう。それから、もつと氣の晴れるやうなことをしてみるんだね。もう、テニスなんか、駄目かね。

一枝 あたくしがですが。おやおや、どんな恰好でせう。

長い沈黙。

一枝 あたくしね、昨日、本棚の整理をしましたら、收の日記を見つけたの。

老婦人 日記をつけてゐたのかい、あの子……

一枝 飛び飛びなんですけれどね……どの日附を見ても、Hがどう云つたの、Hがどうしたのつて書いてありますでせう。Hつて誰かと思ひましたら……

老婦人 アンリエットのことだらう。

一枝 ええ。あたくし……始めて知りましたの。

老婦人 Paive Baroni

長い沈黙。

一枝 ちつとも、氣がつかせませんでしたわ。(間)

老婦人 随分苦しんだらいいんですの。

老婦人 よく黙つてゐてくれたよ。——自分でいろいろ考へてゐたらう、出来ない相談だと云ふことを……

一枝 従兄同志ですけれどね……

老婦人 それにしてもさ……よく黙つてゐてくれた……

一枝 ええ。

老婦人 それに、アンリエットは、あの通り脚

老婦人 恰好なんかどうだつて、やつぱり氣持を明るくするのは、運動に限るやうだね。

一枝 ……

老婦人 音楽なんか、いいだらうけれど、あれは、また、自分で自分に強ひることができないから……

一枝 さうですわ……多少、機械的にでもできることでなければね。

老婦人 相手がゐてくれるといいんだよ。

長い間。

一枝 相手がゐてくれるといいんですわ。どんな相手でも……

老婦人 長い間。

老婦人 收なんか、病氣のせむもあつたらうけれど、何か運動のやうなことをしてゐる時だけだつたからね、快活らしく見えたのは……

一枝 あの子は、運動は、あんまり好きぢやなかつたんですけれどね……

老婦人 それが、やれば、あなるんだから……元氣さうに……面白さうに……

一枝 アンリエットさんと一緒だつたからでせう、それは……

老婦人 そればかりぢやないよ。

氣な娘だから、收にはどうかね。今更、そんなことを云つたつて始まらないけれど……

一枝 西洋人の血が交ると、あなるもんですかね。

老婦人 なにがさ。

一枝 いいえ、氣性がね。

老婦人 氣性は、あなた、お父さん似だよ。

一枝 さうでせうかしら……さう云へば、收もお父さん似ですわね。

老婦人 あなたのこのは、弟のくせに、誰からでも兄さんと間違へられるほど大人しかつた。やつぱり、早死をする子さ。——さういふことを、つくづく、此頃、思ふやうになつたよ。(ボンボンをつづり口に入れ) どう、一つ……いいボンボンだよ。

一枝 ありがたう、たくさん……

老婦人 この時、奥から、蓄音機で、マスネエのレレジイが聞えて来る。

一枝 どなたか来てらつしやるんですの。

老婦人 弘さんだらう。アンリエットのテニスのお相手でね、なかなかしつかりした青年だよ。

一枝 ああ、何時か、いらしつた、あの元氣のいい……

老婦人 少し仲がよすぎるやうだけれど、まあ、まあ……(微笑)

一枝 (これも、強ひて、笑顔をつくり) さうですわ。——なかなかね。

長い沈黙。

老婦人 兎も、無頓着なやうで、やつぱり、残して行つた娘のことは氣になると見えて、今日なんかも、先々のことを、色々相談して來てゐるんだがね。——わたしも先は見えてゐるんだし、かうして手許へ置くのも、少し氣がかりになり出したよ。

一枝 ……

老婦人 その時になれば、どうかなると思ふんだが……やつぱりね。

一枝 ……

老婦人 イヴォンヌは、どうしてか日本の氣候に慣れないで、たうとうあんなことになつてしまつたけれど、母親の無い女の子は可哀さうだね。「ありがたう」と「今日は」といふ言葉を覺えに、透々海を渡つて來たやうなものだつた……アンリエットのお母さんは……

一枝 ほんとですわ。

老婦人 今日は、どうしてまた、こんな話ばかりするんだらう。

老婦人 恰好なんかどうだつて、やつぱり氣持を明るくするのは、運動に限るやうだね。

一枝 ……

老婦人 音楽なんか、いいだらうけれど、あれは、また、自分で自分に強ひることができないから……

一枝 さうですわ……多少、機械的にでもできることでなければね。

老婦人 相手がゐてくれるといいんだよ。

長い間。

一枝 相手がゐてくれるといいんですわ。どんな相手でも……

老婦人 長い間。

老婦人 收なんか、病氣のせむもあつたらうけれど、何か運動のやうなことをしてゐる時だけだつたからね、快活らしく見えたのは……

一枝 あの子は、運動は、あんまり好きぢやなかつたんですけれどね……

老婦人 それが、やれば、あなるんだから……元氣さうに……面白さうに……

一枝 アンリエットさんと一緒だつたからでせう、それは……

老婦人 そればかりぢやないよ。

老婦人 少し仲がよすぎるやうだけれど、まあ、まあ……(微笑)

一枝 (これも、強ひて、笑顔をつくり) さうですわ。——なかなかね。

長い沈黙。

老婦人 兎も、無頓着なやうで、やつぱり、残して行つた娘のことは氣になると見えて、今日なんかも、先々のことを、色々相談して來てゐるんだがね。——わたしも先は見えてゐるんだし、かうして手許へ置くのも、少し氣がかりになり出したよ。

一枝 ……

老婦人 その時になれば、どうかなると思ふんだが……やつぱりね。

一枝 ……

老婦人 イヴォンヌは、どうしてか日本の氣候に慣れないで、たうとうあんなことになつてしまつたけれど、母親の無い女の子は可哀さうだね。「ありがたう」と「今日は」といふ言葉を覺えに、透々海を渡つて來たやうなものだつた……アンリエットのお母さんは……

一枝 ほんとですわ。

老婦人 今日は、どうしてまた、こんな話ばかりするんだらう。

一枝 あたくしの滅入った顔を御覧になつたか
らですわ。来るときは、それは暗れ暗れした
氣持で出かけて来るんですのに……
室内に懐かしい足音が聞えると、急に、
窓のカーテンが開く。アンリエットの姿
があらはれる。

アンリエット ここから御免遊ばせ。あのね、
お祖母さま……弘さんが急に大阪へいらつし
やることになつたんですつて……
老婦人 なんだつてさ……
アンリエット どうしてですか。
老婦人へえ。弘さんに、ここへいらつしやい
つて……

アンリエット (走り去る)
老婦人 アンリエットの顔を見たかい。
一枝 (うなづく)
老婦人 ほんとうと大阪へいらつしやるつて……
弘 (一枝と老婦人に會話した後) 今朝おやち
から云ひ渡されたんです。出し抜けなもんだ
から、面喰つちまいました。
老婦人 大阪へは、お勤めの口がきまつたんで
すか。

弘 それもあるんですけれど……ええ、まあ
さうなんです。
老婦人 それはおめでたう。會社？銀行？
弘 さあ、どつちへ廻されますか。はじめ、い
ろんなことをやらされるらしいんです。
老婦人 實地研究といふわけですね。大阪に
は、お知合ひがおありになるんでしたね。
弘 ええ、おやちが心易くしてゐる人で、い
ろんな事業に手を出してゐる人なんですがね
……その人のうちへ、まあ、預けられるわ
けなんです。

老婦人 それで、何時、おたち？
弘 それがお笑しいんです、この月曜なんです
つて……。服を作るひまもないんですから
ね。
老婦人 この月曜つていふと、(指を折り)あと
四日ですね。前から、ちつともお話はなかつ
たんですの。

弘 僕が行くことですか。それが、前から、僕
をくれつていふ話だけはあつたんです。
老婦人 おや、お養子にいらつしやるんですの。
弘 ええ、まあ、早く云ふと、さうなんです。
このあたりから、アンリエットは、今に
も泣きださうな表情になる。

老婦人 (この様子を見てとつて) アンリエッ
ト、あつち行つてね、つるやに、お養の用意
はどうか聞いておいて……もうぼつぼつか
かるやうにつてね。
アンリエット (縛めを解かれた小羊のやうに
走り去る)
一枝 失禮ですが、向うのお嬢さんは……？
弘 (手眞似で) これつばかりの子供ですよ。
一枝 でも、あなたが、まだお若いから……
それや、お楽しみですわね。

弘 (笑つてゐる)
老婦人 まだお決まりになつてゐるわけぢやない
んですね。
弘 まあ、決まつたやうなものです。考へたつ
てしやうがありませんからね。その代り、い
やだつたら、何時でも出て来ますよ。
一枝 まさか……
老婦人 そのお嬢さまとは、もう何通もお會ひ
になつてゐるんでせう、きつと……
弘 二度……三度……でしたかな。だつて、十
六なんですよ。
老婦人 可愛らしい奥さまができるでせう。
弘 すぐ結婚しやしませんよ。
老婦人 (笑ひながら) それや、さうでせう、ど

うしたつて……
一枝 (笑ふ)
弘 (頭を撫きながら) 養子つて、いやなも
んですつてね。

老婦人 さうとも限りませんわ。ぢや、なんで
すね、東京へは滅多に出ておいでになれませ
んね。
弘 (快活に) 出て来ますよ。アンリエットさ
んがどうしてか、見に来なくつちや……
老婦人 (一枝を顧み) まあ……それは、それ
は……

弘 當分は日本にいらつしやるんでせう。
老婦人 むますとも……わたしをはふつて、
何處へ行くのですか。ねえ、一枝……
一枝 (目で笑ひながら、うなづく)
弘 (少しまごまごして) それでも、また、お父
さまの御都合で……

老婦人 あ、それは、どうなるか、わかりませ
ん。どうせ、何時か、わたしは、一人きりに
なるでせう。
一枝 あたくしがゐますわ。(弘に) ねえ。
弘 さうですとも……
老婦人 一人になるのが寂しいと思つたのは、
もう五六年も前のことですよ。

一枝 あたくしなんか、お母さまのやうには、
なれませぬわ。
弘 僕の母も寂しがりで、今朝から泣き通しな
んです。

一枝 やつぱりね、下がおありにならないか
ら……
老婦人 なあに、子供は親のことなんか考へて
やしないからね。
一枝 ……
老婦人 行きたい處へは、さつさと行くし……
……。死にたい時には、さつさと死ぬし……。

一枝 (寂しい微笑)
弘 いやだなあ、小母さんは、皮肉で……
老婦人 (笑ひながら) 日曜毎に、テニスをしに
いらした家を、お忘れになつちやいませ
んよ。
一枝 (これも、強ひて笑顔を泛べ) それから、
柿の木から落ちて死んだ男の子のゐた家を
ね。

老婦人 さう。
弘 (面を伏せ) 忘れません。
老婦人 アンリエットも、これから、テニスの
お相手がなくなつて、寂しがりでせう。
この時、突然、窓のかけで、アンリエッ

トの啜り泣く聲が聞える。一同、その方
を見る。

老婦人 (異様に緊張した表情で) 弘さん、そ
れぢや、今日は、お話はこれだけにして置き
ませう。おたちになる前に、もう一度いらし
つて下さい。お別れに、お茶でも飲みませう。
アンリエットは、少し氣分が悪いやうですか
ら、失禮させて頂きます。
弘 はあ、では、御免下さい。いづれ、また……
(會話して去る)
沈黙。

老婦人 アンリエット……(返事がない) アン
リエット……(静かに立ち上り奥にはひる)
やがて、彼女は、アンリエットの肩に手を
かけ、いたはるやうにして現れる。
一枝 どうしたんですの。
老婦人 (元の座につき、アンリエットを膝の上
に抱きながら) 泣くひとがありますか、そん
なことぐらゐで……

アンリエット (恥かしさうに老婦人の胸に顔を
を埋める。が、何を思つたか、急に、其處を離
れて、奥へ逃れ去る。階段を駆け上る足音)
老婦人 (あつけに取られて、一枝と顔を合せ
るが、不圖、或る豫感が頭をかすめたらしく、

急に席を起つ。しかし、思ひ直して、今度は、足音を忍ばせながら、靜かにアンリエットの後をつける。
一枝 (獨り取残された形で、無意識に席は立つたものの、ぼつねんと、二階の上を見上げてゐる)

長い沈黙。
暫くして、老婦人が相變らず足音を忍ばせながら現れる。極度の不安から解放された時の、やや疲れたらしい顔つき。
一枝 大丈夫ですの。

老婦人 なにが？ アンリエットかい。(それに答へず) やつぱり、いけなかつたね。
一枝 でもね……さういふもんですわ。
老婦人 (溜息をつき) またかと思つた。
一枝 え？ またかとは？

老婦人 さうだ……泣きたいだけ泣くがいい。女は……若い女は、涙と一緒に悲しみを流してしまへるんだからね。

三

老婦人
アンリエット

アンリエット (老婦人の顔に手をあて) おつむり、下げていらした方がよきはありませぬの。
老婦人 (角の立たないほどに) お前が、あんまりせかすからさ。(間)——心配しないでいよ。
長い沈黙。

アンリエット あつち、どうしませう。
老婦人 もう少し休んで……。すぐなほるだらう。
つる 現る。

つる 今すぐお見えになります。丁度、お出かけにならうとしてらつしやる處でございまして。
老婦人 なに、一寸眩暈がしただけさ。お醫者さんなんか、よかつたのに……。少し喉がかわくやうだから、熱いお茶を一杯入れて来ておくれ。

つる はい。(去る)
アンリエット 今日、いらつしやらない方がよくないこと？
老婦人 なあに、大したことはあるまい。——わたしを迎ひに行かないつて法はないよ。
アンリエット でも、かうやつてると、遅くな

つる
醫問

その年の秋の午後——葉の落ちつくしたポブラ

窓が開いてゐる。室内は、よくは見えないが、ただ、老婦人が、忙しうに出たりはひつたりしてゐる様子が見える。
アンリエットの、「お祖母さま、一寸、いらしつて……」といふ聲が二階から聞える。
つるが、家から出たりはひつたりする。やがて、外出の服装をしたアンリエットが先に立ち、老婦人、漬いてつるが現れる。

老婦人 (時計を見ながら) まだ少し早いね。今から行くと、一時間も待たなくちやなるまい。
アンリエット 少し早いめに行つた方がいよとよ。叔母さま、五時に向うに行つてらつしやる答よ。

つる、茶を持って来る。
老婦人 (靜かに、茶を飲む) 應接間を綺麗に片づけてね。それから、食堂の電球を取替へておくこと、忘れないでね。
長い沈黙。

つる はい。
老婦人 (自分で服をみながら、獨言のやうに) 年を取ると意氣地がなくなるね。——御免よ、アンリエット。お祖母さんは、今、少し意地の悪いことを云つたね。さうぢやない。お前のお父さんは、お前の顔を見に歸つてらしたんだ。だから、お前が一番にお父さんの前に出て、「お歸りなさい」つて云ふんですよ。さうしたら、何んておつしやるだらう。お父さんは、先づお前を両手で抱いて、「よく長い間おとなしくお留守をしてゐたね」つて……。それから、お前の頬をさすりながら、「お母さんそつくりになつた」つておつしやるだらう。

老婦人 あ、さうさう、お父さんは、お前にキッスをなさるかもしれないから、びつくりしちや駄目だよ。
アンリエット キッスなんかなんでもないわ。あたし、お父さまがお立ちになる時のこと覚えてるの。お母様が痛くつて、どうしようかと思つたわ。お祖母さまはなさらないの。

老婦人 お祖母さんもしたいんだけれど、これは、お父さんの方で、びつくりするだらう。かう云ふと、急に、片手を額にあて、もう一方の手を、アンリエットの肩に支へて、ひよるひよるつと前にのめらうとする。アンリエットと、つるが、慌てて、抱き止める。

アンリエット お祖母さま、どうなすつたの。
つる 御隠居さま……。

老婦人 は、老婦人を、長椅子に倚らせる。
つる お醫者様をお呼び致しませうか。
アンリエット 一寸、電話をかけて……。溝口先生のとこね……。早くよ……。

つる (走り去る)
アンリエット (泣聲で) お祖母さま、御氣分がおわるいの。何かお薬は……？
老婦人 (力なく手を振る)

(間) つるや、もうここはいいから、早く叱の支度をしておいで……。よしやはまだ歸らないかい。
つる はい、まだ……。あの人はお使ひが遅いんで困ります。

老婦人 お前だつて早いぢやないよ。さ、お醫者さんが見えたら、こちやなんだから、上へ上らう。(時間を見て) まだ二十分は大丈夫……。 (起ち上らうとするが、また椅子に寄りかかる) をかしいね、どうもまだいけな

い。
アンリエット もう少し、このままにしてらした方がいよことよ。(外の方を見る) お苦しいんですよ。
老婦人 いいや、かうしてれば、どうもない。——誰か、このまま、そつと、東京驛まで連れて行つてくれるものはないかしら……。

アンリエット (面白がつて) 椅子ごと？
老婦人 ああ、椅子ごと揃いで……。なんだと思ふだらう、みんな……。

アンリエット 人がたかつて来るわね。
老婦人 息子の歸りを出迎へに來た、年取つた母親の、恰めな姿だと知れば、笑ふものもあるまい。どら、その襟巻を取つておくれ。

幕

アンリエット 少し早いめに行つた方がいよとよ。叔母さま、五時に向うに行つてらつしやる答よ。

アンリエット (泣聲で) お祖母さま、御氣分がおわるいの。何かお薬は……？
老婦人 (力なく手を振る)

アンリエット (老婦人の肩に毛皮の襟巻を着せかける)

老婦人 かうしてると、裾が寒い。何かかけるものを……

アンリエット (奥にはひる)

アンリエット そんなにお動きになつちや駄目よ。

老婦人 お前も、そこへ掛けたらどう。立つてちや草臥れるだらう。(アンリエットの帽子からはみ出てゐる髪を直してやりなどする) お前にこの帽子は一番よく似合ふね。どれ、あつちを向いてごらん。よし、よし……

お父さんに會つたら、なんて云ふの。

アンリエット (云ひにくがつて、からだをひねる)

老婦人 なんて云ふのさ。——黙つて、さうしてゐるのかい。

アンリエット ほかに澤山人があるの。

老婦人 さあ、どうだか……誰にも知らせなかつたかもしれないね、あの人のことだから……尤も新聞には出てゐたんだから、歸つて来ることは知つても、着く時間なんかわかるまいしね。昔のお友達やなんかとは、どうなつてゐるんだか……

アンリエット (お父さまを探してお貰ひ……) けてね、二精にお父さまを探してお貰ひ……つるやを連れて行くかい。

アンリエット いいわ。

老婦人 途中は大丈夫だね。いや、やつぱりつるやを連れておいで。

アンリエット いいのよ、お祖母さま。東京驛なら、わかるわ。

老婦人 さうかい。本郷の叔母さまは、婦人待合室で待つてらつしやる筈だからね。時間はまだゆつくりだから、慌てないでもいいよ。

アンリエット お父さまは、どんな服を召していらつしやるかしら……

老婦人 さあ、それはわからない。お前、お顔をよく覚えてないんだね。叔母さまは、いくらなんだつて、覚えてる筈だ。(考へて) ちやね、かうするといふ。——この寫眞を持つて行つて、見くらべてみるさ、汽車から降りる人の顔を一々……(さう云つて、笑ひながら、頭にかけた鎖を外し、アンリエットの頭にかけてやる)

アンリエット (その寫眞を一時見つめてみる)

老婦人 鼻の横に大きなホクロがあるから、それを目標にしてね。(醫師に笑ひかけ) 丸で

せう。

醫師 ははあ、今日は、いよいよ、お着きの日ですな。今、お出掛けのところだつたんですか。

老婦人 はあ、丁度出掛けようとして、ここま

で参りましたら、ふらふらつといたしました

ものですから、かうやつて、休んでをりましたん

ですの。

醫師 そこちや御窮屈でせう。まだ、ふらふらなさいますか。

老婦人 今、ここちやあんまりだと思ひまして

起ちかけたんでございますけれど、なんです

か、まだ……

醫師 (脈をとりにながら) はあ……

老婦人 何時か、かういふことがあるだらうと

覺悟はしてをりましたんですけれど……

醫師 覺悟は大袈裟ですな。いや、大したこと

はありません。

老婦人 例のちやございませぬまいか。

醫師 いや、いや、それとは違ひます。やはり、

軽い脚氣血でせう。大分、お氣をお使ひにな

りましたらうからな。

老婦人 ええ、もう二度とないことございませ

すから……

もありませんよ。これくらゐのことはさらにあります。

老婦人 それやさうでせう。

醫師 お連れする前に、一寸、カンフルを一本射しときませう。

老婦人 注射ですか。

醫師 必要はあるまいと思ひますが……。

老婦人 そんなら、よしませう。痛い思ひをするだけ損ですわ。

醫師 そんなことおつしやらないで……。

老婦人 そんなら、このまま、ちつとしてゐませう。

醫師 それだけはつきりなすつていらつしやれば文句はありません。(つるに)お床の用意は出来てゐるんですか。

つる はい。

醫師 お二階でしたな。(間)それでは……。(考へる)何か、下に敷くものはありませんか。もう暫く、このままの方がいいでせう。

つる 奥に去る。やがて、クッションを二つ三つ持つて来る。

醫師 それで結構。(老婦人の腰の下、肩の下などに敷く)どこか、お痛いところはありませんか。

老婦人 頭が……。

醫師 (脈をとりながら)それは、御心配いりません。平常、ああいふ風に申し上げてあつたものだから、若しやお思ひになるのでせうが、この通り、心臓はたしかなので、決して怖くはありません。動脈硬化も、奥さんぐらゐの程度なら、まだまだ……。(間)お顔色がだんだんよくなつて来ました。(つるに)お宅には、ウキスキーかなにかありませんか……葡萄酒でもよろしい。

つる 葡萄酒ならございます。

醫師 少しどうぞ……。

つる 奥に去る。やがて、葡萄酒を持って来る。

醫師 (それを老婦人に飲ませる)平生、少しづつ、召上つていらしたんですな。(瓶を檢めながら)これは、なんですか……ハ……ウ……サ……サ……ウテルネ……。

つる オート・ソーテルヌでございます。

醫師 (つるの顔を見上げ)なるほど、耳聾といふやつで……。

つる (口を抑へ、聲を立てずに笑ふ。が、急に眞顔になり)御隠居様、お寒くはございませんか。

醫師 さやう、少し、薄いやうですね。もう一枚、何か……。(体温器を挿入する)

つる、奥にはひり、別の羽根蒲團を持つて来る。

老婦人 先生はお寒くはありませんか。

醫師 いや、わたしは、太つてますからな。

老婦人 もう何時でございますか。

醫師 今が、きつち五時です。

老婦人 ……。

醫師 折角の日を、どうも残念でしたな。

老婦人 あたくしは、もう息子を一人失くし、嫁を一人失くし、孫を一人失くしたんですからね。それから、もう一人の息子は、十年間もあたくしをうつちやらかして、旅へ出たまま歸つて来ようとはしなかつたんですもの。それでも、自分の手許には、さきほどのあの孫娘を、世の中にたつた一つしかない寶のやうに、大切に預つて、可愛がれるだけ可愛がつて来ましたのが……それさへ、今日、赤の他人に奪はれてしまふんです。赤の他人も同様です。それは、旅から歸つて来る伴のこゝとを申すのではありません。もう一人の男であたくしの息子だと云つて、大きな顔をして

した。

老婦人 あたくしが、ここに、かうして、書物を読んでゐましたんですよ。

醫師 さうでしたか。お驚きになつたでせう。老婦人 變なものですわね。あの子が——取つて申しますんですが——柿の木へ登つて柿を取つてゐることは知つてゐたんでございますよ。危いことをする、早くやめてくれればいい、さう思ひながら、つい、止めることもせず讀む方ばかり氣を取られてゐたんでございませう。

醫師 よくあることです。たしか、お嬢さんもその場にいらしたんでしたな。

老婦人 あれが何か、大きな聲で、しきりにあたくしに云ひつけてをりますのが耳に入りながら、どうしたと云ふんでせう……あれで、一度か、二度、注意はしたと思ひますんですけれど……。

醫師 どうも怪我といふものは、こいつ、豫め、なんとするわけにも行きませんでした。

老婦人 それがね、後から考へてみますと、ただの怪我ぢやないらしいんです。こんなこと、申し上げていいかどうか存じませんけれども……。

醫師 いや、それは何ひますまい。醫者はただ、與へられた場合の處置さへ講じればよろしいのです。立ち入つたお話は、お互のためによくはありませんまい。それに、あまり、また、お話が過ぎると、お疲れになりますから……。

もう暫く、かうしてゐて、お部屋へお連れさせよう。大分、冷えて来ました。

老婦人 あの柿の木は、その後、伐らせてしまひましたの。

醫師 何ひました。

老婦人 その跡へ、「もつこう薔薇」を植ゑさせましたんですけれど、よくつかないらしいんです。萩といふ子が、あの花が好きでしてね。

醫師 はあ。(脈をみる)長い沈黙。

老婦人 なんです、胸騒ぎがして……。

醫師 (黙つて脈を見つづける)

つる (醫師に)何か御用はございませんですか。

醫師 あ、それぢや、一寸、わたしの家へ行つてね、……いや、伴のものにこれを取りやつて下さい。(紙片に何か書きつけて渡す)

つる はい。(退場)

醫師 御氣分は……?

老婦人 少し頭痛が……。

醫師 静かになすつていらつしやい。すぐよくなりませう。汽車は、何時ですか。

老婦人 五時三十分……。

醫師 (時計を見ながら)五時三十分と……。

老婦人 間に合ひませうか。

醫師 何がですか。

老婦人 お隠しになつてはいけません。仰しやつて下さい。ほんたうのことを……。

醫師 ほんたうのことと云ひますと……。

老婦人 丁度必要なだけ……。(溜息)

醫師 なにがです。

老婦人 あたくしの命が……。

醫師 御元氣おつしやつちやいけません。

老婦人 (苦しきうに)ここでは困ります。

醫師 ええ、今……。

老婦人 つるや……。

醫師 女中さん……。

つる、急いで現る。

老婦人 つるや、わたしを、向うへ連れて行つておくれ。

醫師 いや、一寸待つて……奥さん、なんで

みる男です。

老婦人 これは自分の娘だ——さう云つて、また、あたくしの手から、あのアンリエットを攫つて行かうとしてゐるんです。あたくしの伴なら、そんなことはしない筈です。ねえ、さうぢやございませんか。

老婦人 ……。(體温器を外して見る。首を傾ける。不安らしい表情)

老婦人 あのアンリエットの爲めには、あたくしは、殆ど、一人の男をさへ殺しました。その男とは、やはり、あたくしの可愛がつてゐた孫です。父親を失くして、一生目を養はせてゐるのかと思はれるやうな、あの寂しい男の子。…このあたくしですよ、あの収を殺しましたのは…。(溜息)

老婦人 ええ、さうです、柿の木から…。あの柿の木のでつべんに、アンリエットの心臓が、赤く、ぶら下つてゐたんですもの…。

老婦人 (殆ど口の中で) 頭が…頭が…。

老婦人 (だんだん興奮状態になる) 一枚、ゆ

でも、至急、おいでを願つて下さい。御病氣だと申し上げてもよろしいんでございませうか。

老婦人 勿論、さう云つて…。

老婦人 本郷の奥様は、只今、停車場の方へ、お宅の旦那様をお迎へに行つておいでになる筈でございますが…。

老婦人 こちらへ、御一緒に見えるんですか。

老婦人 さあ、それは…。

老婦人 兎に角、お知らせだけしといて…。ほかに別、お知らせするところはありません。

老婦人 あたくしでは、一寸わかり兼ねます

老婦人 ……。

老婦人 よろしい。取敢へずお願ひします。

老婦人 つる、急いで退場。醫師、注射をする。

老婦人 アンリエット…アンリエット…。

老婦人 今、すく…もうぢきです。

老婦人 収、何をそんな顔をして見てるんです。そんな處に、誰もあやしないよ。

老婦人 (老婦人の脈をとる)

長い沈黙。

この頃から、夕日があたりを染め、老婦人の顔に、一種、莊嚴な光を浴びせはじ

るしておくれ。お前の、かけがへのない一人息子が、あまで思ひつめてゐたアンリエットの目に、その頃から、弘といふ青年が映つてゐた—それから、その青年の方でも、アンリエットを—から思ひ込んでゐたわしが、この春、どんな悲劇を見せられたか、一枝、お前だけは、ちゃんと、それを知つてゐるね。

老婦人 (老婦人の脈をとる)

老婦人 お前は、その時、収のことを思ひ出してゐた。さうして、わたしを、例の目で見てゐた。わたしは、この一年間、お前のその目を、どれだけ避けようとしてゐたか。お前は、なんにも知らないといふだらう。誰がそれを知つてゐよう。だが、お前は、やっぱり、母親だもの…。子供の運命については、神の聲を聞くことのできる母親だもの…。お前は、その敏感な母親の鼻で、わたしの罪を嗅ぎ當ててゐたんだね。

老婦人 (益々不安な表情)

老婦人 (息苦しきうに、しかし、朗らかな聲で)

O Thekinis i Jusuqian juor qui termine la vie……

める。

老婦人 (やや穏やかな調子に復し) そうら、歸つて来た…。もう少し遅いと、母さんは、お前の顔が見えなかつたんだ。さ、こつちへおいで…。海は荒れなかつたかい。(問) よく歸つて来てくれたね。あんまり遅いので、母さんは、お前が道に迷つたんぢやないかと、思つて心配したよ。まあ、どうしたの、その埃は…。

老婦人 (益々不安な表情)

老婦人 (益々不安な表情)

老婦人 (益々不安な表情)

老婦人 (益々不安な表情)

老婦人 (益々不安な表情)

老婦人 (益々不安な表情)

老婦人 (益々不安な表情)

老婦人 (益々不安な表情)

老婦人 (益々不安な表情)

老婦人 (益々不安な表情)

老婦人 (益々不安な表情)

老婦人 (益々不安な表情)

老婦人 (益々不安な表情)

幕

長い沈黙。

つるが、白い布の包みを持つて、恐る恐る近づいて来る。醫師の手に包みを渡し、何やら小聲で囁く。醫師、うなづく。

老婦人 (老婦人の耳許に口を寄せ) 大分およろしいやうですから、向うへお連れさせよう。

老婦人 お黙り…。お前はお父さんと何處へでも行くがいい。お祖母さんは、もう用のないからだから、お前たちの邪魔にならない處にゐよう。

老婦人 風邪でもお引きになるといけませんからな。

老婦人 アンリエット…。どうして、お前は、何時までも、そつちを向いてゐるの。怒つたのかい。何も、そんなに怒ることはないぢやないか。

老婦人 (つるに目くばせしながら、老婦人のからだを起さうとする)

老婦人 (それを、向う側に廻つて、手傳ふ)

老婦人 (突然) あ、いけない、いけない。(手を放す。急いで、注射の用意をする) 本郷に御親戚があるんでしたな。電話がありますか。

老婦人 はい。

老婦人 あまり、びつくりなさらんやうに…。そ

紙風船 (一幕)

晴れた日曜の午後一庭に面した座敷。

夫。(縁側の藤椅子に寄り、新聞を讀んでゐる)「米國フラー建材會社のターナー支配人が一日目白文化村を訪れて、おおロシアンゼルの新築園よりと申しましたやうに、目白文化村は今日運河たる美しい住宅地になりました」

妻。(縁側近く座蒲團を敷き、編物をしてゐる)なに、それは。

夫。(讀み続ける)「四萬坪の地區には、整然たる道路、衛生的な下水道電熱供給装置、テニスコート等の設備があり多くの小綺麗なペンガローヤ莊重なライト式建築、さては、優雅な別荘風の日本建築などが、富士の眺めや樹木に富む高臺一帯の晴れやかな環境に包まれて……(新聞を投げ出し)おい、散歩でもして見るか。

妻。いいから川上さんとこへ行つてらっしゃいよ。

夫。是非行かなくつてもいいんだよ。妻。あたしは、思ひ立つた時すぐでなければいやなの。

夫。散歩か。

妻。散歩でもなんでも……

夫。散歩でもなんでもつたつて、ほかに何かするところがあるかい。

妻。ないから、それでいいぢやないの。

夫。あ。

妻。川上さんとこへいらつしつたらどう、そんなこと云つてないで。

夫。もう行きたくないよ。妻。行つてらっしゃいよ、ね。夫。行かないよ、お前のそばにゐたいんだよ。わかない奴だなあ。

妻。わかつてますよ、憚りさま。(間)

夫。あゝあ、これがたまの日曜か。

妻。ほんとよ。

夫。(また新聞を拾ひ上げ、讀むともなしに)かういふ場合の處置なんていふことを、新聞で懸賞募集でもして見たら、面白いだらうな。

妻。あたし出すの。

夫。(新聞を見入りながら、興味をなささうに)何んて出す。

妻。問題はなんて云ふの。

夫。問題か……問題はね、結婚後一年の日曜日を如何に過ごすか……

妻。それぢや、わからないわ。

夫。わからないことはないさ。ぢや、お前云つて見る。

妻。日曜日に妻が退屈しない方法。

夫。そして、夫も迷惑しない方法……

妻。いいわ。

夫。名案があるのか。

妻。あるの。先づ女は、朝起きたら、早速お湯に行つて、ちゃんと化粧をすまして、着物を着替へて、一寸お友達の處へ行つて來ますつて云ふの。

夫。止めるわ、なんとか云つて。

妻。何んて云つて止める。

夫。是非行かなくつても済むんなら、今日は、おれと芝居を附合はないか、とか何んとか……

妻。なるほど。附合はうつて云はれたらどうする。

夫。行けばいいわ。

妻。行けばいいさ。しかし、行きたくなかつたらどうする。行きたくつても、事情が許さなかつたらどうする。今日見たいの。

夫。活劇か……あれや、お前、夫婦で見に行くんぢやないよ。

妻。なぜ。

夫。誰にでも訊いて見る。

妻。それがいけないの、あなたは。あたしはほかの女と違ひますよ。

夫。違ふだらう。違ふから、なほあぶない。

妻。何を云つてるの。

夫。やつぱり出るといふものは、止めない方がいいやうだな。

妻。すると、男は、きつといやな顔をするにきまつてるでせう。

夫。きまつてやしないさ。

妻。あなたのことよ。

夫。おれが何時いやな顔をした。

妻。しないの。

夫。まあいい、それからどうする。

妻。いやな顔をするでせう。さうしたら、かう云ふの——實は、あんまり行きたくもないんだけれど、うちでぶらぶらしてたつていふことが後でわかると工合が悪いから……それが、會ふたんびに、一度遊びに來い、日曜なら主人もゐるし、一緒に芝居にでもつて、さう云はれるんでせう、今日は、どうせあなたもうちにゐて下さるんだし、一寸行つて來ようと思ふの。それとも、何か御都合でもあればつて優しく訊いて見るの、それとなくよ。

夫。それとなくね。いや、別に、おれの方はかまはないが、お前がゐらなくつて、晝飯はどうする。

妻。お晝は、お茶漬の用意をして置きました。

夫。晝は。

妻。晝は、出がけに「あづまや」へ寄つて、親子

でもさう云つて置ませう。

夫。また親子か。歸りは遅くなるだらう。

妻。さうね、まあ、はつきりわからないけれど、十時になつたら、お床を敷いて寝てて頂戴。

夫。金は持つてるかい。

妻。それがもう、すつかりなの。

夫。ぢや、これを渡しとから。さ、十圓。

妻。ありがたう。

夫。夜風はもう寒いよ、襟巻を持つてけ。

妻。ええ。

夫。さて、おれは、これからゆつくり本でも讀まう。湯だけ沸くやうにしておいてくれ。客が來たら、ビスケットの残りはまだあると……

妻。今日は何も刺さるまい。あゝあ、長閑な日曜だ。

夫。(黙つて下を向いてゐる)

妻。どうしたい。

夫。あなたは、もう駄目。

妻。どうしてでも。

夫。(新聞を投げだし)さうか、それぢや、お前が若し男だつたら、さういふ時どうする。妻。さういふ時つて……

妻。それこそ、朝から用意をして、朝御飯を食べたらすぐ出掛けるくらいでなければ……。

夫。前の晩に話をきめといてね。

妻。さうよ、何處なら何處へ行つて。

夫。日歸りで鎌倉あたりへ行くのもいいな。

妻。行きたい處があるわ。

夫。さうするつていふと、東京驛を八時何分かに出る汽車がある。

妻。二等よ。

夫。當り前さ。早くあの窓ぎはの向ひ合つた席を占領するんだなあ。おれのステッキとお前のバラツルとを、おれが、から網の上のせ……。

妻。あたし、持つてゐる方がいいの。

夫。さうか。後からはひつて来る奴らは、おれ達を見て、ははあ、やつてるなと思ひながら、成るべく近くに席を取るに違ひない。

妻。馬鹿ね。

夫。汽車が動き出す。

妻。窓を開けて頂戴。

夫。煤がはひるよ。あれ御覽、濱離宮の跡だ。

妻。まあ。

夫。品川、品川、山手線乗換。

妻。早いね、あたし、キャラメルを買ふの。

妻。あなた話ができる筈だ。

夫。話……どんな話がある。

妻。話は「する」ものよ。「ある」もんぢやないわ。

夫。なんだ、それや……。哲學か。よし、話は「する」ものとして置かう。お前だつて話をしないぢやないか。

妻。うるさいつておつしやるからよ。

夫。何かしてる時に喋るからさ。

妻。うそよ、寝てからでもよ。

夫。ねむいからさ。

妻。(しんみり) ほんとを云ふと、あたしは、黙つてあなたのそばにゐさへすれば、それで満足なの。あなたが、もう少しあたしに氣をつけて下さると、それこそ、どんなにいい方だか知れないんだけれど。

夫。(小鼻をうごめかし) 晩飯の菜はなんだい。

妻。(快活に) 未定よ、今日の成績次第。

夫。(その氣持に乗り兼ねて) お前はいつまでも女學生だね。

妻。どういふ意味。あたし、何時でもさう思ふの、日曜なんか、それや餘裕がある時は、お芝居を見に行くなり、何かおいしいものを食

夫。よし、おい、キャラメル。

妻。あなたはいかが。

夫。もらはう。大森は通過、もうちき社長の家が見える。

妻。あれがさう、けちな家ね。

夫。けちな家だ。蒲田、川崎は飛ばして横濱と。こんな處にも用はない。程ヶ谷、戸塚、さあ大船へ来た。

妻。あたし、サンドウキツチを買ふの。

夫。よし、おい、サンドウキツチ。

妻。あなたはいかが。

夫。うむ、もらはう。

妻。いやよ、一人でたべちや。

夫。さ、降りる用意をした。下駄を穿いて……。

妻。坐つてなんかみません、そんな……。

夫。先づ行くとすると八幡宮だらうな。知つてるか。

妻。知つてますよ。それより、海岸へ行つて見ませうよ。

夫。それもよからう。ええと……。

妻。自動車を呼べばいいわ。

夫。さうか、おい、タクシー。さあ、お前先生へ乗れ。

妻。ちや、御免遊ばせ。

夫。そこ、煙草に火をつけると。

妻。その前に、行先をおつしやいよ、運轉手に。

夫。海岸でいいぢやないか。

妻。をかしいわ、海岸までなんて。一寸、運轉手さん、海濱ホテル。

夫。海濱ホテルは閉まつてやしないか。

妻。うそおつしやい。

夫。しやうがない。行つちまへ。ブウ、ブウ、ブウ……。

妻。何よ、それや。もう来たのよ。

夫。やれやれ。ちや、見晴しのいい部屋へ通してくれ給へ。

妻。食堂でいいぢやないの。

夫。さうさ、だから、お前、何か注文しろ。

妻。あなたは。

夫。おれはなんでもいい。

妻。ちや、カルピスを二つ、冷たいのね。

夫。おい、君、君、妻まではまだ間があるから、少しその邊を歩いて来よう。十二時には歸つて来るから、何か美味しいものを食はして呉れ。

妻。さう。

夫。それから當分滞在したいんだが、いい部屋があいてるか。バスルームのついた……。

妻。さうね、だから行つてらつしやい、川上さんそこへでもなんでも。

夫。しつこいな。今朝お前は何んて云つた。おれが、川上の處へ行つて来るつて云つたら、川上さん川上さんつて毎日社で顔合はせてる人を、なんだつてさう慰しがるんでせうね、日曜ぐらゐ一日うちにいらつしつたつて損はないでせう。何んの爲めにあたしがかうしてゐるんです。さう云つたね。

妻。それがどうしたの。

夫。どうもしないさ。問題は、お前が、何んの爲めにかうしてゐるかつていふことだ。

妻。(ややむきになり) あら、かうしてゐてはいけないの。

夫。かうしてゐるにも、かうしてゐやうがあるぢやないか。おれが新聞を読む。お前は編物をしはじめる。おれが溜息を吐く。お前も溜息を吐く。おれが欠伸をする。お前も欠伸をする。おれが……。

妻。だから、どつかへ行きませうて云へば、あなたも、なんとか、かんとか云つて……。

夫。よし、それはわかつた。だが、おれたちは、日曜にどつかへ行く爲めに、夫婦になつたわけぢやあるまい。うちにゐたつて、もう少し

妻。あなた話ができる筈だ。

夫。話……どんな話がある。

妻。話は「する」ものよ。「ある」もんぢやないわ。

夫。なんだ、それや……。哲學か。よし、話は「する」ものとして置かう。お前だつて話をしないぢやないか。

妻。うるさいつておつしやるからよ。

夫。何かしてる時に喋るからさ。

妻。うそよ、寝てからでもよ。

夫。ねむいからさ。

妻。(しんみり) ほんとを云ふと、あたしは、黙つてあなたのそばにゐさへすれば、それで満足なの。あなたが、もう少しあたしに氣をつけて下さると、それこそ、どんなにいい方だか知れないんだけれど。

夫。(小鼻をうごめかし) 晩飯の菜はなんだい。

妻。(快活に) 未定よ、今日の成績次第。

夫。(その氣持に乗り兼ねて) お前はいつまでも女學生だね。

妻。どういふ意味。あたし、何時でもさう思ふの、日曜なんか、それや餘裕がある時は、お芝居を見に行くなり、何かおいしいものを食

夫。そこ、煙草に火をつけると。

妻。その前に、行先をおつしやいよ、運轉手に。

夫。海岸でいいぢやないか。

妻。をかしいわ、海岸までなんて。一寸、運轉手さん、海濱ホテル。

夫。海濱ホテルは閉まつてやしないか。

妻。うそおつしやい。

夫。しやうがない。行つちまへ。ブウ、ブウ、ブウ……。

妻。何よ、それや。もう来たのよ。

夫。やれやれ。ちや、見晴しのいい部屋へ通してくれ給へ。

妻。食堂でいいぢやないの。

夫。さうさ、だから、お前、何か注文しろ。

妻。あなたは。

夫。おれはなんでもいい。

妻。ちや、カルピスを二つ、冷たいのね。

夫。おい、君、君、妻まではまだ間があるから、少しその邊を歩いて来よう。十二時には歸つて来るから、何か美味しいものを食はして呉れ。

妻。さう。

夫。それから當分滞在したいんだが、いい部屋があいてるか。バスルームのついた……。

考へてゐるか、それが知りたいんだ。かういふ生活を續けて行くうちに、おれたちはどうなるかについてふことだらう。違ふか。それとも、お前が、娘時代に描いてゐた夢を、もう一度繰り返して見てゐるのか。

妻。あなたは馬鹿よ。(笑はうとしてつい泣顔になる)

夫。人間はみんな馬鹿さ。自分のことがわからずにあるんだ。さ、もうよさう、こんな話には。

妻。でも久しぶりよ、泣いたのは。

夫。おれが、日曜日にお前をばつて外へ遊びに出る。それをお前が不満に思ふのは當り前だ。たまには氣晴らしもしたいだらう。活動ぐらゐなんでもない。夕飯でも食つたら、出掛けるか。

妻。(うなづく)

夫。行かう。そんならそれで、早く風呂へでもはひつて来い。

妻。(涙を拭きながら)今日はいいの。

夫。どうして。

妻。あなたこそ、今日で三日目よ。

夫。うむ、少し風邪氣味なんだけれど……まあ、今日はよさう。それより、今が三時半だ

から……さうだ、夕飯までに一寸出て来るから。

妻。(元の座に着き、恨めしげに)どこへいらつしやるの。

夫。なに、ぢき歸つて来る。

妻。(夫の顔を見つめ、何か云はうとして、急にうつつむき)ええ、いいわ。

夫。(もぢもぢしながら)川上さんとこぢやないよ。

妻。(氣まづげに)何處だつていいことよ。

夫。(妻の傍にしゃがみ)玉突だと思つてるんだらう。

妻。(その方は見ずに)いいから、行つてらつしやいよ。

夫。怒つたのか。

妻。(また泣いてゐる)

夫。(途方に暮れて)どうしたんだい、一體。

妻。あたしが悪かつたの。

夫。いいも悪いもないぢやないか。だから、後で活動(行動)行くんだよ。

妻。(溜息を吐き)もう、わかつたの。

夫。何がわかつたんだい。

妻。もういい加減に諦めるわ。

夫。なにを……

うしてゐるのが……。

妻。あなたはどうかなの。

夫。おれは、お前とかうしてゐることが、だんだんうれしくなくなつて来た、それは事實だ。しかし、お前がなくなつた時のことを考へると、立つても坐つてもゐられないやうな氣がする。それも、ほんとだ。

妻。どつちがほんとなの。

夫。どつちもほんとだ。(間)だから、おれは、こんなことぢやいけないと思ふ。が、どうにもならないんだ。(間)お前が、さうして、おれのそばで、黙つて編物をしてゐる。お前は一體、それで満足なのか。そんな筈はない。おれの留守中に、お前は、どこか部屋の隅つこで、たつた一人、ぼんやり考へ込んでゐるやうなことがあるだらう。おれは外にゐて、お前のその淋しさうな姿を、いくども頭に描いて見る。百圓足らずの金を、毎月、如何にして盛大に使ふか、さういふことにしか興味のないおれたちの生活が、つくづくいやになりやしないか。今更そんなことを云つてもしかたがないと諦めてゐるかも知れない。しかし、お前は決して理想のない女ぢやないからね。おれは、今のお前がどんなことを

妻。御免なさい。

夫。髪だぜ。

妻。をかしたものだね。よその奥さんたちは、旦那さんが留守だと、けつく氣樂だつてよるこんでゐるの。だけど、あたし、それが不思議だつたの。

夫。それや、不思議なのが當り前さ。

妻。それが今日、やつと不思議でなくなつたの。

夫。え。

妻。男つていふものは、やつぱり、朝出て、晩歸つて来るやうに出来てゐるのね。

夫。(苦笑する)

妻。男つていふものは、家にゐることを、どうしてさう思に着せるんでせう。女は、それがたまらないのね。

夫。何も思に着せるわけぢやないさ。

妻。だから、行く處があつたら、さつさと行つて頂戴。その方が、ずつと氣持がいいわ。

夫。(また椅子にかけて、新聞を讀み始める)

妻。あたし、日曜がおそろしいの。

夫。おれもおそろしい。

(間)

妻。あなたは、あんまり、あたしを甘やかして

妻。バスルームつて……お風呂場ね。

夫。しッ。あ、さう。ぢや、それにしよう。いや、見ないでもいい。それから君のうちに飛行機はないの。

妻。あなた。

夫。ない。それぢや仕方がない。歩いて行かう。さ、おれのステッキは……。

妻。また汽車の中に忘れて来やしない。

夫。いや、ボーイに渡した。ああ、それだ。

妻。どつちへ行くの。

夫。向うに見えるのが江の島だ。

妻。いい景色ね。

夫。氣をつけないと轉ぶよ。どら、手を曳いてやらう。

妻。人が見るわよ。

夫。見るぢが損をする。草臥れたか。ぢや、この邊で一休みしよう。なんなら、海へはひつてもいいよ。

妻。あたし、はひるわ。

夫。はひれ。うむ、お前も裸になると、なかなか好い體格だ。あんまり遠くへ行くな。

妻。大丈夫よ。

夫。待て待て、そこで、さうしてて見る。寫眞を一枚取つて置かう。さ、いいかい。うむ、

これや素敵だ。(だんだん興奮して来る)今迄、お前が、こんなに美しく見えたことはない。どうだい、その形は……。なんといふ素晴らしい色だ。さうさう、やあ、お前の髪の毛は、そんなに長かつたのか。お前の胸は、そんなにふつくらしてゐたのか。あ、笑つてゐるね。こつちを向いて御覽。うん、それがお前の眼だつたのか。ああその口は……(われを忘れたやうに叫ぶ)

妻。(はじめて顔を上げ、たしなめるやうに)あなた。

(長い沈黙)

夫。ここへ来て見る。

妻。(笑つてゐる)

夫。(両手を差し出し)来て御覽。

妻。いや。

夫。来て御覽つてば。

妻。(起ち上り、夫の両手を取り、それを振りながら)あなたには、丁度いいつていふところがないのね。

夫。どういふ風に。(妻を引寄せようとする)

妻。いや、そんなことしぢや。

夫。(妻の手を取りたるまま)お前は、ほんとに、おれがいやになりやしないか。おれと

うしてゐるのが……。

妻。あなたはどうかなの。

夫。おれは、お前とかうしてゐることが、だんだんうれしくなくなつて来た、それは事實だ。しかし、お前がなくなつた時のことを考へると、立つても坐つてもゐられないやうな氣がする。それも、ほんとだ。

妻。どつちがほんとなの。

夫。どつちもほんとだ。(間)だから、おれは、こんなことぢやいけないと思ふ。が、どうにもならないんだ。(間)お前が、さうして、おれのそばで、黙つて編物をしてゐる。お前は一體、それで満足なのか。そんな筈はない。おれの留守中に、お前は、どこか部屋の隅つこで、たつた一人、ぼんやり考へ込んでゐるやうなことがあるだらう。おれは外にゐて、お前のその淋しさうな姿を、いくども頭に描いて見る。百圓足らずの金を、毎月、如何にして盛大に使ふか、さういふことにしか興味のないおれたちの生活が、つくづくいやになりやしないか。今更そんなことを云つてもしかたがないと諦めてゐるかも知れない。しかし、お前は決して理想のない女ぢやないからね。おれは、今のお前がどんなことを

きるのよ。(編物をし始める)
 夫。さうでもあるまい。
 妻。いいえ、さうなのよ。
 夫。むづかしいもんだな。
 妻。よそのうちを御覧なさいよ。
 夫。見てよ。
 妻。あの通りになさいよ。
 夫。出来ないよ。
 妻。女はつけ上るものよ。
 夫。知ってるよ。
 妻。そいぢやいいわ。
 (長い沈黙)
 夫。おれたちは、これで、うまく行つてる方ぢやないかなあ。
 妻。もう少しついでいふ處ね。
 夫。金かい。
 妻。さうぢやないのよ。
 (長い沈黙)
 夫。犬でも飼はうか。
 妻。小鳥の方がよかない。
 (長い沈黙)
 夫。(欠伸をする)
 妻。(欠伸をする)
 (間)

ぶらんこ(一幕)

夫。(相手をならずに)齒磨のチューブが破れてるから、氣をつけて頂戴。
 妻。(臺所へ行きながら)鼠は出なかつたかい、昨夜は。
 夫。(相變らず膳の上に氣を取られて)あなた、昨日の朝、何處へお置きになつたの。昨夜お湯へはいらつしやらなかつたし……。
 夫。(楊枝を使ひながら)今日は、一つ、風呂へはひるかな。
 妻。もう駄目ね、一昨日の午夢は……。
 夫。さあ……。おれも、今迄、いろんな夢を見たが、これくらゐ不思議な夢を見たことがない。
 (間)
 夫。あつた。
 妻。手拭はあつたの。
 夫。あつた。
 妻。夢だからつて馬鹿にはできない。
 夫。おれが、かう云ふと、お前はすぐに、夢があとになるもんですかと来る。

それや、夢で金持ちになつたからつて、何も、ほんとに、金持ちになると限つちやないさ。
 そんなことを、あてにする馬鹿があるもんか。
 (間)
 妻。夢は、どこまでも夢さ。
 夫。それでいいんだ。
 妻。ところで、夢といふやつは、空想とは、また違ふんだ。
 夫。夢は、やつぱり、一生のうちで、實際に在つたことなんだ。
 妻。夢は、やつぱり、一生のうちで、實際に在つてゐる間に、ちゃんと起つたことなんだ。
 夫。夢は、煮え過ぎても知りませんよ。
 妻。夢……今日は、夢の汁か……。
 夫。夢……今日は、夢の汁か……。
 (顔を洗ふ音。やがて、手拭で顔を拭きながら現る)
 妻。夢は、入れ違ひに、臺所から釜を提げて来る)
 夫。お櫃をもう一つ買ふのね。
 妻。(手拭を釘に掛け、長火鉢の前にすわり)煙草を一本く喫ひたいな。

夫。おい、話をしてやらうか。
 妻。ええ。
 夫。昔々ある處に、男と女があつた。男は學校を出るとすぐ會社に勤めた。女は、まだ女學校に通つてゐた。二人は毎朝、同じ時刻に、郊外の同じ停車場で顔を合せた。そのうちに、二人は、お辭儀をするやうになつた。男が早く来た時には、男は女の来るのを待つた。女が早く来た時には、女は……。
 妻。先へ行つてしまつた……。
 夫。さういふこともあつた。
 (此の時、あらッといふ女の子の叫び聲が聞える。庭の中に、大きな紙風船が轉がつて来る)
 夫。(新聞を投げ出し、庭に降りて風船を拾ふ)
 妻。(獨言のやうに)千枝子ちゃんは、おうちにあるの、今日は。
 夫。(黙つて風船をつきはじめる)
 妻。およしなさいよ、あなた……。(大きな聲で)千枝子ちゃん、いらつしやい。をばちゃんと風船をついて遊びませう。
 夫。(相變らず一生懸命に風船をつく)
 妻。(起ち上り、玄関から下駄を持つて来て庭に降り)あなた、駄目よ、そんなに力を入れ

ちや……(子供が垣根の向うにゐるらしい、それに)き、をばちゃんときませう。(かう云ひながら、夫のついてゐる風船を奪ひ取るやうにしてつく)千枝子ちゃん、あつちから廻つていらつしやい。
 夫。(妻の後を追ひながら、じれつたさうに)どら、貸して見ろ、おい……。

ちや……(子供が垣根の向うにゐるらしい、それに)き、をばちゃんときませう。(かう云ひながら、夫のついてゐる風船を奪ひ取るやうにしてつく)千枝子ちゃん、あつちから廻つていらつしやい。
 夫。(妻の後を追ひながら、じれつたさうに)どら、貸して見ろ、おい……。

遠くの森を
毎日毎日
輪にかく——
それが楽しみだつた。
妻。いやよ、そんなに、お醤油をかけちゃ
夫。おれは、子供の時分、よく醤油を、飯にか
けて食つたよ。
妻。赤だわ。
夫。お前は、何んでも、毒にしちまふね。
そこで、その夢だ。
おれは、あてもなく
その森の中へ、はひつて行つた。
毎日、輪にかいた、その森さ。
夜なんだよ、それがね。
妻。それより、こつちのが漬かり加減よ。
夫。夜なんだ、それが……
奥へはひつて見ると
森は——その輪にかいた森は
とてつもなく、大きな森なんだ。
露西亞か、南米か……
そんな處に在りさうな
人跡未踏の大森林さ。
妻。(何か云はうとする)
夫。まあ、黙つて聽いてろ。

夜なんだぜ、それが……
おれは怖いとは思はなかつた。
ちつとも怖いとは思はなかつた。
ただ、むやみに、悲しかつた。
おれは、不圖、自殺を思ひ立つた。
妻。もう深山、そんな話は……いいの、あな
た、そんなにゆつくりしてゐて……
夫。いいから、しまひまで聴け。
自殺を思ひ立つた。
そこで
一本の樹の枝を見つけて
それへ帯をひっかけた
頭の上で、その兩端を結びつけ
いよいよ
首を吊らうとしたんだ。
妻。(顔をそむけ)あなた！
夫。いいか
するとだよ……
すると、誰かが、後ろから、おれの肩を叩く
ぢやないか。
妻。人がゐたの。
夫。人なもんか。可愛い娘さ、それがね、十二
三の……
笑ひながら、おれの顔を見てるぢやないか。

夫。なるほど、いつか話した夢は、あんまり込
み入つて、お前にはわからなかつた。
わからなかつたから、面白くなかつたんだ。
昨夜のは、きつと、わかる。わかるやうに、話
してやる。
お前は、おれの妻だ。おれが、どんな夢を見
たか
それくらゐのことは、知つてなけれや。
妻。(夫の茶碗を取り、飯をつける)たぐさん
つけてよ。
夫。おい、おい。
妻。また、お表までに、お腹が空くわよ。
夫。(茶碗を受け取りながら)それは、まだ、お
れが小さい時分のことらしい。
小さいと云つても、十六か十七……
變に世の中が寂しい頃だ。
(間)
いつも云ふ通り
おれには、友達といふものが無かつた。
遊ぶと云へば
一人で
蜻蛉を捕るか
冬なら
日の當る裏山の斜面で

妻。いいわ、時計と相談してね。
夫。(煙草に火をつけながら)まだ大丈夫。(外
を見るやうにして)好い天気だな。
(間)
つまり、夢に對するおれの興味は、夢そのも
のの面白さに在るんだ。
妻。(飯をよそふ)
夫。夢は、おれを退屈さから救つてくれる。
夢は、おれに、人生の木蔭を教へてくれる。
妻。(汁をつける)
夫。昨日と今日……今日と明日……その間に、
おれは金のかからない旅をする。
楽しい旅だ。
おれに取つて、夢は、現實の一部なんだ
希望だとか、理想だとか……そんな空虚なも
んぢやない。
妻。(箸を取り上げ)あなたは、よくさう、夢が
見られるのね。
夫。羨ましいか。そこで、昨夜の夢だが……
(箸を取る)
妻。その前に、此の間の出張手當を、早く取
つて来て頂戴。
夫。あ、さうさう。九圓七十錢……こいつこそ、
夢でもいい……と、思ふのは間違ひで、今日

は、是非、取つて来る。
(沈黙)
妻。今朝は、明なしよ。
夫。どうして。
妻。買つとくのを忘れたの。
夫。よし、さう出なくつちや……
(忘れた……)
何んといふ好い言葉だ。
一切の醜さ、一切の暗さ、一切の苦しみ、恐
ろしさを覆ふ言葉だ。
忘れてくれ、忘れて……何もかも、忘れてく
れ。
妻。(きまりわるさうに)あら、ほんとに忘れた
のよ。
夫。ますますいい。(間)それに、今日の飯は、
上出来だ。
妻。(強ひて笑顔を作り)炭がね……
夫。(妻の顔を見て)あ、ほんとだよ。
妻。さう？……(涙ぐむ)
夫。馬鹿、馬鹿……お前は、夢を見ないから、
いけないんだ。
たまに見れば下らない夢しか見ない。
妻。だつて、どんな夢が面白いんだか、わから
ないんですもの。

夫。なるほど、いつか話した夢は、あんまり込
み入つて、お前にはわからなかつた。
わからなかつたから、面白くなかつたんだ。
昨夜のは、きつと、わかる。わかるやうに、話
してやる。
お前は、おれの妻だ。おれが、どんな夢を見
たか
それくらゐのことは、知つてなけれや。
妻。(夫の茶碗を取り、飯をつける)たぐさん
つけてよ。
夫。おい、おい。
妻。また、お表までに、お腹が空くわよ。
夫。(茶碗を受け取りながら)それは、まだ、お
れが小さい時分のことらしい。
小さいと云つても、十六か十七……
變に世の中が寂しい頃だ。
(間)
いつも云ふ通り
おれには、友達といふものが無かつた。
遊ぶと云へば
一人で
蜻蛉を捕るか
冬なら
日の當る裏山の斜面で

同僚。(起き上る。妻がかくれる)それがね、奥さん……

夫の聲。よし、よし、こいつの知ったことぢやない。さ、出ろ、出ろ。

妻の聲。まあ……(と、何かに驚いて)行つてらつしやい。

(格子の閉ぢる音)

妻。(現る。長火鉢に向ひ頬杖をつく。ひとり)でに、微笑がうかぶ)

夫の聲。(やや遠く)そこで、おれは十六の少年だ……

世の中が變に……

おい、何處へ行くんだ。

同僚の聲。一寸、待て……急用だ。

夫の聲。こん畜生……早く、しちまへ。人が来るぞ。

(どちらから始めるともなく、二人の調子外れな口笛が、一時、縫れるやうに聞えてくる)

—幕—

ブランコのつもりでゐたのは、やはらかな、あたたかい、天鵝絨の吊床なんだ。

妻。吊床つて、なあに

夫。吊床を知らないのか。吊床さ、そら……大人の寝る搖籃さ。

妻。宮殿なの……?

夫。うん……

その宮殿が、決して、ありふれた、お伽噺式の宮殿ぢやない。

(外の格子戸が開く音)

聲。おい、まだか。

妻。(憶てて夫の肩より離れ)それ御覽なさい、また遅れたわ。

夫。(憶ててチヨツキの釦をはめながら)いやいや、遅れない。(大聲にて)なんだ、やつぱり行くのか。今日は休むのかと思つてた。

聲。どら……

(聲の主、茶の間に首を出す)

妻。あら、いけません、こんなとこへ……

同僚。おや、もう、歸つて来たのか。や、奥さん、お早う。

妻。いくらせかしても、これですの。

夫。丁度いい。まあ、話の先を聴け。その宮殿と云ふのが、決して、ありふれた、お伽噺式

の宮殿ぢやないんだ。

妻。(上着を着せながら)そこは違ひますよ。もつと上……

夫。宮殿といふ言葉は悪いかも知れない。一切の裝飾が、ただ、住むものの爲めの裝飾なんだ。

同僚。面白いぢやないか。しかし、さういふ裝飾があり得るか。

夫。あり得るさ。第一、吊床が奇抜なんだ。そのブランコさ、つまり……

同僚。どのブランコ……

夫。どのつて……

妻。いやな片桐さん、ほん氣になつて聞いてらつしやるわ。(夫に)およしなさいよ、もう、あなた。

同僚。一體、何の話だい。

妻。夢なんです、この人の……。そら、例の……

(夫にハンケチ、時計、金入などを渡す)

同僚。なあんだ、さうか。

夫。君は、しかし、夢の面白さがわかる男だ。ただ、自分では、一向、見ないやうだね。

同僚。見ない。處で、奥さん……

夫。君は、ブランコに乗つたことがあるか。

同僚。ないよ。實はね……

夫。よしよし、その話は後で聴く。昨夜の夢といふのはかうなんだ。

(巻煙草に火を點けながら)

おれが、まだ、十六七の頃……世の中が、變に、かう、寂しい頃だ。

(玄關の方に行きながら)

それでゐて、いろいろの事を、知るともなしに、覺える頃だ。

(妻が消える)

同僚。實はね、君、弱つたことになつたんだ。

夫の聲。弱ることはないぢやないか。

妻。(玄關に出る)

同僚。(起き上らうともせず、言葉つきは夫に、心持は妻にと云つた工合に)いや、それがね、急に、國から、おやぢがやつて來るつて云ふんでね、やつて來るのは、かまはないが……

夫の聲。さ、行かう、行かう。

同僚。行くさ。そこで、どうでせう、奥さん、今晚だけ……

夫の聲。いいよ、いいよ、どうにかなるよ。さあ……(同僚の手を引張るらしく)おれの夢を聴いてからにしろ。

命を弄ぶ男ふたり(一幕)

人物
眼鏡をかけた男
縲帯をした男

鐵道線路の土手——その下が、材木の置場らしい僅かの空地、黒く濕つた土の、ところどころに、踏み躪られた雑草。遠くに、シゲナルの赤い灯。どこかに、月が出てゐるのだらう。

眼鏡をかけた男——二十四五ぐらゐに見える——が、ぼつねんと、材木に腰をかけてゐる。考へ込む。溜息をつく。涙をかむ。眼鏡を外して拭く。髪をむしる。腕組みをする。服の皺を伸ばす。舌を出す。縲帯をした男が現れる。つまり、顔中縲帯で包んでゐるわけであるが、両方の眼と、鼻の孔と、口の全部、それだけが切り抜いてある。

眼鏡をかけた男の前行つたり来たりする。そこに人がゐるの知らないやうにも思はれる。土手の上にあがるが、すぐ降りて来る。

眼鏡。君、踏切はもつと先ですよ。縲帯。(別段驚いた様子もなく)さうですか。踏切はもつと先ですか。(獨言のやうに)踏切はもつと先……と。(眼鏡をかけた男と並んで腰をかける)

眼鏡。どこかへいらつしやるんですか。縲帯。行かうと思ふんですがね。君も、どつかへいらつしやるんですか。眼鏡。行かうか、どうしようかと思つてゐるんです。縲帯。なるほど。行くのもいいが、どんなもんですかね。うまく、一思ひに、行けますかね。眼鏡。さあ、行つて見ないことにや、わかりませんな。

(長い沈黙)
縲帯。君は、どう思ひます、此の邊ぢや、やつぱり、此處でせうな。
眼鏡。さうですな、まあ、此處あたりでせうな。
縲帯。迷ふことはないんだが、さて、迷ひますな。
眼鏡。いろいろ考へるからですな。どうにもしやうがないといふ場合に、これですからな。

縲帯。僕は、かう見えて、センチメンタルなことは嫌ひな男ですがね。書置一つしてないんです。それといふのが、理由ははつきりしてゐるし、これがまた、至極、散文的でしたな。
眼鏡。いや、その點では、僕なども同様ですよ。それや、人によつては、別の道を選ぶかも知れませんが、結局、癒らない疵は癒らないんですからな。
縲帯。君の云はれることは、どうもよくわかりませんが、さういふ意味でなく、僕は、死といふことによつて、或る問題を解決しようとしてゐるのではなく、既に死人に等しい自分だからだと、自分で始末しようとしてゐるのだ

けなんです。だから、何も、今更、英雄的な覺悟や、非現実的な空想で、此の一時の間を、悲壯な物語りに作り上げる必要はないんです。
眼鏡。僕も、それを云ふんです。どうせ自分はいちいち地なした。人生の敗殘者だ。運命の犠牲者だ。さう思へばこそ……
縲帯。いや、いや、君はわかつてゐないんです。それや、その筈だ。君は、かう云つちやなんだが、一時の出来心でせう。戀人に捨てられたとか、會社の金を遣ひ込んだとか、誤つて人を殺したとか……
眼鏡。は、は、は、さう見えませぬかね。いや、もう何んにも云ひませぬ。人の苦しみを、一人の男の苦しみを、さう簡単に片づけられちゃ、たまらない。

縲帯。ちがひますか。まあ、それならそれでいい。お互に、かうして、偶然、同じ死に場所を選んで、そこへ同時に落ち合つた、ただそれだけの事實に、さうこだはることはない。どうぞ、僕にはおかまひなく……
眼鏡。いや、君の方こそ、どうぞ……。然し、僕もまだ血の通つてゐる人間です。眼の前で、勝手なことをされては迷惑です。踏切も、そ

んなに遠くはない。どうです、人を呼びませうか。
縲帯。人を呼ぶ……。呼んでどうするんです。(間)邪魔はしつこなしにしようぢやありませんか。
眼鏡。かう見えて、僕は、人一倍、物事を考へる方なんです。輕卒だとか、向う見ずだとか云はれることが、一番不愉快なんです。
縲帯。ああ、それだからですね。ちや、一つ、その理由といふやつを、何ふことにしませうか。

眼鏡。それはお話ししてもよござんすがね。それより、君は一體、どういふんです。さう深い事情も、おありにならないやうだが……
縲帯。さう見えますか。それならそれでかまひませんがね。は、は、は、此の縲帯がわかりませんな。
眼鏡。火傷でもなすつたんですか。
縲帯。さうあつさり云つてのけられたんぢやね……。まあ、よしませう。
眼鏡。火傷には、實によく效く薬があるんですかね。
縲帯。火傷なら、火傷として置ませう。それが癒つたら、どうなるんです。

眼鏡。いいぢやありませんか。
縲帯。顔中にひつつりが出来ても……。二眼とは見られない顔になつても……。
眼鏡。御商賣は。
縲帯。僕は商賣人ぢやないんです。應用化學の研究をしてゐる、つまり、學者なんです。人造ダイヤモンドの發明に没頭してゐたんです。もう九分九厘まで成功しかけてゐたんです。處が、一寸したこと、薬品が爆発してしまつてね。
眼鏡。それなら、猶更ぢやありませんか。折角九分九厘まで出来上つてゐる、その研究の方を續けておやりになれば、それが出来ないことはないんでせう。顔がなんですか。男振りがなんですか。元來、君のやうな仕事をやつてをられる方は、却つて……
縲帯。まあ、お待ちなさい。僕は、これで、まだ獨り者なんです。
眼鏡。丁度いいぢやありませんか。
縲帯。許嫁があるんです。
眼鏡。その人はどう云ふんです。
縲帯。かまはないと云ふんです。
眼鏡。そんなら、何も云ふことはないぢやありませんか。なんだ、それぢや、君、第

絹帯。それと云ふのが、その女は、僕を愛してゐるんです。

眼鏡。さうでせうとも。

絹帯。僕は、或る時、思ひきつて、絹帯を取つて、此の顔を見せてやつたんです。

眼鏡。それでもいいつて云ふんでせう。

絹帯。(うなづいて) さうして、僕の胸に顔を押しあてて、泣くんです。悲しくはないつて云ひながら泣くんです。

眼鏡。わかりませぬ、その氣持は。

絹帯。僕にはわからない。

(やや長い沈黙)

眼鏡。わかるぢやありませんか。

絹帯。わかるとすれば、彼女が誰をついてゐるといふことです。

(やや長い沈黙)

眼鏡。僕は、決心しました。決心したといふよりも諦めました。さうです、諦めたんです。

絹帯。さう、諦めたんですなあ。

眼鏡。ね、さうでせう。頗る簡単です。(間)僕は、から見えて、センチメンタルなことが、嫌ひな男なんです。

眼鏡。僕も、から見えて、人一倍、物事を考へ

るたちなんです。僕は俳優です、まあ名前を云へば、御承知かも知れませんが、それはいいますまい、僕は俳優なんです、新劇の方では、相當認められてゐる俳優なんです。八歳の時に両親を失くして、伯父にあたる——これも名前を云へば御承知かも知れませんが、まあ、云はずに置ませう——その伯父の家に引取られたのですが、そこに、一人、娘がありましたね。

絹帯。もうその先は、何はなくつてもわかるやうな氣がしますが、それぢや、ただの戀愛事件ですね。

眼鏡。ただのとは、どういふんです。ぢや、君のは何んです、そんな、つまらない義理立てぐらゐで、人が參ると思ふんですか。

絹帯。參る……それで、結局、どうなつたんです。

眼鏡。その先がわかつてゐるなら、云ふ必要はないでせう。

絹帯。まあ、さう怒り給ふな。

眼鏡。話を始めるか始めないうちに、それで結局どうなつたんで訊く法がありますか。張合ひもなにもあつたもんぢやない。

絹帯。さうまた、惡合ふこともないわけですね、

話が話なんだから。つまり、その娘さんと添ひ逢はれなくなつた。それで悲觀の末、かういふところらしいな。

眼鏡。何が、ところらしいんです。違ふも違ひだ。は、は、人のことつていふものはわからんもんだなあ。その娘は、たうとう病氣で死んだんです。(涙ぐんで) 可哀さうなことをしました。その病氣も、僕が種をつくつたやうなもんです。僕が、或る女優と、どうのかうのつていふ噂が立つた。そんなことは絶対にないんです。それを苦にして、つまり、ほんとだと思つて、日夜煩悶したんです。一人で、小さな胸を痛めたんです。その女優が、一座の座頭と、名を云へば御承知でせう、然し、それは云ひませぬ、その座頭と結婚した、そのことが新聞に出るまで、その女は僕の云ふことを信用しなかつたんです。然し、疑ひが晴れた時は、もう遅かつた。彼女は、病院のベッドの上に、後世を扶き、鼻を吸ひ、僕は馬鹿でした。意氣地なしでした。今から考へると、なぜ、その時、すぐに、役者なんか止して、これ御覽と云つてやらなかつたか、それを思ふと、なま

じ、藝術がどうのかうのと夢中になつて、下らない臺詞なんかばかり、覺えようとしてゐた、あの時の自分が、情けなくもあり、憎らしくもあり……僕は、運まきながら、死んだ女の心持を、自分の心の中に活かさう、さうして、その女の後を追はうと決心したんです。

絹帯。そいつは、つまらない考へだな。君が死んだら、どうなるんです。その娘さんのそばに、行けるとでも思つてゐるんですか。まさか、さういふわけぢやないでせう。なるほど、君の悲しみは、十分察しられる。然し、決して、永久に忘れることの出来ない悲しみぢやない。今は、それや、さうは考へられないでせう。そこがまた、君の美しい處なんだ。

眼鏡。君はいくつです。(間)

絹帯。いくつでもいい。君はまだ若い。人生の花は、これからぢやありませんか。

眼鏡。君はいくつです。

絹帯。僕ですか。あてて御覽なさい、と云つたら、君は困るだらう。三十五でせよ。だが、僕の場合、年は問題ぢやない。

(やや長い沈黙)

眼鏡。僕も、から見えて、人一倍、物事を考へ

るたちなんです。僕は俳優です、まあ名前を云へば、御承知かも知れませんが、それはいいますまい、僕は俳優なんです、新劇の方では、相當認められてゐる俳優なんです。八歳の時に両親を失くして、伯父にあたる——これも名前を云へば御承知かも知れませんが、まあ、云はずに置ませう——その伯父の家に引取られたのですが、そこに、一人、娘がありましたね。

絹帯。もうその先は、何はなくつてもわかるやうな氣がしますが、それぢや、ただの戀愛事件ですね。

眼鏡。ただのとは、どういふんです。ぢや、君のは何んです、そんな、つまらない義理立てぐらゐで、人が參ると思ふんですか。

絹帯。參る……それで、結局、どうなつたんです。

眼鏡。その先がわかつてゐるなら、云ふ必要はないでせう。

絹帯。まあ、さう怒り給ふな。

眼鏡。話を始めるか始めないうちに、それで結局どうなつたんで訊く法がありますか。張合ひもなにもあつたもんぢやない。

絹帯。さうまた、惡合ふこともないわけですね、

眼鏡。誰か来たやうですよ。見つかると厄介だ。(起ち上る)

絹帯。線路巡視ですね。どれ、隠れるかな。

(兩人、表をかくす)

土手の上を、人が通る。安全燈の火影が、さつと、舞臺をかすめる。

汽車の音(近づく)

眼鏡。(表を現し) もう、大丈夫ですよ。

絹帯。(續いて現れ) 下りですね。

眼鏡。神戸行の急行です。

絹帯。(腕を叩し) 君こそ、思ひ止まるんです。早まつたことはしないがいい。

(汽車が土手の上を通る。兩人、それを見送る)

眼鏡。込んでるやうですね。

絹帯。込んでましたか。夜汽車は陰氣だなあ。

(間)

眼鏡。あなたこそ、立派な仕事がおありなんだから、それだけで、生きてゐる甲斐がありさうなもんですがなあ。

絹帯。生存の意義なんかどうでもいい。仕事は仕事、人生は人生です。君なんか、まだこれ

から、どんな仕事でも出来る。どんな感でもできる。殊に、藝術家と云へば、仕事そのものが戀人ぢやないんですか。まあ、さう云つたやうなもんぢやないんですか。僕らにや、よくは飲み込めないが、かう、なんと云ふか、一種のゲオルグと云ふかな、さういふもんがあるんぢやないんですか。からだのすぐむやうな、ぞくぞくするやうな、融け込むやうな、さういふ状態に、何時でもなれるんぢやないんですか。

眼鏡。そんなことなら、あなたの方の仕事でも、やつぱり、戀人に對するやうな心持になれるでせう。食ふことや寝ることを忘れてまで、仕事に熱中するなんていふこと……世間の事や、家庭のことを全く棄てて顧みないつていふことや、よくそんな話を聞くぢやありませんか。

絹帯。そりや違ひますよ。それはなるほど、學者の一面には、さういふところもある。もう一面を見ないとわからない。つまり、人間の問題ですよ。理窟ぢやない。さうでせう、君と同じ境遇にある、もう一人の青年に訊いて御覽なさい。その青年は、君と同じ悲しみ、君と同じ悩みを、君のやうな方法で解決する

眼鏡。なにをするんだ。
 眼鏡。(この間に、素早く土手の上に駆け上る。汽車が通る。姿が消える)
 眼鏡。たうとう、ヤリヤがつた。ほんとに、ヤリヤがつた。畜生。こいつは、やつぱり、後ぢや、工合が悪い。
 (かう咳く、が、不圖、土手の上を見ると、眼鏡をかけた男が、眼をこすりながら、とぼくと降りて来る)
 眼鏡。おや、こいつも擦れ違ひか。
 眼鏡。駄目だ、貨物列車だ。
 眼鏡。ああ、痛え。(眼をこする) 煤がはひりやがつた。こいつはいかん。とても痛い。あいたた、た……(間)
 眼鏡。すみませんが、ちよつと、見て下さい。
 眼鏡。(見ながら) 見るのはいいが、此の明りぢや、君……。どら、もつと、上を向き給へ。
 さう、眼に力を入れちや駄目だよ。
 眼鏡。(眼を両手で引きあげるやうにして) ありましたか、右の方ですよ。
 眼鏡。見えるもんか、これぢや。
 (汽笛、汽車の音)
 さ、来た、一人でゆつくり取り給へ。(土手の

上にあがらうとする)
 眼鏡。痛い、痛い。(眼鏡をした男に振り向き) 後生だから、こいつを取つてからにして下さい。
 眼鏡。だつて、君……(もう一度、眼の中をのぞき込みながら) 見えないものをとれたつて、それや無理だらう。
 (汽車の音近づく)
 眼鏡。痛いついでに、それぢや、一思ひにやつて来たまへ、丁度いいや。
 眼鏡。そんな無茶なことを云はないで、どうかして下さい。これぢやどうすることもできやしない。
 (汽車が土手の上を通り過ぎる。辨當の空が二人の傍に飛んで来る)
 眼鏡。(それを拾ひあげて) 綺麗に食つてあらあ。
 眼鏡。あいたた、あいたた……。さ、早く……。眼鏡。(辨當の空を棄て) どら、厄介な男だなあ、ハンケチかなんか出し給へ。
 眼鏡。ポケットにはひつてるやつを出して下さい。
 眼鏡。(ポケットからハンケチを引き出し出す) これでいいの。(そのはすみに、寫眞のやうな

ものが落ちる) おや、何か出たぜ。(あたりを探す。一枚の寫眞を拾ひあげる) 寫眞だ。これ……。(明りにすかしながら) なるほど、これか。桃割だね。や、これや素敵だ、どうだい、この笑ひ方は……。
 眼鏡。さ、そんなことは役に……。
 眼鏡。さうでせうか。(間) その眼が、もう永久に眠つてるんです。
 眼鏡。この眼がね、惜しいことをしたもんだなあ。此の口元だつて、大したもんだよ。此の年にしちや、珍しく戀惑的だね。
 眼鏡。その口が、堪忍して、頂戴と云つたんです。(泣聲になる) それが最後でした。
 眼鏡。この口がね。
 眼鏡。ええ、さう云つたんです。
 眼鏡。それが、此の手を見たまへ。何んといふ、あどけなさだ。お手玉を握るためにできてゐる手だ。
 眼鏡。いいえ、それが、僕の手を握つたんです。(聲をあげて泣く) か、か、堪忍、堪忍、して頂戴、かう云ひながら、兩、兩手、僕の

かどうかわからない。いや、寧ろ、さうしないのが普通でせう。しない方が正しいんだ。
 眼鏡。正しいとは限りません。
 眼鏡。僕は飽くまで反対するな。(間) どうです、警察へ引渡させようか。
 眼鏡。警察……。さうして、どうするんです、(間) お互に、邪魔をしつこなしにしようぢやありませんか。僕こそ、あなたの不心得を論じてあげたいくらいなんだ。
 眼鏡。論ずはいな。君こそ、家へ歸つたらどうです。悪いことは云ひませんよ、年長者の言葉を信用し給へ。
 (汽笛、汽車の音)
 眼鏡。(起ち上り) もう、何んにも云はないで下さい。(土手の上に駆け上らうとする)
 眼鏡。(その袖をとらへ) よし給へ、君。それや、なんにもならんよ。
 眼鏡。(振り放さうと薄曇きながら) 放して下さい。僕のからだは僕のものです。勝手にさして下さい。
 眼鏡。それや、君のものさ、君のからだは。だから、つまらんことは止せと云ふんだ。僕は、かう見えて、センチメンタルなことは嫌ひな男だ。死なしていいものなら死なせるさ。(突

然、聲を荒らげて) 馬鹿! しつかりしろ!
 (引掛りおろす)
 眼鏡。(此の語勢に氣を抜かれて) それぢや、あなたは、どうなさるんです。
 眼鏡。(此のひまに相手を突き退け) 僕は、かうする。(土手の上を走り上る)
 (此の刹那、汽車が通る。眼鏡した男の姿が消える)
 眼鏡。あッ、やつたな。(間) たうとう、ヤリヤがつた。畜生。
 (さう云つてゐると、土手の上から、眼鏡をした男が、のつそり降りて来る)
 眼鏡。なあんだ、やらなかつたのか。
 眼鏡。やつたさ、やつたけれど、早すぎたんだ。正確に云へば、勢をつけ過ぎたんだ。線路の向うへ飛び込んだんだ。しくじつた。此の次だ。(息をはずませてゐる)
 眼鏡。だから、僕に先へやらせればいいのに。
 眼鏡。さうはいかんさ。君に先へやらせちや、僕の顔が立たん。君の自殺には、僕は反対なんだ。見て見ないふりは出来ない。僕は、自分のことさへどうでもよけりや、君を家へ送り届けるなり、警察へ引渡すなりする處だ。然し、それができない。君が僕の言ふことを

聞かない以上、君のやりたいことは、僕の知らない處でやり給へ。場所も此處と限つたわけぢやないんだらうから。
 眼鏡。此處を先へ見つけたのは僕なんだ。
 眼鏡。あと先の話をしてるんぢやない。僕が生きて居る間、君を殺すわけには行かないから、さう思ひ給へ。
 眼鏡。ぢや、僕を生かす爲めに、あなたも生きることを考へたらどうです。それなら、話をはわかる。
 眼鏡。さうか、君は、ほんとに死ぬ氣はないんだな。さうだらう。それでわかつた。それならそれで、こんな處に、何時までもゐるのはよし給へ。もう、君、遅いぜ。今が十時の濱松行だ。
 眼鏡。死ぬ氣がないのは、あなたのことです。鐵道自殺のやり損ひなんていふのは、あんまり流行らないからな。
 (この時、また汽笛が響く、と、やがて、列車の近づく音)
 眼鏡。よし、そんなら、見てる。(土手を登りかける)
 眼鏡。今度は、僕だ。(眼鏡した男を引掛りおろす)